ISSN 2434-981X

広島文教大学 心理学研究叢書 第１巻

親切の心理学

深田 博己 著

（広島文教大学 人間科学部 教授）

広島文教大学 心理学会

2019 年（令和元年）5 月

広島文教大学 心理学研究叢書 第１巻

親切の心理学

深田 博己 著

（広島文教大学 人間科学部 教授）

広島文教大学 心理学会

2019 年（令和元年）5 月

広島文教大学 心理学研究叢書 第１巻
『親切の心理学』

深田博己（著）
広島文教大学 人間科学部 教授

広島文教大学 心理学会
2019 年（令和元年）5 月

まえがき

元号が平成から令和へと変わる節目の時期の数年間に、広島文教大学は、大きな改革を断行してきた。学科レベルでは、2018 年度に心理学科は、大学院人間科学研究科教育学専攻と共に、心理学界初の国家資格「公認心理師」の養成に踏み切った。学部レベルでは、2019 年度に人間科学部初等教育学科を教育学部に昇格させ、一学部体制から「教育学部」と「人間科学部」の二学部体制への発展的改組が実現した。同じ 2019 年度に、大学レベルでは、男女共同参画の精神に則り、大学院で先行的に実施していた男女共学化を大学全体に拡張し、「広島文教女子大学」から男女共学の「広島文教大学」へと衣替えした。

広島文教大学は、学生の教育・指導を最重要目標に掲げる教育型の大学である。その一方で、学内研究助成制度を導入するなど、教員の研究活動に対する支援を惜しまぬ大学でもある。こうした研究環境のもと、広島文教大学（〔旧〕広島文教女子大学）では、2012 年度より心理学科を中心に心理学を専門とする学内の教員が結集し、広島大学大学院教育学研究科心理学講座社会心理学研究室の協力を得て、対人コミュニケーションに関する研究の活性化と発展を目指し、全国規模の対人コミュニケーション研究会を立ち上げた。そして、対人コミュニケーション研究会の機関誌『対人コミュニケーション研究』を、審査制度を導入しつつ、毎年 1 冊ずつ着実に刊行してきた。

対人コミュニケーション研究会は、対人コミュニケーションに特化した研究テーマを追求する研究組織である。これに対して、心理学のあらゆるテーマと領域における研究の活性化と発展を目的として、2014 年度より心理学科の教員を中心に学内の心理学分野の教員が再び結集し、広島文教大学心理学会（〔旧〕広島文教女子大学心理学会）を設立した。広島文教大学心理学会では、無審査で自由に研究成果を発表できる場として『広島文教大学心理学研究（〔旧〕広島文教女子大学心理学研究)』を創刊し、半年ごとに年 2 回の刊行を継続してきた。

広島文教大学では、さらなる学部および大学院の改組も模索されている。こうした変革の時代に置かれているからこそ、研究者としての教員の研究成果の蓄積とそれを発表する場の拡充が望まれる。こうしたニーズに応えて、広島文教大学心理学会では、まとまった研究成果を発表する場として、『広島文教大学心理学研究』のモノグラフ的な特徴をもつ『広島文教大学心理学研究叢書』の刊行を計画するに至った。研究叢書という性格から明確なように、当然のことながら『広島文教大学心理学研究叢書』は不定期の刊行となる。

本書『親切の心理学』は、筆者が 2015 年から 2017 年までの 3 年間に『対人コミュニケーション研究』と『〔旧〕広島文教女子大学心理学研究』に発表してきた親切に関する研究成果を、大幅に修正（加筆・削除・分割・統合）し、再構成したものである。「親切」は、現代社会を住みやすくし、人間の心身の健康を増進するために有用な行為であるし、人間が備えておくべき基本的な人徳でもあり、武田学園広島文教大学の建学の精神「心を育て　人を育てる　＝　育心育人」に通じるものがある。「親切」な心をいかに育てるか、「親切」な行動をいかに増やすか、「親切」に満ちた社会をいかに形成するのか、といった課題こそ、現代社会に課せられた重要な課題の 1 つであると考える。

しかしながら、現時点では、わが国における親切に関する心理学的研究は極めて不足しているのが実情であり、国際的にみても親切の心理学的研究はわずかな数が散見されるにすぎない。わが国において「親切」の研究に関心を寄せ、「親切」の研究に携わる研究者を増やすことが喫緊の課題となる。そこで、本書では、初学者が「親切」研究に取り組む際に手軽に利用できる情報を提供するために、数少ない内外の先行研究の内容紹介を詳細に行うよう心がけた。本書がいくらかでも心理学分野における「親切」研究の遂行を促進することを、また、当該領域の発展に貢献することを、筆者は切に望む。

平成時代最後の年となる平成 30 年（2018 年）に刊行計画が策定された『広島文教大学心理学研究叢書』の第 1 巻を、わが国にとっても本学にとっても新しい時代の幕開けの年となる令和元年（2019 年）に刊行できることは感慨に堪えない。

最後に、『広島文教大学心理学研究叢書』の創刊に際し、ご理解とご支援をいただいた広島文教大学森下要治学長に心より感謝申し上げたい。また、広島文教大学心理学会会長として心理学系教員の研究活動の推進にご尽力いただいている植田智教授（副学長・人間科学部長）に感謝申し上げる次第である。

2019 年（令和元年）5 月 18 日

広島文教大学 人間科学部 心理学科　教授　　深田 博己

目　　次

まえがき　1
目次　3

第１章　序：なぜ親切の研究なのか …… **9**
第 1 節　人間にとっての親切の価値　9
1. 親切の影響と機能　9
2. 人間の生き方の原則に関わる人徳としての親切　10
3. ダライ・ラマ 14 世の仏教的親切観　10
4. 親切に関する心理学的研究の意義と価値　11
第 2 節　親切に関する心理学的研究の契機と課題　11
1. わが国における親切研究の先駆者　11
2. 親切研究の契機　11
3. 親切の心理学的研究の多様な課題　12
第 3 節　本書の特徴　12
1. 本書のねらい　12
2. 本書の構成　12
3. 初出論文の修正・再構成と共著者の方々への謝辞　13

第２章　親切の辞義 …… **15**
第 1 節　日本語の辞義としての親切　15
1. 国語辞典に見る「しんせつ」と「親切」　15
2. 「親切」、「心切」、「深切」の意味　16
3. 「親切」の意味内容の分類　17
4. 派生語と複合語から見た「親切」　17
5. 心理－行動次元から見た「親切」の意味　19
6. 「親」と「切」の字義　20
7. 「親切」の語源　21
8. まとめ　21
第 2 節　英語の辞義としての親切　22
1. 辞典に見る欧米の親切　22
2. 欧米の親切の対象と範囲　24
3. 欧米の親切行動の具体例　25
第 3 節　「小さな親切運動」の親切　26
1. 「小さな親切」運動の契機と展開　26
2. 「小さな親切」の意味するもの　27
3. 「小さな親切」運動における活動の実態　28

4. 「小さな親切」運動を支える親切観　29
5. まとめ　32

第３章　日本的親切論：近藤良樹の親切の哲学　……　33
第 1 節　近藤良樹の親切論　33
1. 哲学者近藤良樹と日本的親切論の構成　33
2. 親切の定義と親切概念の本質　34
3. 親切の時代差と文化差　34
第 2 節　親切の対象者　36
1. 親切の対象者の特定　36
2. 親切の対象者の状態　37
3. 親切の対象者の特性　37
4. 親切な行為の特徴　38
5. 手段としての親切　38
6. 親切に対する対象者の理解・評価　39
第 3 節　親切の行為者　39
1. 親切をする人の特徴　39
2. 親切を乞われる人の特徴　41
3. 親切の要請と拒否　42
第 4 節　親切心　43
1. 親切心の基本的特徴　43
2. 親切心を構成する心性　43
3. 親切の影響　45
第 5 節　親切の本質　46
1. ささやかな無償のボランティア的な手助け・贈与　46
2. ささやかさと傍観的距離　47
3. 仕事外と仕事中の親切　48
4. 親切をする側とされる側の好意　48

第４章　親切の哲学から親切の心理学への道程　……　49
第 1 節　近藤良樹の親切論再考　49
1. 近藤の親切概念の本質の検討　49
2. 親切概念の本質的要素の修正案　50
3. 親切の哲学的再定義　51
第 2 節　心理学分野における親切の関連・類似概念の検討　51
1. 心理学的研究における親切の概念　51
2. 親切の関連・類似概念　52
3. 援助行動、愛他的行動、向社会的行動の概念間の比較　54
4. 援助行動、愛他的行動、向社会的行動の包摂関係　56
5. 援助行動と愛他的行動と向社会的行動の相違点　57

第 3 節　親切の心理学的概念の検討　59
1. 心理学的な親切概念と近藤の親切概念との比較　59
2. 心理学的な親切概念と関連・類似概念との比較　64
3. 親切の心理学的定義　66
4. 新たな心理学的親切概念に基づく親切の心理学的研究の功罪　67

第５章　親切の心理学的研究の展開の方向性 …… 69
第 1 節　親切の心理学的研究の基本的枠組み　69
1. 親切過程　69
2. 親切過程における中核的行動としての親切行動　70
3. 親切行動の規定因の構造　71
4. 親切過程における周辺的行動の規定因の構造　74
5. 親切過程における基本行動に関する心理学的研究の展開　75
第 2 節　生起過程モデルによる親切行動の理解　76
1. 親切行動の生起過程モデルの概要と意義　76
2. 対象者に関する評価・検討過程　78
3. 親切行動の意思決定過程　78
4. 親切行動の実行過程　79
第 3 節　親切の心理学的研究に対する関連領域からの示唆　80
1. 親切の理論・モデルへの示唆　80
2. 親切行動の種類と構造への示唆　81
3. 親切の行為者の特性への示唆　82
4. 対象者の親切要請行動への示唆　84
5. 親切に対する対象者の反応への示唆　84

第６章　親切現象の心理学的理解 …… 87
第 1 節　親切現象の心理学的理解の視点　87
1. 親切の定義に内包される 2 つの視点　87
2. 多次元的視点と時系列的視点　87
第 2 節　親切現象の多次元的理解　88
1. 親切の成立要件とその構造　88
2. 親切の成立要件に関する多次元的理解　90
第 3 節　親切現象の時系列的理解　94
1. 親切行動を構成する行動の時系列的構造　94
2. 複雑性からみた 3 水準の親切過程　95
3. 広範性からみた 3 層の親切過程　98
第 4 節　親切現象に関する心理学的研究の未来　100
1. 心理学的研究で扱う親切と親切過程　100
2. 親切現象に関する心理学的研究の課題構造　101

第７章　親切現象における対人コミュニケーションの役割 …… 103
第 1 節　相互作用過程における親切現象　103
1. 親切現象の発生する文脈　103
2. コミュニケーション行動から見た親切過程　104
第 2 節　親切過程における対人コミュニケーション　104
1. コミュニケーション的対人相互作用過程としての親切過程　104
2. 親切過程における対人コミュニケーションの具体像　105
3. 親切過程における対人コミュニケーションの構造的理解　108

第８章　わが国における親切の心理学的研究 …… 111
第 1 節　わが国における親切の心理学的研究の特徴　111
1. 定義の明確な日本的親切を主テーマとする研究　111
2. 定義の不明確な親切を主テーマとする実証的研究　112
3. 定義の明確な欧米的親切を付随的に扱う実証的研究　112
4. 定義の不明確な親切を付随的に扱う実証的研究　112
第 2 節　定義の明確な日本的親切を主テーマとする研究　113
1. 非実証的研究　113
2. 実証的研究　114
第 3 節　定義の不明確な親切を主テーマとする実証的研究　119
1. 親切と幸福感の互恵的関係：Otake et al.（2006）の研究　119
2. 親切行動と感謝行動に関する介入の効果：北村（2012）の研究　122
3. 傍観者の存在が親切行動の生起に及ぼす効果：原田・松見（2007）の研究　123
4. 社会的迷惑行為の抑止に及ぼす親切行動の効果：油尾・吉田（2013）の研究　124
5. 親切さの判断に及ぼす行為者の意図と他者の利益の影響：二宮（1982）の研究　125
第 4 節　定義の明確な欧米的親切を付随的に扱う実証的研究　126
1. 生き方の原則（長所・人徳）としての親切　126
2. 自己への親切（自分への優しさ）　126
第 5 節　定義の不明確な親切を付随的に扱う実証的研究　127
1. 性格としての親切　127
2. 向社会的行動や援助行動としての小さな親切行動　128
3. 取り入りの下位方略としての親切な行為　129
4. 表情の与える印象としての親切　130
第 6 節　まとめ　131

第９章　欧米における親切の研究 …… 133
第 1 節　欧米における親切研究の概観　133
1. 欧米の親切研究を理解するための基本用語　133
2. 欧米の親切研究の分野とその特徴　136
第 2 節　欧米における親切の心理学的研究　139
1. 親切行動が自身のウェル・ビーイングと生活満足感に及ぼす効果：

Lyubomirsky et.al.（2004）と Buchanan & Bardi（2010）の研究　139
2. 親切と感謝の介入がクライエントの心理的機能の改善に及ぼす効果：
Kerr et al.（2015）の研究　141
3. 思春期直前の児童の親切行動促進がウェル・ビーイングと仲間からの受容に及ぼす効果：
Layous et al.（2012）の研究　143
4. 発達段階に対応した親切尺度の作成：Comunian（1998）の研究　145
5. 自己への他者からの親切行為の熟考が自己の情緒や寛大さに及ぼす効果：
Exline et al.（2012）の研究　147
6. 実験参加者の性とストレスが異性あるいは同性の見知らぬ他者の親切さと魅力の
選好に及ぼす効果：Li et al.（2008）の研究　153
7. ストレス下での、自分への優しさがウェル・ビーイングに及ぼす効果：
Neely et al.（2009）の研究　156
8. まとめ　158
第 3 節　欧米における親切の医学的研究　159
1. オキシトシンの分泌を媒介として、親切が幸福と健康の増進に及ぼす効果：
ハミルトン（2011）の研究　159
2. 親切のもたらす幸せのタイプ：監訳者・有田（2011）の見解　161

第 10 章　親切の構造に関する測定的研究 …… 163
第 1 節　親切の意味的構造　163
1. 問題　163
2. 予備調査 1　164
3. 予備調査 2　165
4. 本調査　166
5. 総合考察　169
6. 要約　170
第 2 節　親切の行動的構造　171
1. 問題　171
2. 予備調査　171
3. 本調査の方法　174
4. 本調査の結果　175
5. 追加調査　178
6. 総合考察　181
7. 要約　184
第 3 節　不親切の動機的構造　184
1. 問題　184
2. 方法　186
3. 結果　187
4. 考察　192
5. 要約　194

第 11 章　親切行動とふれ合い恐怖心性の関連に関する研究 …… 195
第 1 節　典型的および非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の作成　195
1. 問題　195
2. 方法　202
3. 結果　203
4. 考察　209
5. 要約　211
第 2 節　親切行動と典型的および非典型的ふれ合い恐怖心性との関連　212
1. 問題　212
2. 方法　214
3. 結果　217
4. 考察　220
5. 要約　221

第 12 章　親切行動とコミュニケーション不安の関連に関する研究 …… 223
第 1 節　既知の他者用および未知の他者用コミュニケーション不安尺度の作成　223
1. 問題　223
2. 方法　227
3. 結果　228
4. 考察　235
5. 要約　237
第 2 節　親切行動と既知の他者および未知の他者へのコミュニケーション不安との関連　238
1. 問題　238
2. 方法　239
3. 結果　241
4. 考察　243
5. 要約　245

引用文献 …… 247

第１章　序：なぜ親切の研究なのか

本章では「なぜ親切の研究なのか」という問いに答えるために、最初に第 1 節「人間にとっての親切の価値」では、親切は人間にとってどのような影響や機能をもつと筆者自身が考えているのか、親切は人間の生き方とどのように関わっていると専門領域の心理学者たちが捉えているのか、ノーベル平和賞の受賞者である仏教の指導者が親切をどのように捉えているのか、という 3 つの面から、親切に関する心理学的研究の意義と価値を探る。次に第 2 節「親切に関する心理学的研究の契機と課題」では、わが国における親切研究の先駆者を紹介し、親切研究の直接的な契機に触れ、親切の心理学的研究における多様な課題を指摘する。最後に第 3 節「本書の特徴」では、本書のねらいを述べ、本書の構成内容を簡潔に記述することによって本書の概要を把握可能にし、本書をまとめる際の元となった初出論文に触れ、共著者への謝辞を述べる。

第１節　人間にとっての親切の価値

1. 親切の影響と機能

親切をされると、親切をされた人の心はほんのりと温かくなる。そして、親切をする人にも何となく心地よい感情が生まれる。親切は、親切をする人とされる人の心を温かくするだけでなく、親切を見ていた人たちの心も温かくする。親切をした人は、もっと親切をしたいと思うようになり、親切をされた人は、感謝の気持ちから次は自分が親切をしたいと思うようになるし、親切を見ていた人たちも自分たちも親切をしようという気持ちになる。こうして、親切の輪が広がっていくことになる。親切は、人間関係を豊かにし、社会に潤いをもたらし、住みやすい社会をつくる機能をもつと言えよう。

親切は、困苦を抱えている人に対する無償の小さな手助け・贈与であるので、直接的にはその困苦の解消に役立つ。それだけではなく、親切は親切をする人の心や体を健康にすることが、最新の研究成果として発見されつつある。親切をする人自身の心への親切の影響については、親切が自身のウェル・ビーイングや幸福感を高めるという心理学的研究の成果が蓄積されつつあり、親切をする人自身の身体への影響については、親切が自身の高血圧や心臓病を改善するという医学分野の研究によって証明されつつある。親切が、親切をする人自身の心身にポジティブな効果をもたらすことは、親切の括目すべき機能であろう。

以上のように、親切は 3 つの主要な機能をもつことが分かる。第 1 の機能として、親切は、困苦を抱える人の困苦を解消し、親切の対象者に肯定的な影響を及ぼす。第 2 の機能として、親切は、親切をする人の心身の健康を改善し、親切の行為者自身に肯定的な影響を及ぼす。第 3 の機能として、微視的には親切は、観察している周囲の第三者の心を温かくし、周囲に肯定的な影響を及ぼし、巨視的には親切は、その輪が広がることによって、社会に潤いと暮らしやすさをもたらし、社会に

肯定的な影響を及ぼす。

2. 人間の生き方の原則に関わる人徳としての親切

人間の生き方の原則に通じる 24 の人徳・長所は、6 つの領域（勇気、正義、人間性と愛、節度、超越性、知恵と知識）に分類される（Peterson & Seligman, 2004）。このうちの「人間性と愛」の領域に属する人徳・長所は「愛する力・愛される力」、「親切」、「社会的知能」という 3 つの人徳・長所から成る。6 つの領域を構成する合計 24 の人徳・長所の評価に関する日米比較の結果から、日本では 1 位に感謝、2 位に親切が挙がり、アメリカでは 1 位に親切、2 位に愛情が挙がるという（Shimai, Otake, Park, Perterson, & Seligman, 2006）。「親切」は、日本人の、そして世界中の人々の生き方の原則にかかわる極めて重要な人徳・長所であると言える。

人徳・長所としての親切とは、親切な心をもつこと、親切であること、親切をすることであり、人間の生き方に深く関わる特質である。しかも、「親切」は、6 領域の人徳・長所の中で情緒的な特徴を最も顕著に示す領域である「人間性と愛」の領域を構成する 3 つの下位領域の 1 つである。「親切」は「愛する力・愛される力」や「社会的知能」と共に「人間性と愛」の領域を構成するので、いわゆる人間らしさに結びつく人徳・長所であると解釈できる。

以上のように、「親切」は、人間の生き方の原則に関わる人徳・長所として、3 つの特徴を示す。第 1 に、「親切」は、「愛する力・愛される力」や「社会的知能」と共に「人間性と愛」の領域を構成する。第 2 に、「親切」は、人間らしさを反映する、最も情緒的な性質の顕著な人徳・長所である。第 3 に、「親切」は、24 の人徳・長所の中で、国や文化を超えて最も重視される人徳・長所である。

3. ダライ・ラマ 14 世の仏教的親切観

ノーベル平和賞の受賞者としても知られる、チベット仏教の指導者ダライ・ラマ 14 世は、親切（kindness）について次のような見解を提出している（The Dalai Lama, 2006, pp. iv - v より抜粋引用）。“我々の生存は、多くの他者の行為と親切に依存している。すなわち、我々は、誕生の瞬間から両親の世話と親切を受け、人生の終盤では病気の苦悩と高齢に直面し、再び他者の親切に依存する。人生の初期と末期に他者の親切に依存するのであれば、親切をする機会をもつ人生の中期に、他者に対して親切にすべきでない理由などない。”

また、ダライ・ラマは次のように続けて述べている。“親切と思いやりは、永続的な幸福と喜びの源泉となるものであり、我々の人生を意味あるものにしてくれる重要なものである。親切をすることで我々が恩恵を受けることは常識であり、他者の幸福によって我々の幸福は左右されるので、他者を思いやることはやりがいのあることである。すなわち、親切や思いやりのようなポジティブな心理状態は、明らかに心理的な健康と幸福感を高めるので、温かさ、親切、思いやりのような基本的で善良な人間性を育てれば、人生は一層有意義で幸福で穏やかなものとなる。”

以上のダライ・ラマの言葉から、3 つの親切観を読み取ることができる。第 1 に、親切は、幼少期と高齢期には他者から受容し、青年期・成人期には他者に提供するものである。第 2 に、親切は他者の幸福と喜びを高める。第 3 に、他者の幸福によって自分が幸福になるという恩恵を親切はもたらす。第 2 と第 3 の親切観は、上記の「1. 親切の影響と機能」で述べた親切の第 1 の機能と第 2 の機能に対応する。

4. 親切に関する心理学的研究の意義と価値

親切は、困っている他者に対してだけではなく、行為者自身に対しても、さらに社会全体に対しても望ましい影響を及ぼすので、また、人間の生き方の原則に関わる最も重要な人徳・長所でもあるので、親切を研究することは、個人、集団、社会のいずれにとっても非常に有益である。このことから、親切研究は、研究成果の社会への還元が期待できる研究テーマであると評価することができる。しかも、国内外の親切に関する心理学的研究の蓄積は非常に乏しく、今後の発展が待たれる研究領域である。したがって、わが国で親切に関する心理学的研究を遂行することは、学問的意義と社会的意義の両方を満たす、極めて意義ある取り組みとなる。

第 2 節　親切に関する心理学的研究の契機と課題

1. わが国における親切研究の先駆者

筆者の親切研究は、わが国で唯一の親切に関する哲学的・倫理学的研究を発表された広島大学名誉教授・近藤良樹博士の日本的親切論に基礎を置くものである。筆者の親切研究は、近藤博士の日本的親切論に触発されて開始した経緯があり、近藤博士の研究論文が存在しなければ、筆者の親切研究は形を成さなかった。親切研究は、筆者が広島大学を 2012 年 3 月に定年退職し、同年 4 月に広島文教大学（〔旧〕広島文教女子大学）奉職後に手がけた研究であるが、奇しくも、筆者と近藤博士は、教育学研究科と文学研究科で所属部局は異なっていたものの、1992 年～2008 年の 16 年間、広島大学の同僚であったことを後で知ることとなった。近藤論文からは、親切の本質に関する知識だけでなく、物事の本質に縦横無尽に切り込み、論理で勝負する哲学研究・倫理学研究の面白さを学ぶことができた。

親切の哲学的・倫理学的研究から心理学的研究を構想するにあたっては、日本社会心理学会の会長等を歴任され、わが国を代表する社会心理学者であり、援助行動研究の第一人者である関西大学名誉教授・高木修博士の援助行動研究および向社会的行動研究をお手本として参考にした。高木博士は、すでに 1980 年代初頭から援助行動研究・向社会的行動研究の優れた研究成果を数多く報告して来られた。2010 年に広島大学大学院教育学研究科を主会場に開催され、筆者が大会委員長を務めた日本社会心理学会第 51 回大会で、高木博士が、特別企画シンポジウム“日本社会における「助ける」、「助けられる」、「助け合う」ということの社会的意義は？”を企画され、援助という現象を多面的に捉えることの重要性を提案されたことは、今でも鮮明な印象として脳裏に焼き付いている。

2. 親切研究の契機

親切研究の直接の契機は、広島文教女子大学大学院人間科学研究科の社会人学生・岡竹郁子さんが修士論文の研究として、筆者のゼミで親切研究に取り組んだことにある。この親切という研究テ

ーマは、筆者の現在の勤務先、武田学園広島文教女子大学の創設者である故武田ミキ初代理事長・学長が掲げられた教育理念「心を育て 人を育てる　＝　育心育人」に通じるものがある。こうした理由もあって、筆者にとって初めて挑戦することになったテーマ「親切」の研究には、この数年間の研究時間のうちのかなりの時間を割いた。

3. 親切の心理学的研究の多様な課題

親切の心理学的研究は、関連領域である援助行動、愛他的行動、向社会的行動に関する先行研究を参考にすると、親切過程における 5 種類 4 段階の基本行動やそれに関係する心理的反応に関する測定的研究、規定因特定的研究、生起過程研究、効果過程研究、理論・モデル構築研究といった社会心理学的研究課題が考えられる。また、健常者あるいは心理的問題を抱える臨床群の対象者に対する親切行動の介入研究のような臨床社会心理学的研究課題、慈愛瞑想（loving-kindness meditation）の効果研究のような臨床心理学的研究課題も考えられる。さらには、親切に関する心理学的研究の成果を裏付ける生体内の変化の解明を可能とする医学系分野との学際的共同研究課題も重要になるであろう。

第 3 節　本書の特徴

1. 本書のねらい

ところで、親切とは何か、親切とはどのような概念であろうか。この点に関しては、わが国の親切概念と欧米の親切（kindness）概念に大きな違いがあることが近藤（2007a）によって指摘されているものの、日本と欧米の親切概念の違いを踏まえた心理学的研究は、現時点では見当たらない。それどころか、わが国では、親切に焦点化した本格的な研究と呼ぶにふさわしい心理学的研究はわずか数件しか存在しないのが現状である。

こうした状況を踏まえ、まず筆者は、日本と欧米で使用されている親切という概念の比較整理を試みることから出発した。次に、国内外で発表された親切に関する先行研究を収集し、主要な先行研究の概要を紹介した。これと同時に、親切という現象をより深く理解するために、独自の理論的枠組みを設定することによって、親切に関する理論的研究に挑戦してきた。さらには、理論的研究と並行して、実証的研究に着手し、7 件の調査研究を実施してきた。

本書のねらいは、筆者がこれまでに行ってきた親切に関する研究の成果を体系化して、情報提供することによって、親切研究に関心をもつ研究者を増やすことと親切研究に取り組む研究者を支援することであり、究極的には親切研究領域の発展に寄与することである。

2. 本書の構成

本書は 12 章構成である。第 1 章「序 : なぜ親切の研究なのか」では、人間にとっての親切の価値、親切の心理学的研究の契機と課題、本書の特徴を通して、親切の心理学的研究の意義について述べ

る。第 2 章「親切の辞儀」では、日本語の親切の概念と英語の親切（カインドネス：kindness）の概念の異同を考察しており、いわば親切の言語学的研究に相当する。加えて、社会運動としての小さな親切運動における親切の性格を分析する。

第 3 章「日本的親切論：近藤良樹の親切の哲学」では、親切に関する近藤（2007a）の本格的な哲学的・倫理学的論考を再構成して紹介し、日本的親切論の本質に迫る。第 4 章「親切の哲学から親切の心理学への道程」では、哲学的・倫理学的な日本的親切論を分析的な視点から捉えなおし、心理学的研究の土台作りを行う。第 5 章「親切の心理学的研究の展開の方向性」では、親切の関連・類似概念である援助行動、愛他的行動、向社会的行動などとの比較から親切概念の独自性を検討し、これらの関連・類似概念の研究領域から親切の心理学的研究に関する示唆を得る。

第 6 章「親切現象の心理学的理解」では、親切現象を心理学的に理解するための多次元的視点と時系列的視点という 2 つの視点が内包されることを指摘し、5 種類 4 段階の基本行動から成る標準的親切過程、3 水準の親切過程、3 層の親切過程という新たな視点を提案する。第 7 章「親切現象における対人コミュニケーションの役割」では、親切現象は対人コミュニケーションを抜きには考えられないことを親切過程の丹念な分析を通して証明する。

第 8 章「わが国における親切の心理学的研究」では、日本的親切概念あるいは欧米的親切概念のどちらを用いた研究であるかという次元、および親切を主テーマとする研究であるかそうでないかという次元から、親切研究を二次元的に分類し、わが国の親切に関する心理学的研究を展望する。そして第 9 章「欧米における親切の研究」では、様々な領域における親切研究を概観した上で、典型的な親切の心理学的研究を紹介し、親切の医学的研究の最新成果も紹介する。

第 10 章から第 12 章までの 3 章では、筆者が実施した親切に関する実証的研究を紹介する。第 10 章「親切の構造に関する測定的研究」では、最初に親切と類似語の類似度（意味的距離の逆数）から親切の意味的構造を、次に未知の他者あるいは友人・知人に対する親切行動の実行可能性から親切の 2 種類の行動的構造を、最後に未知の他者に対して親切にしない理由から不親切の動機的構造を測定し、それぞれの測定尺度を作成している。第 11 章「親切行動とふれ合い恐怖心性の関連に関する研究」では、既知の他者に対する典型的ふれ合い恐怖心性と未知の他者に対する非典型的ふれ合い恐怖心性を測定する尺度を作成し、親切行動とそれら 2 種類のふれ合い恐怖心性との関連を検討している。第 12 章「親切行動とコミュニケーション不安の関連に関する研究」では、既知の他者に対するコミュニケーション不安と未知の他者に対するコミュニケーション不安を測定する尺度を作成し、親切行動とそれら 2 種類のコミュニケーション不安との関連を検討している。

3. 初出論文の修正・再構成と共著者の方々への謝辞

本書を構成する論文は、広島文教大学心理学会（〔旧〕広島文教女子大学心理学会）の機関誌「広島文教大学心理学研究（〔旧〕広島文教女子大学心理学研究）」と対人コミュニケーション研究会の機関誌「対人コミュニケーション研究」に発表した論文を基にしている。初出論文は、表 1-1 に示した通りであるが、全ての論文にわたって内容や表現の大幅な加筆、削除、修正を行っている。また、元論文の分割や削除、複数の論文の統合や再構成を行っている。

元論文を作成するに当たりご協力いただいた共著者の方々は、表 1-2 に示す通りである。これらの共著者の方々に心より感謝申し上げたい。

表 1-1　本書を構成する初出論文一覧

深田 博己 (2015a).　親切の哲学と心理学　対人コミュニケーション研究, **3**, 33-83.
深田 博己 (2015b).　欧米における親切の研究　広島文教女子大学心理学研究, **2(1)**, 1-38.
深田 博己 (2016).　親切現象の心理学的理解　広島文教女子大学心理学研究, **3(1)**, 1-18.
深田 博己 (2017).　わが国における親切の心理学的研究　広島文教女子大学心理学研究, **3(2)**, 1-22.
深田 博己・岡竹 郁子 (2015a).　親切の意味的構造　広島文教女子大学心理学研究, **1(2)**, 1-20.
深田 博己・岡竹 郁子 (2015b).　親切の行動的構造　広島文教女子大学心理学研究, **1(2)**, 21-36.
深田 博己・谷川 瑞貴 (2016).　不親切の動機的構造　広島文教女子大学心理学研究, **2(2)**, 25-36.
深田 博己・山根 嵩史・植田 智・福田 雄一 (2017a).　典型的および非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の作成　広島文教女子大学心理学研究, **4(1)**, 1-18.
深田 博己・山根 嵩史・植田 智・福田 雄一 (2017b).　既知の他者用および未知の他者用コミュニケーション不安尺度の作成　広島文教女子大学心理学研究, **4(1)**, 19-32.
深田 博己・山根 嵩史・植田 智・福田 雄一 (2017c).　ふれ合い恐怖心性と社会的行動およびスキルとの関連　広島文教女子大学心理学研究, **4(1)**, 33-48.
深田 博己・山根 嵩史・植田 智・福田 雄一 (2017d).　コミュニケーション不安と社会的行動およびスキルとの関連　広島文教女子大学心理学研究, **4(1)**, 49-59.

表 1-2　共著者の氏名、所属、職名（表 1-1 の提示論文順）

岡竹 郁子	〔旧〕広島文教女子大学大学院人間科学研究科教育学専攻　修了生
谷川 瑞貴	〔旧〕広島文教女子大学人間科学部心理学科　卒業生
山根 嵩史	川崎医療福祉大学医療福祉学部臨床心理学科　助教
植田 智	広島文教大学人間科学部心理学科　教授
福田 雄一	広島文教大学人間科学部心理学科　教授

第２章　親切の辞義

日常用語である「親切」は、多義的であり、特定の定義が広く受け入れられているわけではない。そこで、最初に日本語の辞義（言葉の意味）としての親切について考察する。また、日本での親切が意味する内容と欧米での親切／カインドネス（kindness）が意味する内容を検討することによって、日本と欧米における親切の異同を確認する必要がある。そこで、次に英語の辞義としての親切について考察する。最後に、わが国における親切が、実際にどのように社会に受け止められているのかを考察するために、社会運動としての「小さな親切運動」を取り上げ、この「小さな親切運動」として推奨されている親切の意味内容を検討する。したがって、第 1 節では「日本語の辞義としての親切」、第 2 節では「英語の辞義としての親切」、第 3 節では「『小さな親切運動』の親切」について述べる。

第１節　日本語の辞義としての親切

1. 国語辞典に見る「しんせつ」と「親切」

(1) 使用する国語辞典

日本語としての親切の意味は、国語辞典でどのように解説されているのであろうか。表 2-1 に示したわが国の代表的な国語辞典である 6 種類の大辞典から親切の辞義（言葉の意味）を探る。

表 2-1　親切の意味を調べるための国語辞典

1) 『国語大辞典』:　金田一春彦・池田弥三郎（編）（1980）『学研国語大辞典（机上版）』学習研究社。
2) 『日本国語大辞典』:　日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2001）『日本国語大辞典　第二版　第 7 巻』小学館。
3) 『広辞林』:　三省堂編修所（編）（1984）『広辞林　第六版＜机上版＞』三省堂。
4) 『大辞泉』:　小学館大辞泉編集部（編）（2012）『大辞泉　第二版　上巻』小学館。
5) 『広辞苑』:　新村出（編）（2008）『広辞苑　第六版　机上版　あーそ』岩波書店。
6) 『日本語大辞典』:　梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明（監修）（1995）『講談社カラー版　日本語大辞典　第二版』講談社。

(2)「しんせつ」という言葉

「しんせつ」という音をもつ言葉には様々な意味があり、「親切」を含めて、17 種類の言葉の存在が指摘されている。「親切」と共通の「しんせつ」という音をもつ言葉は、「心切」、「深切」のほかに、14 種類の言葉が見られる。6 種類の国語辞典で共通に見出し語として取り上げられている「し

んせつ」は 5 語である。6 種類全ての辞典が「親切」、「臣節」、「新設」、「新雪」、「新説」の 5 語を見出し語として取り上げている。そして、『広辞林』を除く 5 種類の辞典が「深雪」を、『日本国語大辞典』と『大辞泉』と『広辞苑』の 3 種類の辞典が「真説」を、『日本国語大辞典』と『広辞苑』の 2 種類の辞典が「親接」を、『日本国語大辞典』の 1 種類の辞典が「心折」、「申雪」、「申説」、「信説」、「神説」、「真切」、「親褻」の 7 語を見出し語として取り上げている。

(3)「親切」という言葉

「親切」は 6 種類全ての国語辞典で見出し語として取り上げられている。さらに詳細に、「親切」が見出し語として取り上げられている形態を見ると、①『日本語大辞典』の 1 種類の辞典が「親切」を単独で見出し語とし、解説の中で「心切」と「深切」について言及をしている。次に、②『国語大辞典』と『広辞林』の 2 種類の辞典が、「親切・深切・心切」を見出し語とし、③『日本国語大辞典』と『大辞泉』と『広辞苑』の 3 種類の辞典が「親切・深切」を見出し語としている。

見出し語の取り上げ方から、「親切」と特に関連の大きい言葉は、「心切」と「深切」であることが分かる。

2. 「親切」、「心切」、「深切」の意味

(1) 見出し語「親切」の場合

見出し語「親切」の中で「心切」と「深切」について言及をしている『日本語大辞典』では、「親切」は、“（禅宗用語で、慈悲心で相手の気持ちとぴたりと合うことの意味から）①情が厚く、丁寧なこと・さま。②心の底から深く思うこと・さま。”（p.1107）と説明される。そして、①は禅宗では「心切」、②は「深切」とも言うと説明される。すなわち、人に対する「親切」には、「心切」的な要素と「深切」的な要素の両方が含まれると読み取れる。

(2) 見出し語「親切・深切・心切」の場合

見出し語「親切・深切・心切」を使用した『国語大辞典』では、「親切・深切・心切」は、“①（利害を考えず）相手の身になってつくすこと。人情の厚いこと。②行きとどいて、ていねいであること。③心の底からすること。”（p.990）と説明される。このように、「親切」、「深切」、「心切」の間の区別は全くなされていない。

見出し語「親切・深切・心切」を使用した『広辞林』では、「親切・深切・心切」は、“①人情が深いこと。真心がこもっていること。その人の身になって考えたり行動すること。ねんごろ。②見えからではなく、心の底からすること。”（p.1030）と説明される。ここでも、「親切」、「深切」、「心切」の間の区別は全くなされていない。

(3) 見出し語「親切・深切」の場合

見出し語「親切・深切」を使用した『日本国語大辞典』では、「親切・深切」は、“①（深切）深くはなはだしいこと。特に、心入れの深いこと。心の底からであること。また、そのさま。②他人への心情で、思いやりのあること。特に相手のために配慮のゆきとどいていること。また、そのさま。懇篤。”（p.645）と説明される。このように、「親切」と「深切」は明確に区別されていないものの、「親切」の意味内容①は特に「深切」と限定される。さらに、『日本国語大辞典』では、「真切」

は、“気持ちや表現に真実さがあること。まじめであること。また、そのさま。”（p.644）と説明され、「親切・深切」と「真切」は区別される。

見出し語「親切・深切」を使用した『大辞泉』では、「親切・深切」は、“①相手の身になって、その人のために何かをすること。思いやりをもって人のためにつくすこと。また、そのさま。②（深切）心の底からすること。また、そのさま。”（p.1881）と説明される。『大辞泉』でも、「親切」と「深切」は明確に区別されていないものの、「親切」の要素②が特に「深切」と限定される。

見出し語「親切・深切」を使用した『広辞苑』では、「親切・深切」は、“①（「深切」と書く）深く切なること。痛切。②人情のあついこと。親しくねんごろなこと。思いやりがあり、配慮のゆきとどいていること。”（p.1454）と説明される。『広辞苑』でも、『大辞泉』と同様に、「親切」と「深切」は明確に区別されていないものの、「親切」の意味内容①が特に「深切」と限定される。

3. 「親切」の意味内容の分類

6 種類の国語辞典には、大きく 2 つ～3 つの意味内容が「親切」、「深切」、「心切」の内容として記述されている。「親切」、「深切」、「心切」の意味内容は、(1)明瞭な「人に対する愛他的な気持ちや振る舞い」と、(2)人や物事や状況に対する心の底からの気持ちや振る舞い、の 2 つに分類できると考える。こうした観点から、各国語辞典に記載された意味内容を表 2-2 に示した。

『国語大辞典』の①、『日本国語大辞典』の②、『広辞林』の①、『大辞泉』の①、『広辞苑』の②、『日本語大辞典』の①と②の記述は、全て人に対する愛他的な気持ちや振る舞いに関連した内容である。

しかし、『国語大辞典』の②と③、『日本国語大辞典』の①、『広辞林』の②、『大辞泉』の②、『広辞苑』の①の記述は、人に対する心の底からの気持ちや振る舞いに限定されない、物事や状況に対する心の底からの気持ちや振る舞いを含む、一般的な幅広い内容である。なお、『日本国語大辞典』の「真切」も、同様な広い内容である。

以上のように、「親切」、「深切」、「心切」は、人に対する愛他的な気持ちや振る舞いを意味する比較的狭義の「親切」、「深切」、「心切」と、人や物事や状況などに対する心の底からの気持ちや振る舞いも含む比較的広義の「親切」、「深切」、「心切」があると解釈される。しかし、「親切」、「深切」、「心切」の中核的意味内容が、あくまでも人に対する愛他的な気持ちや振る舞いであることは、『日本語大辞典』の記述に典型的に示されている。加えて、（　）書きで、（深切）という特殊扱いをされる意味内容を除くと、純粋な「親切」の意味内容が、人に対する愛他的な気落ちや振る舞いであることは、より一層明瞭になる。

4. 派生語と複合語から見た「親切」

「親切」、「深切」、「心切」の派生語および複合語として、6 種類の国語辞典で、どのような言葉が挙がっているのかを検討することによって、「親切」の意味を吟味する。

①『国語大辞典』では、「親切気（しんせつぎ）」と「親切ごかし（しんせつごかし）」の 2 語。

②『日本国語大辞典』では、「親切顔（しんせつがお）」、「親切気（しんせつぎ）」、「親切気（しんせつげ）」、「親切ごかし（しんせつごかし）」、「親切心（しんせつしん）」、「親切尽（しんせつずく）」、「親切振（しんせつぶり）」、「親切味（しんせつみ）」、「親切めかし・い（しんせつめかし・い）」、

「親切めく（しんせつめく）」、「親切者（しんせつもの）」の 11 語。

③『広辞林』では、「親切気（しんせつぎ）」の 1 語。

④『大辞泉』では、「親切気（しんせつぎ）」、「親切気（しんせつげ）」、「親切ごかし（しんせつごかし）」、「親切さ（しんせつさ）」、「親切味（しんせつみ）」の 5 語。

⑤『広辞苑』では、「親切気（しんせつぎ）」と「親切ごかし（しんせつごかし）」の 2 語。

⑥『日本語大辞典』では、「親切気（しんせつぎ）」、「親切気（しんせつげ）」、「親切ごかし（しんせつごかし）」、「親切さ（しんせつさ）」、「親切味（しんせつみ）」の 5 語。

以上のように、6 種類の国語辞典で取り上げられた派生語と複合語は、全て「親切」の派生語と複合語であり、「深切」と「心切」の派生語および複合語は皆無である。このことから、「親切・深切・心切」の中で、「親切」が中核となる言葉であること、「深切」と「心切」は周辺的な言葉であることが確認できた。

表 2-2　「親切」、「深切」、「心切」の意味内容の分類

国語辞典の種類	人に対する 愛他的な気持ちや振る舞い	人や物事や状況に対する 心の底からの気持ちや振る舞い
『国語大辞典』	①（利害を考えず）相手の身になってつくすこと。人情の厚いこと。	②行きとどいて、ていねいであること。 ③心の底からすること。
『日本国語大辞典』	②他人への心情で、思いやりのあること。特に相手のために配慮のゆきとどいていること。また、そのさま。懇篤。	①（深切）深くはなはだしいこと。特に、心入れの深いこと。心の底からであること。また、そのさま。懇篤。
『広辞林』	①人情が深いこと。真心がこもっていること。その人の身になって考えたり行動すること。ねんごろ。	②見えからではなく、心の底からすること。
『大辞泉』	①相手の身になって、その人のために何かをすること。思いやりをもって人のためにつくすこと。また、そのさま。	②（深切）心の底からすること。また、そのさま。
『広辞苑』	②人情のあついこと。親しくねんごろなこと。思いやりがあり、配慮のゆきとどいていること。	①（「深切」と書く）深く切なること。痛切。
『日本語大辞典』	（・・・慈悲心で相手の気持ちとぴたりと合うことの意味から）＊ ①情が厚く、丁寧なこと・さま。 ②心の底から深く思うこと・さま。	

注 1）＊（　）内の表現は①と②の両方にかかる。

5. 心理－行動次元から分析した「親切」の意味

6 種類の国語辞典に見られる「親切」、「深切」、「心切」の説明を、心理的側面と行動的側面とに分類する試みを行った。心理的側面と行動的側面の間に明確な線引きをすることは困難であるが、比較的心理的な側面についての記述であるか、比較的行動的な側面についての記述であるかを、あくまでも相対的に判断した結果を表 2-3 に示した。表 2-3 から、6 種類の全ての国語辞典は、相手への思いやりや相手の身になって考えるなどの心理的側面と、相手のためにつくしたり、ゆきとどいた配慮をするなどの行動的側面の両面から、「親切」、「深切」、「心切」を記述していることが判明した。

表 2-3　「親切」、「深切」、「心切」の意味の心理的側面と行動的側面

国語辞典の種類	主に心理的側面	主に行動的側面
『国語大辞典』	①（利害を考えず）相手の身になって・・・。人情の厚いこと。	①・・・つくすこと。 ②行きとどいて、ていねいであること。 ③心の底からすること。
『日本国語大辞典』	①（深切）深くはなはだしいこと。特に、心入れの深いこと。心の底からであること。 ②他人への心情で、思いやりのあること。懇篤。	①また、そのさま。 ②特に相手のために配慮のゆきとどいていること。また、そのさま。
『広辞林』	①人情が深いこと。真心がこもっていること。その人の身になって考えること。	①その人の身になって行動すること。ねんごろ。 ②見えからではなく、心の底からすること。
『大辞泉』	①相手の身になって・・・。思いやりをもって・・・。	①・・・その人のために何かをすること。・・・人のためにつくすこと。また、そのさま。 ②（深切）心の底からすること。また、そのさま。
『広辞苑』	①（「深切」と書く）深く切なること。痛切。 ②人情のあついこと。・・・思いやりがあり、・・・	②親しくねんごろなこと。・・・配慮のゆきとどいていること。
『日本語大辞典』	①情が厚く・・・。 ②心の底から深く思うこと。	①情が厚く、丁寧なこと・さま。 ②のさま。

6.「親」と「切」の字義

「親切」という言葉を構成する 2 つの漢字「親」と「切」の字義（文字の意味）を確認しておく。そのために、表 2-4 に示した 3 種類の漢和字典を利用して、「親切」の意味と、その「親切」の意味に対応する「親」と「切」の意味を抽出する。

表 2-4　漢字「親」と「切」の意味を調べるための漢和辞典

1) 『大漢語林』: 鎌田正・米山寅太郎（著）（1992）『大漢語林』大修館書店。
2) 『大字源』: 尾崎雄二郎・都留春雄・西岡弘・山田勝美・山田俊雄（編）（1992）『角川大字源』角川書店。
3) 『漢和大字典』: 藤堂明保（編）（1980）『学研漢和大字典（机上版）』学習研究社。

『大漢語林』では、「親切」は、“なさけ深い。丁重でゆきとどくこと。”（p.1276）と説明される。この「親切」の意味に対応する「親」は、“①したしい。ちかい。②したしむ。ちかづく。④したしみ（㋐いつくしみ。思いやり。㋑よしみ）”（p.1276）である。「切」は、“⑥程度の深刻さを表す（㋑しきりに。ふかく。ねんごろに。）”（p.146）ものであり、この意味の熟語として「深切」と「懇切」が挙がっている。『大漢語林』では、「親」と「切」の意味は異なり、「親」の程度を「切」が表しており、「切」が「親」を修飾する関係として捉えられる。

『漢和大字典』では、「親切」は、“①身近な。②ぴったりとはだ身にこたえる。③人情深くていねいなこと。”（p.1196）と説明され、このうちの③がいわゆる「親切」である。この意味に対応する「親」は、“①したしむ・したしい・ちかい”（p.1196）であり、熟語として「親切」と「親疏」が挙がっている。「切」は、“③刃物をじかに当てるように、ぴたりとくっついて膚にこたえるさま。”であり、この意味の「切」については、類似語に「親」と「即」が、その熟語として「親切」と「懇切」が挙がっている。『漢和大字典』では、「親」と「切」は本質的に同じ意味を表しており、いわゆる「親切」を表す「親」と「切」の語が二重に使用され、「親切」の意味が強調されていると捉えられる。

『大字源』では、「親切」は、“①ぴったりとあてはまっていること。②人に対してよく世話をする。真心を尽くす。”（p.1616）と説明され、このうちの②がいわゆる「親切」である。この意味に対応する「親」は、“④したしむ（㋐近づける。近づく。㋑なかよくする。むつまじくする。㋒愛する。親近感を持つ。）。⑤したしい。ちかしい。親密である。⑥支援するもの。”（p.1615）である。「切」は、“⑥深い。深く。しきりに。⑪ねんごろ。くれぐれ。まこと。”（p.193）であり、⑪の「切」の類似語として「親」と「即」が、その熟語として「懇切」が挙がっている。『大字源』では、「切」に 2 つの意味があると読み取れる。「切」が程度を表す⑥の意味の場合には、『大字源』と同様に「親」の程度を「切」が表しており、「切」が「親」を修飾する関係として捉えられる。しかし、「切」が⑪の意味を表す場合には、『漢和大字典』と同様に、いわゆる「親切」を表す「親」と「切」の語が二重に使用され、「親切」の意味が強調されていると捉えられる。

以上のように、「親切」と「親」「切」の関係性に関して、『大漢語林』では「親」の程度を「切」が表し、『漢和大字典』では類似語の「親」と「切」が二重使用され、『大字源』ではその両方の形態が見られる。

7. 「親切」の語源

二字漢字の謎を解くと銘打って、北嶋（2011）は、親を切ると書いてなぜ「親切」なのかという問いかけをし、「親切」という二字漢字の意味を次のように説明している。「親切」の「親」という漢字は、「立」、「木」、「見」に分解でき、「親」は、「木」の上に「立」ち、いつも子供を「見」守っていることを表し、「親」には、親しさ、思いやりという意味がある。一方、親切の「切」は、切るという意味ではなくて、「切に望む」という場合のように、心から、心の底からという意味であり、どうしてもと強く思う様子を表した副詞である。そこから、「親切」は、親しさや思いやりの程度が深いこと、激しいことを意味することになるという。

『語源辞典』（吉田金彦（編）（2000）『語源辞典　形容詞編』東京堂出版）によると、「しんせつ親切・深切・心切」の語源については、以下のような説明が見られる。“「親切・深切」は漢語で、思い入れの深く切実であること。また、そのさまの意から、古くは「深切」を常用した。「親切」のほかに、「心切」の字も当てられる。身近に接している、じかにはだ身にふれる意の親しいから、シン（親）の字を使用することが多い。セツ（切）は、はものをじかに当てるように、身近についてゆきとどくの意である。”（p.190）。

以上のように、「親」と「切」の関係性に関しては、ここでも、「親」の程度を「切」が示す説と、「親」と「切」が同じ意味を示す説の 2 種類が示され、「深切」が古語であること、「心切」が当て字であることが明らかとなった。

8. まとめ

6 種類の国語辞典を使用した「親切」の辞義的分析から、「親切」の同義語として「深切」と「心切」があることが分かった。そして、6 種類の国語辞典で取り上げられた派生語と複合語は、全て「親切」の派生語と複合語であり、「深切」と「心切」の派生語および複合語は皆無であった。このことから、「親切・深切・心切」の中で、「親切」が中核となる言葉であること、語源辞典から「深切」は古語、「心切」は当て字の使用であり、「深切」と「心切」は周辺的な言葉であることが確認できた。

また、「親切」は、人に対する愛他的な気持ちや振る舞いを意味する比較的狭義の「親切」と、人や物事や状況などに対する心の底からの気持ちや振る舞いも含む比較的広義の「親切」があると解釈された。しかし、「親切」の中核的意味内容は、あくまでも人に対する愛他的な気持ちや振る舞いであることが判明した。

さらに、6 種類の全ての国語辞典は、相手への思いやりや相手の身になって考えるなどの心理的側面と、相手のためにつくしたり、ゆきとどいた配慮をしたりするなどの行動的側面の両面から、「親切」を記述していることが示された。

なお、3 種類の漢和辞典から、「親切」は 2 つの漢字「親」と「切」が同じ意味を二重に表現していると解釈される場合と、「親」の程度を「切」が表現していると解釈される場合があることが示された。

以上のように、辞義から、①「親切」、「深切」、「心切」の中核的用語は「親切」であること、②「親切」の中核的意味内容は人に対する愛他的な気持ちや振る舞いであること、③「親切」は心理

的側面と行動的側面の両面から成立することが解明された。

第 2 節　英語の辞義としての親切

1. 辞典に見る欧米の親切

(1) 使用する辞典類

欧米では、日本語の親切に相当する用語は一体どのような意味をもつのであろうか。ここでは、英語の「カインドネス（kindness）」の意味内容を検討するために、いずれも大辞典である表 2-5 に示した英和辞典、和英辞典、英英辞典を使用する。

表 2-5　「カインドネス（kindness）」の意味を調べるための英和辞典、和英辞典、英英辞典

1) 『新和英大辞典』: 渡邉敏郎・E. R. Skrzypczak・P. Snowden（編）（2003）『研究社新和英大辞典 第 5 版』研究社
2) 『研究社新英和大辞典』: 竹林滋（編集代表）（2002）『研究社新英和大辞典　第 6 版』研究社
3) 『小学館ランダムハウス英和大辞典』: 小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会（編）（1974）『小学館ランダムハウス英和大辞典　第 2 巻』小学館
4) 『*The Randomhouse Dictionary of the English Language*』: Flexner & Hauck (Eds.) (1987). *The Randomhouse Dictionary of the English Language*. Second Edition. Randomhouse.
5) 『*The New Lexicon Webster's Dictionary of the English Language*』: Lexicon Publications (1987). *The New Lexicon Webster's Dictionary of the English Language*. 1988 Edition. Lexicon Publications.
6) 『*Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged*』: Gove & The Merriam-Webster Editorial Staff (Eds.) (1986). *Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged*. Merriam-Webster Inc.
7) 『*The Oxford English Dictionary*』: Simpson & Weiner (Eds.) (1989). *The Oxford English Dictionary*. Second Edition. Vol.VIII. Clarendon Press.

(2) 和英辞典に見る親切

日本語の「親切」に最も近い英単語は、「カインドネス（kindness）」であることは周知の事実である。『研究社新和英大辞典』によると、「親切」を意味する言葉として、第 1 に“kindness”が挙がっており、このほかに“goodness”と“a favor”が挙がっている（p.1351）。そして、「小さな親切」としては“a small kindness”と“a little act of kindness”の表現が、「親切な行為」としては“a kind [considerate] act”と“an act of kindness”の表現が紹介されている（p.1351）。

(3) 英和辞典に見るカインドネス

逆に、「カインドネス（kindness）」は、どのような意味をもつ言葉であるのかについて、2 種類の英和大辞典によって検討する。『研究社新英和大辞典』では、“kindness”は、“①親切、優しさ（goodness）、②親切な態度［ふるまい］、③親切な行為、④（古）愛情、好意、友情”と説明される（p.1355）。

また、『小学館ランダムハウス英和大辞典』では、“kindness”は、“①親切、優しさ、思いやり、情け深さ、②親切な行為（kind act）、③親切な態度（ふるまい）（kind behavior）、④友情（friendly feeling）、好意（goodwill, liking）”と説明される(pp.623-624)。①の説明の中に、“動物に対する優しさ（kindness to animals）”という表現が見られる。

以上のように、英語の「カインドネス（kindness）」も、日本語の「親切」と同様に、心理的な側面と行動的側面の両方の意味を含む言葉であることが分かる。しかし、「カインドネス（kindness）」は、人間以外のもの（例えば、動物）に対する優しさを含む点が、日本語の「親切」とは異なるように思われる。

(4) 英英辞典に見るカインドネス

英英辞典では、「カインドネス（kindness）」はどのように説明されているであろうか。4 種類の英英大辞典を参照してみる。なお、語句や単語の冒頭の大文字小文字の表現は、辞典の表記をそのまま引用しているため、不統一である。

『*The Randomhouse Dictionary of the English Language*』では、“kindness”は、“①親切であるという人の状態あるいは特質（the state or quality of being kind）。②親切な行為（a kind act）、好意（favor）。③親切な振る舞い・態度（kind behavior）。④友好的な気持ち（friendly feeling）、好意（liking）。”と説明される（p.1056）。また、①と③の同義語として、“優しさ（benignity）、善意（benevolence）、人情（humanity）、寛大（generosity）、慈善（charity）、同情（sympathy）、思いやり（compassion）、慈悲心（tenderness）”が、②の同義語として“善行（good turn）”が、①の反対語として、“悪意・悪意に満ちた行為（malevolence）”が、③の反対語として、“残酷・残酷な行為（cruelty）”が挙がっている（p.1056）。

『*The New Lexicon Webster's Dictionary of the English Language*』では、“kindness”は、“親切であるという人のもつ特質、または、（他人に）力を貸して少しばかり役立つために（その人に対して）親切な行為をするというこの特質が表された具体例（the quality of being kind or an instance of this to do (someone) a kindness to render (someone) a small service）”と説明される（p.540）。そして、kind の説明として、“同情心のある（sympathetic）、助けになる（helpful）、友好的な（friendly）、配慮の行き届いた（thoughtful）、優しい（gentle）、気立てのよい（well-disposed）、人のそのような特質を示すこと（showing such qualities）、行為が心地良いあるいは有益な（pleasant or beneficial in action）”が挙がっている（p.540）。

『*Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged*』では、“kindness”は、“①親切であるという人の行為あるいはその具体例（an act or instance of being kind）: 好意（Favor）。②親切であるという人の特質あるいは状態（the quality or state of being kind）: 同情・思いやり（Sympathy）、寛大・慈悲（Clemency）。”と説明される（p.1243）。

Simpson & Weiner（1989）の『*The Oxford English Dictionary*. Second Edition. Vol.VIII. Clarendon Press.』では、“kindness”は、“④親切であるという人の特質あるいは習性（The quality or habit of being kind）; 親切な性質あるいは傾向、または、行動や行為でこうした人の性質や傾向を示すこと（kind nature or disposition, or the exhibition of this in action or conduct）。こうした実例（an instance of this）、親切な行為（a kind act）。⑤親切な気持ち（Kind feeling）、優しさあるいは慈しみの気持ち（a feeling of tenderness or fondness）; 親愛の情（affective）、愛情（love）、善意（good will）、好意（favour）、友好（friendship）。”と説明される（p.441）。なお、①～③は古語としての“kindness”の説明なので、省略した。

以上のように、英英辞典でも、“kindness”という用語は、心理的な側面と行動的な側面の両側面を含む点では、日本語の「親切」という用語と同様であるが、優しさ、思いやり、愛情、寛大、善意、同情、友好的な気持ち、といった多様な意味をもつ点では、日本語の「親切」という用語よりも、その用語の意味する範囲が広い。

2. 欧米の親切の対象と範囲

(1) 親切の対象

日本では親切の用語が、見知らぬ他人（近藤, 2007a）あるいは家族を除く他者（深田, 2015a）のように、家族以外の他者個人に対する親切として限定的に使用されるのに比較して、欧米ではカインドネスの用語は、その対象が家族も含む点、さらには親切の対象が自分自身にまで及ぶ点が明らかに異なる。

例えば、McCarty & McCarty（1994）の著書の中では、カインドネスは、ホームレスのような見知らぬ他人に対する親切だけでなく、友人に対する親切、同僚などの知人に対する親切、さらには、自分の母親や子どもなどの家族に対する親切として使用されている。また、カインドネスは、職場における親切や教育における親切といった表現だけでなく、例えば問題児の指導を意味するコミュニティに対する親切（kindness to community）、環境の保護を意味する環境に対する親切（kindness to environment）といった抽象的な対象に対しても使用されている。

特筆すべきは、親切の対象が自分自身にも及ぶ点であり、自己への優しさや自己への思いやりという意味で、自己への親切（self-kindness）という用語が使われている（Neely, Schallert, Mohammed, Roberts, & Chen, 2009; Neff ,2003b）。

このほかに、未来世代のための親切（kindness for future generations: Tibetan Review, 2009）、動物に対する親切（kindness towards animals: Ascione, 1997）といった現存しない人々に対する親切や人間以外の対象に対する親切の表現も見られる。

(2) 親切の範囲

日本的な親切は、ささやかな手助け（近藤, 2007a）あるいは比較的小さい手助け・贈与（深田, 2015a）を指すのに比較して、欧米のカインドネスは、大きな負担や犠牲の伴う手助け・贈与含む点が日本的な親切と異なる。

例えば、欧米のカインドネスの内容としては、ホスピス（末期患者収容施設）でのボランティア（McCarty & McCarty, 1994）、腎臓などの臓器提供（Steinberg, 2003）、旧社会主義圏から自由主義圏への養子縁組（Venable & Shaw, 2011）といったコストの大きい手助け・贈与も扱われている。

(3) 親切の行為者

日本的な親切の行為者は、人間にしかも個人に限定される（深田, 2015a; 近藤, 2007a）。しかし、欧米のカインドネスでは、人間存在を超越した神の親切（God’s kindness）という表現が使用されている（Lerner, 2013）。日本文化では、神道や仏教における神仏の親切という表現は不自然であり、神仏の御利益・御加護あるいは仏の慈愛・慈悲（loving-kindness）をいただくという表現の方が自然である。このように行為者の点からも、欧米のカインドネスは日本の親切とは異なるようである。

3. 欧米の親切行動の具体例

親切を実践する際の典型的な親切行動として、ハミルトン（2001）は、表 2-6 の 40 項目の親切行動を挙げている。表 2-6 に示された 40 の親切行動の対象と内容を分析することによって、ハミルトン（2011）の想定する親切がどのようなものかを検討し、欧米における親切の意味内容を確認する。

近藤（2007a）や深田（2015a）は、見知らぬ他人に対する小さな手助け・贈与が典型的な親切行動であると考えている。明らかに見知らぬ他人に対する小さな手助け・贈与であると判断される親切行動は、項目 1、2、11、13、35 の 5 項目だけであり、項目 40 の 1 項目もそうした性格の強い内容である。

親切の対象として友人・知人を近藤（2007a）は含めないが、深田（2015a）は含める。親切の対象が友人・知人であると判断される項目は、6、20、22～27、30～34、36～38 の 16 項目であろう。項目 3、12、18、19、28、29 の 6 項目は、友人・知人を対象とする方が自然な親切内容ではあるが、見知らぬ他人に対しても取りうる親切内容である。

親切行動の対象という点で、対象が家族やきょうだいである項目 7、21 の 2 項目は、近藤（2007a）や深田（2015a）の想定する親切行動とは異なり、対象が家族、恋人、親友など重要な他者である項目 39 も異なる。また、親切行動の負担度という点で、負担の大きい行動を示す項目 8、14、15 は、近藤（2007a）や深田（2015a）の想定する親切のカテゴリーから外れる。

項目 4、5、6、10 は、親切行動というよりむしろマナー行動であり、項目 3、22、29 を含めて、わが国の「小さな親切運動」の内容と類似する内容である。また、項目 16、17、30、36 は、わが国の文化では見られにくい内容の親切行動であろう。

表 2-6　実践に役立つ 40 の親切行動（ハミルトン (2011) の pp.196-199 を一部修正）

1. お年寄りの買い物袋を持ってあげる
2. レジの列で急いでいる人に順番を譲ってあげる
3. 人をほめる
4. 店やレストランで働いている人に、「ありがとう」などと声をかける
5. 運転中に割り込みされそうになったとき、笑顔と手振りでどうぞと促す
6. かつて世話になった恩師に、感謝の手紙を送る
7. 友人やきょうだいの子どもをあずかってあげる
8. 慈善団体に参加してボランティアをする
9. 献血する
10. 街頭で冊子を配っている人がいたら、微笑んで受け取り、ありがとうございます、読ませてもらいますねと声をかける
11. バスや電車でお年寄りに席を譲る
12. 困っている人の相談に乗る
13. 寄付をする
14. 恵まれない子どものフォスターペアレント（里親）になって金銭的に支援する
15. 孤児を養子や里子にする

16. 新聞の投書欄などに人々を励ますメッセージを送る
17. 特に理由がなくてもハグする
18. 誰かに何かを買ってあげる
19. お金で苦労している人に昼食や夕食をおごる
20. 誕生日に電話をかけ、「ハッピー・バースデー・トゥ・ユー」と祝福する
21. インターネットの宅配サービスを使い、家族にまとまった食料品を送る
22. 恩ある人に感謝の手紙を書き、直接会って読み上げる
23. 職場でコーヒーをとってくるときにほかの人に声をかけたり、いきなり持ってきて渡してみる
24. お世話になった取引先にチョコレートを贈る
25. お年寄りに花を贈る
26. お年寄りの家を訪ねて、話し相手になる
27. 大切な人や友人が望んでいることを聞き出して、かなえてあげる
28. 人に本を贈る
29. 人の服装をほめる
30. 頑張っている人のためにパーティを開く
31. お年寄りの家を訪ねて庭をきれいにしてあげる
32. 買い物に出かけられない人のために、代わりに買ってきてあげる
33. 息抜きが必要な人を誘って夜、パーッと遊ぶ
34. 会社に入ってきた新人や近所に引っ越してきた人を昼食に誘う
35. 後ろの人のためにドアを押さえておく
36. 誰かのために詩を書いたり、歌をつくってみる
37. ユーチューブなどの面白いビデオや感動する映像を、元気のない人に教える
38. 誰かが苦手にしていることを、代わりにやってあげる
39. 大切な人のために朝食をつくってあげる
40. 親切にされたら自分も親切にして、親切の輪を広げる

第 3 節　「小さな親切運動」の親切

1. 「小さな親切」運動の契機と展開

(1)「小さな親切」運動の契機

親切という言葉から連想されるのは「小さな親切運動（Small Kindness Movement）」である。「小さな親切」運動は、東京大学学長であった茅誠司が 1963 年 3 月 28 日に東京大学卒業式の告示で「小さな親切」の必要性を説き、その実行を訴えたことが発端であった。告示の主旨は表 2-7 の通りである。

以下、主として、公益社団法人「小さな親切」運動本部（2015）の公式ホームページに掲載された情報から、運動の概要を紹介する。

表 2-7　東京大学卒業式での茅誠司学長の告示の主旨

豊かな社会的教養をもつという意味は、様々な知識をもつことでなく、その教養を社会人としての生活の中に活かすことであり、人格形成の基盤とすることである。親切は「雪崩」のように発達するものなので、「小さな親切」がきっかけとなり、「親切」が日本社会の隅々まで波及することを希望する。「小さな親切」は、やろうとすれば誰にでもできるものなので、勇気をもって実行すれば、その「小さな親切」は、バラバラな百科事典的知識を融合させる接着剤の役割を果たし、立派な社会人としての人間形成の基盤となる。（公益社団法人「小さな親切」運動本部（2015）の公式ホームページ掲載の「東京大学卒業式告示」から筆者が要約した）

(2)「小さな親切」運動の展開

茅誠司ら 8 人が提唱者となって、1963 年 6 月 13 日に民間運動として「小さな親切」運動は始まり、「小さな親切」運動本部が発足した。「小さな親切」運動本部の初代代表には茅誠司が就任した。「小さな親切」運動本部は、1966 年に社団法人の認可を受け、2011 年に公益社団法人の認定を受けた。「小さな親切」運動本部は、東京都千代田区にその活動拠点を置き、全国 33 道府県に県本部、145 市町村に支部があり、会員数約 20 万人の組織である。会員は、正会員（個人単位、企業・団体単位）、一般会員（個人単位、10 人以上のグループ単位）、学校会員（学校単位）の 3 種類である。情報誌として季刊誌「小さな親切」が発行されている。

2.　「小さな親切」の意味するもの

(1)「小さな親切」とはなにか

第 1 に、「小さな親切」の「小さな」は、親切の大きさのことではなく、「小さな親切」は、やろうと思えば、いつでも、どこでも、だれでもできる親切という意味である。このように「小さな親切」では、親切の大きさを問題にするわけではない。

第 2 に、「小さな親切」は、心の中に思いやりの芽をもつことが第一歩で、その心を可能な範囲で実行できればよいと考える。必ず実行行為を伴うボランティアと違い、「小さな親切」は思いやりの心を重視する。

(2)「小さな親切」運動のスローガンとシンボル

「小さな親切」運動のスローガンは、「できる親切はみんなでしよう　それが社会の習慣となるように」である。また、シンボルマークは、小さな芽が、あたたかな太陽の光の中で、大きく成長することを願って、「双葉に太陽」のマークが、シンボルフラワーは、まごころの花言葉をもつ「コスモス」が採用されている。加えて、流氷の天使クリオネをモチーフとしたキャラクターも採用されている。

(3)「小さな親切」八か条

小さな親切運動の初期に、茅誠司初代代表は、表 2-8 の「小さな親切」八か条を提唱した。「小さな親切」八か条の内容を検討してみると、いわゆる「親切」な行為に相当するのは、⑥と⑦の 2 か

条だけである。①～④の 4 か条は、「親切」な行為そのものではなく、対人関係を形成・維持・発展させるための基本的なコミュニケーション・スキルに相当する。これらの行為は、直接的な「親切」ではないものの、相手の存在を認めるからこそ生じる行為であり、相手に心地よい感情と喜び、自信と勇気を与える行為であるので、間接的に「小さな親切」行為とみなされたのであろう。また、⑤と⑧は、社会的迷惑行為という望ましくない行為を戒めるものであり、「親切」という望ましい行為を推奨する⑥と⑦が積極的な親切行為であるとすれば、これとは異質の、消極的な親切行為であると言える。このように、「小さな親切」運動の初期に提唱された「小さな親切八か条」は、必ずしも「親切」な行為そのものだけではなく、社会人として身に付けておくべき基本的なマナーを包含するような、「親切」の基盤となる行為を指し示していると言えよう。

表 2-8　「小さな親切」八か条（公益社団法人「小さな親切」運動本部 (2015) より転載）

①朝夕のあいさつをかならずしましょう。
②はっきりした声で返事をしましょう。
③他人からの親切を心からうけ入れ、「ありがとう」といいましょう。
④人から「ありがとう」といわれたら、「どういたしまして」といいましょう。
⑤紙くずなどをやたらにすてないようにしましょう。
⑥電車やバスの中でお年寄りや、赤ちゃんをだいたおかあさんには席をゆずりましょう。
⑦人が困っているのを見たら、手つだってあげましょう。
⑧他人のめいわくになることはやめましょう。

親切が非常に多様な行動を含む理由は、「小さな親切」が元々どのような言葉として提出されたのか、その起源に遡ることによってよく理解できる。茅誠司代表が「小さな親切」八か条を提唱した当時、小さな親切運動本部事務局長を務めた塚原（1964）は、茅が「チープ・モラル（cheap moral）」を「小さな親切」と訳したと記述している。小さな親切という言葉の起源がチープ・モラルであれば、対人関係を形成する上で欠かせない挨拶などのコミュニケーションや、社会の一員として当然身に着けておくべきマナーが、「お金のかからないささやかな道徳的行動」としての親切に含まれることが理解できる。

3. 「小さな親切」運動における活動の実態

「小さな親切」運動における主な活動は、下記のように大きく 4 種類に分類される。

(1) 親切の心を元気にする活動

①親切さんの紹介：街で見かけた親切な行いをした人の話を募集し、紹介する活動。

②「小さな親切」実行章：街で見かけた親切な人を表彰する活動は、親切な行為の動機づけを高め、思いやりのネットワークを広げることを目的とする、「小さな親切」運動の根幹をなす活動。

③作文コンクール：私のした、受けた、見た、できなかった「親切」をテーマとする、小中学生の体験作文を募集し、子どもたちに親切の意味と大切さを知ってもらうための活動。

④はがきキャンペーン“手のひら感謝状”：親切にしてくれた人に対する感謝の気持ちを表すエッセイコンテスト活動。

(2) 親切の心を育てる活動

①紙芝居による「心の教育」プロジェクト：紙芝居を学校教育に活用し、他者を思いやる心を育て、いじめや不登校を抑制するための活動。

②紙芝居講師養成講座：紙芝居の読み聞かせスキルの向上と読み聞かせボランティアのネットワーク拡大を目指す活動。

(3) 日本を守り、地球を救う活動

①日本列島クリーン大作戦：「美しい日本、美しい心」をスローガンに、美化活動を通して、地域や環境への関心を高め、コミュニティ作りに貢献する活動。

②エコキャップ収集運動：ペットボトルのキャップを分別収集し、発展途上国の子どもの命を救うワクチン購入の資金作りの活動。

③日本列島コスモス作戦:コスモスを日本中に咲かせ、心あたたかな街づくりの輪を広げる活動。

(4) 世界や地域とつながる活動

①地域の輪・和・環プロジェクト：身体の不自由な人やお年寄りの社会参加を願い、車椅子を寄贈し、交流を図り、心のバリアフリーを広げる活動。車椅子利用者への理解促進などを目的とする講習会の開催活動。このほかに、施設慰問、寄贈運動（切手、カード、はがき）、お便り便（一人暮らしのお年寄りに手紙を送る運動）、Thanks Letter（大切な人への感謝の手紙を送る運動）といった活動。

②あいさつ運動：他者の存在を認めることを意味するあいさつは、最も身近な「小さな親切」である。人と人とのコミュニケーションのきっかけや、人間関係のきっかけを作る活動。

③「小さな親切」運動実践協力校：学校単位に、「小さな親切」運動本部の各種事業の中から、作文コンクールやはがきキャンペーンの必須事業のほかに、一事業を選択して取り組んでもらう活動。

④心の国際交流：世界各地に存在する親切運動を行っている団体によって結成された世界親切運動（World Kindness Movement: WKM）は、「世界中に親切を」をスローガンとしている。WKM のメンバーと交流する活動。

4. 「小さな親切」運動を支える親切観

「小さな親切」運動が始まってわずか半年後に、茅（1964a）は、言論界・実業界・芸術界など各界の第一線で活躍する 25 名の人たちの親切観、および小さな親切の実例をまとめている。小さな親切運動に賛同する人たちの親切観は、①親切の心とかたち、②人間性の回復、③小さな親切運動のうちそと、に 3 分類されている。この書の序として、茅（1964b）は、“一つ一つの小さな親切は誰にでも容易にできることには違いない。然し、それを実行する機会を逃すことが実に多い。それを全然反射的に、習慣的に一つも残さずに実行する人間となるまでの道は誠に遥かで遠いと言わなければならない。”（p.3）と、実行の難しさを強調している。この書の中で展開されている親切観の一部を紹介する。

(1) 親切の心とかたち

(a) 良識を伴う親切（坂西, 1964）　他人の経験を通して親切の型を学ぶことはできても、自分の心を鍛え、温かい心を育てなければ、猿真似の親切に終わってしまう。「親切で殺された人」*という言葉が示すように、真心から出た親切でなければ、悪い結果をもたらすこともありうる。そうならないためには、親切には良識が、善意には知性が伴わなければならない。親切は、人間として当然行わなければならない行為であるため、そうした判断を可能とする良識が必要である。また、善意がお節介とならないよう、状況を判断するだけの知性が求められる。

*筆者注）正しい意味は「ありがた迷惑を押しつけられた人」と思われる。

(b) しつけの大切さ（松下, 1964）　人に親切にされることはうれしいことであるし、人に親切にすることは快いものである。こうした行為のやり取りによってお互いの心が通い合い、精神的な潤いや心の豊かさが生まれ、対人関係がよくなり、このことが、仕事の励みや能率の向上に繋がる。親切と温かい心遣いは、物心両面の豊かさをもたらす。自分を大切にするだけでなく、同時に他人を大切にするという基本的な心構えが、親切や温かい心遣いとなって現れる。親切や温かい心遣いは、人間としての共通の心がけであり、人間的しつけによって養われるので、大人がそうした人間的躾の重要性を認識し、子どもにしつけていかねばならない。

(c) 明るい暖かい心（矢野, 1964）　使えば使うほど益々多く湧き出す泉のように、心の中に湧いてきた明るい暖かい気持ちが流れ出て親切な行為になる。明るい暖かい心を育てるためには、そうした心をもつように自分が努力し続けることが一番大切である。親切には小さな親切と大きな親切があるが、小さな親切ができない人には、大きな親切はできない。ただし、小さな親切と大きな親切の違いは、そこに働く親切な心の大小ではなく、親切な心を注ぐ出来事の大小の違いを指す。したがって、小さな親切とは、親切の価値が小さいという意味ではなく、小さい出来事に親切が注がれているという意味である。

(d) 心の触れ合い（赤井, 1964）　小さな親切は、しなくてもそう大きな迷惑や苦労を掛けるものではないが、その小さな親切によって、人々が触れ合い、心と心が通じるようになり、お互いに交流できるようになる。小さな親切を運動として行う理由は、小さな親切は皆で手をつないで実行すべきものであるからである。日本人は、親切をするにも遠慮がちであり、躊躇する傾向がある。小さな親切をするくらいの勇気は誰でももっていたいものであり、実行をためらうことは、小さな親切を吹聴することよりも劣る。

(e) 親切の受容（佐藤, 1964）　親切は、義務でないから尊いもの・潤いのあるものであり、また、自発的なものであるから心構えや努力がいる。親切にされた人は、おそらく他の人に親切にするはずであり、こうして小さな親切は広がり、住みよい社会への道が開ける。親切を受け入れる側の受け入れ態勢が大事であり、親切なことをした人に失望感を与えたり、親切心をくじいたりしないようにしなければならないし、親切を素直に受け取る自分の人間性をすり減らしてはならない。人からの親切を感謝の念をもって快く受けることは、自分が人に親切になることにつながる。

(2) 人間性の回復

(a) 社会の規律と親切（茅, 1964c）　対立を解決する前提は「和」することであり、和することは社会の規律に従うことである。「小さな親切」は、社会の規律に従うことであり、社会人としての義務を行うことである。小さな親切運動が提唱されるということは、社会の規律に従うという義務がなかなか果たされていなくて、それを行うのに小さな勇気が必要とされることを意味する。したがって、小さな親切運動の必要性がなくなることが望ましい。

(b) 親切の条件（原, 1964）　親切は、報酬や返礼を期待したり、恩を売ったりするものであって

はならない。また、自分の行った親切が表に現れることを望んだり、第三者に知られたりすべきではない。自分のした親切に関する事柄が親切にした相手の耳に入れば、親切の価値が半減したり、相手に不快感を与えたり、時には恨みを買ったりすることになりかねない。

(c)「小さな」の意味（森下, 1964）　「小さな親切」運動は、自分自身を犠牲にしてまで、自分を殺してまで他人に尽くす運動ではなく、凡人が、誰でもしようと思えば、いつでも、どこででも、できる親切である。大人にも子どもにもできる親切であり、「小さな」というところに意味がある。

(d)受け取る側の感謝（諸井, 1964）:「小さな親切」運動は、感謝されることを求める運動ではないが、受け取る側が感謝の気持ちをもって親切を受け取り、さらにその感謝を第三者に対する親切によって表現すれば、運動の本旨に一致するものとなる。

(e)平和への第一歩（森戸, 1964）　大衆社会では、人々は、身近な共同体への帰属感を失った個人として、群衆の中で孤独な生活を送っている。こうした大衆社会的傾向に対処するための有効で手近な方法としては、身近で現実的な小さい事柄を捉えて、そこで人間関係を回復・強化することが肝要である。「小さな親切」運動における「小さな」ということを、「身近で現実的」と解釈し、「親切」ということを、「隣人的な人間関係の復興」を目指すことと解釈すれば、まさに、「小さな親切」運動は、大衆社会的傾向への処方箋となる。万人の踏み出すことのできる平和への第一歩は、個人が社会での日常の生活において、小さな親切と小さな愛情を分かち合い、小さな関心と小さな勇気と小さな責任を覚醒し合い、小さな迷惑と小さな暴力を排除し合うことによって、踏み出される。

(3) 小さな親切運動のうちそと

(a)親切の効用（栗田, 1964）　親切とは、自分の行動に責任をもつこと、他人に迷惑をかけないこと、相手の立場を考えて思いやりの態度をもつこと、礼儀を守って人に接することである。親切によって、世の中は明るく、楽しくなり、住みやすくなるので、親切は、世の中の人が仲良く平和に暮らす基礎を作る。日本人は、身近な人には親切をするが、見知らぬ人には容易にできる親切をためらう傾向があるので、勇気を出して積極的に小さな親切を実行しなければならないし、親切をされる人も、遠慮せず感謝して受け入れなければならない。

(b)親切をする人の留意点（呉, 1964）　人間は誰でも親切をしようという気持ちをもっているが、何となく恥ずかしいとか、人が見ているから晴れがましいという気持ちが働くため、ついためらってしまうので、親切を実行するには勇気がいる。親切は純真な気持ちから出発したものでなくてはならない。したがって、親切は、押しつけてはいけない、何かのためにするとか恩を着せるためにするといった下心があってはいけない、代償や報酬を求めてはいけない、お礼や感謝がないからといって気を悪くしたり憤慨したりしてはいけない。

(c)小さな親切の原語と、小さな親切運動への批判に対する反論（塚原, 1964）　「小さな親切」運動発足当初に事務局長を務めた塚原（1964）によると、賞を受ける人はエリートに限られていたが、庶民大衆の中から顕彰する人を選ぶべきであるという考え方に関連して、茅誠司は、チープ・モラル（cheap moral : お金のかからないささやかな親切はするものだという道徳）を「小さな親切」と訳し、これが小さな親切運動へと展開していくことになった。小さな親切運動が世間の話題になり、大きな流れとなったとき、様々な批判が起こったが、塚原（1964）は、それらの中から検討に値する 5 つの批判を取り上げ、反論している。

①親切は結構だが、親切をすることが運動になってはおしまいであるという批判。現代は、社会

的な課題に個人的に対処できるような時代ではなく、社会的に訴えるためには運動の形を取らざるを得ない。「小さな親切」運動は、日本人の精神革命を目指している。

②「小さな親切」をしたことにバッジを与えること、そんなバッジを誰が麗々しくつけるのかという批判。バッジには、「実行章」と「会員章」の 2 種類があり、運動する側は社会的な効果を考え、仲間意識を高めるためにバッジを利用する。また、バッジには、例えば、運動に参加しているという自覚や誇りのような個人的な意味もある。

③「小さな親切」などとケチクサイことを言わないで、なぜ「大きな親切」といわないのかという批判。「小さな親切」もできない人に「大きな親切」ができるわけもないという意味で、「小さな親切」の中に「大きな親切」が宿っている。「小さな親切」と「大きな親切」は異質なものではない。

④「小さな親切」なんて偽善だという批判。「小さな親切」や人間の好意を体得してもらうしかないが、たとえ偽善であっても「小さな親切」を実践してもらうことが大切であり、そうした簡単な実践から新しい世界が開けてくる。

⑤「小さな親切」は労働強化をカムフラージュし、無償労働に直結するという批判。労働強化や無償労働と「小さな親切」は次元の異なる問題であり、両者の間には何の関係もない。

上記の批判③④⑤と同質の批判として、⑥「小さな親切」を強調することによって、当然政治的に解決すべき課題を忘れさせているという批判がある。今、目の前の困っている人に救いの手を差し伸べること（小さな親切、付き合い論）と、困る人がいなくなるような社会にすること（政治的課題、大所高所論）は、両立すべきことである。

5. まとめ

「小さな親切」運動の特徴として、4 つの点を指摘できる。1 つ目は、「小さな親切」という言葉の由来は、スモール・カインドネスにではなく、チープ・モラルにある点である。

これにより、2 つ目は、「小さな親切」には、困っている他者の手助けをするといった他者に対する直接的な親切行為だけでなく、あいさつや感謝などの人間としての基本的なコミュニケーション行為や、さらには社会的迷惑行為の抑制といった基本的なマナーの遵守が含まれている点である。

3 つ目は、「小さな親切」は、親切の大きさが小さいという意味ではなく、やろうと思えば、いつでも、どこでも、だれでもできる親切を意味する点である。

4 つ目は、行為としての「小さな親切」の実行を奨励するだけではなく、「小さな親切」の芽となる「親切な心」の育成を重視している点である。

第３章　日本的親切論：
近藤良樹の親切の哲学

本章では日本語と英語における親切の辞義の異同、すなわち、日本と欧米における親切の意味の違いを指摘した。これを受け本章では、日本文化・日本社会における親切の問題を徹底的・多面的に掘り下げて、その特色と独自性を解明した近藤（2007a）の哲学的・倫理学的研究を「日本的親切論：近藤良樹の親切の哲学」として紹介する。近藤の日本的親切論では、どのような人に対して親切をするのか、親切をする人はどのような人か、親切心とはどのような心か、親切の本質とは何か、という 4 つのテーマが論じられている。そこで、第 1 節では「近藤良樹の親切論」の概要を述べ、近藤の 4 つのテーマをそれぞれ再構成し、第 2 節では「親切の対象者」、第 3 節では「親切の行為者」、第 4 節では「親切心」、第 5 節では「親切の本質」として紹介する。

第１節　近藤良樹の親切論

1. 哲学者近藤良樹と日本的親切論の構成

(1) 哲学者近藤良樹

本格的な「親切論」は、哲学者・倫理学者である広島大学名誉教授・文学博士・近藤良樹によって提出されている。近藤良樹は、大阪大学文学部・大学院文学研究科（1972 年修了）で哲学を修め、大阪大学文学部助手、佐賀大学教育学部講師・助教授、広島大学文学部助教授・教授を歴任した。1995 年以降は広島大学大学院文学研究科倫理学研究室の主任教授として活躍し、2008 年 3 月に広島大学定年退職後に福山平成大学教授を務めた。近藤は、13 冊の著書と 60 編以上の論文を発表し、広島大学定年退職を記念して、「誠実」や「希望」など 9 つのテーマに関して、広島大学リポジトリに 9 つの論文集を掲載している。こうした 9 つの論文集のうちの 1 つとして、近藤（2007a）の「親切論」（論文集）がある。近藤（2007a）の「親切論」の特徴は、日本独自の「親切」の解明にあり、いわゆる「日本的親切論」が展開されている。

(2) 近藤良樹の親切論の構成

近藤良樹の「親切論」は、5 編の論文から構成され、近藤（2007a）として編纂されている。第一章「我々の親切は、誰にするのか―日本的な親切の人間関係論―」の初出は近藤（2004a）、第二章「親切な人（ひと）は、どんな他人（ひと）か―人間関係としての親切論―」の初出は近藤（2004b）である。第三章「親切心―他人に対するあたたかな思いやり―」および第四章「親切の本質―たまたまする、ささやかな手助け―」の初出はいずれも近藤（2007a）であるが、章を区別するために、前者を近藤（2007b）、後者を近藤（2007c）と表記する。なお、第一章（補）として掲載された英語

論文“The theory of kindness from the viewpoint of Japanese human relations―Whom are we kind to?―”は、第一章と同じ内容を少し詳しく述べたものであり、この論文は Kondo（2004c）が初出である。

近藤（2004a）は、いわば彼の親切論の中核を成す論文であり、この論文では、親切を誰にするか（親切の対象者）に焦点を絞りつつ、近藤の構想する「親切論」の核心部分が論じられている。これに対して、近藤（2004b, 2007b, 2007c）は親切論の各論に相当する。近藤（2004b）は、親切な人とはどのような人かに、また近藤（2007b）は、親切心とは何かに、さらに近藤（2007c）は、親切の本質とは何かに迫っている。

本章は、近藤の親切論を再構成し、若干の心理学的考察を加え、整理し直したものである。近藤（2007a）の親切論の構成と本書における親切論の再構成とを対比するための比較表を、表 3-1 として示した。近藤論文の直接引用に当たっては、表記の一貫性を保つため、用語の漢字変換を一部修正した箇所がある。また、煩雑さを避けるため、これ以降、近藤論文は全て近藤（2007a）として一括表記する。したがって、引用文のページ表記は、すべて近藤（2007a）のページに統一する。また、近藤論文の内容紹介に関しては、元論文の表現と例文をできるだけ取り入れるように試みた。

2. 親切の定義と親切概念の本質

(1) 近藤（2007a）の親切の定義

近藤（2007a）は、論文の冒頭で“われわれの「親切」は、困ったり求めをもつ他人に対して、たまたまその場に居合わす者が、ささやかな手助けをすることである。”（p.1）と、親切の定義を述べている。

(2) 近藤（2007a）の親切概念の本質

上の定義から明らかになる親切の本質は、①親切は「たまたまその場に居合わせる人」が行うものであること、②親切の内容は「ささやかな手助け」であること、③親切は「他人に対して行うもの」であること、④その他人は「困っているか、助けを求めている状態」にあること、の 4 点である。こうした親切の本質について、近藤（2007a）は、表 3-2 のように繰り返し言及している。

3. 親切の時代差と文化差

(1) 親切の時代差

近藤（2007a）によると、中世以前の共同社会では、大いに依存し合い、干渉し合うのが普通で、これが親切であったが、現代の個人主義的市民社会では、それは干渉・お節介と見なされ、他者との距離を置く、傍観的でささやかな手助け・贈与が親切である。また、現代社会は、自立した個人が等価な有償の交換を行う契約社会であるが、親切は、等価な有償の交換という冷たい関係を停止して、あたたかな無償の贈与をする、社会のささやかな潤滑油である。親切に関するこうした時代差は、中世以前の共同社会（Gemeinschaft）と近代以降の市民社会（Gesellschaft）を対比することによって理解できる。なお、共同社会とは、地縁、血縁などにより自然発生的に形成された連体的な社会（例：家族集団、村落）であり、市民社会とは、ある特定の目的を達成するために人為的に形成された利益追求的な社会である。

表 3-1　近藤（2007a）の親切論の構成と本章での親切論の再構成との比較

近藤（2007a）の親切論の構成	本章での親切論の再構成
	第 1 節　近藤良樹の親切論 1. 哲学者近藤良樹の日本的親切論の構成 2. 親切の定義と親切概念の本質 3. 親切の時代差と文化差
第一章　我々の親切は、誰にするのか **―日本的な親切の人間関係論―** 1. 親切は、ひと（人）にする 2. 親切は、ひと（他人）にする 3. 親切は、困っているひと、求めのあるひとにする 4. 親切は、（困っていても）いやな者には発動しない 5. 近づきたい他人を選んでする親切もある	**第 2 節　親切の対象者** 1. 親切の対象者の特定 2. 親切の対象者の状態 3. 親切の対象者の特性 4. 親切な行為の特徴 5. 手段としての親切 6. 親切に対する対象者の理解・評価
第二章　親切な人（ひと）は、どんな他人（ひと）か **―人間関係としての親切論―** 1. よく気がつき思いやりのある人 2. あまり人見知りしないひと 3. 実行力・行動力の豊かなひと 4. 世話好き 5. 優しそうで暇や余裕のありそうなひと 6. 求めるもの（能力）を持っていそうなひと 7. 通りすがりの者 8. 不親切な親切な人	**第 3 節　親切の行為者** 1. 親切をする人の特徴 2. 親切を乞われる人の特徴 3. 親切の要請と拒否
第三章　親切心　―他人にするあたたかな思いやり― 1. こころ優しさ、ささやかな思いやり 2. ささやかな好意 3. あたたかさ―冷たい商品社会のぬくもり 4. 自発性 5. 主観性・思い込み・行き違い 6. 親切心への否定的評価	**第 4 節　親切心** 1. 親切心の基本的特徴 2. 親切心を構成する心性 3. 親切の影響
第四章　親切の本質　―たまたまする、ささやかな手助け― 1. 無償のボランティア的な贈与 2. 仕事のうちでも親切が言えるか 3. ささやかさ―子供にもできる 4. かならずしも頼りにはならない 5. 傍観的他者距離 6. 市民社会のふれあいの間柄 7. 好意のふるまい 8. 純粋な親切は、行きずりの人、通りがかりの人にするもの	**第 5 節　親切の本質** 1. ささやかな無償のボランティア的な手助け・贈与 2. ささやかさと傍観的距離 3. 仕事外と仕事中の親切 4. 親切をする側とされる側の好意

表 3-2　親切の本質に関する近藤（2007a）の言及

“親切は、たまたま出会った他人の間でするのが典型であろう。”（p.4）
“純粋な親切は、行きずり、通りすがりの他人にする親切である。”（p.5）
“親切は、たまたまの出会いに、余裕でする、ほんのささやかな手助けである。”（p.4）
“親切は、本質的に、「小さな親切」である。”（p.4）
“親切は、ささやかな無償の手助け・援助を、他人にすることである。”（p.5）
“親切は、他者距離を保って、ほんの表面のごくささやかな援助をするにとどめる。”（p.4）

(2) 親切の文化差

近藤（2007a）によると、日本における親切の対象者は、人であり、他人であるが、これに対し、英語の親切（kindness）やドイツ語の親切（Freundlichkeit）の概念は、動植物に対する親切も含む広い概念であり、優しいという概念にまで拡大している。また、日本では、個人と家族は一心同体であり、個人と家族との間の心理的距離は非常に小さいが、個人と家族以外の人々との間の心理的距離は大きい。これに対して、英語圏の国では、個人主義が徹底しているので、個人にとって、家族も他人であり、家の内外の別は大きな違いではないため、他人と同様に家族も親切の対象者になる。こうした文化差は心理学的にも自己と他者の境界の問題としてよく理解できる。すなわち、自己と他者の境界線を自己、家族、友人・知人、見知らぬ他人の 4 層から成る同心円で考えると、集団主義文化圏に属する日本では、自己と家族の間には明確な境界線は存在せず、家族の外側に境界線が存在するが、個人主義文化圏に属する欧米では、自己の外側に境界線が存在するのである。

第 2 節　親切の対象者

本節では、近藤（2007a）の第一章に基づいて、親切の対象者の特徴を中心に、親切に関する分析と再構成を行う。ただし、近藤（2007a）の親切論を構成する最も重要で中核的な部分である親切の定義や親切概念の本質などについては、あらかじめ第 1 節で紹介した。

1. 親切の対象者の特定

(1) 日本的親切の対象者

わが国における親切の対象者は他人である。家族に対する親切や動植物に対する親切も含む英語圏やドイツ語圏の親切とは異なる。

(2) 日本的親切の非対象者

近藤（2007a）は、動植物、死者、植物人間、乳幼児、家族、友人は、親切の対象とならないと考えている。

(a) 動植物　人以外の動植物は親切の対象とならない。

(b) 死者　人であっても、死者は親切の対象者とならない。

(c)植物人間・乳幼児　生きている人でも、植物人間や乳幼児は親切の対象者とならない。親切を親切と理解できる人が、親切の対象者となる。これは、親切をされた相手が、その行為を親切であると評価することによって、初めて親切が成立するという、親切の成立要件の1つが関係すると解釈できる。植物人間や乳幼児に対する援助や支援は、親切というよりも、むしろケア（世話・介護）という方が適切であろう。

(d)家族　家族は親切の対象者とならない。家族は一心同体の存在であり、家族が困っている場合は小さな親切を超える、自己犠牲的献身が当然である。例外として、他人行儀になっている場合にのみ、家族が親切の対象者となる（例：パソコンにてこずっている父親に対する息子の手助け）。

(e)友人　友人は親切の対象者とならない。友人に対する親切には、嫌われたくない等の不純な動機が働き、行為者が親切な行為への見返りを期待しているため、親切が無償の手助けではなくなるからである。

2. 親切の対象者の状態

(1) 困っている状態

親切の対象者である他人は、何かに困っていなくてはならない。親切は、他人の困苦の発見から始まる。相手が困っていない場合の自称親切は、お節介、迷惑、余計なお世話であり、度が過ぎるとハラスメントや犯罪である。

(2) 助けを求めている状態

困っている人は、ささやかな手助けなので、たまたま居合わせた他人に頼むことができる。相手が困っていると言えば、困っていることは確かであり、親切な行動が誘発される。しかし、人は、困っているということを表現せずに、隠すことも多い。

(3) 困る前段階の状態

親切は、困る手前の、「求め」のある段階、親切をありがたいと思える段階でも、成り立つ（例：コーヒーを入れていて、ついでに、喜んでくれそうな人にも入れてあげる場合）。

(4) 親切に該当しない場合

困窮していても、清貧に誇りをもって生きている人に対する場合や、欲しそうにしている人の場合でも、親切が「いらぬお節介」、「余計なお世話」、「ありがた迷惑」になることがある（例：タバコを欲しそうにしている禁煙中の人に対する「一本どうぞ」という行為）。

3. 親切の対象者の特性

(1) たまたまその場に居合わす人

親切は、たまたまその場に居合わす人、行きずりの人、通りすがりの人に対して、見知らぬ他人が行う。

(2) 好きな人

好感のもてる人に対して、親切をする。好意からの親切は、他者に対する親しみと好きだという感情より生じるが、一般的に、好意からの親切は、好きな相手に向けられやすい。しかし、見知らぬ他人から親切を乞われるとき、その相手について好き嫌いの判断をする前に、親切は終わることもある（例：道を尋ねられた場合）。

(3) 嫌いな人

嫌いな相手に対しては、助けを求められても、嫌いの程度と助けの内容によって、親切をするかどうかが決まる。相手に「憎悪」、「敵意」、「悪意」をもつ場合には、親切は生じない。

4. 親切な行為の特徴

(1) ささやかな手助け・贈与

親切な行為の内容は、ささやかな手助けである。親切は、しなくても済む程度のもので、即興的なささやかな手助けである。客観的な困窮度が大きい場合は、親切の対象とはならない。親切をされる者にとっての困窮度は大きくても、親切をする者には、小さな手助けに感じられなくてはならない。

この点に関して、親切の内容は、周囲に人がいなければ、我慢し、なしで済ませられるものであり、また、負担でないから、そこに居合わせた他人に手助けを頼めるのである。

(2) 無償の手助け・贈与

親切は、困っている相手の困苦を解消し、手助けの求めに対して応える行為であるので、無償の価値ある手助けであり、価値あるものの無償の贈与である。親切は、その見返りを期待してはならない。

(3) 自発性

親切は、自発的に、任意に、自由に行うものである。親切は、義務ではないし、誰かに強制されてするものではない。親切をするのもしないのも、行為者の自由である。

5. 手段としての親切

(1) 下心のある親切

親切が目的ではなく、手段となっている、下心のある親切がある。下心のある親切は、過剰なほど贈与的で、相手から好意や信頼を得て、価値ある欲しいものを手に入れることが目的である（例：赤ずきんに対する狼の親切）。親切は、見知らぬ他人に怪しまれずに近づき、わずかな負担で大きな獲物を手に入れる機会を作るので、そうした手段として利用される。

(2) 親切ごかし

親切ごかしは、贈与的・利他的な振りをし、親切そうに振る舞うが、実際には、自己利益を目的とする利己的行為である。親切ごかしの親切は、冷淡で過小に贈与的である（例：猿蟹合戦の蟹に対する猿の親切）。下心ある親切や親切ごかしは、自分の欲求を満たしてくれる相手を限定的に選択

する。近藤は、利己的な親切をその大きさによって、過大な場合が下心のある親切、過小な場合が親切ごかし、と区別しているように思われる。

(3) 隣近所との親切の交換

たまたま隣り合った他人が固定したのが隣近所である。隣近所同士の親切は、純粋に親切をするのではなく、良好な人間関係でいたいという別の意図（下心）が働いてなされる。親切によって良好な隣人関係を作るのは、「親切のよい利用の仕方」である。近藤（2007a）の言う隣近所とは、あいさつ程度は交わすが、友人と呼べるほどの親しい間柄では決してない関係の人々のことであると解釈できる。

6. 親切に対する対象者の理解・評価

(1) 相手側の親切の理解・評価

親切は、相手から親切と受け止められてこそ親切であり、相手が親切と理解し評価しなければ、親切とは言えない。相手が親切と理解・評価しない、独り善がりの親切は、「余計なお世話」、「お節介」、「迷惑」にすぎない。

近藤（2007a）は、“親切は、親切にされる者の微妙な感受性に負うところが大きく、その手助けが余計と思われれば、お節介となり、ありがたいと受けとめられるなら、親切となる。”（p.33）と述べている。

(2) 相手次第の親切

人は相手の態度や行動によって、自己の態度や行動を決定する。したがって、親切も相手の反応次第で変わる。このことを、近藤（2007a）は「親切は相関的」であると表現している。

第 3 節　親切の行為者

近藤（2007a）の「親切な人とはどんな他人か」の特性記述は羅列的になされているが、その記述内容は決して一次元的ではない。「親切の行為者」の特性は、困っている人に対して「親切をする人」の特性と、困っている人から「親切を乞われる人」の特性に二分されると解釈できる。したがって、ここでは、近藤（2007a）の第二章に基づいて、困っている人に「親切をする人」の特性と、困っている人から「親切を乞われる人」の特性を区別し、これら 2 タイプの特性に関する分析と再構成を試みる。

1. 親切をする人の特徴

最初に、「親切をする人」の特徴に関する分析と再構成を行う。

(1) よく気のつく人

親切をするためには、他人が困っているかどうか、助けを求めているかどうか、に気づく必要がある。困っている人に目を留めるような、よく気のつく、優しい思いやりのある人でなければならない。単なる好奇心旺盛な、詮索好き、知りたがり屋とは違う。

(2) 思いやりのある人

困っていることや助けの求めは、相手の立場になってみるという思いやりがなくては、気づきにくい（例：電車で老人が老人に席を譲る。若者は、親切心がないのではなくて、気づいていない）。他人であることを越えず、ささやかに触れ合うことに限定した、自制した遠慮のある思いやりをもつ人が親切な人である。

(3) 好意的な人

近藤（2007a）は、“親切にする人は、好意的なひとである。”（p.28）と言う。好意は、相手を肯定的に受容し、近づきたいと思い、贈与的な気持ちをもつことである。しかし、好意から親切をする人は、ときには利己的で、好きな相手を優先することがある。

親切と好意の異同は次の通りである。親切と好意は、他者距離を超えない限度で、他人に近づき贈与的にかかわる点が類似している。親切は、一時的で、相手が困っている場合に、一方的にするものであるが、好意は、持続的で、相手が困っていても困っていなくても抱き、親切をする側も親切をされる側も抱く点で異なる。加えて、親切は、必ず親切な行為を伴うが、好意は必ずしも行為を伴わない。すなわち、双方向性（一方向的－双方向的）、持続性（一時的－持続的）、行動随伴性（随伴－非随伴）の 3 点において、親切と好意は区別されると解釈できる。

(4) 善意の人

また、近藤（2007a）は、“親切は、善意の気持ちでもする。”（p.28）とも言う。善意は、利他的で、相手のことを思い、贈与的である。善意から親切をする人は、弱者や受難者を優先する。

(5) 同情的な人

親切な人は、同情的な人である。親切と同情は、受難・困苦の他者への思いやりであり、他人に距離を置いて関わる冷たさの点では類似している。しかし、親切は、傍観者にとどまっているのみでは、その親切を成就できず、当事者となる必要があるが、同情は、その相手を傍観しているのみでよい。このように、行動随伴性の点で、親切と同情は異なる。

(6) 人見知りしない人

親切は、実行されてこそ親切である。他人が困っているかどうか、気軽に声をかけて確認し、手助けを気軽に実行してこそ、親切な人である。しかし、親切の相手の多くは、見ず知らずの他人なので、人見知りする人は、恥ずかしさが先に立って、手助けの実行が難しい（例：外国人に話しかけられそうになると、避けるようにする）。人見知りする人、内弁慶な人、恥ずかしがり屋の人は、親切を実行しにくい。

(7) 腰の軽い人

労を惜しまない腰の軽い人、行動力のある人、実行力のある人が親切に向いている。これに対し、

腰の重い人は、親切にすべきだと分かっていても、助けを求められても、即興的に応じることができず、動くことをためらい、不親切になりやすい。

親切を実行するためには、手助けを自分が引き受けて、自分がなすべきだと自覚することが必要である。その際、自分一人なら手助けするが、他に多数の人がいる状況では、誰かが引き受けるだろうと思い、親切にすることをためらうことになる。これは、社会心理学の援助行動研究で指摘されてきた、援助行動の生起に関係する認知要因である行為者の「責任認知」と「責任の分散」に相当する。

(8) 世話好きな人

親切は、世話好きな人・社交的な人が見も知らない人と接触するための格好の機会を与える。そのため、世話好きな人・社交的な人にとって、負担が少なくて相手の喜ぶ親切は、買ってでもしたい楽しい活動である。その理由は、①無償の手助けだが、ささいなもので、軽い負担で済む、②援助する立場なので、優位を保ちながら社交を楽しめる、③いやになったら、無償だから勝手にやめる自由がある、からである。

世話という手助けは、親切よりも持続性があり、相手に深く関わる本格的な手助けである（例：身の周りの世話、学校のウサギの世話）。この点に関して、近藤（2007a）は、世話が“してもしなくてもいいささいなものではない。”、“欠くことのできない重要なもので、仕事というべきものである。”、“不可欠の手助けであり、本格的に手を煩わすことである。”（p.32）と述べている。

困っている人にとって、楽しみながら助けてくれる世話好きは、気軽に助けを頼めるありがたい存在である。

普通の親切な人は、相手が迷惑に思っていると察すると、親切を即座にやめるが、世話好きな人は、親切をすること自体が楽しみになっているので、相手が迷惑がっていても、そう簡単には親切をやめない。また、世話好きな人は、自分自身が人づきあいが好きなので、他者もそうだと見なして、過剰にかかわる。これは、自らの気持ちの投映であり、社会心理学の社会的認知研究における「合意性バイアス」にも通じる。

(9) 利他的な人

親切な人は、愛他的・利他的な気持ちをもつ。利己的なエゴイストは、他者に対して親切にしない。

(10) 選択的に不親切な人

ほどほどの親切は必要であるが、自立心に乏しい依存的人間に対する親切は、過度の依存的人間を生み出す恐れがあるので、不親切こそ大局的な親切になる場合がある。

また、親切をすることもないし、親切を受けることもない、不親切をモットーにする独立自尊の人、孤高に生きようとする人がいる。

2. 親切を乞われる人の特徴

次に、「親切を乞われる人」の特徴に関する分析と再構成を行う。

(1) 優しそうな人

困っている人から、親切にしてほしいと一番に乞われる人は、優しそうな人、温厚そうな人である。乱暴な人、怖い人、きつい人、冷たい人、攻撃的な人、無思慮な人、不精な人、立腹している人は選ばれない。

(2) 暇そうな人

困っている人から、次に親切を乞われる人は、暇そうな人、余裕のありそうな人である。ただし、親切には、短い時間があればよいので、仕事中の人にでも、親切を乞うことができる。

(3) 求める能力をもっていそうな人

困っている人から、最終的に親切を乞われる人は、困っている内容に対応するための、ふさわしい能力をもつ人である（例：重い荷物を運ぶ手助けは高齢者や子どもには頼めない）。

親切として、ささいなことを無償で求めるので、最高の能力者よりも、遠慮しなくて済む、ほどほどの能力者の方が都合のよい場合がある。

(4) 仕事にしていない人

手助けに適切な人がいても、親切を乞うことのできない相手は、それを有償の仕事にしている人である（例：タクシー運転手に対して、ヒッチハイカーは無賃乗車を頼めない）。また、公設案内所の案内係の人や交番の警察官の「道案内」は、仕事であり、案内する義務・責任があるので、親切には該当しない。

(5) たまたま近くに居合わせる人

親切の内容は、周囲に人がいなければ、我慢し、なくても済ますことのできるものである。負担でないから、そこに居合わせる他人に手助けを頼める。

無償の手助けでも、計画的に、あらかじめ依頼する場合は、奉仕やボランティアになる。

親切は、怪しまれずに他人に近づく数少ない機会なので、行きずりの親切を装って、故意に近づく人がいる（例：赤ずきんに対する狼の接近）。

3. 親切の要請と拒否

(1) 親切の要請

親切を求める人も、ささやかな手助けであることを前提にして親切を受け入れる。もし、過剰な手助けだと、親切を受け入れることはできなくなる（例：道を尋ねると、目的地まで一緒に行ってあげると言って、しつこく付いてくる）。

(2) 親切の拒否

親切をされる人が、「ご好意はありがたいのですが・・・」、「ご好意だけいただいておきます」、「お気持ちだけいただきます」、「お気持ちだけで十分です」と言う場合は、遠慮している場合か、余計なお世話の場合のどちらかである。不要な親切、余計な親切を断るときに、「ご好意」という言葉を使うことが多いことから、親切と好意の重なり具合が大きいと推測できる。

第 4 節　親切心

本節では、近藤（2007a）の第三章に基づいて、親切をする人の心の問題、すなわち親切心に関する分析と再構成を行う。親切は行動だけから成り立つのではなく、親切をする人の心のあり方が問われる。

1. 親切心の基本的特徴

(1) 近藤（2007a）の親切心

近藤（2007a）は、論文の主題「親切心」の副題として「他人に対するあたたかな思いやり」を挙げている。このことから、親切心の中核的心性を「思いやり」と捉えているのではないかと理解できる。「思いやり」は本来あたたかいものであるので、「あたたかな思いやり」は「思いやり」の「あたたかさ」を強調しているだけであると解釈できる。

親切心に関して、近藤（2007a）は、“親切心は、困っていたり求めのある他人に対して、やさしい気持ちをもち、これに同情し、その解消にささやかな援助・手助けをしたいと、好意的に、あたたかにこれを思いやることであろう。”（p.40）、“親切心は、やさしい、慈しみの気持ちをもち、利他の気持ちをもちつつ、困っているひとの手助けをしようと心がける贈与的な愛のこころをもつ。”（p.40）と述べている。

(2) 親切心の基本的特徴の検討

親切は、困っている「他人」に対する「ささやかな」「無償の」手助け・贈与であるので、親切心には、「ささやかさ」と「あたたかさ」が常に随伴すると考えられる。したがって、親切心に関係すると思われる「好意的な」、「善意の」、「優しい」、「思いやりのある」、「同情的な」、「慈しみの」、「愛の」、「あたたかい」、「利他的な」、「贈与的な」気持ちや心は、すべて「あたたかさ」を共通要素としてもつと同時に、それらの気持ちや心は、すべて「ささやかな」ものにすぎないところに基本的な特徴が存在する、と考察できる。そして、この親切心の「ささやかさ」こそが、親切をする人とされる人との接触を浅いレベルにとどめ、他人同士の距離である「他者距離」を保つ役割を果たしている、と解釈できる。

2. 親切心を構成する心性

(1) 親切の基本的心性

(a) ささやかな優しさ　親切における優しさは、相手に穏やかに接して、細やかに配慮するにとどまる、ささやかな優しさである。

(b) ささやかな思いやり　親切における思いやりには、ささやかではあるが、一方的な贈与の気持ちを伴う、好意で包むあたたかさがある。

(c) ささやかな愛　親切における愛は、自己の余裕・余剰を贈与するにとどまり、献身的な慈悲

の愛とは異なり、深い愛ではない。親切の愛は、見知らぬ者同士のごく浅い愛である。

(d)ささやかな好意　親切における好意は、相手を好ましく思い、相手のためになることをしてあげたいと思う、ささやかに触れ合う親愛の情である。親切を受けるとき、「ご好意に甘えて」と言うように、親切心と好意の範囲はほぼ一致し、「親切心は好意で代表される」と近藤（2007a）は考えている。

ただし、親切心は、相手が困っているときにだけ働くが、好意は、相手が困っていなくても働き、親切をされる側の人にも見られる。

(2) 自発性と任意性

(a)自発的な親切　親切は、自発的なものである。相手や周囲の者から強制されるものではない。

(b)当為としての自発的な親切　個人的に気は進まなくても、人として行うべき親切がある。この親切は、当然なすべき行為「当為（Sollen)」である。この場合、外的な強制はないものの、個人のもつ行動基準のような内的強制が働くことによって、自発的な親切が生じる。

(c)義務としての自発的な親切　親切は、義務ではないが、個人的に自分がしなければならないという義務意識から自発的に生じる親切もある。

(d)応答的な自発性　困っている相手の状態を自ら発見することによって、自発的に行う親切は、相手の困苦状態に触発されて行われるという意味で、自発性は暗黙裡に応答的に方向づけられているにすぎない。これに対し、困っている相手からの要請に応えて、自発的に行う親切は、明らかに応答的である。

(e)任意性　親切は、しなくても済む程度のもので、あくまでも、任意である。親切も不親切も、自由であり、任意である。世話好きは、楽しみで親切を行うが、そのほかの人は、自己の誇り・自尊心を満足させるために、親切を行う。これについて、近藤（2007a）は、“世話好きは、楽しみで親切をすすめていくのだが、そうでないひとは、楽しみではなくても、自己の良心・理性を安堵させ、ひととしての誇り・自尊心を満足させるために、自主的自発的に、親切へと自らをかりたてていく。”（p.47）と表現している。

(3) 迷惑行為となる親切の心性

(a)思い込み　親切は、たまたま見ず知らずの他人に対して行うので、その他人の内心（困っている状態）は、想像・推測するにとどまり、主観的な思い込みが生じやすい。この思い込みは、根拠もなく自分の考えに固執することなので、相手を利することにはならない。

(b)行き違い　親切の気持ちはありがたいが、その親切の行為は迷惑になるという「ありがた迷惑」がある。せっかくの好意なので、断れず、いやいやその迷惑行為を受け入れることもある。親切な心が一番の贈与であるとすれば、親切な行為というささいな迷惑行為は我慢するのが、親切への礼儀正しい振る舞いになるからである。

(4) 否定・拒否される親切

(a)干渉がましい親切　親切を求めていないのに、口出し・手出しをしてくるのは、親切とは違う、単なる干渉である。干渉がましい親切は否定・拒否される。

(b)劣位を感じさせる親切　親切は、一方的な贈与・助けであるので、親切をする人は優位に立つ。対等でありたい人は、親切をされるという劣位に不快を感じるので、親切は否定・拒否される。

(c)恩着せがましい親切　ささやかな負担であっても、恩着せがましい人は、親切にしたことをしつこく言い立て、大きなお返しを要求する。恩着せがましい親切は否定・拒否される。

(d)孤高を好む場合　孤高を好む人は、仮に困っていても、親切を嫌い、余計なお世話と思うので、親切は否定・拒否される。

3. 親切の影響

(1) 親切をする人自身への親切の影響

(a)心地よさ　親切をすると気持ちがいい。親切は、贈与であるが、負担は小さく、後悔することはないので、贈与の気持ち良さだけが残る。困っていた相手が喜ぶので、自分の小さな贈与が大きく感じられる。親切は、利己の介入する暇もなく即興的に応じる利他的行為であり、さわやかである。

(b)優越感　親切は、優越の立場からなされる贈与であるので、優越感を感じられる。

(c)親切な行為の実行による親切心の出現　近藤（2007a）によると、例え求めに応じて行った親切でも、親切な行為の実行は、好意的で、優しい、思いやりの気持ちや心を一時的にその人にもたらすことがある。行動が原因で、心理的変化が生じる場合であり、とりあえず親切に振る舞うことが、その人の親切心を育てることになる。

(2) 親切の相互影響性

(a)ぬくもり　親切のあたたかさは、親切をされる相手が感じるものだが、相手の感じるあたたかさは、親切をする人にも伝わり、お互いに優しさのぬくもりを感じ合うことができる。

(b)なごみ　親切は、好意の開示であり、敵意や悪意のないことを示す。非敵対的な友好関係の顕在化は、人を相互になごませる。

(c)親切の循環　親切をすると、親切をされた人は、好意を感じ、好意のお返し、あるいは親切のお返しをしようとし、相互がより好意的になっていく。この現象は、社会心理学で、対人関係の形成メカニズムとして指摘されている互恵性の原理、あるいは個人の社会的行動の規定因として指摘されている互恵規範を意味する。

(3) 親切の限界と効用

(a)親切の限界の自覚　親切は、ささやかな小さな親切であることを自覚することが重要である。近藤（2007a）によると、親切は、①わずかに自分の余裕分のみを贈与するにすぎないもの、②なくて済むほどささやかな小さいものである。

(b)親切の効用　他方、親切は、①ときには決定的な大きい役割を果たすことがあるし、②社会を穏やかな住みやすいものにする。

現代社会は、個人が等価な有償の交換を行う冷たい資本制社会、契約社会、商品社会である。親切は、冷たい社会の中での、あたたかな無償の贈与である。親切が過小であると、味気ない社会になる。

(4) 親切を当てにできない理由と対応

他人の親切を当てにしてはならない理由として、近藤（2007a）は次の 4 点があると指摘する。

①親切をしてくれる人に余裕がなくなったら、親切をしてくれない。
②親切をしてくれる人に贈与の意思がなくなったら、親切をしてくれない。
③親切をしてくれる人の、親切の内容・程度が期待通りとは限らない。
④親切をしてくれる人が、体裁よく取り繕うだけの人で、頼りにならない人である場合もある。
親切を当てにしなくて済むよう、困ったことにならないよう、近藤（2007a）は以下の 2 点の対応を挙げている。
①自律的に自分で対応する（例：道案内を頼まなくて済むよう、予め地図を読む）。
②制度的に対応できるようにする（例：道案内を頼まなくて済むよう、案内板を設置する）。

第 5 節　親切の本質

本節では、近藤（2007a）の第四章に基づいて、親切の本質について分析し、再構成する。近藤の親切論における日本的親切の特徴は、ささやかさにあることが強調されている。

1. ささやかな無償のボランティア的な手助け・贈与

(1) ささやかな無償の手助け・贈与

親切は、お金をとらない、ささやかな無償の手助け・贈与である。他人への価値の移譲は、この資本制社会では、同価値のものとの有償の交換になるが、親切は、価値を無償で贈与する。例えば、親切な薬屋さんは、薬代をとるし、その薬代を安くしても、親切とは言わない。商売を終えて、余剰・余裕の部分で、無料で相談に乗る、サンプルを贈与するなど、ささやかに好意的に振る舞うのが親切である。

(2) ごくささやかなボランティア

近藤（2007a）は、“無償の親切は、ささやかなボランティアである。”（p.52）と言う。親切は、労働とみなされるほどの労力奉仕はしない。しかし、ボランティアは、準備を伴う計画的な親切、自己を捧げるほどの大きな親切であり、自己の生活を変えなければ遂行できない。本来は有償の仕事であるものを無給・無償でするのが奉仕活動やボランティアである。
負担の感じ方に関しては、親切は、即興的で負担が小さいが、ボランティアは、計画的で負担が大きい。また、重視する点に関しては、親切は、ささやかな好意とささやかな無償の手助け・贈与であるが、ボランティアは、無償の労働である。

(3) ささやかな金銭贈与

親切は、労力の提供と金銭の贈与、すなわち献身と献金の両方を含む。しかし、ボランティアは無償の労働の贈与であり、金銭の贈与は寄付・献金に分類され、区別される。

(4) わずかな余裕・暇

親切は、その気持ちがあれば、ほんのわずかな余裕・暇があるだけで、実行できる。ボランティ

アとちがい、親切をする余裕は誰にでもある（例：道案内）。

しかし、ボランティアは、余裕・余暇に恵まれている人や、経済的に恵まれている人であるからこそ、労力的・時間的な負担の大きい献身的活動を無償で行うことができる。

近藤（2007a）は、“極貧の者には、ボランティアは難しいが、親切な人には、いくらでもなれる。”、“万人が、親切のための余裕・暇はもっている。”（p.54）と述べている。

2. ささやかさと傍観的距離

(1) ささやかさ

親切は、本来、負担を感じない程度の、ささやかな親切、小さな親切である。親切の手助け・贈与の大きさは、あとに貸し借りの意識を残さないほどささやかなものである（例：お金が足らなくて困っている人に対する 10 円硬貨 1 枚の贈与は親切であるが、1 万円の贈与は親切を超える）。そのため、親切は、子どもにでも十分できる。

(2) 行きずりの傍観的関係

親切は、対等か優位の立場から、してもしなくてもよい手助け・贈与をすることであり、たまたま出会った気楽な行きずりの傍観者的な関係において成立する。親切は対象者にささやかな手助け・贈与をするという意味では当事者としてかかわるが、あくまで他人としての距離を置くという意味では傍観者的にかかわる。

(3) 親切の偶然性

見知らぬ人に対する親切は、たまたま居合わせることによって、偶然的に行うものである。そして、見知っている人に対する親切は、たまたま居合わせる場合も、意図的に接近する場合も、いずれの場合も、親切をすることになる多くの事柄は偶然的に決まる。

(4) 同情との違い

親切には必ず手助け的・贈与的行為が伴うが、同情には手助け的・贈与的な行為が常に伴うわけではない。また、親切はその相手を必ずしもよく見ていないが、同情はその相手をよく見ている。

(5) 自立・独立の尊重

親切は、自立した者同士の他者距離を尊重し、外面的で表面的なささやかな接触に限定される。親密な心の交流や行動の交換は行われない。他人同士の関係を超えないように、干渉しないこと、介入しないこと、侵害しないこと、そして自制することが必要となる。

(6) ボランティアとの他者距離の違い

親切は、展開されている事柄の本筋にはかかわらないので、相手との距離が遠いままであるが、ボランティアや奉仕は、展開されている事柄の本筋にかかわるので、相手との距離が近くなる。

(7) 市民社会での触れ合いの場

現代社会では、市民同士の触れ合いが少なくなっている。こうした社会で、親切は、行きずりの

人と人との触れあいの場を作る。

(8) 余裕のない場合の親切心の表明

親切をするには余裕や暇が必要になるが、親切をするだけの余裕や暇がない場合でも、親切心は、好意としていつでも表明できる（例：「案内してあげたいけど、急いでいるので、ごめんなさい」）。

3. 仕事外と仕事中の親切

(1) 仕事外での親切

典型的な親切は、仕事を離れて、仕事の外で、その余裕にする、ほんのささやかな無償の手助け・贈与である（例：八百屋を仕事とする人が、休業日に通行人に郵便局への道順を教える）。

(2) 仕事中の親切

平均的な仕事が有償であり、その有償の仕事中に、好意と贈与の気持ちを伴う無償のサービスをすれば、それは仕事の中での親切になる。親切は、ささやかな負担なので、仕事中でもさしはさむことができる（例：親切な八百屋さんは、大根の葉が不要な客のために、無料で葉を切ってあげ、切り落とした葉をゴミとして引き取る）。

4. 親切をする側とされる側の好意

(1) 親切をする側の好意

親切をする人の好意は、ささやかで自制的である。好意の性質に関して、近藤（2007a）は、“好意は、相手を好ましく思い、相手のためにと贈与的であるが、愛のように一体化を求めるものではない。”、“好意は、引き付けられ近づく面と、その限度を超えないようにと自制する面をもつ。”と記述している（p.61）。

(2) 親切をされる側の好意

好意は、親切をする側の人が抱くのであるが、親切という価値あるものを贈与してくれる人に対して、親切をされる側の人に好意が生じることは自然である。親切は、相手にも好意を生じさせる。

(3) 好意と親切のお返し

価値あるものをもらったら、それと等価なものをお返ししなければならない、という互恵規範が社会には存在する。親切をされた人は、親切をしてくれた人に好意を抱き、そのお返しをしたいと思い、等価な交換となるような好意や親切で応えようとする。このように、好意や親切の交換に発展することがある。

第４章　親切の哲学から
親切の心理学への道程

近藤良樹の「日本的親切論」は、日本における親切とは何かについて、奔放に思考を巡らせ、日本人の親切像を十分に描ききることに成功している。哲学的・倫理学的に親切を考察し、親切の本質に鋭く切り込んだ優れた論文であることは言うまでもない。近藤論文を高く評価したうえで、彼の親切論を再考し、若干の修正を試みる。本章では、「親切の哲学から心理学への道程」を模索するため、日本的親切論の再考を踏まえつつ、心理学分野における親切の関連・類似概念を検討することによって、これらの関連・類似概念と異なる、独自の親切概念が心理学分野で成立可能かどうかを検討する。そこで、第 1 節では「近藤良樹の親切論再考」、第 2 節では「心理学分野における親切の関連・類似概念の検討」、第 3 節では「親切の心理学的概念の検討」について論じ、親切の心理学的定義を導く。

第 1 節　近藤良樹の親切論再考

1. 近藤の親切概念の本質の検討

(1) 近藤の親切概念の定義と本質

近藤（2007a）の親切の定義（われわれの「親切」は、困ったり求めをもつ他人に対して、たまたまその場に居合わす者が、ささやかな手助けをすることである。）および親切の概念の本質を紹介した第 3 章第 1 節では、親切の定義から親切の本質には 4 点あることを指摘した。すなわち、①親切は「たまたまその場に居合わせる人」が行うものであること、②親切の内容は「ささやかな手助け」であること、③親切は「他人に対して行うもの」であること、④その他人は「困っているか、助けを求めている状態」にあること、の 4 点であった。しかし、第 3 章第 2 節～第 5 節の記述内容の分析を通して、①と②に関して、以下のような本質の追加と補強を行う方が望ましいと考える。また、③と④に共通する、親切の対象に関連する新たな本質の追加が必要と考える。

(2) 親切をする人に関する本質の再考

親切を行う人に関しては、①の「たまたまその場に居合わせる人」という物理的特性のみでなく、思いやりなどのあたたかい「親切心をもつ人」という心理的特性が重要であると判断できる。すなわち、「親切な行為」の背景には「親切な心」が存在すると推測されることから、「親切」は、「親切な心」と「親切な行為」の両面から成立することを強調する。

ただし、「親切」の定義に、「親切心」という用語を使用することは、トートロジーに陥る危険性があるので、「親切心」を「気持ち」という用語に置き換えて、「思いやりなどのあたたかい愛他的

な気持ち」と表現する。

(3) 親切な行為に関する本質の再考

親切な行為に関しては、親切の内容が労力的・情報的な手助けだけでなく、「物質的・金銭的な贈与」も含まれる。そこで、②のささやかな「手助け」を、ささやかな「手助け・贈与」とする。

また、親切な行為が、相手からの見返りを期待しない「無償の」手助け・贈与であることは、非常に重要な親切の要素であると考えられる。そこで、「ささやかな」に加え、「無償の」手助け・贈与とする。

さらに、親切は、強制されるものではなく、自発的になされるものであるため、「自発的」という表現を加える。

(4) 親切をされる人に関する本質の再考

親切は、親切を受ける側がそれを親切と理解し、評価して初めて親切と言える。このように、相手が親切な行為を親切と理解･評価することは､親切の成立要件に欠かせない要件であると判断し、本質として新たに追加する。

ただし、「親切」の定義に、「親切を親切と理解・評価する」という表現を使用することは、トートロジーに陥る危険性があるので、「行為をありがたいと評価する」という表現に置き換える。

2. 親切概念の本質的要素の修正案

(1) 新たな親切の本質的要素の提案

親切概念の本質を再考した結果から、以下のように、親切には 10 点の本質的要素が含まれると指摘できる。

①親切をする人は、「たまたまその場に居合わせる人」であること。
②親切をする人は、思いやりなどの「あたたかい愛他的な気持ち」をもっていること。
③親切をされる人は、たまたまその場に居合わせる「他人」であること。
④親切をされる人は、「困っているか、助けを求めている状態」にあること。
⑤親切な行為は、「手助け・贈与」であること。
⑥親切な行為は、「ささやか」であること。
⑦親切な行為は、「偶然的に」行われること。
⑧親切な行為は、「無償」であること。
⑨親切な行為は、「自発的」であること。
⑩親切をされる人は、その行為を「ありがたいと評価」していること。

(2) 親切の本質的要素間の関係

上記の親切の本質的要素の間には以下のような関係性が存在する。①と③と⑦に共通するのは、たまたま居合わせる人が、たまたま居合わせる人に、たまたま親切な行為をするという、親切の「偶然性」である。この「偶然性」については、親切の定義の中で 3 回繰り返し表現せず、1 回にとどめる。この偶然性は、⑥の親切行為のささやかさに密接に関係する。

②の親切をする人が、思いやりなどのあたたかい愛他的な気持ち（親切心）をもつことは、親切

な人が思いやりのあるなどの、あたたかい愛他的な人格特性をもつことに繋がる。すなわち、親切心は、親切な人の特性を反映しているので、親切な行為をする人の人格特性については、親切の定義の中に含めない。また、②の親切をする人があたたかい愛他的な気持ち（親切心）をもつことは、⑧の親切の行為が無償であることに繋がり、さらに、⑨の親切の行為が自発的であることにも繋がる。

③の親切をされる人が他人であることは、⑦の偶然の行為が⑩のありがたいと評価することに結びつきやすい。例えば、家族成員同士であれば当然と受け止める行為であっても、他人同士であれば、ありがたい親切と受けとめられやすい。

(3) 親切に関する近藤（2007a）の 4 つの本質的要素と本書で提案した 10 の本質的要素の関係

本書で提案した親切の 10 の本質的要素は、近藤（2007a）の親切の定義に含まれる 4 つの本質的要素と根本的には異なるものではない。提案した 10 の本質的要素の①、③、④は、近藤（2007a）の 4 つの本質的要素の①、③、④に対応するし、提案した本質的要素の⑤と⑥は、近藤（2007a）の本質的要素の②（ささやかな手助け）を 2 つに分割しただけである。また、提案した本質的要素の⑦は、近藤（2007a）の本質的要素の①に含まれる「たまたま」という偶然性を強調するために独立させたに過ぎない。「たまたま」と「ささやか」は、近藤（2007a）が第四章の副題として挙げている内容であり、重要度は高い。

新たに追加したように見える本質的要素の⑧と⑨は、近藤（2007a）が親切な行為の特徴として挙げた 3 つの性質（ささやかさ、無償性、自発性）のうちの 2 つであり、追加した本質的要素の⑩は、近藤（2007a）が親切の対象者の状態として指摘した内容であり、追加した本質的要素の②は、近藤（2007a）が第三章の主題とした「親切心」を組み込んだものである。

以上のように、本書で新たに追加したように見える本質的要素は、全て近藤の親切論で当然のごとく扱われている要素ばかりであり、その意味で、本書の 10 の本質的要素は、近藤（2007a）の 4 つの本質的要素に、次に重要と判断できる要素を追加したものであると言える。

3. 親切の哲学的再定義

親切の 10 の本質的要素を包含する形で、親切を哲学的に再定義すると、次のようになる。すなわち、「親切は、困っている、あるいは助けを求めている他人に対して、偶然その場に居合わせる行為者が、思いやりなどのあたたかい愛他的な気持ちをもって、自発的に無償のささやかな手助け・贈与をすることであり、その行為を相手がありがたいと評価することで成立する。」となる。

第 2 節　心理学分野における親切の関連・類似概念の検討

1. 心理学的研究における親切の概念

少なくとも 2015 年時点までのわが国における親切の心理学的研究（例えば、原田・松見, 2007; 北村, 2012; 二宮, 1982; Otake et al., 2006; 油尾・吉田, 2013）は、いずれも親切の概念を明瞭に提示し

ないまま、親切研究を実施している。また、親切を付随的に取り上げた心理学的研究も、同様に親切の概念については触れていない。

したがって、わが国における親切の心理学的研究が、親切をどのように定義し、親切をどのような概念として捉えていたかに関しては全く分からない。少なくとも、近藤（2007a）の定義に見られる日本的な親切概念を想定していたとは考えにくい。

心理学的な観点から親切の概念定義をする前に、親切の関連概念・類似概念に関する検討を試みることによって、心理学の分野で親切に関する心理学的研究が独立した研究テーマとして成立するかどうかを検討する。

2. 親切の関連・類似概念

(1) 心理学分野における親切の関連・類似概念

心理学の分野において、親切に関連・類似する概念であり、かつ、ある程度研究の蓄積の見られる概念を探ると、5 つの概念に辿り着く。それは、援助行動（helping behavior）、社会的支援（social support）、愛他的行動（altruistic behavior）、向社会的行動（prosocial behavior）、道徳的行動（moral conduct）である。なお、altruistic behavior には、愛他的行動あるいは利他的行動の訳語が用いられ、altruism には、愛他心、愛他性、利他心、利他性の訳語が用いられている。また、prosocial behavior には、向社会的行動あるいは順社会的行動の訳語が使用されている。さらに、social support には、社会的支援、社会的サポート、ソーシャルサポート、ソーシャル・サポートの用語が当てられている。

(2)『APA 心理学大辞典』に見る定義と説明

上記の 5 つの概念に関して、『APA 心理学大辞典』（ファンデンボス, 2013a）に記載されている定義と説明は以下の通りである。

(a) 援助行動　援助行動とは、“他者の状態やウェルビーイングを改善する、一人または複数の人間の行動であり、向社会的行動の一類型のことである。”　（ファンデンボス, 2013a, p.82）。援助行動の多くは、小さい要求に応えるので、リスクはあまりないが、コストを伴う。

(b) 社会的支援　社会的サポート（社会的支援）とは、“他者への支援や癒しの提供。”（ファンデンボス, 2013a, p.383）である。一般的には、ストレッサーへの対処を支援するために行われ、社会的ネットワークにおける対人関係から生じる。

(c) 愛他的行動　利他的行動（愛他的行動）とは、“他者の利益のために行われる行動。”　（ファンデンボス, 2013a, p.914）である。

(d) 向社会的行動　向社会的行動とは、“自分以外の人や集団にとって有益となる社会的で建設的な行動、あるいはそのような方法。”（ファンデンボス, 2013a, p.265）である。

(e) 道徳的行動　道徳的行為（道徳的行動）とは、“社会や集団によって受容されている価値や慣習、規則に沿うような行動のこと。”（ファンデンボス, 2013a, p.647）である。

(3) 近藤の親切概念と『APA 心理学大辞典』の関連・類似概念との相違点

(a) 援助行動　援助行動では、援助者のコストを重視するが、親切では、親切をする者のコストは無視できるほど小さい。なお、コスト（cost）は、負担、損失、出費と訳されることもある。

(b) 社会的支援　社会的支援は、対人関係が形成されている者同士の間で行われるが、親切は対

人関係の存在しない他人同士の間で行われる。

(c) 愛他的行動　愛他的行動には、関心・支持・共感の表明に加え、非常に親切な行動、弱者の権利の擁護、ボランティア活動、殉難（愛他的自殺）などの献身的・奉仕的行動が含まれるが、親切はささやかな小さな手助け・贈与である。

(d) 向社会的行動　向社会的行動は、他者にとって有益な援助行動や愛他的行動だけでなく、集団や社会にとって有益な防犯行動や環境美化行動など幅広い行動も含まれるが、親切は他者個人にとって有益な行動である。

(e) 道徳的行動　道徳的行動では、行動が社会や集団の価値や規則に一致していることが重視されるが、親切では、行動が困っている者の困苦の低減・解消に役立つことが重視される。

(4) 社会的支援の異質性

(a) 行為者と被行為者の相対的重視度　援助行動、愛他的行動、向社会的行動、道徳的行動に関しては、行為者の行為が最も重視され、それぞれ個人の援助行動、愛他的行動、向社会的行動、道徳的行動の生起過程が研究の関心の中心となる。これに対して社会的支援は、社会的支援行為を提供される被行為者（対象者）である被支援者に生じる効果（例：ストレス低減効果）が最も重視される。

(b) 行為者の人数：個人か多数か　援助行動、愛他的行動、向社会的行動、道徳的行動の場合、通常、行為者は個人である。しかし、社会的支援の行為者は、個人というよりも、被支援者を取り巻く対人関係のネットワークの中に存在する多数の人々であり、その多数の人々の社会的支援の総量に注目が集まる。

(c) 行為者の行為と心性の対応　援助行動、愛他的行動、向社会的行動、道徳的行動は、そうした行動の生起に関わる行為者の心性が重要視される。しかし、社会的支援の場合、支援行動を実行する人の心性はあまり重要視されない。

(d) 実行される行為と期待される行為　援助行動、愛他的行動、向社会的行動、道徳的行動は、行為が実行されることが重要であるが、社会的支援の場合は、受け取れると期待される行為（知覚された支援）が実際に受け取った行為（実行された支援）と同等以上に重要である。

(e) 社会的支援の除外　以上のように、研究の視点が、①行為者ではなくて被行為者に置かれていること、②一人の行為者ではなくて複数の行為者に置かれていること、③行為者の心性が重視されないこと、④期待される行為が重要であること、の 4 点において、社会的支援は、他の 4 種類の行動とは決定的に異なる。加えて、これらの 4 点において、社会的支援は親切とも決定的に異なる。したがって、以後の検討対象概念から、社会的支援を除外する。

(5) 道徳的行動の異質性

(a) 道徳性と道徳的行動の関係性　援助行動、愛他的行動、向社会的行動の背後には、愛他心・愛他性が存在すると共通に仮定される。これに対して、道徳的行動の場合は、道徳的行動の背後に道徳心・道徳性を仮定するかどうかについては、記述の一般性が求められる心理学分野の辞典・事典でありながら、道徳性（morality）の定義と記述は、以下のように極めて一貫性に欠ける。

①道徳性は、認知的側面（道徳判断）、感情的側面（道徳的感情）、行動的側面（道徳的行動）に分類される（明田, 2002b）。

②道徳性は、道徳意識と道徳的行動を総合したものである（市河, 1995）。

③道徳性は、道徳意識あるいは道徳的問題の解決能力である（二宮, 1999）。
④道徳性は、道徳的意識・判断である（ファンデンボス, 2013a, p.647）。
⑤道徳性は、道徳的行動を生み出す社会的能力である（首藤, 2013）。

(b) 道徳的行動の除外　以上のように、道徳性の概念定義と説明はあまりにもばらばらである。したがって、道徳的行動と道徳性との関係を論じることは不可能であり、以後の検討対象概念から、道徳的行動を除外する。

3. 援助行動、愛他的行動、向社会的行動の概念間の比較

(1) 関連・類似概念の検討資料

援助行動、愛他的行動、向社会的行動の概念を検討する資料として、ファンデンボス（2013a）の『APA 心理学大辞典』、藤永（2013）の『最新心理学事典』、中島・安藤・子安・坂野・繁桝・立花・箱田（1999）の『心理学辞典』、日本社会心理学会（2009）の『社会心理学事典』、古畑・岡（2002）の『社会心理学小辞典〔増補版〕』、小川（1995）の『改訂新版　社会心理学用語辞典』の 6 点を使用する。

(2) 援助行動を中心とする 3 つの概念間の関係性

援助行動の概念定義は、辞典・事典間で比較的一貫している。最も詳しい定義は、高木（2013）の“援助とは、困っている他者のことに配慮し、他者が期待する、得て喜ぶような恩恵を、なんらかの自己犠牲を覚悟して、人から命令されたためではなく、自由意思から提供することである。”（p.40）であろう。

高木（2002a, 2013）は、他者にポジティブな影響を与える典型的な向社会的行動として援助行動を位置づけ、援助行動が向社会的行動に含まれると認めている。また、ファンデンボス（2013a）も、援助行動を向社会的行動の一類型であると見ているし、岩淵（2009）も、向社会的行動には援助行動も含まれると述べている。

そして、相川（1999b）は、援助行動を“他者に利益をもたらそうと意図された自発的な行動”（p.74）と定義している。そして、援助行動は向社会的行動の一例であり、援助行動のうち、愛他性に動機づけられたものは愛他的行動である、と記述している。このように、相川（1999b）は、向社会的行動の中に援助行動が含まれ、さらに援助行動の中に愛他的行動が含まれる、という概念間の包摂関係を考えている。

また、廣兼（1995a）は、“援助行動とは、困っている他者に対して、他者が望む状態を実現するために手を貸す行動のことである。”（p.23）と定義している。そして、愛他心に基づく援助行動を愛他的行動と呼び、援助行動の中に愛他的行動が含まれるという。

しかし、高木（2013）は、援助行動と愛他的行動との違いは必ずしも明確ではないとする立場をとっている。

困難な状況にある人を救おうとする意図をもって行われる行動が援助行動であるとする浦（2009）は、援助行動の動機に関して、①利他的動機だけでなく、②報酬を求め罰を避けようとする利己的な動機と、③困苦を抱える他者の存在を知ったことでの個人的な苦痛を低減しようとする利己的な動機、という 3 種類の動機を考慮した援助行動生起の包括モデルを指摘している。

援助行動を提供する援助者の負担や犠牲に関しては、「リスクはあまりないが、コストを伴う」（フ

ァンデンボス, 2013a)、「なんらかの自己犠牲の覚悟がいる」（高木, 2013)、「非緊急事態の援助と緊急事態の援助」（廣兼, 1995a)、といった記述がみられ、援助行動の実行にはある程度の負担や犠牲を伴うことが示唆される。

(3) 愛他的行動を中心とする 3 つの概念間の関係性

高木（2013）は、愛他的行動を、“他者の幸せのみを希求し、大きな自己犠牲を払って他者に尽くす行動”（p.40）と見ているが、援助行動と区別することには消極的である。

堂野（1995）は、愛他心を “外的な報酬を期待せずに他者の利益や福祉のために行動しようとする心”（p.2）とした上で、 愛他的行動を“愛他心に基づき自己の損失（コスト）をも顧みず、強制でなく自発的に生じる行為”（p.2）と定義している。そして、愛他的行動は向社会的行動の 1 つであると位置づけ、愛他的行動には、①援助・救助、②分与・寄付、③協力・協同、④同情・慰めなどが含まれる、と述べている。

愛他的行動の直接的な記述はないが、愛他心について、明田（2002a）は、“①自分よりも他者の利益を第一に考えようとする思いやりの気持ちで、他者に利益をもたらそうという意図を含んでいること、②外部からの強制ではなく自発的なものであること、③外的な賞罰を期待することなく内発的なものであること”（p.2）という 3 つの特徴を挙げている。こうした愛他心に基づく行動が愛他的行動となる。

ファンデンボス（2013a）は、利他的行動を“他者の利益のために行われる行動”（p.914）と定義し、利他的行動として、①関心や支持や共感の表明、②非常に親切な行為、③社会的弱者の権利の積極的擁護、④ボランティア活動、⑤殉難など、広範囲な行為を挙げている。しかし、利他的行動に利己的動機が関与しないという見解に対しては懐疑的である。

愛他主義を愛他心とほぼ同義と考える岩淵（2009）は、“愛他主義は、自分のことよりも他人や状況などの得や利益などを優先する考え方や心情である。”（p.124）とし、このような意図や心情から起こる行動を愛他的行動とした。この愛他的行動には、①援助や救済、②分与や寄付、③協力や共同、④同情や慰め、などが該当するという。そして、岩淵（2009）は、愛他的行動を行った際に、行為者自身に満足感や自尊感情の高揚などの個人的報酬が生じることも多いと指摘している。これは、愛他的行動であっても、究極的には利己的動機が作用している可能性があると解釈できる。

相川（1999a）は、愛他的行動を、“他者の利益のために、外的報酬を期待することなく、自発的意図的になされる行動”（p.3）という定義を採用している。愛他的行動は、行為者の動機に愛他性が仮定される行動であるため、動機の点で、他者に利益をもたらす自発的行動全般を指す向社会的行動とは区別される。すなわち、行為者の動機が愛他的な向社会的行動は愛他的行動であるが、行為者の動機が愛他的でない向社会的行動は愛他的行動ではない。したがって、愛他的な動機の伴う、①他者に対する寛容、②同情の表現、③援助や救助、④分与や寄付、⑤社会的な不公平や不平等の是正などは、愛他的行動である。

動機の問題に関して、相川（1999a）は、愛他的な動機から生じたように見える行動であっても、利己的な動機が働いていることもあると指摘する。例えば、愛他性に一致する行動をとると、人は自尊感情の高揚や自己満足などの内的報酬を得るが、愛他性に一致しない行動をとると、罪悪感や無能感などの罰を得る。そのため、愛他的行動には、報酬を求め、罰を避けるという利己的な動機が根底に存在する可能性が大いにある。しかし、現実にどの程度の愛他的動機と利己的動機が愛他的行動に関与しているかを見極めることは困難であり、純粋な愛他的動機の存在を仮定することに

は無理があるという見解もある。

(4) 向社会的行動を中心とする 3 つの概念間の関係性

すぐ上で述べたように、相川（1999a）は、他者に利益をもたらす自発的行動全般を向社会的行動と考え、向社会的行動のうち、愛他性に動機づけられた向社会的行動を愛他的行動と考えている。すなわち、愛他的行動は、向社会的行動に含まれる下位概念である。

これに対して、高木（2002b）は、向社会的行動を、“他者の身体的・心理的幸福を配慮し、ある程度の出費を覚悟して、自由意思から、他者に恩恵を与えるために行う行動”（p.68）と定義し、愛他的行動との区別は難しいと述べている。また、高木（2013）は、向社会的行動には、①寄付・奉仕行動、②分与・貸与行動、③緊急事態における救助行動、④労力提供する援助行動、⑤迷い子や遺失者に対する援助行動、⑥社会的弱者に対する援助行動、⑦小さな親切行動、の 7 種類があるという。最後の⑦小さな親切行動は、ちょっとした思いやりや親切心からの行動であり、近藤（2007a）の親切の概念に一致する。

向社会的行動に関する広義の定義と狭義の定義を併記した廣兼（1995b）は、“広義には、社会的ルールにしたがって他者の利益を増大させる行動であり、反社会的行動と逆の機能をもつ行動という意味を含む”（p.84）とした。この広義の定義では、向社会的行動は、援助行動や贈答行動、協力といった様々な利他的行動が含まれるという。この定義は、向社会的行動と利他的行動を区別していないし、援助行動を向社会的行動と利他的行動の一部と見なしている。利他的行動が援助行動よりも広い概念であると捉えているのは、廣兼自身（廣兼, 1995a）の「愛他心に基づく援助行動が愛他的行動である」という記述と大きく矛盾する。廣兼（1995b）が利他的行動と愛他的行動を別の概念であると誤解している可能性があるため、利他的行動と援助行動あるいは広義の向社会的行動との概念間の関係に関する廣兼（1995b）の見解は、無視することにする。なお、この廣兼（1995b）の広義の定義を、岩淵（2009）は、向社会的行動の広義の定義として、そのまま採用している。

加えて、廣兼（1995b）は、向社会的行動の狭義の定義を紹介している。それによると、“向社会的行動は、外的報酬を期待することなしに他者に利益をもたらすためになされた自発的行動”（p.84）であり、他者の利益を増大させることを目的とした愛他的動機と、以前に他者から受けた恩恵や他者にかけた迷惑の埋め合わせを目的とした賠償的動機によって生じる。

廣兼（1995b）と同様に、向社会的行動の狭義の定義として、岩淵（2009）は、“外的な報酬や返礼を目的とすることなく、自発的に行われる他者に利益をもたらすための行動”（p.125）と説明している。

4. 援助行動、愛他的行動、向社会的行動の包摂関係

向社会的行動は、他者に利益や恩恵を与える行動全般を指す幅広い概念であることは、共通に認められている（相川, 1999b; ファンデンボス, 2013a, 廣兼, 1995b; 岩淵, 2009; 高木, 2002b, 2013）。

(1) 向社会的行動と援助行動の包摂関係

援助行動が向社会的行動に属する典型的な行動であること、すなわち、向社会的行動と援助行動との間に上位－下位概念関係が存在することは、共通的に認識されている（相川, 1999b; ファンデンボス, 2013a; 岩淵, 2009; 高木, 2002a, 2013）。

(2) 向社会的行動と愛他的行動の包摂関係

愛他的行動と向社会的行動との関係は、援助行動と向社会的行動との関係ほど明確ではないが、向社会的行動が上位概念で、愛他的行動が下位概念であるという関係が読み取れる。すなわち、①向社会的行動に愛他的行動が含まれると明言する立場（相川, 1999a; 堂野, 1995）、②向社会的行動に援助行動が含まれ、その援助行動に愛他的行動が含まれることから、向社会的行動に愛他的行動が含まれると論理的に判断される立場（相川, 1999b; 廣兼, 1995a）、③向社会的行動に援助行動が含まれ、援助行動と愛他的行動との違いが明瞭ではないことから、向社会的行動に愛他的行動が含まれると推測される立場（高木, 2013）、④向社会的行動の狭義の定義から、動機的に 2 種類の向社会的行動のうちの 1 種類が愛他的行動に相当すると判断される場合（廣兼, 1995b）、が大勢を占めている。他方、⑤向社会的行動と愛他的行動の区別が難しいとする立場（高木, 2002b）、⑥向社会的行動の狭義の定義の内容が愛他的行動の定義と区別しにくい場合（岩淵, 2009）もあるが、これらの見解は明らかに少数派である。

(3) 援助行動と愛他的行動の包摂関係

援助行動と愛他的行動の関係は一義的ではない。すなわち、①愛他的動機に基づく援助行動を愛他的行動とする立場（相川, 1999b; 廣兼, 1995a）、②援助行動と愛他的行動は区別できないとする立場（高木, 2013）、③愛他的行動の種類の中に、愛他心あるいは愛他主義に基づく援助が含まれる場合（堂野, 1995; 岩淵, 2009）、④愛他的行動の種類として、援助行動には属さない、広範囲な行動（例：社会的不公平の是正、殉難）を挙げている場合（相川, 1999a; ファンデンボス, 2013a）、が見られる。このように、援助行動と愛他的行動の重なり具合が大きいことは容易に理解できるが、援助行動と愛他的行動の捉え方が研究者によって一貫していないので、両者を区別することは非常に困難であると言える。

5. 援助行動と愛他的行動と向社会的行動の相違点

(1) 行動の対象者の範囲

向社会的行動の対象者に関しては、定義の多くは「他者」に対する利益や恩恵という対人的な表現にとどまっており（相川, 1999a; 廣兼, 1995b; 高木, 2002b, 2013）、「集団」の利益や恩恵にまで言及しているのは、ファンデンボス（2013a）のみである。しかし、「反社会的行動」と逆の機能をもつ行動として向社会的行動を捉えるのであれば（廣兼, 1995b; 岩淵, 2009）、向社会的行動によって利益や恩恵を受ける対象は、他者個人だけでなく、集団や社会も含まれる。すなわち、様々な安全促進行動（例：盛り場の防犯パトロール）や環境配慮行動（例：環境美化行動）なども向社会的行動であり、その利益や恩恵は、他者個人だけでなく、集団や社会全体にも及ぶ。

これに対して、援助行動と愛他的行動によって、利益や恩恵を受ける対象は他者個人が中心となる。援助行動が他者個人を対象としていること（相川, 1999b; ファンデンボス, 2013a; 廣兼, 1995a; 高木, 2002a, 2013; 浦, 2009）、愛他的行動が他者個人を対象としていること（明田, 2002a; 相川, 1999a; 堂野, 1995; ファンデンボス, 2013a; 高木, 2013）は、明白であろう。例外的に、愛他的行動に関して、岩淵（2009）が他人や状況の利益という表現を使用しているが、この状況が具体的に何を指すのかは、不明である。したがって、援助行動と愛他的行動では、家族などの小集団が対象に

なることはあっても、大集団、組織、社会は、対象から除外した方がよいと思われる。

行動の対象は、他者個人、集団、社会を対象とする向社会的行動の方が、他者個人を対象とする援助行動と愛他的行動よりも、広範囲で包括的である。

(2) 行動の種類

援助行動の種類に関する特別な言及は見られず（相川, 1999b; ファンデンボス, 2013a; 高木, 2002a, 2013; 浦, 2009）、わずかに、緊急事態での援助行動と非緊急事態での援助行動が示唆されるにとどまる（廣兼, 1995a）。

これに対して、愛他的行動の種類としては、次の行動が挙がっている。①関心や支持や共感の表明、②非常に親切な行為、③社会的弱者の権利の積極的擁護、④ボランティア活動、⑤殉難など（ファンデンボス, 2013a）。愛他心を伴う、①援助・救助、②分与・寄付、③協力・協同、④同情・慰めなど（堂野, 1995）。愛他主義を伴う、①援助や救済、②分与や寄付、③協力や共同、④同情や慰めなど（岩淵, 2009）。愛他的動機を伴う、①他者に対する寛容、②同情の表現、③援助や救助、④分与や寄付、⑤社会的な不公平や不平等の是正など（相川, 1999a）。

また、向社会的行動の種類として、次の行動が挙がっている。①寄付・奉仕行動、②分与・貸与行動、③緊急事態における救助行動、④労力を提供する援助行動、⑤迷い子や遺失者に対する援助行動、⑥社会的弱者に対する援助行動、⑦小さな親切行動（高木, 2013）。このほかには向社会的行動の種類に関する記述は見られないが、前段落で示した愛他的行動の種類は、すべて向社会的行動に属する。

以上のように、援助行動は、比較的単純な事態を想定するためか、その種類が問題視されていないのに比べると、向社会的行動と愛他的行動は、非常に多様であり、その種類によって行動特徴に大きな違いが存在することを暗に示している。

(3) 動機の関与

援助行動を生起させる心理的要因として、高木（2013）では他者配慮が、相川（1999b）では他者利益意図が重視される。そして、愛他性や愛他心に基づく行動は、援助行動の中でも、特に愛他的行動と位置づけられる（相川, 1999b; 廣兼, 1995a）。しかし、援助行動の動機として、浦（2009）は、愛他的動機だけでなく、利己的動機もありうると示唆している。

愛他的行動を生起させる心理的要因として、相川（1999a）は愛他的動機を、堂野（1995）は愛他心を、岩淵（2009）は愛他主義を挙げているが、他方で、相川（1999a）と岩淵（2009）は、利己的動機の関与の可能性を指摘している。

向社会的行動を生起させる心理的要因として、高木（2002b）は他者配慮を、廣兼（1995b）は愛他的動機と賠償的動機を挙げている。

以上のように、いずれの行動も、愛他的動機だけでなく、利己的動機の関与も否定できない。一見すると、他者利益を目的とする行動も、その根底に自己利益の追求が潜んでいる可能性が考えられる。しかし、利己的動機に比べて、明らかに愛他的動機の方が顕著であれば、援助行動、愛他的行動、向社会的行動とみなしてよいのではないか。親切行動に関しても、利己的動機に比べて、明らかに愛他的動機の方が顕著であれば、親切行動と見なせる。本書は、このような動機相対主義的立場に立つ。

第 3 節　親切の心理学的概念の検討

1. 心理学的な親切概念と近藤の親切概念との比較

第 3 章第 1 節で近藤（2007a）の親切の定義から親切概念の本質を 4 点指摘し、第 4 章第 1 節で親切の本質的要素を 10 点挙げ、親切の哲学的再定義を試みた。その本質的要素に沿って、親切の関連・類似概念から、心理学的な親切概念の本質的要素を考える。

(1) 親切行動の対象者

(a) 対象者の範囲（親切概念の本質的要素③）　近藤（2007a）の親切論では、親切は、一部の例外を除き、「たまたまその場に居合わせる人」が、「たまたま居合わせる他人」に対して親切をするという、他人同士の間での親切行動に限定される。友人に対する親切は、嫌われたくないから、といった不純な動機が入り込みやすいので、友人は親切行動の対象者から外される。しかし他方で、近藤（2007a）は、たまたま隣り合った他人が固定したのが隣近所であり、隣近所同士の親切には良好な人間関係を形成・維持したいという動機（下心）が働くにもかかわらず、隣近所同士の親切を認め、むしろ積極的に奨励している。さらに、近藤（2007a）は、見知らぬ人に対する親切だけでなく、見知っている人に対する親切にも言及し、後者の親切には意図的に接近する場合があるが、親切の内容は偶然的に決まると述べており、親切の対象者を必ずしも見知らぬ他人に非常に厳密に限定しているわけではないと分かる。

愛他的動機が顕著な場合には、「愛他的な、無償の手助け・贈与」という条件が満たされるので、友人、知人、親族にまで、親切行動の対象者を拡大しても差し支えないと考えられる。したがって、親切の対象者に関しては、親切の行為者である主体としての「自己」に対して、客体としての「他者」という用語を用いる。

なお、家族成員間の親切も、近藤（2007a）の指摘するように、特殊な条件下では成立するであろうが、家族成員間の親切はあくまでも例外的なものとして扱う。一般的には、困っている家族に対する手助け・贈与は、家族の一員としての義務であり、当為であって、決して親切ではない。

顕著な愛他的動機の存在を前提条件としながら、対象者の範囲を、未知の他人から、未知・既知を問わない他者にまで積極的に広げることは、近藤（2007a）の親切論とは根本的に異なる。

(b) 対象者の状態（親切概念の本質的要素④）　親切行動の対象者である他者は、基本的には困っている状態にある。親切行動の行為者が、他者の困っている状態に気づくか、あるいは、他者が困っていると助けを求めるかによって、親切行動が生起するのが典型的である。

このほかに、他者が困っていない場合にも、非典型的な親切はありうる。他者が現時点では困っていなくても、近い将来その他者に困ることが発生すると行為者が予想する場合、困難の発生を予防するために、親切な行動をとることもある。また、近藤（2007a）も指摘しているように、他者が特に困っている状態でなくても、他者がより良い状態になるために、行為者が親切行動をとることもある。

このように、将来の困苦が予想される他者にまで、親切行動の対象者を積極的に広げることは、近藤（2007a）の親切論とは若干異なるが、大きな違いはない。

(2) 親切の状況

(a)偶然性（親切概念の本質的要素①③⑦）

すぐ上の (1)で述べたように、親切行動の対象者の範囲と対象者の状態を拡大させると、親切は、他人同士の偶然の出会いの中で生じる行動に限定されなくなる。すなわち、対象者を友人・知人などの、すでに形成された対人関係にまで拡大させ、対象者の状態を現時点で困っていない状態まで拡大させると、親切行動は、すべてが偶然的に生じるのではなく、計画的に準備される場合も起こりうる。しかし、下の(4)(c)で触れるように、行為者にとって親切行動の負担度・犠牲度は決して大きくはないので、既知の対象者に対する親切行動であっても、親切行動は偶然的に生じるものが大半であろう。

親切行動の他の条件が満たされれば、計画性のある親切行動も認めてよいと考える点が、近藤（2007a）の親切論とはある程度異なるものの、偶然性に特徴づけられる親切行動が典型的な親切行動であるとする点は、基本的に近藤（2007a）の親切論と同じである。

(3) 親切行動の行為者

(a)愛他心（親切概念の本質的要素②）　親切な行動をする人は、基底に親切な心をもつ人である。「親切心」に最も近い心理学的概念である「愛他心」について、心理学事典・辞典は以下のように説明している。①利他性とは、“自己犠牲を払ってでも他者に利益を与えようとする、他者への思いやり・・・”（フォンテンボス, 2013, p.914）である。②“愛他性とは、自らの利益よりも他者の福祉や正義が大切だとする価値観が内面化されたものである。”（相川, 1999a, p.3）。③愛他心は、“・・・向社会的行動をひきだす心理学的基礎の重要な一つで、利他心ともいう。自分より他者の利益を第一に考えようとする思いやりの気持ちで、他者に利益をもたらそうという意図を含んでいること、外部からの強制ではなく自発的なものであること、外的な賞罰を期待することなく内発的なものであることの 3 つを特徴とする。”（明田, 2002, p.2）。④愛他心は、“外的な報酬を期待せずに他者の利益や福祉のために行動しようとする心”である（堂野, 1995, p.2）。⑤“愛他主義は、自分のことよりも他人や状況などの得や利益などを優先する考え方や心情である。”（岩淵, 2009, p.124）。

また、援助者の人格特性として、高木（2013）は、①他者の幸せのために大きな自己犠牲を払って他者に尽くそうという感情的温かさと日常的思いやりに関係している「愛他性」、②自己に期待される責任を自ら進んで受け入れて、行動でそれを果たそうとする「社会的責任性」、③他者の情動状態や情動反応を知覚し、その他者の情動状態を共有する「共感性」、という 3 つの特性を指摘している。

さらに、愛他心に関連して、堂野（1995）は、他者の置かれた状況に対する適切な「認知」と，その心情に対する「共感」が、愛他的行動の生起を規定する基本的な内的要因と見ている。

ところで、近藤（2007a）の親切論では、親切心の基本的心性は、①ささやかな優しさ、②ささやかな思いやり、③ささやかな愛、④ささやかな好意である。行為者が自分の親切を、ささやかな手助け・贈与にとどめ、対象者との間の関係を他人同士の関係にとどめなくてはならない。しかし、対象者を友人・知人にまで拡大し、下の(4)(c)で改めて論じるように、親切行動をある程度の負担・犠牲を覚悟した「ささやかでない、ある程度の」手助け・贈与まで含めるとすると、親切の基本心性は、ささやかでない優しさ、思いやり、愛、好意まで含むものとなる。これらの基本心性は、すべて愛他心に密接に関連する特性である。

ところで、親切は、純粋な愛他心をもつ人だけが行うわけではない。人は、誰しも、愛他心と利己心の両方を持ち合わせており、利己心よりも愛他心が顕著な場合、愛他心が利己心を凌駕している場合には、他者のためになる行為は親切とみなしてよいであろう。

なお、困っている人を助けなければならないという、行為者の義務感や責任感が親切行動を引き起こすことがあることも、忘れてはならない。

以上のように、愛他心などから成る親切心の強度が、近藤（2007a）の親切心よりもある程度強いものまで含むという点、利己心に対する愛他心の優位性を前提とする点、および行為者の愛他心の存在を強調する点は、近藤（2007a）の親切論と異なる。

(b) 愛他的動機（追加要素⑪）　親切な行動をする人は、愛他心といった親切な心を基底にもつが、直接的に親切行動を引き起こすのは愛他的動機である。愛他的動機は、見返りを期待しない、自発的な無償の親切行動をもたらす。親切行動が生じるためには、少なくとも、自己利益を目的とする利己的動機よりも、他者利益を目的とする愛他的動機が優勢でなければならない。

援助行動、愛他的行動、向社会的行動から利己的動機を完全に排除しきれないことからも、親切行動の場合も、利己的動機を排除しきれないと考えられる。利己的動機には、①対象者や周囲の人々からの報酬や賞の獲得動機、②対象者や周囲の人々からの制裁や罰の回避動機、③対象者や周囲の人々に対して良い印象を与えるための自己呈示動機、④困苦を抱える他者に直面することによる自己の苦痛低減動機、⑤過去に他者から受けた恩恵に対するお返しを意味する互恵動機、⑥過去に他者にかけた迷惑の埋め合わせをしたいという賠償的動機など、があるだろう。親切行動の対象者の範囲を見知らぬ他人から友人・知人に、さらには親族にまで拡大した場合、それらの利己的動機のいずれもが全く関与しない親切、純粋に愛他的動機のみが関与する親切は、現実的にどの程度ありうるのか、はなはだ疑問である。世話好きな人を除く、そのほかの人は、自己の誇り・自尊心を満足させるために、親切を行う、と近藤（2007a）も考えている。これは親切行動の結果として得られる内的報酬であり、⑦自己高揚動機あるいは内的報酬獲得動機が潜在していると考えることができる。さらに、近藤（2007a）は、隣近所の人に対する親切には、良好な人間関係でいたいという動機が働く、と述べている。これは、⑧親和動機あるいは対人関係形成・維持動機が、親切行動の動機として混入していることを示す。

そこで、愛他的動機と利己的動機が併存する場合であっても、愛他的動機が顕著であれば、親切行動と解釈する方が現実的であろう。

また、見返りを期待していなくても、近藤（2007a）も指摘しているように、親切行動は、結果的に、行為者に満足感を生じさせたり、自尊感情を高めたり、といった効果を生じさせる面をもつ。これは、愛他的動機の根底に、そうした効果を期待する利己的動機が潜んでいる可能性を示唆する。動機の判断は非常に困難であるため、愛他的動機が顕著であるという条件を満たせば、親切行動と見なすことができる、という単純な解釈が現実的である。

このように、利己的動機を排除しきれないと考える立場は、部分的に近藤（2007a）の親切論と共通しているが、親切行動の行為者の愛他的動機を強調する点は、親切行動の基底に愛他的動機を暗黙に仮定する近藤（2007a）の親切論と大きく異なる。

(4) 親切行動の特徴

(a) 親切行動の無償性（親切概念の本質的要素⑧）　親切行動は、見返りを期待しない無償の行動である。親切行動は、自己負担や自己犠牲を払ってでも、他者の利益と幸福を希求しようという、

愛他心を基底とする、愛他的動機に基づいて生じる行動である。

ただし、すぐ上の(3)(b)で取り上げたように、純粋に愛他的動機だけでなく、内的報酬獲得動機などの利己的動機が混入する場合があり、こうした場合には親切行動の無償性が低下してしまうが、典型的な親切行動は、あくまで無償の行動であり、見返りを期待しない。

行動の無償性は、親切行動を特徴づける重要な要素であり、この点は近藤（2007a）の親切論と基本的に同じであるが、利己的動機に対する愛他的動機の相対的優位性を容認することに起因する無償性の低下は避けられず、この点が近藤（2007a）の親切論とある程度異なる。

(b) 親切行動の自発性（親切概念の本質的要素⑨）　親切行動は、行為者の愛他心を基底とする愛他的動機に基づいて生起する。親切行動が愛他心と愛他的動機から生じるものであることは、親切行動が、他者によって強制されて生じる行動ではなくて、行為者の自由意思から自発的に行う行動であることに繋がる。

ただし、他者の困苦に行為者自身が気づいて、親切行動を行う場合に比べ、①他者の困苦を第三者に指摘されて気づいて、親切行動を行う場合や、②他者の困苦の解消を第三者から促されて、親切行動を行う場合は、この順に行動の自発性の程度は低下する。

なお、親切行動の自発性は、親切行動の意図性に通じ、自発的な親切行動は意図的な親切行動であることを意味する。他者の困苦を解消したいという愛他的動機を伴わずに実行された行為者の行動が、結果的に偶然、他者の困苦の解消に役立った場合は、親切とは言わない。意図的に実行される手助け・贈与が親切行動である。

行動の自発性は、親切行動を特徴づける重要な要素であり、この点は近藤（2007a）の親切論と基本的に同じであるが、自発性のやや低い行動も親切行動に含める点が、近藤（2007a）の親切論とある程度異なる。

(c) 親切行動の負担度（親切概念の本質的要素⑥）　近藤（2007a）の親切論では、親切は、してもしなくても済む程度のささやかで小さな手助けであり、行為者が負担や犠牲を気にせずに、無視して行うことのできる行為であるし、また、対象者も、行為者に気軽に求めることのできるささやかな行為である。

しかし、向社会的行動の中の 1 種類として、高木（2013）は、「小さな親切行動」を、また、愛他的行動の 1 種類として、ファンデンボス（2013a）は、「非常に親切な行為」を挙げている。しかし、ファンデンボス（2013a）の「非常に親切な行為」は、わが国とは異なる欧米の親切概念を反映した表現あり、わが国における親切概念には当てはまらない。

親切行動の負担度・犠牲度は、大きいか、小さいか、二分法で判断すれば、決して大きい方ではなく、小さい方に該当する。行為者の負担度を、便宜的に 9 段階（1 極めて小さい、2 かなり小さい、3 わりと小さい、4 やや小さい、5 どちらでもない、6 やや大きい、7 わりと大きい、8 かなり大きい、9 極めて大きい）で考えるならば、近藤（2007a）の親切行動の負担度は第 1 段階～第 2 段階、せいぜい第 3 段階までであろうと推論される。対象者の範囲の拡大など、これまでの議論の方向性から判断すると、親切行動の負担度・犠牲度を第 4 段階あるいは第 5 段階にまで拡大して、第 1 段階～第 4 段階あるいは第 1 段階～第 5 段階の親切行動を設定する方が望ましいであろう。これにより、親切行動の行為者は、大きくはないが、ある程度の負担・犠牲を覚悟しなければならないことが起こる。

なお、負担度・犠牲度は、①時間的側面、②労力的側面、③金銭的側面、④物質的側面、⑤身体的側面、⑥精神的側面、⑦社会的側面の 7 つの側面で考える必要がある。

以上のように、行為者の負担・犠牲は、無視できる程度から、大きくはないけれども覚悟しなければならない程度までの範囲をとるものとする。こうした拡大された親切行動の負担度･犠牲度は、近藤（2007a）の親切論における負担度・犠牲度と異なる。

(d)親切行動の種類と範囲（親切概念の本質的要素⑤）　親切行動の種類と範囲について、近藤（2007a）は、ささやかな小さな「手助け」であり、「贈与」であるとし、負担度・犠牲度や計画性・準備の点で、ボランティアや世話と異なると説明しているが、親切行動の種類を整理して示していない。援助行動の種類も示されていないが、愛他的行動の種類と向社会的行動の種類に関しては、明示されている。

愛他的動機に基づいて生起し、行為者の負担や犠牲が大きくない以下の行動は、親切行動であると言える。①関心、支持、共感の表明（ファンデンボス, 2013a）、②同情、慰めの表明（相川, 1999a; 堂野,1995; 岩淵, 2009）、③指摘、助言（本書での追加事項）、④情報提供（本書での追加事項）、⑤労力提供（高木, 2013）、⑥分与、寄付（相川, 1999a; 堂野,1995; 岩淵, 2009; 高木, 2013）、⑦貸与（高木, 2013）、⑧協力、協同（岩淵 2009）、⑨救助（相川, 1999a; 堂野,1995; 高木, 2013）。

これらのカテゴリーの中で、近藤（2007a）の「手助け」と「贈与」に意味的に含まれないカテゴリーは、①、②、⑧、⑨である。特に⑨については、負担の小さい、ささやかな手助け・贈与に限定される（例：濁流に流されている人を発見したとき、濁流に飛び込む救助行動ではなく、警察に110 番通報する行動や近くの人に助けを求める行動）。

親切行動の負担度・犠牲度が大きくないことを前提に、親切行動の種類と範囲は、確実に広がっているため、この点は、近藤（2007a）の親切論と異なる。

(5) 対象者の反応

(a)親切行動に対する対象者の評価（親切概念の本質的要素⑩）　親切行動が親切行動であるためには、その行動を対象者が親切と認知し、評価する必要がある。行為者の親切行動によってもたらされる自己利益に対象者が注目する場合には、「ありがたさ」の評価が生じ、親切行動に伴う行為者の負担・犠牲の大きさに対象者が注目する場合には、「ありがたさ」の評価に加えて、「申し訳なさ」の評価が生じると予想される。

そうした「ありがたさ」や「申し訳なさ」といった、親切行動に対する対象者の肯定的評価は、その行動が親切であるためには欠かせない必要条件である。

行為者の親切行動を対象者が親切と評価することが親切の成立に必要であると、近藤（2007a）の親切論でも指摘されているが、本書ではこの対象者の反応を本質的要素として取り上げ、強調したという意味で、近藤（2007a）の親切論とある程度の相違があると言える。

(6) 本書の心理学的親切概念と近藤（2007a）の親切概念との相違点のまとめ

上の(1)～(5)で論じた、近藤（2007a）の親切概念と本書における心理学的親切概念との相違点を整理したのが表 4-1 である。表 4-1 では、近藤（2007a）の親切概念の本質的要素（筆者が再考した本質的要素）ごとに、本書における心理学的親切概念との相違度の大きさを、「大」、「中」、「小」の 3 段階で示した。また、近藤（2007a）の親切概念と本書の親切概念との比較結果を、典型的事項と非典型的事項に分けて整理したのが表 4-2 である。表 4-2 では、近藤の親切概念と異なる場合の、本書における親切概念の特徴が分かる。

表 4-1　近藤（2007a）の親切概念と本書の親切概念の相違度

（1）親切行動の対象者		
(a)対象者の範囲（本質的要素③）	相違度	大
(b)対象者の状態（本質的要素④）	相違度	小
（2）親切の状況		
(a)偶然性（本質的要素①③⑦）	相違度	中
（3）親切行動の行為者		
(a)愛他心（本質的要素②）	相違度	大
(b)愛他的動機（本質的要素⑪：追加要素）	相違度	大
（4）親切行動の特徴		
(a)無償性（本質的要素⑧）	相違度	中
(b)自発性（本質的要素⑨）	相違度	中
(c)負担度（本質的要素⑥）	相違度	大
(d)種類と範囲（本質的要素⑤）	相違度	大
（5）対象者の反応		
(a)親切行動に対する評価（本質的要素⑩）	相違度	中

2. 心理学的な親切概念と関連・類似概念との比較

なぜ、援助行動、愛他的行動、向社会的行動ではなくて、親切行動なのか。親切行動とその関連・類似概念である援助行動、愛他的行動、向社会的行動との違いはどこにあるのかを、親切概念を構成する 11 の要素（追加要素を 1 つ含む）から検討する。

(1) 援助行動、愛他的行動、向社会的行動との違い

(a) 行為の負担度・犠牲度（親切概念の本質的要素⑥）　援助行動、愛他的行動、向社会的行動には、行為者の負担・犠牲が非常に大きい行動も含まれるが、親切行動にはそうした負担・犠牲の大きい行動は含まれない。

(b) 行為の偶然性（親切概念の本質的要素⑦）　親切行動は、行為者の負担度・犠牲度の大きくない行動であるため、典型的な親切行動が偶然的に生じるという偶然性が特徴となりうるが、援助行動、愛他的行動、向社会的行動では偶然性は重要視されない。

(c) 対象者の評価（親切概念の本質的要素⑩）　親切行動では、対象者が行為者の行動を肯定的に評価することが、親切であるための必要条件として重視されるが、援助行動、愛他的行動、向社会的行動では、行為者の行動に対する対象者の評価は、特に強調されない。

(2) 向社会的行動との違い

(a) 対象者の範囲（親切概念の本質的要素③）　最も広い概念である向社会的行動の対象には、個人だけでなく、集団や社会も含まれるが、親切行動の対象は他者個人である。

表 4-2　典型的事項と非典型的事項からみた近藤（2007a）の親切概念と本書の親切概念の比較

親切の本質的要素		近藤（2007a）		本書	
		典型	非典型	典型	非典型
(1)	対象者の範囲 （本質的要素③）	・見知らぬ他人	・隣近所の人 （・見知っている人）	・見知らぬ他人 ・友人・知人	・親族
	対象者の状態 （本質的要素④）	・困苦状態 ・要請状態	・困る前段階 ・より良い状態の希求	・困苦状態 ・要請状態	・困る前段階 ・より良い状態の希求 ・将来の困苦の予防
(2)	偶然性 （本質的要素①③⑦）	・偶然性		・偶然性	・計画性
(3)	愛他心 （本質的要素②）	・ささやかな愛他心		・ささやかな愛他心 ・ある程度の愛他心	・愛他心が利己心を上回る場合
	愛他的動機（追加） （本質的要素⑪）			・愛他的動機	・愛他的動機が利己的動機を上回る場合
(4)	無償性 （本質的要素⑧）	・無償性		・無償性	・無償性が有償性を上回る場合
	自発性 （本質的要素⑨）	・自発性		・自発性	・第三者からの指摘 ・第三者からの促し
	負担度 （本質的要素⑥）	・ささやかな負担		・ささやかな負担 ・ある程度の負担	
	種類と範囲 （本質的要素⑤）	・ささやかな行為		・ささやかな行為 ・ある程度の行為	
(5)	親切行動に対する評価 （本質的要素⑩）	・肯定的評価		・肯定的評価	

注 1）表内の第 1 列目の番号は、(1) 親切行動の対象者、(2) 親切の状況、(3) 親切行動の行為者、(4) 親切行動の特徴、(5) 対象者の反応である。

(3) まとめ

親切概念を構成する 11 の要素（追加要素を含む）のほとんどが、関連・類似概念である 3 つの行動（援助行動、愛他的行動、向社会的行動）にも共通しており、親切概念とこれらの関連・類似概念との類似度は非常に高いと言わざるを得ない。

全体的に、類似度が高い中で、いくつかの相違点が存在する。親切行動が、関連・類似概念である援助行動、愛他的行動、向社会的行動と異なるのは、①行為者の負担度・犠牲度が大きくない点、②行動の偶然性が重視される点、③行動に対する対象者の肯定的評価が必要とされる点である。また、親切行動は、向社会的行動に比べ、対象者が他者個人に限定される点で異なる。

援助行動、愛他的行動、向社会的行動との間に存在する上記の相違点が、親切行動という概念の独自性と存在意義をもたらし、親切に関する心理学的研究の価値を保証してくれる。

なお、類似度を判断すると、親切行動の概念に対して、相対的に類似度の高い概念は援助行動と愛他的行動であり、相対的に類似度の低い概念は向社会的行動である。

3. 親切の心理学的定義

(1) 狭義の定義

典型的な親切に焦点を絞る形で、心理学的に親切を狭義に定義すると、「親切とは、個人が、小さい負担を覚悟し、あたたかい思いやりの気持ちをもって、愛他的な動機から自発的に、困っている他者の利益になる無償の手助け・贈与を偶然的に実行し、その行為を他者が肯定的に評価することである。」となる。

(2) 広義の定義

狭義の定義に含まれる条件を緩やかに解釈すると、広義の定義となる。例えば、①義務感や責任感から親切な行為を行う場合は、「あたたかい思いやりの気持ち」が小さくなり、②利己的な動機や内的報酬が関与する場合は、純粋な「愛他的な動機」ではなくなり、愛他的動機の関与する割合がある程度減少する。③他者が困っていない場合は、他者は、「困っている他者」から「潜在的な困苦を抱えた他者」へと、さらには「より良い状態を歓迎する他者」へと変わる。また、④親切行動の実行によって、満足感や自尊感情の高揚などの自己利益や内的報酬が結果的に得られる場合は、「他者の利益になる無償の行為」という特徴が、「自己の利益になる有償の行為」という性質の出現によって、ある程度割り引かれてしまう。そして、⑤あらかじめ計画され、準備された親切であれば、親切の偶然性が低下する。

(3) 定義の問題点

親切を心理学的に定義するにあたり、親切の対象者を「見知らぬ他人」から、未知・既知を問わない他者へと拡張したが、これが親切研究を複雑化することを指摘しておかねばならない。

例えば、親切行動の負担度は、見知らぬ他者と見知っている他者（友人・同僚・知人・親族・隣近所の人など）で異なる可能性が高い。見知っている他者の場合、その他者からそれまでにもらった親切や将来もらうかもしれない親切が作用することによって、見知っている人に対する親切行動に感じる負担度・犠牲度が低下する可能性がある。このことは、見知っている他者に対する利己的

動機（互恵動機や賠償動機、あるいは報酬・賞の獲得動機）が関与しやすいことにも繋がる。また、親切行動の自発性や無償性の違い、さらには親切行動に対する対象者の評価にまで影響すると考えられる。

また、親切行動の負担度・犠牲度に関しては、気にならないささやかな負担から、大きくはないが覚悟の必要な負担にまで拡張することにより、取り扱う親切行動の種類と範囲は広がるが、大きい負担を伴う行動も含む他の行動（援助行動、愛他的行動、向社会的行動）との違いがあいまいになり、親切行動の独自性が損なわれるという弊害は避けられない。

4. 新たな心理学的親切概念に基づく親切の心理学的研究の功罪

近藤（2007a）の哲学的・倫理学的親切概念は、非常に洗練されており、日本的な親切の特徴を十分に描ききっている。近藤（2007a）の親切の定義と親切概念の 4 つの本質的特徴にみられるように、近藤（2007a）の考える親切は、「困っている他人に対して、たまたま居合わす人がささやかな手助けを行う」ことであり、非常に明確な制約条件をもつ限定された行動である。そのため、心理学分野で研究されてきた類似の援助行動、愛他的行動、向社会的行動と、近藤（2007a）の親切行動は明らかに一線を画すことができるという意味で、近藤（2007a）の立場は極めて明瞭な独自性をもつ。このように、近藤（2007a）の親切の定義に従って、親切の心理学的研究を進めていけば、援助行動研究、愛他的行動研究、向社会的行動研究とは異なる親切研究の展開が期待できるという利点がある。いわゆる「小さな親切」に限定して、心理学的研究を展開していくのも一つの方向性である。

しかし、その反面、近藤（2007a）の親切は、見知らぬ他人という限定された対象者に対する無償のささやかな、限定された手助けであることから、多様な親切現象を扱うためには、親切概念を拡張する必要性も否定できない。こうした立場から、本書では、親切概念の独自性をある程度犠牲にして、親切概念を拡張的に捉え直し、援助行動、愛他的行動、向社会的行動に関する既存の心理学的研究の成果を応用する形での、親切研究の展開を提案する。

したがって、近藤（2007a）の日本的親切論の枠組みを崩すことは功罪相半ばするが、敢えて緩やかな親切論へと一歩を踏み出し、心理学的研究の可能性を探ることにする。

第５章　親切の心理学的研究の展開の方向性

親切という現象は、親切行動だけに注目しても決して理解できない。親切をする人が困っている人を発見する行動や親切を提供する行動、困っている人が親切を求める行動や提供された親切を受容する行動、およびお礼やお返しをする行動などを時系列的に捉えない限り、親切現象の全容は解明できない。そこで、本章では、「親切の心理学的研究の展開の方向性」を探るために、まず、時系列的視点から親切現象を捉えるための枠組みである親切過程の概念を提案し、親切研究の基本課題を考える。次に、親切現象を構成する多様な行動の生起過程の問題への注意を喚起するために、親切過程の中核的行動である親切行動の生起過程モデルを提示する。最後に、親切の心理学的研究を実行するためのヒントを関連領域の先行研究から得る。したがって、第 1 節では「親切の心理学的研究の基本的枠組み」を提示し、第 2 節「生起過程モデルによる親切行動の理解」、第 3 節「親切の心理学的研究に対する関連領域からの示唆」について述べる。

第１節　親切の心理学的研究の基本的枠組み

1. 親切過程

(1) 親切にかかわる行動の時系列的構造

援助にかかわる行動が対人相互作用における対人行動の一種であると考えた高木（2013）は、援助を求める行動、援助を提供する行動、援助を受容する行動、援助（者）への反応、の 4 種類を援助にかかわる行動として指摘している。高木（2013）のこうした援助にかかわる行動についての指摘を参考に、親切にかかわる行動を推論する。

親切現象を構成している親切にかかわる行動は、時系列的に示すと、①行為者が困っている対象者を発見する行動（困苦発見行動）あるいは②対象者が行為者に親切を求める行動（親切要請行動）、③行為者が対象者に親切を提供する行動（親切提供行動＝親切行動）、④対象者が行為者の親切を受容する行動（親切受容行動）、⑤対象者が行為者にお礼やお返しをする行動（親切返礼行動）、の 5 種類となる。

①の行為者が困っている対象者を発見する行動は、行為者の親切行動が生じる前段階の行動であって、②の対象者が行為者に親切を求める行動（親切要請行動）と二者択一的行動である。すなわち、行為者は、自らが困苦を抱える人を発見して親切行動をとるか、困苦を抱える人に助けを求められて親切行動をとるか、のどちらかである。ただし厳密に言えば、困苦発見行動は行動レベルの反応ではなく、認知レベルの反応である。

(2) 親切過程と基本行動

5 種類の行動は、時系列的には、第 1 段階の困苦発見行動あるいは親切要請行動、第 2 段階の親切行動、第 3 段階の親切受容行動、第 4 段階の親切返礼行動という 4 段階の行動である。こうした 5 種類 4 段階の行動から時系列的に構成される親切現象を「親切過程」と呼び、この親切過程を構成する 5 種類の行動を「基本行動」と呼ぶことにする。

2. 親切過程における中核的行動としての親切行動

(1) 援助行動研究から示唆される親切行動の規定因

親切過程には 5 種類の基本行動が含まれるが、高木（2013）の見解を参考に判断すると、親切に関する心理学的研究の関心の焦点は、あくまでも親切を提供する行動（親切行動）に向けられるはずである。そして、どのような要因が親切行動の生起を促進するのか、あるいは抑制するのか、という親切行動の規定因の解明が、最大の関心事になるはずである。援助行動の規定因に関する高木（2013）の見解を適用すると、親切行動の規定因は、①親切行動の行為者の要因、②親切行動の対象者の要因、③親切行動の生起する状況の要因、の 3 要因に大別される。

(2) 追加すべき親切行動の規定因

上記の①親切行動の行為者の要因、②親切行動の対象者の要因、③親切行動の生起する状況の要因の 3 要因のほかに、親切行動の規定因として 4 つの要因が存在すると考えられる。

第 1 に、親切行動自体がどのような特徴をもつのかによって、親切行動の生起は影響されるであろう。例えば、たまたまその場に居合わせた旅行者には道案内の親切をすることはできないが、座席をゆずることはできるし、たまたま小銭の持ち合わせのない人には両替の親切をすることはできないが、探し物を一緒に探す親切はできる。このように、親切行動の種類やタイプによって親切行動の実行は影響を受ける。こうした親切行動の性質に関係する要因が親切行動の特性要因である。

第 2 に、親切行動の行為者の要因あるいは対象者の要因として独立的に扱うことの不可能な、行為者と対象者との関係性の要因がある。例えば、行為者の性は行為者の要因と位置づけられ、同様に対象者の性は対象者の要因と位置づけられるが、行為者と対象者の性の組み合わせが重要になることがある。行為者が男性であっても、対象者が男性であるか女性であるかによって、すなわち同性関係における親切であるか異性関係における親切であるかによって、親切行動の実行は影響される。また、異性関係における親切行動の場合でも、女性に対する男性の親切行動と男性に対する女性の親切行動とでは、発生のしやすさが異なるであろう。このように、行為者側の要因と対象者側の要因の組み合わせが意味をもつ場合があり、これが親切行動の行為者と対象者の関係性要因である。

第 3 に、親切行動の要請の要因は、本来、親切行動の対象者の要因に包括可能な要因である。しかし、親切行動の要請の要因はいくつかの下位要因から成る。そこで、対象者の要因の構造が複雑化することを避けるために、親切行動の対象者の要因から親切行動の要請要因を独立させことにする。

第 4 に、親切行動は、行為者の過去の経験によっても影響を受ける。例えば、過去に親切行動を実行したことがどの程度のあるのか、また、実行した親切行動が対象者から感謝され成功したのか、あるいは対象者から断られ失敗したのか、といった経験が親切行動の実行に影響するはずである。

こうした行為者の過去経験に関係する要因が親切行動の行為者の過去経験要因である。

(3) 親切行動の 7 つの規定因

親切行動の規定因は、援助行動研究から示唆される 3 つの要因と本書で追加すべきと考えた 4 つの要因の合計 7 要因となる。すなわち、①親切行動の行為者要因、②親切行動の対象者要因、③親切行動の特性要因、④親切行動の要請要因、⑤親切行動の行為者と対象者の置かれる状況要因、⑥親切行動の行為者と対象者の関係性要因、⑦親切行動の行為者の過去経験要因、の 7 要因である。

これらの要因と親切行動の生起との関係を分析することによって、どの要因がどの程度親切行動の生起を促進するのか、あるいは抑制するのか、を明らかにすることができる。

(4) 規定因の交互作用

親切行動の生起に対して 7 つの要因は単独で作用するわけではない。7 つの要因はそのいくつかが組み合わさって、親切行動の生起を規定する。すなわち、親切行動の生起に及ぼす 7 つの要因の効果は、それぞれの要因の主効果として捉えるだけではなく、2 つの要因の交互作用効果、あるいは 3 つ以上の要因の交互作用効果として捉えるべきである。

こうした 2 つ以上の要因の交互作用効果は、①7 つの要因における 2 つ以上の要因間の交互作用効果である場合、②1 つの要因に属する 2 つ以上の下位要因間の交互作用効果である場合、③それら①と②の混合した交互作用効果である場合、が考えられる。

さらには、下位要因には、一次の下位要因（7 つの要因のそれぞれを構成する下位要因）だけでなく、二次の下位要因（7 つの要因のそれぞれを構成する一次の下位要因のそれぞれを構成する下位要因）、三次の下位要因等々も含まれる。

現実の親切行動は、多くの要因が関与することによって生起しているので、複数の要因の交互作用効果に注目すべきではあるが、親切行動の規定因を一覧する際には、規定因が階層構造をもつことを前提にして、単純化するために規定因を列挙するにとどめる。

3. 親切行動の規定因の構造

親切行動の生起を規定する 7 つの要因は、それぞれ複数の一次の下位要因から構成される（表 5-1）。以下に、7 つの規定因のそれぞれを構成する主な一次の下位要因を列挙し、その一次の下位要因を構成する二次の下位要因の例を（　　）内に示す。

(1) 親切行動の行為者要因

①行為者の特性要因（思いやりや愛他性など様々な人格特性要因、知的能力や体力など様々な能力要因）、②行為者の動機要因（愛他的動機要因、様々な利己的動機要因）、③行為者の状況判断要因（対象者の困苦度認知要因、対象者の対処能力認知要因、行為の必要性認知要因、行為の責任性認知要因など）、④行為者の状態要因（余裕や暇の有無の要因、仕事中か仕事外かの要因など）、⑤行為者の人口学的特性要因（年齢要因、性要因、社会経済階層要因など）など。ただし、③の行為者の状況判断要因は、規定因ではなく、媒介要因として位置づけることも多い。

表 5-1　親切行動の規定因の構造

(1) 親切行動の行為者要因	①行為者の特性要因 ②行為者の動機要因 ③行為者の状況判断要因 ④行為者の状態要因 ⑤行為者の人口学的特性要因など
(2) 親切行動の対象者要因	①対象者の種類要因 ②対象者の状態要因 ③対象者の特性要因 ④対象者の人口学的特性要因など
(3) 親切行動の特性要因	①親切行動の性質要因 ②親切行動の負担度・犠牲度要因 ③負担・犠牲の次元要因 ④親切行動の種類要因 ⑤親切行動の実行に伴う利得とコストの相対的大きさ要因、および親切行動の非実行に伴う利得とコストの相対的大きさ要因、など
(4) 親切行動の要請要因	①対象者の行動要請要因 ②行動要請者の種類要因など
(5) 親切行動の行為者と対象者の置かれる状況要因	①対象者の周囲の他者存在要因 ②周囲の他者の反応要因 ③事態の緊急性要因など
(6) 親切行動の行為者と対象者の関係性要因	①好悪関係要因 ②地位関係要因 ③同性－異性関係要因 ④年齢関係要因など ⑤先輩－同輩－後輩関係要因 ⑥類似性要因など
(7) 親切行動の行為者の過去経験要因	①過去の親切行動提供経験要因 ②過去の親切行動被提供経験要因 ③過去の親切行動要請経験要因 ④過去の親切行動被要請経験要因 ⑤過去の親切行動受容経験要因 ⑥過去の親切行動被受容経験要因 ⑦過去の返礼行動実行経験要因 ⑧過去の返礼行動被実行経験要因 ⑨過去の親切行動見聞経験要因

(2) 親切行動の対象者要因

①対象者の種類要因（未知の他者か既知の他者（友人・知人）かという親疎要因など）、②対象者の状態要因（困苦状態か非困苦状態かという要因、困苦の種類要因など）、③対象者の特性要因（好感度や親しみやすさなどの人格特性要因、知的能力や体力など様々な能力要因）、④対象者の人口学的特性要因（年齢要因、性要因、社会経済階層要因など）など。

(3) 親切行動の特性要因

①親切行動の性質要因（無償性要因、自発性要因など）、②親切行動の負担度・犠牲度要因（負担・犠牲の大きさ要因）、③負担・犠牲の次元要因（時間的、労力的、金銭的、物質的、身体的、精神的、社会的次元という次元の種類要因）、④親切行動の種類要因（共感の表明、情報提供、労力提供、分与、寄付、貸与などの行動の種類要因）、⑤親切行動の実行に伴う利得とコストの相対的大きさ要因、および親切行動の非実行に伴う利得とコストの相対的大きさ要因、など。

(4) 親切行動の要請要因

親切行動の対象者の要因に含めることもできるが、ここでは、独立的要因として扱う。①対象者の行動要請要因（要請の有無の要因）、②行動要請者の種類要因（対象者からの要請か、第三者からの要請かという要因）など。

(5) 親切行動の行為者と対象者の置かれる状況要因

①対象者の周囲の他者存在要因（行為者以外の他者存在の有無の要因、周囲の他者の人数の要因、周囲にいるのは既知の他者か未知の他者かという要因）、②周囲の他者の反応要因（関心の有無の要因）、③事態の緊急性要因（事態の緊急度の要因）など。

(6) 親切行動の行為者と対象者の関係性要因

①好悪関係要因（行為者と対象者の好き・嫌いの組み合わせ要因）、②地位関係要因（行為者と対象者の社会的地位の組み合わせ要因）、③同性－異性関係要因（行為者と対象者の性の組み合わせ要因）、④年齢関係要因（行為者と対象者の年齢の組み合わせ要因）、⑤先輩－同輩－後輩関係要因（行為者と対象者の経験期間の組み合わせ要因）、⑥類似性要因（外見や人口学的特性など様々な側面に関する行為者と対象者との類似性）など。

(7) 親切行動の行為者の過去経験要因

①過去の親切行動提供経験要因（提供経験度要因、成功経験度要因、失敗経験度要因、被感謝経験度要因など）、②過去の親切行動被提供経験要因（被提供経験度要因、利得経験度要因、迷惑経験度要因、感謝経験度要因など）、③過去の親切行動要請経験要因（要請行動実行経験度要因など）、④過去の親切行動被要請経験要因（要請行動被実行経験度要因など）、⑤過去の親切行動受容経験要因（親切行動受容経験度要因など）、⑥過去の親切行動被受容経験要因（親切行動被受容経験度要因など）、⑦過去の親切返礼行動実行経験要因（親切返礼行動実行経験度要因など）、⑧過去の親切返礼行動被実行経験要因（親切返礼行動被実行経験度要因など）、⑨過去の親切行動見聞経験要因（見聞経験度要因など）。

4. 親切過程における周辺的行動の規定因の構造

親切に関する心理学的研究の最大の関心事は、親切行動の規定因の解明にある。しかし、親切にかかわる行動には、このほかに困苦発見行動、親切要請行動、親切受容行動、親切返礼行動の 4 種類があり、親切に関する心理学的研究の方向として、これら 4 種類の行動の規定因の解明がある。先行段階の行動の規定因が後続段階の行動の規定因に加わってくるため、親切過程が進行していくにつれて、規定因の数が増加し、構造が複雑化する。

(1) 困苦発見行動の規定因の構造

困っている対象者から手助け・贈与の求めがない場合には、行為者が対象者の困苦を発見しなければ、親切行動は生じない。困苦を抱える人がその困苦を表明したり、手助けを求めたりしないことも多い。そのため困苦の発見は非常に重要になる。対象者の困苦の発見行動の規定因としては、親切行動の規定因として挙げた 7 つの要因のうちの 5 つの要因（①親切行動の行為者要因、②親切行動の対象者要因、⑤親切行動の行為者と対象者の置かれる状況要因、⑥親切行動の行為者と対象者の関係性要因、⑦親切行動の行為者の過去経験要因）が共通している。しかし、親切行動の規定因として挙げた 2 つの要因（③親切行動の特性要因と④親切行動の要請要因）は無関係である。

(2) 親切要請行動の規定因の構造

親切行動は、対象者から親切行動の要請があれば、対象者が親切を必要としている困った状態にあることが明白になるため、行為者が親切行動をとりやすくなる。対象者が親切行動を受け取る可能性を高めるためには、親切要請行動が決定的に重要な役割を果たすので、親切要請行動生起の規定因を特定することは非常に重要な研究課題となる。親切要請行動の規定因の構造は、基本的には親切行動の規定因の構造と類似しているが、当然のことながら親切行動の規定因の中の親切行動の要請要因に相当する要因は存在しない。

したがって、親切要請行動の規定因としては、①親切要請行動の行為者要因（親切行動の対象者要因に同じ）、②親切要請行動の対象者要因（親切行動の行為者要因に同じ）、③親切要請行動の特性要因（親切行動の特性要因にほぼ同じ）、④親切要請行動の行為者と対象者の置かれる状況要因（親切行動の行為者と対象者の置かれる状況要因に同じ）、⑤親切要請行動の行為者と対象者の関係性要因（親切行動の行為者と対象者の関係性要因に同じ）、⑥親切要請行動の行為者の過去経験要因（親切行動の行為者の過去経験要因に同じ。特に、過去の親切要請行動実行経験要因が重要）が考えられる。そして、これに⑦親切行動の特性に対する要請者の認知要因（親切行動の特性を要請者があらかじめどのように認知しているか）が加わる。

(3) 親切受容行動の規定因の構造

行為者の親切行動が対象者に受容されて初めて親切は成立するので、そうした意味で、対象者の親切受容行動は重要である。対象者の親切受容行動の規定因の構造は、基本的には親切行動の規定因の構造と類似しているが、親切受容行動に先行する段階での要因も加わる。

親切受容行動の規定因としては、①親切受容行動の行為者要因（親切行動の対象者要因に同じ）、②親切受容行動の対象者要因（親切行動の行為者要因に同じ）、③親切受容行動の特性要因（親切行動の特性要因に同じ）、④親切行動の要請要因、⑤親切受容行動の行為者（親切行動の対象者）と対

象者（親切行動の行為者）の置かれる状況要因（親切行動の行為者と対象者の置かれる状況要因に同じ）、⑥親切受容行動の行為者と対象者の関係性要因（親切行動の行為者と対象者の関係性要因に同じ）、⑦親切受容行動の行為者の過去経験要因（親切行動の行為者の過去経験要因に同じ。これに過去の親切受容行動経験要因が加わる）が考えられる。そして、これに⑧親切受容行動の行為者の親切行動に関する評価要因が非常に重要な要因として新たに加わるだけでなく、親切受容行動に先行する親切要請段階と親切提供段階における、⑨親切要請行動の特性要因、⑩親切行動の特性要因も加わる。さらに、親切受容行動の行為者（親切行動の対象者）の受容－拒否行動に対して対象者（親切行動の行為者）がどのような反応をするのかという、⑪親切受容行動の影響に関する行為者の予想（肯定的－否定的予想）要因も親切受容行動の重要な規定因として作用するであろう。

(4) 親切返礼行動の規定因の構造

行為者の親切行動を対象者が受容したところで、親切現象は終結するのではない。その時その場で、行為者に対して対象者が、即時的な返礼行動をとる場合もあれば、一定時間経過後に返礼行動をとる場合もある。親切返礼行動の生起をもって、一連の親切にかかわる行動が終結したと見なせる。親切返礼行動の規定因の構造も、基本的には親切行動の規定因の構造に類似しているが、親切過程における先行行動である親切行動、親切要請行動、親切受容行動の規定因、および過去の返礼行動経験要因が加わるので、非常に複雑となる。煩雑な記述を避けるため、規定因の列挙は省略するが、親切返礼行動に対して親切返礼行動の対象者（親切行動の行為者）がどのような反応をするのか、に関する親切返礼行動の行為者の予想（肯定的－否定的予想）要因と、親切受容行動の規定因の中の親切行動に対する評価要因が重要な役割を果たすと解釈できる。

5. 親切過程における基本行動に関する心理学的研究の展開

(1) 各行動の規定因の解明から生起機制の解明へ

親切過程に関する心理学的研究の当面の中心課題は、親切行動の規定因の解明であると、また、発展課題は、困苦発見行動、親切要請行動、親切受容行動、親切返礼行動の規定因の解明であると、論じてきた。しかし、各行動の規定因の解明がある程度進行した段階では、並行して、各行動の生起機制に関する解明が要求される。

(2) 親切行動の生起過程モデルの作成と検証

親切行動の生起機制を検討する際には、生起過程モデルを作成し、そのモデルを検証する手順をとるやり方が効率的であろう。同様に、困苦発見行動、親切要請行動、親切受容行動、親切返礼行動に関しても、生起過程モデルを作成し、検証するやり方で研究効率を増加させるのが望ましいであろう。

第 2 節　生起過程モデルによる親切行動の理解

1. 親切行動の生起過程モデルの概要と意義

(1) 親切行動の生起過程モデルの概要

高木（1997, 1998）の援助授与行動の生起過程モデルを適用することによって、親切行動の生起過程モデルを作成し、提案する。親切行動の生起過程は、図 5-1 に示すように、①対象者に関する行為者の評価・検討過程、②親切行動の実行の意思決定過程、③親切行動の実行過程、の 3 つの第一次下位過程から構成され、それぞれの第一次下位過程は、さらに合計 11 段階の第二次下位過程から構成される。ただし、このモデルは、親切行動の負担度・犠牲度がある程度以上の場合にのみ適合する。

(2) 親切行動の生起過程モデルの意義

親切行動の生起過程モデルを作成することは、第 1 に親切行動の生起現象を時系列的に理解可能にするという意義があるだけでなく、第 2 に以下のような意義もある。

親切行動の生起過程モデルを利用することによって、親切行動の生起過程における 3 つの第一次下位過程のうちのどの第一次下位過程に焦点化した研究を計画するのか、あるいは、11 段階の第二次下位過程のうちのどの段階に焦点化した研究を計画するのか、を効率よく決定することが可能となる。こうして、第一次下位過程あるいは第二次下位過程の発生・進行を規定する要因や発生・進行のメカニズムを検討する課題の存在が明確に意識できるようになる。

ただし、この親切行動の生起過程モデルの妥当性は、行為者の親切行動の負担度・犠牲度に依存する。すなわち、親切行動の実行に伴う行為者の負担度・犠牲度がある程度の大きさに達している場合に、生起過程モデルの妥当性が高まる。

もし、行為者にとって親切行動の負担度・犠牲度が小さい場合には、当然のことながら、対象者の抱える問題に行為者は気づきにくいし､気づいたとしても問題の重要性は低いと判断されやすく、対象者の能力の範囲内で解決されると査定されやすいため､「対象者に関する行為者の評価・検討過程」は生じにくい。そして、行為者が親切行動をとることについての自己の責任を自問する意義は小さくなり、親切行動の実行に伴う利得と損失、非実行に伴う利得と損失はいずれも小さいため、こうした分析があまり強く意識されることはなく､「親切行動の意思決定過程」自体が強く機能しない。また、行為者にとって親切行動の負担度・犠牲度が小さい場合には、行為者にとって有効な親切行動の選択は容易であり、そのささやかな親切行動に関して行為者が自分自身の実行能力を疑うようなことは起こらないし、その成功・失敗の評価は深刻なものにはならないので、親切行動は気軽に実行されることになるため、こうした「親切行動の実行過程」は生じやすいと考えられる。以上のように、負担度・犠牲度が小さい親切行動の場合には、親切行動の生起過程自体の明瞭度が低いため、それぞれの下位過程や段階の発生の規定因やメカニズムを検討する必要性が低くなってしまう。

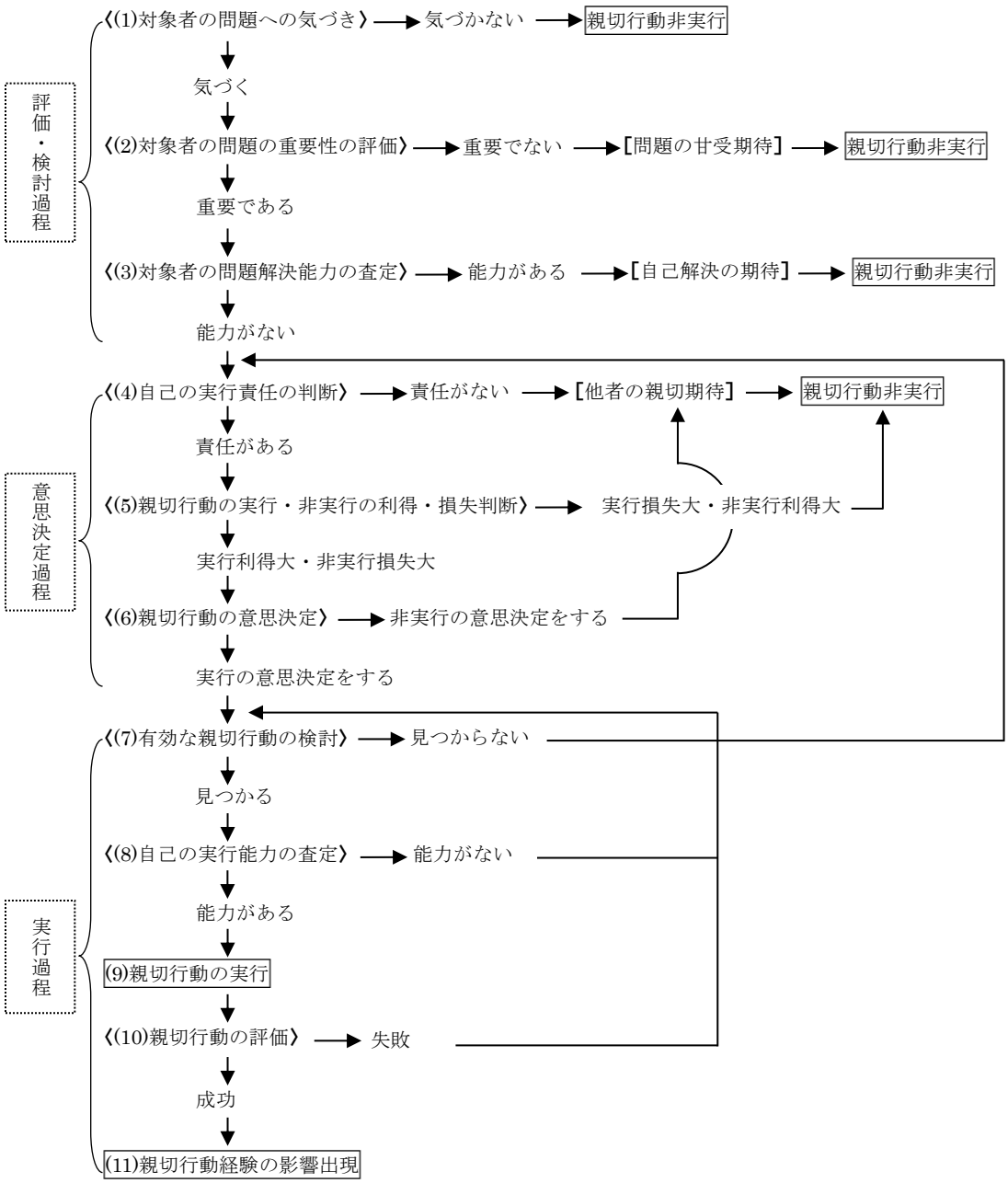

図 5-1　親切行動の生起過程モデル（高木(1997, 1998)に基づいて作成）

2. 対象者に関する評価・検討過程

最初の第一次下位過程は、対象者（親切行動の対象者）に関して行為者（親切行動の行為者）が評価・検討する過程であり、3 つの第二次下位過程から成る。

(1) ①対象者の抱える問題への気づき段階

対象者の抱える問題に行為者が気づくかどうかの段階であり、気づかなければ、親切行動は生じない。もし、行為者が、対象者の抱えている問題に気づけば、次の段階②へ進む。

(2) ②問題の重要性の評価段階

対象者の抱える問題の重要性を行為者が評価する段階であり、問題が親切行動の授与に値しないほど卑小なものと評価すれば、親切行動は生じない。また、問題の重要性がある程度を超えると、単なる親切では対応しきれなくなるため、親切行動は生じない。もし、行為者が、対象者の抱える問題がある程度重要であると評価すれば、次の段階③へ進む。

(3) ③対象者のもつ問題解決能力の査定段階

対象者が問題を解決する能力をもっているかどうか、行為者が査定する段階であり、対象者が自力で問題解決する能力をもっていると査定すれば、親切行動は生じない。対象者の自力での問題解決に期待することになる。もし、行為者が、対象者には自力での問題解決能力がないと査定すれば、次の段階④へ進む。

3. 親切行動の意思決定過程

次の第一次下位過程は、行為者が対象者への親切行動を行うかどうかの意思決定に関わる過程であり、3 つの第二次下位過程から成る。

(1) ④親切行動の実行責任の判断段階

対象者に対する親切行動を実行する責任が自分にあるかどうか、行為者が判断する段階であり、自分には親切行動の実行責任がなくて、ほかの人たちに実行責任があると判断すれば、親切行動は生じない。ほかの人たちの親切行動の実行を期待することになる。もし、自分に実行責任があると判断すれば、次の段階⑤へ進む。

(2) ⑤親切行動の実行に伴う利得と損失、および親切行動の非実行に伴う利得と損失の分析段階

行為者が、親切行動を実行した場合に生じると予想されるポジティブな結果（利得）とネガティブな結果（損失）の相対的な大きさを分析し、同時に、親切行動を実行しなかった場合に生じると予想されるポジティブな結果（利得）とネガティブな結果（損失）の相対的な大きさを分析する段階である。親切行動を実行した場合のネガティブな結果（損失）と親切行動を実行しなかった場合のポジティブな結果（利得）の方が大きいと判断すれば、親切行動は生じない。もし、逆に、親切行動を実行した場合のポジティブな結果（利得）と親切行動を実行しなかった場合のネガティブな結果（損失）の方が大きいと判断すれば、次の段階⑥へ進む。

(3) ⑥親切行動の意思決定段階

親切行動を実行するかどうかを、行為者が意思決定する段階であり、実行しないと意思決定すれば、親切行動は生じない。その場合は、ほかの人たちの親切行動の実行に期待することになる。しかし、もし、実行しようと意思決定すれば、次の段階⑦へ進む。

4. 親切行動の実行過程

最後の第一次下位過程は、行為者が対象者に対する親切行動を実行することに直接関係する過程であり、5 つの第二次下位過程から成る。

(1) ⑦有効な親切行動の検討段階

対象者の抱える問題を解消するために有効な親切行動の種類と方法を、行為者が検討する段階であり、有効な親切行動を思いつくことができなければ、親切行動は生じない。その場合は、段階④に戻って、再度、自分の実行責任を判断することになる。もし、有効な親切行動が見つかれば、次の段階⑧へ進む。

(2) ⑧行為者自身の実行能力の査定段階

有効な親切行動を実行する能力が自分自身にあるかどうかを、行為者が査定する段階であり、実行能力がないと査定したときには、親切行動は生じない。その場合、段階⑦に戻って、再度、別の有効な親切行動を探すことになる。もし、実行能力があると査定したときには、次の段階⑨へ進む。

(3) ⑨親切行動の実行段階

行為者が親切行動を実行する段階であり、実行が終了した時点で、次の段階⑩へ進む。

(4) ⑩親切行動の評価段階

自分の実行した親切行動が対象者の抱える問題の解消に役立ったかどうか、行為者が効果を評価する段階であり、失敗したと評価すれば、段階⑦に戻って、再度、別の有効な親切行動を検討することになる。もし、成功したと評価すれば、次の段階⑪へ進む。

(5) ⑪行為者における親切行動経験の影響出現段階

親切行動の行為者は、後になって自分の行った親切行動に関して振り返り、あらためて、親切行動の内容や成果について再評価する。そして、その再評価が肯定的であるか否定的であるかによって、行為者のその後の親切行動に対する態度や動機づけが影響される。

第 3 節　親切の心理学的研究に対する関連領域からの示唆

1. 親切の理論・モデルへの示唆

親切過程を構成する基本行動の生起過程を予測･説明する理論･モデルを作成するに当たっては、援助行動研究領域で提出されてきたモデルが大いに参考になる。

(1) 親切行動の生起過程モデルへの示唆

「親切行動の生起過程モデル」の範例としては、先に紹介した高木（1997）の「援助授与行動の生起過程モデル」が非常に有用であるが、そのほかにも多くのモデルが提案されてきた。

援助行動の生起に関する理論モデルの動向を論じた松井（1985）は、①規範を中心にした 5 つのモデル（社会的規範説、社会的責任規範モデル、社会的責任規範の数式モデル、価値観に基づいた愛他的意思決定モデル､態度形成モデル）､②感情状態を中心とした 3 つのモデル（覚醒低減モデル、認知ループモデル、共感媒介 2 段階モデル）、③認知過程を中心とした 2 つのモデル（帰属理論に基づくモデル、重大性評価の生起モデル）、④2 つの混合モデル（緊急事態での意思決定モデル、共感・規範モデル）を紹介した。そして、従来の諸モデルの知見を整理し、共通点を踏まえて、新しいモデルを提案した。提案された新モデルは、簡潔性と実証性に難があるが、従来の諸モデルの位置づけに役立つ。

向社会的行動の意思決定モデルとして、竹村・高木（1988）は、「認知的判断モデル」、「覚醒：出費－報酬モデル」、「規範的意思決定モデル」を紹介し、これらのモデルの適用範囲は、行為に伴う出費（高低）と事態の緊急性（緊急、非緊急）の二次元的に理解できると指摘した。前二者は「緊急・高出費」、後者は「非緊急・高出費」の条件で適用されると考察した。

また、献血行動を取り上げた高木（1986）は、S. H. Schwartz の「愛他心に関する規範的意思決定モデル」の妥当性を検討しているし、竹村・高木（1985, 1987a, 1987b）は、向社会的行動の意思決定過程に焦点化した検討を行った。

(2) 親切要請行動の生起過程モデルへの示唆

高木（1997）の論文では、詳細な「援助要請行動の生起過程モデル」も提案されており、「親切要請行動の生起過程モデル」を作成する際に利用できる。高木（1997）は、援助要請行動が生起するまでを、①自己の問題への気づき、②問題の重要性の評価、③自己の問題解決能力の査定、④援助要請の意思決定、⑤潜在的援助者の探求、⑥援助要請方略の検討、⑦援助要請の実行、の 7 段階で捉えた。

(3) 親切の提供経験・受容経験の影響出現過程モデルへの示唆

援助後に援助者と被援助者に生じる影響に関しても、高木（1997）は、「援助者における援助経験の影響出現過程モデル」と「被援助者における被援助経験の影響出現過程モデル」を提出しており、これらのモデルは、「親切行動の行為者における親切提供経験の影響出現過程モデル」と「親切の対象者における親切受容経験の影響出現過程モデル」を作成する際に利用可能である。

前者の「援助者における援助経験の影響出現過程モデルで」は、援助の認識に引き続いて生じる、

援助の効果・成果に関する成功・失敗評価によって、援助者の自己効力感・有能感や自尊心が影響され、それが援助や被援助に対する肯定的・否定的態度に影響し、最終的に援助や被援助に対する積極的・消極的動機づけに影響すると仮定する。後者の「被援助者における被援助経験の影響出現過程モデル」では、被援助の認識に引き続いて生じる、被援助の効果・成果に関する成功・失敗評価によって、被援助者の援助への感謝・失望や自尊心が影響され、それが援助や被援助に対する肯定的・否定的態度に影響し、最終的に援助や被援助に対する積極的・消極的動機づけに影響すると仮定する。

2. 親切行動の種類と構造への示唆

親切行動の種類や構造を明らかにし、親切行動の測定尺度を作成する際に、向社会的行動、愛他的行動、援助行動領域の先行研究から多くの具体的示唆を得ることができる。

(1) 親切行動尺度への示唆

(a) 向社会的行動研究からの示唆　向社会的行動の類型と基本特性に関して、大学生を対象に実施した調査研究から、高木（1982）は、①22 種類の代表的な向社会的行動が 7 種類の行動群に類型化できる、②向社会的行動を特徴づける 25 種類の行動特性が 3 つの基本特性にまとまる、③3 つの基本特性から成る 3 次元空間における、7 種類の向社会的行動群間の距離、すなわち、各向社会的行動群の位置を特定できる、と報告した。なお、高木（1982）の 7 種類の行動類型とは、①寄付・奉仕行動、②分与行動、③緊急事態における救助行動、④努力を必要とする援助行動、⑤迷い子や遺失者（物を失った人）に対する援助行動、⑥社会的弱者に対する援助行動、⑦小さな親切行動、であった。

続いて、10 代から 60 代の人々から典型的な向社会的行動のエピソードを収集した高木（1987a）は、41 種類の向社会的行動に整理し、類似性評定に基づくクラスター分析によって、9 種類の行動群（①寄付・分与行動、②奉仕行動、③提供行動、④組織的、計画的、形式ばった行動、⑤努力を必要とする援助行動、⑥小さな親切行動、⑦緊急事態における救助行動、⑧非組織的、自発的、形式ばらない援助行動、⑨ちょっとした気配り行動）を確定した。そして、3 種類の基本特性に属する 12 種類の行動特性から、因子分析によって、41 種類の向社会的行動を 6 種類の行動型（①出費の比較的少ないちょっとした援助行動型、②貴重な持ち物を提供する援助行動型、③社会的弱者に対する援助行動型、④組織的、計画的、形式ばった援助行動型、⑤身体的努力を必要とする援助行動型、⑥緊急事態における救助行動型）に分類した。

向社会的行動尺度（中高生版）の作成を試みた横塚（1989）は、5 因子（①家族への向社会的行動、②友人への行動的援助、③寄付や奉仕、④友人への学習面での援助、⑤友人への心理的援助）から成る 20 項目の尺度を提案した。他方、向社会的行動尺度（大学生版）の作成を試みた菊池（1988）は、小さな親切行動に相当する 20 項目の尺度を作成した。

なお、25 種類の向社会的行動を用いた高木（1991）は、行動の類似度を指標として、アメリカにおける向社会的行動をクラスター分析によって類型化し、向社会的行動の基本的な構造に日米間の差異はないと報告した。

(b) 愛他的行動研究からの示唆　対象別利他行動尺度の作成を試みた小田・大・丹羽・五百部・清成・武田・平石（2013）は、21 項目の利他行動が、7 項目ずつの家族項目群、友人・知人項目群、

他人項目群に分かれることを見出した。

なお、青年期の友人関係に限定されるが、永井（2011）は、3 因子（①心理的援助、②日常的援助、③不干渉）から成る 13 項目の友人関係愛他行動尺度を作成した。

相互受益的な援助傾向の個人差を把握するための J. Sawyer の愛他心尺度を検討した中村（1976）は、この尺度が個人の愛他的傾向を測定する尺度としてかなりの信頼性とある程度の妥当性を備えていると解釈した。

(c) 援助行動研究からの示唆　Amato & Pearce（1983, 高木, 1987c による）は、62 種類の援助エピソードが 3 次元の潜在構造をもつことから、最終的に、62 種類の援助エピソードを 4 群（①緊急事態への介入、②形式ばった、組織的な援助、③見知らぬ人に対する形式ばらない、気まぐれな、ありふれた援助、④寄付、分与）に類型化した。

援助に伴う損失の大きさ、被援助者の種類、援助に必要とされる資源を考慮して、松井（1981）は、26 の援助場面（援助行動）を選定し、これらの援助場面（援助行動）に関する援助経験の構造として 3 つの軸（①援助経験の一般的傾向、②募金的援助傾向、③自発的援助傾向）を抽出した。

原田（1990）は、7 種類の援助行動類型（①金品の譲渡・貸与型、②紹介・勧誘型、③代行型、④同調型、⑤小さな親切行動型、⑥助言・忠告型、⑦気遣い・いたわり型）を代表する 20 項目の援助行動を使用した。

非関与の規範が援助行動に及ぼす効果を検討した本間（1988）は、6 種類の援助場面を用いているが、設定された援助場面（①見知らぬ人の荷物、②夜道の援助、③ホームの盲人、④ホームの酔っ払い、⑤デパートの迷子、⑥街中の暴力）が援助行動項目に該当する。

(2) 親切行動と親切要請行動の共通尺度への示唆

主婦を被調査者とした西川（1997）は、①近所の親友、知人、隣人に対する主婦の援助要請行動と、②近所の親友、知人、隣人からの援助要請に対する主婦の要請応諾行動（援助要請応諾行動）を測定するための共通の尺度を作成しようと試みた。しかし、分析結果からは共通の尺度は得られず、総合判断に基づき、援助要請者と被要請者（援助提供者）の両方の立場に共通する 4 つのカテゴリー（①切迫事態でのインフォーマルな援助、②切迫事態での一般的な援助、③非切迫事態でのインフォーマルな援助、④非切迫事態での一般的な援助）に分類される 32 項目の援助項目のリストを作成した。

3. 親切の行為者の特性への示唆

親切の行為者の特性を検討する際には、向社会的行動・援助行動の行為者の動機、規範意識、パーソナリティ特性に関する先行研究が参考になる。

(1) 親切行動の動機の構造への示唆

7 種類の向社会的行動群に関して 12 種類の具体的な向社会的行動を用意した高木（1983）は、向社会的行動の動機の構造を検討し、①25 種類の基本的な動機が 6 種類の動機型に分類できること、②6 種類の動機型ごとに、当該の動機型がそれぞれの向社会的行動群の原因である程度、③6 種類の動機型がいくつか組み合わさって、各向社会的行動群を生起させること、を明らかにした。

7 種類の援助行動型を代表する 20 項目の援助行動を行う理由を調査した原田（1990）は、収集し

た 18 の援助動機が 6 因子（①援助の規範意識と合理的援助効用の予期、②互恵と友好的関係、③被援助者への同情、④援助コストの低さと当然さ、⑤合理的ではない援助効用の予期、⑥非援助の後ろめたさ）に分類されることを見出した。

6 種類の援助場面を用いた本間（1988）は、各場面での行動に関して、①援助（手を貸す、声をかける）、②様子を見る（人を呼ぶ）、③非援助（何もしない）の 3 件法によって評定を求め、その理由を 11 の選択肢の中から選択させた。本間（1988）は、①を直接的援助、②を間接的援助と位置づけている。理由に関する 11 項目の選択肢のうちの 3 項目が援助動機に、8 項目が非援助動機に分類できる。

(2) 行為者の親切行動の規範意識への示唆

10 代から 80 代の男女を調査対象にした箱井・高木（1987）は、29 項目の援助規範意識項目を収集し、4 種類の規範意識（①返済規範意識、②自己犠牲規範意識、③交換規範意識、④弱者救済規範意識）から成る援助規範意識尺度（最終的な項目数は 25 と推論される）を作成した。

松井・堀（1978, 1979）は、援助に関する 20 項目 3 因子（①不干渉、②苦境への援助、③恩）から成る規範意識尺度を作成した。

その松井・堀（1978, 1979）の因子名を 3 要素（①非関与の規範、②一般的援助の規範、③互恵の規範）と言い換えた本間（1988）は、規範意識の中の非関与の規範が援助行動に及ぼす抑止効果に注目した。そして、都市部では、非関与の規範が援助の抑止にかかわり、非都市部では、互恵規範が援助の実行にかかわっていることを見出した。

また、上記の箱井・高木（1987）の 4 種類の規範意識のうちの 3 種類（②自己犠牲規範意識、③交換規範意識、④弱者救済規範意識）を用いた手塚（1994）は、それぞれの規範意識の強弱が、3 場面（①行動直後場面、②成功場面、③失敗場面）における行為者の感情（①爽快感、②幸福感、③充実感、④安定感、⑤自尊感、の 5 因子 15 項目の感情尺度得点）に及ぼす効果を検討した。

なお、30 項目の向社会的行動に関する規範的意見項目を用いた高木（1992）は、アメリカにおける向社会的行動に関する規範的態度の構造を因子分析と主成分分析によって検討し、分析法が違っても安定した 4 種類の態度と分析法によって異なる不安定な 2 種類の態度を発見し、規範的態度の構造には日米間の明確な対応関係が見られないと報告した。

(3) 非親切行動の動機への示唆

7 種類の向社会的行動群を代表する 12 種類の向社会的行動を選定した高木（1987b）は、その 12 種類の向社会的行動の非生起理由（非援助動機）を収集し、26 種類の非援助動機を選定した。そして、26 種類の非援助動機が 5 因子（①合理的な状況判断に基づく責任の拒否、②援助もしくは被援助の好ましくない経験、③援助者もしくは被援助者の好ましくない人格特徴、④責任の分散可能性、⑤援助能力の欠如）にまとまることを見出し、これらの 5 種類の非援助動機型を用いて、7 種類の向社会的行動群の非生起の特徴を解明した。

(4) 親切行動の規定因としての行為者の特性への示唆

援助行動に及ぼす援助者のパーソナリティ要因の効果を検討した原田・狩野（1980）は、他者との相互作用によって、援助がネガティブな自己像を補償する機能をもつと示唆した。同様に、援助行動に及ぼす援助者のパーソナリティ要因の効果を検討した原田（1983）は、援助傾向、都市化傾

向、愛他心指標などのパーソナリティ要因が援助行動の予測因とはなりにくいと報告した。

4. 対象者の親切要請行動への示唆

親切の対象者の親切要請行動に関する研究を計画する場合に、援助要請行動の規定因および意思決定過程に関する先行研究がヒントを与えてくれる。

(1) 親切要請行動の規定因への示唆

援助要請行動の規定因を実験的に検討した山口・西川（1991）は、①女性の方が男性よりも援助を要請しやすいこと、②男性の方が女性よりも援助を要請されやすいこと、③魅力的な人の方が魅力的でない人よりも援助を要請されやすいこと、④自尊心の低い人の方が自尊心の高い人よりも援助を要請しやすいこと、を発見した。

援助要請を抑制する要因を検討した島田・高木（1994）は、援助要請をしなかった理由を収集し、15 種類の原因・動機・理由を、援助要請意思決定時における状況認知要因として整理し、2 つの援助要請場面ごとに、①状況認知要因の構造、②状況認知要因と個人特性要因との関係、③パス関係（個人特性要因→状況認知要因→援助要請意図）を解明した。

(2) 親切要請行動の意思決定過程への示唆

援助要請行動の意思決定過程を検討した島田・高木（1995）は、4 つの援助要請場面ごとに、①援助要請の意思決定時における 8 種類の情報の情報検索回数と情報選択順序、②援助要請行動の意思決定時における 5 種類の心理状態、を分析した。

5. 親切に対する対象者の反応への示唆

親切の行為者に対する対象者の反応を研究しようとするとき、援助者に対する被援助者の返礼行動、返礼義務感、心理的負債感、評価に関する先行研究から有益な情報を得ることができる。

(1) 行為者に対する対象者の返礼行動への示唆

被援助者が援助者の援助出費を償うために返礼行動を行うという補償行動の文脈から、西川（1985）は、補償的返礼行動に及ぼす加害（出費）の程度と援助意図性の効果を実験的に検討した。また、被援助者の反応が互恵規範に基づくと考えた西川・高木（1986）は、互恵性の観点から、返礼行動に及ぼす被援助経験の有無と援助意図性の効果を実験的に検討した。

(2) 行為者に対する対象者の返礼義務感への示唆

被援助者の返礼行動を規定する返礼義務感に注目した西川（1986）は、被援助者の返礼義務感に及ぼす援助者側の援助意図性、被援助者側の援助成果、援助者側の援助出費の効果を実験的に検討した。

(3) 親切行動や行為者に対する対象者の心理的負債感への示唆

援助に対する被援助者の反応に注目した相川・吉森（1995）は、被援助者の心理的負債感を測定

するための、18 項目から成る単一次元の心理的負債感尺度を作成した。

被援助者の心理的負債の規定因の解明を目指した相川（1988）は、①被援助者の性別（男性、女性）、②援助者との関係（親友、他人）、③援助開始の所在（被援助者の要請、援助者の申し出）、④援助必要場面（落し物捜し、怪我の応急措置）、⑤援助成果（成功、不成功）の 5 要因実験計画により、心理的負債への影響を検討した。

(4) 行為者に対する対象者の評価への示唆

衡平理論（equity theory）の観点から、相川（1984）は、返報の機会の有無が援助者に対する被援助者の評価（印象、対人魅力）に及ぼす効果を実験的に検討した。

第６章　親切現象の心理学的理解

本章の第 1 節「親切現象の心理学的理解の視点」では、親切の心理学的定義には、親切現象を心理学的に理解するための多次元的視点と時系列的視点という 2 つの視点が内包されることを指摘する。次に、第 2 節「親切現象の多次元的理解」では、「親切の成立要件とその構造」および「親切の成立要件の多次元的理解」について論じる。続いて、第 3 節「親切現象の時系列的理解」では、「親切現象を構成する行動の時系列的構造」、「複雑性からみた 3 水準の親切過程」（行動的親切過程、因果的親切過程、拡張的親切過程）、「広範性からみた 3 層の親切過程」（標準的な親切過程、マクロな親切過程、ミクロな親切過程）について提案する。最後に、第 4 節「親切過程に関する心理学的研究の未来」では、「心理学的研究で扱う親切と親切過程」および「親切過程に関する心理学的研究の課題構造」について考察する。

第 1 節　親切現象の心理学的理解の視点

1. 親切の定義に内包される 2 つの視点

日本的親切論を展開した近藤（2007a）の親切に関する哲学的･倫理学的定義を精緻化する方向で、深田（2015a）は親切の心理学的定義を提出した。深田（2015a）によると、「親切とは、個人が、小さい負担を覚悟し、あたたかい思いやりの気持ちをもって、愛他的な動機から自発的に、困っている他者の利益になる無償の手助け・贈与を偶然的に実行し、その行為を他者が肯定的に評価することである。」（p.65）と定義される。この親切の心理学的定義には、親切を多次元的に捉えるべきであるという視点と時系列的に捉えるべきであるという 2 つの心理学的視点が組み込まれている。

2. 多次元的視点と時系列的視点

例えば、二次元的に考えると、行為者側の愛他的動機と手助け・贈与の実行のそれぞれは、親切が成立するための必要条件であるし、同様に、行為者側の手助け・贈与の実行とその行動に対する対象者側の肯定的評価のそれぞれも、親切が成立するための必要条件である。

しかも、行為者側の愛他的動機と手助け・贈与の実行のそれぞれは、行為者の親切行動の生起過程の構成に必須の要素であり、行為者側の手助け・贈与の実行とそれに対する対象者側の肯定的評価のそれぞれは、対象者の親切受容行動の生起過程の構成に必須の要素である。

このように、一連の親切現象は、それを構成する個々の親切に関わる行動およびこれに関係する心理的反応から多次元的かつ時系列的に理解されねばならない。

第 2 節　親切現象の多次元的理解

1. 親切の成立要件とその構造

(1) 行為者と対象者の二者関係からの親切の成立要件

親切現象を多次元的に理解するにあたって、親切現象の中核を成す親切行動に焦点化し、この親切行動の多次元的理解について考察する。例として、行為者の愛他的動機、行為者の動機に対する対象者の認知、行為者の行為に対する対象者の評価という 3 つの要因から親切の成立要件を考えてみる。

親切は、困苦を抱えている人に対して、親切にする側が愛他的な動機から手助け・贈与を行わねばならない。利己的な動機からの手助け・贈与は親切ごかしであり、下心のある偽善的行為である。愛他的な動機からの手助け・贈与であっても、それだけでは親切とは言えない。親切にされる側が親切にする側の行動を親切心からと認知しなければならないが、それでもまだ不十分である。たとえ親切にする側が愛他的動機から手助け・贈与を行ったと、親切をされた側が認知したとしても、不必要なものと評価するならば、その手助け・贈与は親切とはならない。それは、不要な親切、無用な親切、親切の押しつけ、善意の押し売り、ありがた迷惑、余計なお世話、要らぬお世話、要らぬお節介、干渉、過干渉、迷惑、迷惑千万となる。親切をされる側がその手助け・贈与を苦痛に感じるならば、それは悪質な迷惑行為、嫌がらせ、ハラスメント、ストーカー行為、犯罪のレベルに達してしまう。親切は、最終的に、行為者（親切をする側）の行動を対象者（親切をされる側）がありがたいと肯定的に評価しなければならない。

(2) 行為者と対象者の二者関係からの親切の成立要件の構造

親切の成立要件を考えるには、成立要件を構造的に把握するのが効率的である。親切の当事者は、基本的には親切の行為者と対象者の 2 人である。行為者と対象者という 2 人の当事者が存在しなければ、親切は存在しえない。行為者と対象者の存在は、親切の成立にとって必要条件であるが、例外的に、行為者の眼の前に対象者がいない場合もありうる。例えば、落し物を交番に届けるという親切の場合、困っている人は、行為者の目の前の顕在的な対象者ではなく、その場にいない不特定な対象者であり、行為者にとっては困っていると推察される潜在的な対象者である。

親切を多次元的に捉える際の構造としては、表 6-1 に示した行為者内レベル、行為者－対象者間レベル、対象者内レベルの 3 レベルが考えられる。行為者内レベルの構造は、行為者内の心理的反応間の関係や、行為者内の心理的反応と行動の関係として捉えられる。また、行為者－対象者間レ

ベルの構造は、行為者の心理的反応あるいは行動と対象者の心理的反応あるいは行動との間の関係として捉えられる。さらに、対象者内レベルの構造は、行為者の心理および行為者の行為に対する対象者の心理的反応間の関係として捉えられる。

(3) 親切の成立要件を複雑化する第三者の存在

親切は、行為者と対象者という二者のみが存在する場で常に生起するのではない。2 人の当事者以外の人々（第三者）が存在する環境の中で、親切が生じることも多い。第三者の存在は、第三者の心理的反応や行動が親切の成立に影響することによって、親切の成立要件を非常に複雑化してしまう。

表 6-1　親切の成立要件の構造

構造のレベル	関係の枠組み	関係を検討する要因の具体例
行為者内レベル	行為者の心理的反応間の関係	親切心の有無、愛他的動機の有無、負担度認知、自発性認知、損得認知などの行為者の心理的反応間の関係
	行為者の心理的反応と行動の関係	①行為者の親切心の有無、愛他的動機の有無、負担度認知、自発性認知、損得認知などの心理的反応と②行為者の親切行動の実行の有無との関係
行為者－対象者間レベル	行為者の心理的反応と対象者の心理的反応の関係	①行為者の親切心の有無、愛他的動機の有無、負担度認知、自発性認知、損得認知などの心理的反応と②対象者の認知する行為者の親切心の有無、愛他的動機の有無、負担度、自発性、損得などとの関係
	行為者の行動と対象者の心理的反応の関係 A	①行為者の親切行動の実行の有無と②それに対する対象者の評価、負債感、自己の損得認知などとの関係
	行為者の行動と対象者の心理的反応の関係 B	①行為者の親切行動の実行の有無と②対象者の認知する行為者の親切心の有無、愛他的動機の有無、負担度、自発性、損得などとの関係
	対象者の要請行動の有無と行為者の行動の実行の有無の関係	①対象者の親切要請行動の有無と②行為者の親切行動の実行の有無との関係
対象者内レベル	行為者の心理および行動に対する対象者の心理的反応間の関係	対象者の認知する行為者の親切心の有無、愛他的動機の有無、負担度、自発性、損得や、対象者の認知する行為者の行動の評価、および、対象者の認知する自己の負債感、自己の損得などの心理的反応間の関係

第三者にはいくつかのタイプが考えられ、そのタイプによって、行為者の親切行動の生起だけでなく、対象者の親切要請行動、親切受容行動、親切返礼行動が影響を受ける。第三者のタイプとしては、①親切行動に無関心な傍観者（1 人、複数）、②親切行動に注目している評価者（1 人、複数）、③親切行動をとるように勧める勧告者（1 人、複数）、の 3 つのタイプが考えられる。タイプ①よりもタイプ②の方が、さらにタイプ②よりもタイプ③の方が、第三者の親切事態への関与度は高いので、第三者に対する行為者と対象者の意識はタイプ③②①の順に高く、行為者と対象者が第三者から受ける影響の大きさはこの順になる。

第三者は、親切の行為者と対象者という主要な当事者の周囲にたまたま存在する人々という意味だけでなく、行為者の行為が親切であるかどうかを客観的に判断する判定者の意味ももつ。後者の意味が強調されるならば、行為者と対象者の判断が親切になろうと、不親切になろうと、第三者の判断によって親切かどうかが決定されることになる（例：小さな子どもが転び、近くにいた人が助け起こし、親も感謝し、親切が成立しているように見えるが、子どもが自力で起き上がるのを待つ方が望ましいと、と子育てのベテランである第三者が判断する）。

2. 親切の成立要件に関する多次元的理解

(1) 行為者と対象者からの親切の二次元的理解

親切を理解するために、2 つの要因の組み合わせによる二次元的分析を試みる。それぞれの要因は、本来連続量であるが、分析を単純化するために、2 値（例えば、有無、大小、高低）で考える。これによって、①典型的な親切、②非典型的な親切、③本質的には親切と言えない見かけだけの親切、④親切と逆の有害な影響を与える迷惑行為、⑤親切とは全く無関係の行動、の存在が明らかになる。特に、定義から導かれる典型的な親切以外にも、様々な非典型的な親切があることが分かる点が有益であろう。ここでは、思いつくままに 7 種類の視点を取り上げる。

(a) 行為者の親切心と親切行動の関係からみた親切　親切が成り立つためには、行為者は、親切な心をもって、親切な行動をしなければならない。すなわち、親切が成立するための必要条件として、行為者の心（親切心＝愛他心、愛他的動機、愛他的意図）と行動（親切行動）がある。行為者に親切心があるかどうか、また、親切を実行するかどうかによって、親切を分析的に捉えたのが表 6-2 である。①親切心を伴う親切行動は「親切」、②親切心があっても親切行動をとらないのは「実行されない親切（潜在的親切）」、③親切心を伴わない親切行動は「見せかけの親切」、④親切心もなく親切行動もとらないのは「不親切」である。

(b) 行為者の行動意図と対象者にとっての行動の価値の関係からみた親切　行為者が意図的に親切行動をとるのか、無意図的に親切行動をとるのか、また、対象者にとってその行動が価値あるものなのか、無価値なものなのか、によって親切を分析的に捉えたのが表 6-3 である。①意図的な親切行動が価値のある行動の場合が典型的な「親切」、②意図的な親切行動が価値のない場合は「不要な親切」、③意図しない行動が価値をもつ場合は「無意図的親切」、④意図しない行動が価値をもたない場合は「親切と無関係な行動」である。

表 6-2　行為者の親切心と親切行動の関係からみた親切

		行為者の心（親切心）	
		あり	なし
行為者の行動（親切行動）	あり	①親切	③見せかけの親切
	なし	②実行されない親切	④不親切

表 6-3　行為者の行動意図と対象者にとっての行動の価値の関係からみた親切

		行為者の行動意図	
		あり	なし
対象者にとっての行動の価値	あり	①親切	③無意図的親切
	なし	②不要な親切	④親切と無関係な行動

(c) 行動に伴う行為者の親切心と対象者の親切心認知の関係からみた親切　親切が成り立つためには、行為者は親切心（愛他心、愛他的動機、愛他的意図）をもって親切行動をしなければならないし、対象者は親切心からの行動であると認知しなければならない。親切が成立するための必要条件という視点から、行為者が親切心に基づいて行動を実行するかどうか、また、対象者がその親切心を認知するかどうかによって、親切を分析的に捉えたのが表 6-4 である。①親切心のあることを正確に認知する場合が「親切」、②親切心があるのにそれを認知しない場合が「無駄な親切」、③親切心がないのにあると勘違いする場合が「誤解的親切」、④親切心のないことを正確に認知する場合が「親切と無関係な行動」である。

表 6-4　親切行動に伴う行為者の親切心と対象者の親切心認知の関係からみた親切

		行為者の親切心	
		あり	なし
対象者の親切心認知	あり	①親切	③誤解的親切
	なし	②無駄な親切	④親切と無関係な行動

(d) 行為者と対象者に親切行動がもたらす損得判断の関係からみた親切　親切が成立するためには、行為者が小さな負担と犠牲を払い、そのことによって、対象者が、困っていることを解消できるといった小さな恩恵を受けなければならない。親切行動が行為者と対象者にもたらす損得判断の関係から、親切を分析的に捉えたのが表 6-5 である。①行為者と対象者の双方が得をするのが「互恵的行為」、②行為者が得をし、対象者が損をするのが「利己的行為」、③行為者が損をし、対象者が得をするのが「親切」、④行為者と対象者の双方が損をするのが「互損的行為」、である。

表 6-5　行為者と対象者に親切行動がもたらす損得判断の関係からみた親切

		行為者の損得判断	
		得	損
対象者の損得判断	得	①互恵的行為	③親切
	損	②利己的行為	④互損的行為

(e)親切行動が行為者と対象者にもたらす負担度判断の関係からみた親切　親切が成立するためには、行為者が親切行動の負担度を小さいと感じていなければならないし、対象者も自分が受けた親切行動を負担の小さい行動だと感じなければならない。親切行動の負担度の判断から、親切を分析的に捉えたのが表 6-6 である。①行為者と対象者の双方が、親切行動の負担が小さいと判断する場合が「親切（小さな親切)」、②親切行動の負担を行為者が小さいと判断するが、対象者が大きいと判断する場合が、対象者側に「負債感を伴う親切」、③親切行動の負担を行為者が大きいと判断するが、対象者が小さいと判断する場合が、行為者側に「負担感を伴う親切」、④行為者と対象者の双方が、親切行動の負担を大きいと判断する場合が「過剰な親切」である。

表 6-6　行為者と対象者に親切行動がもたらす負担度判断の関係からみた親切

		行為者の負担度判断	
		小	大
対象者の負担度判断	小	①親切（小さな親切）	③負担感を伴う親切
	大	②負債感を伴う親切	④過剰な親切

(f)行為者の隠そうとする意図と対象者の気づきの関係からみた親切　行為者が親切をされる人にその親切を隠そうとする場合と隠そうとしない場合がある。隠そうとするのが特殊な場合で、隠そうとしないのが一般的な場合である。また、対象者がその親切に気づく場合と気づかない場合がある。行為者が親切を隠そうとしない場合に、対象者がその親切に気づく場合が典型的な親切である。こうした視点から親切を分析的に捉えたのが表 6-7 である。①隠そうとしているのに気づかれてしまうのが「見抜かれた親切」、②隠そうとして気づかれない親切が「こっそりする親切」、③隠そうとしていなくて、気づかれるのが「典型的な親切」、④隠そうとしていないのに気づかれない親切が「気づかれない親切」である。

表 6-7　行為者の隠そうとする意図と対象者の気づきの関係からみた親切

		行為者の隠そうとする意図	
		あり	なし
対象者の気づき	あり	①見抜かれた親切	③典型的な親切
	なし	②こっそりする親切	④気づかれない親切

(g) 対象者からの親切の求めと行為者の親切行動の関係からみた親切　親切が成立するためには、困っている対象者が行為者に対して親切を乞うか、乞わないかは関係がない。どちらの場合も親切行動が生じれば親切である。困苦状態の対象者が親切を求めるかどうか、行為者が親切行動を実行するかどうか、という視点から親切を分析的に捉えたのが表 6-8 である。①対象者の求めに応じてするのが「応答的親切」、②対象者の求めがなくてもするのが「自発的親切」、③対象者の求めがあるのにしないのが「顕著な不親切」、④対象者の求めがなくてしないのが「不親切」である。

表 6-8　対象者の求めと行為者の行動の関係からみた親切

		行為者の親切行動	
		あり	なし
対象者の求め	あり	①応答的親切	③顕著な不親切
	なし	②自発的親切	④不親切

(2) 親切の三次元的理解

さらに詳細に親切を理解するために、3 つの要因の組み合わせによる三次元的分析を試みる。上で触れたように、それぞれの要因は、本来連続量であるが、分析を単純化するために、2 値（例えば、有無、大小、高低）で考える。ここでは、1 種類の視点のみ取り上げる。

(a) 行為者、対象者、および第三者の親切判断の関係からみた親切　親切の当事者である行為者と対象者に、第三者を追加して考えてみる。これら 3 種類の人が親切行動を親切と判断しているか、親切と判断していないかによって、親切を分析的に捉えたのが表 6-9 である。

表 6-9　行為者、対象者、および第三者の親切判断の関係からみた親切

第三者の判断		親切		非親切	
行為者の判断		親切	非親切	親切	非親切
対象者の判断	親切	①客観的親切	③無意図的親切	⑤主観的親切	⑦誤解的親切
	非親切	②実らない親切	④潜在的親切	⑥迷惑的親切	⑧親切と無関係な行動

第三者が行為者の行動を親切と判断するとき、①行為者が自分の行動を親切と判断し、対象者もその行動を親切と判断する場合が「客観的親切」、②行為者は自分の行動を親切と判断するが、対象者がその行動を親切と判断しない場合が「実らない親切」、③行為者が自分の行動を親切と判断しないのに、対象者がその行動を親切と判断する場合が「無意図的親切」、④行為者も対象者も親切と判断しない場合が「潜在的親切」である。

第三者が行為者の行動を親切と判断しないとき、⑤行為者が自分の行動を親切と判断し、対象者

もその行動を親切と判断する場合が当事者の間でのみ成立する「主観的親切」、⑥行為者は自分の行動を親切と判断するが、対象者がその行動を親切と判断しない場合が「迷惑的親切」、⑦行為者が自分の行動を親切と判断しないのに、対象者がその行動を親切と判断する場合が勘違いによる「誤解的親切」、⑧行為者も対象者も親切と判断しない場合が「親切と無関係な行動」である。

(b) 三次元的理解の二次元的理解への分割　3 つの要因の組み合わせに基づく三次元的分析は、2 つずつの要因の組み合わせによる 3 種類の二次元的分析としてとらえることもできる。すなわち、上記の親切判断の例では、ⓐ行為者と対象者の親切判断、ⓑ行為者と第三者の親切判断、ⓒ対象者と第三者の親切判断、に関する 3 種類の二次元的分析に分割して捉えることができる。

3 種類の二次元的分析のうち、ⓑ行為者と第三者の親切判断について取り上げてみる。行為者と第三者が親切と判断するか、親切ではないと判断するか、という二次元的分析の結果を表 6-10 に示す。①行為者と第三者の双方が親切と判断する場合は「客観的親切」、②行為者は親切と判断するが、第三者が親切と判断しない場合は独り善がりの「独断的親切」、③行為者が親切と判断しないのに、第三者が親切と判断する場合は、行為者が意図しない「無意図的親切」、④行為者と第三者の双方が親切でないと判断する場合は「親切と無関係な行動」である。

表 6-10　行為者と第三者の親切判断の関係からみた親切

		行為者の判断	
		親切	非親切
第三者の判断	親切	①客観的親切	③無意図的親切
	非親切	②独断的親切	④親切と無関係な行動

第 3 節　親切現象の時系列的理解

1. 親切現象を構成する行動の時系列的構造

援助に関わる行動を時系列的に構造化した高木（2013）の見解に倣い、深田（2015a）は、時系列的視点から、親切現象を構成している親切に関わる行動の構造を提示し、親切に関わる行動が、5 種類 4 段階からなる時系列的構造を示すことを指摘した。

親切に関わる行動は、①行為者が困っている対象者を発見する行動（困苦発見行動）、②対象者が行為者に親切を求める行動（親切要請行動）、③行為者が対象者に親切を提供する行動（親切提供行動＝親切行動）、④対象者が行為者の親切を受容する行動（親切受容行動）、⑤対象者が行為者にお礼やお返しをする行動（親切返礼行動）、の 5 種類となる。

①の行為者が困っている対象者を発見する行動は、行為者の親切行動が生じる前段階の行動であ

って、②の対象者が行為者に親切を求める行動（親切要請行動）と二者択一的行動である。すなわち、行為者は、自らが困苦を抱える人を発見して親切行動をとるか、困苦を抱える人に手助けを求められて親切行動をとるか、のどちらかである。ただし厳密に言えば、困苦発見行動は行動レベルの反応ではなく、認知レベルの反応である。

2. 複雑性からみた 3 水準の親切過程

親切現象は、複雑性の次元、すなわち親切現象の理解に使用する諸要因の複雑さの次元から理解可能である。複雑性の次元に関しては、①親切現象を 5 種類 4 段階の「基本行動」のみから捉える「行動的親切過程」、②行動的親切過程に対して、各基本行動の規定因および効果を加味した「因果的親切行動過程」、③行動的親切過程を構成する各基本行動に関する行動生起過程と効果生起過程に関わるあらゆる要因（規定因、媒介因、および効果の大きさ）を考慮する「拡張的親切過程」、という 3 水準の複雑さをもつ親切過程が考えられる。

(1) 行動的親切過程

5 種類の行動は、時系列的には、第 1 段階の困苦発見行動あるいは親切要請行動、第 2 段階の親切行動、第 3 段階の親切受容行動、第 4 段階の親切返礼行動という 4 段階の行動である。こうした 5 種類 4 段階の行動から時系列的に構成される親切現象を「行動的親切過程」と呼び、この行動的親切過程を構成する 5 種類の行動を「基本行動」と呼ぶ（図 6-1）。このように「行動的親切過程」は、行動レベルで親切現象を時系列的に捉える用語である。

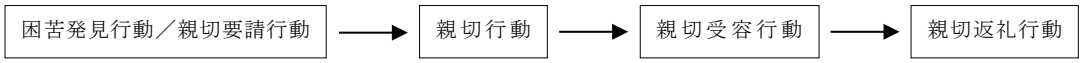

図 6-1　行動的親切過程

(2) 因果的親切過程

親切現象が 5 種類 4 段階の基本行動から構成されるという行動的親切過程の概念は、親切現象を理解するうえで最も基本な考え方であるが、あまりにも単純すぎる。各基本行動の原因（規定因）と結果（効果）を考慮しなければ、各基本行動の生起と効果の双方を包括する親切現象の全体像を理解したことにはならない（図 6-2）。本論では、5 種類 4 段階の基本行動から成る「行動的親切過程」に、各基本行動の規定因と効果を加味し、これを「因果的親切過程」と呼ぶことにする（図 6-3）。

図 6-3 の水平方向の矢印は、先行段階の基本行動が当該基本行動に及ぼす影響と、当該基本行動が後続段階の基本行動に及ぼす影響を示す。また、各基本行動を中心とする上下方向の矢印は、先行段階の基本行動以外の規定因が当該基本行動の生起に及ぼす影響と、当該基本行動が後続基本行

動以外の諸反応に及ぼす効果を示す。

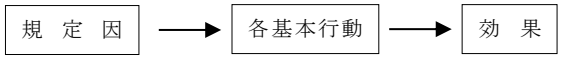

図 6-2　各基本行動の規定因と各基本行動の効果

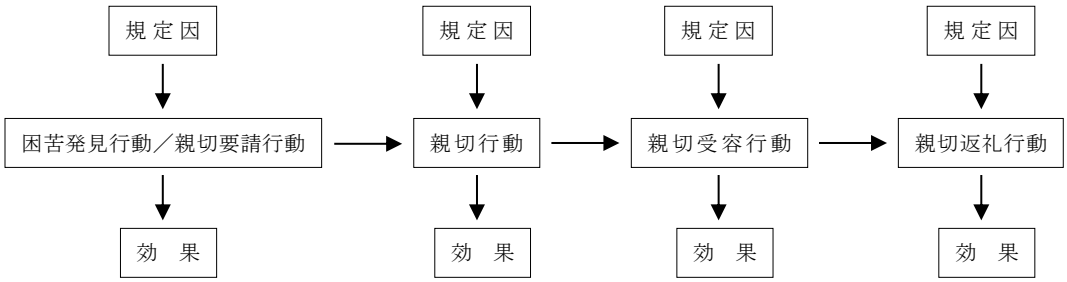

図 6-3　因果的親切過程

(3) 拡張的親切過程

厳密に考えると、因果的親切過程も親切現象を完全に包含しているわけではない。個々の基本行動の生起に及ぼす規定因の影響を的確に理解するためには、そこに働く媒介因を考慮しなければならないし、個々の基本行動が諸反応に及ぼす効果を理解するためには、そこに働く媒介因を理解しなければならない。前者が基本行動に関する行動生起過程であり、後者が基本行動に関する効果生起過程である（図 6-4）。例えば、基本行動の中核的行動である親切行動を例にとると、親切行動の規定因だけでも表 6-11 に示したように、心理的要因や行動的要因のほかにも状況要因や関係性の要因など、多様な規定因が存在する。そして、親切行動の効果は、対象者の心理面および行動面だけでなく行為者の心理面および行動面にまで、さらには第三者の心理面や行動面にまで及ぶ。

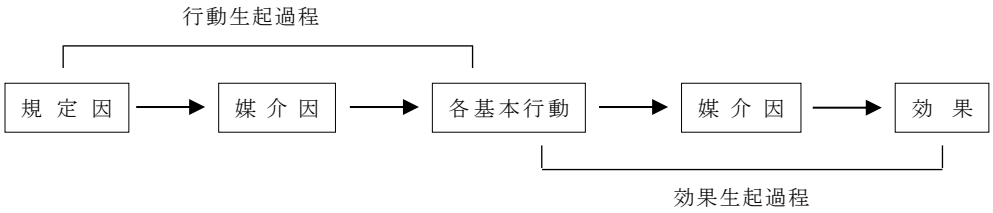

図 6-4　各基本行動に関する行動生起過程と効果生起過程の概要

表 6-11　親切行動の規定因の種類と構造

(1) 親切行動の行為者要因	①行為者の特性要因 ②行為者の動機要因 ③行為者の状況判断要因 ④行為者の状態要因 ⑤行為者の人口学的特性要因など
(2) 親切行動の対象者要因	①対象者の種類要因 ②対象者の状態要因 ③対象者の特性要因 ④対象者の人口学的特性要因など
(3) 親切行動の特性要因	①親切行動の性質要因 ②親切行動の負担度・犠牲度要因 ③負担・犠牲の次元要因 ④親切行動の種類要因 ⑤親切行動の実行に伴う利得とコストの相対的大きさ要因、および親切行動の非実行に伴う利得とコストの相対的大きさ要因、など
(4) 親切行動の要請要因	①対象者の行動要請要因 ②行動要請者の種類要因など
(5) 親切行動の行為者と対象者の置かれる状況要因	①対象者の周囲の他者存在要因 ②周囲の他者の反応要因 ③事態の緊急性要因など
(6) 親切行動の行為者と対象者の関係性要因	①好悪関係要因 ②地位関係要因 ③同性－異性関係要因 ④年齢関係要因など ⑤先輩－同輩－後輩関係要因 ⑥類似性要因など
(7) 親切行動の行為者の過去経験要因	①過去の親切行動提供経験要因 ②過去の親切行動被提供経験要因 ③過去の親切要請行動実行経験要因 ④過去の返礼行動受け取り経験要因 ⑤過去の親切行動見聞経験要因

このように、5 種類 4 段階の各基本行動に関する行動生起過程（基本行動生起の規定因とその媒介因）と効果生起過程（基本行動生起の効果とその媒介因）を包括する過程を「拡張的親切過程」と呼ぶことにする（図 6-5）。

図 6-5 の媒介因の左右にある水平方向の矢印は、先行段階の基本行動が特定の媒介因を介して当該の基本行動に影響することを示す。また、各基本行動の上下方向の矢印は、先行段階の基本行動要因を除く全ての規定因が媒介因を介して当該基本行動に及ぼす影響と、当該基本行動が特定の媒介因を介して後続段階の基本行動を除く全ての心理面や行動面に及ぼす影響を示す。

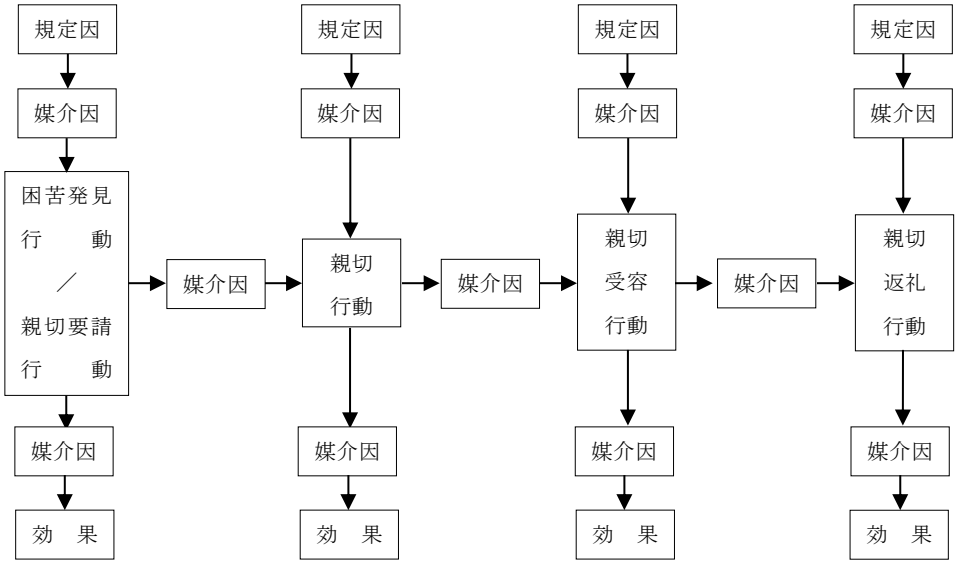

図 6-5　拡張的親切過程

3. 広範性からみた 3 層の親切過程

親切現象は、広範性の次元、すなわち親切現象の時間的広がりの次元から理解可能である。広範性の次元に関しては、①5 種類 4 段階の基本行動から成る標準的な親切過程、②標準的な親切過程の連鎖であるマクロな親切過程、③標準的な親切過程を構成する個々の基本行動に関する行動生起過程や効果生起過程であるミクロな親切過程、という 3 層が考えられる。すなわち、親切過程は 3 層構造であると考えられる。

(1) 標準的な親切過程

親切過程は、親切現象の広がりから考えることができるが、親切現象を 4 つの行動段階から捉える場合を、「標準的な親切過程」とする。この標準的な親切過程は、標準的な親切過程の連鎖あるい

は集合体としてのマクロな親切過程を構成する基本単位であると同時に、個々の基本行動およびそれに関わる様々な要因を構成要素にもつ過程である。すなわち、親切現象は、複数のミクロな親切過程が標準的な親切過程を構成し、複数の標準的な親切過程がマクロな親切過程を構成するという3層構造をもつ。

標準的な親切過程には、標準的な行動的親切過程、標準的な因果的親切過程、標準的な拡張的親切過程が考えられる。

(2) マクロな親切過程

よりマクロな視点に立つと、時系列的視点から見た広義の親切関連現象はこうした4段階の行動にとどまらない。親切の行為者は、自らが実行した親切に対する対象者の感謝の気持ちを知ると、今後も親切をしようという態度が強まり、将来の親切行動の実行頻度が増すであろう。また、親切を受けた対象者は感謝の気持ちから、今度は自分が困っている人に親切にしようという思いを強めるかもしれない。また、たまたま親切を目撃した第三者が自分も親切をしたいと考えるようになる可能性もある。こうして、個人内あるいは個人間で親切の連鎖が生じ、親切の輪が社会に広がっていくことになる。もちろん、親切に対する拒否経験が行為者の将来の親切行動を抑制することも起こりうる。すなわち、マクロな視点に立てば、4段階の標準的な親切過程は、以前に生じた4段階の標準的な親切過程から影響を受け、次に生じる4段階の標準的な親切過程に影響を与える。こうした標準的な親切過程の連鎖は、「マクロな親切過程」である（図6-6）。

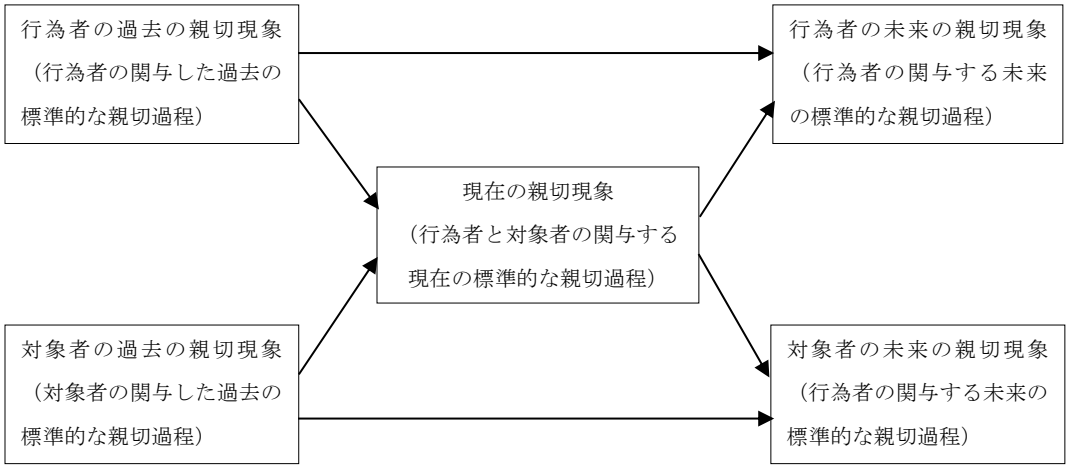

図6-6　マクロな親切過程

行為者に焦点を置くと、ある特定の行為者が関与する親切現象は、その行為者が過去に経験した親切現象からの影響を受け、その行為者および対象者（ときには第三者）の関与する親切現象に影響する。また、対象者に焦点を置くと、ある特定の対象者が関与する親切現象は、その対象者が過

去に経験した親切現象からの影響を受け、その対象者および行為者（ときには第三者）の関与する親切現象に影響する。

なお、マクロな親切過程にも、マクロな行動的親切過程、マクロな因果的親切過程、マクロな拡張的親切過程が考えられる。

(3) ミクロな親切過程

前項のマクロな視点とは逆に、よりミクロな視点に立つと、親切要請行動にしても、親切行動にしても、その行動が生起する過程には、様々な認知判断や意思決定が関与しているし、生起した行動が様々な心理的反応や行動を引き起こす。すなわち、標準的な親切過程を構成する 5 種類の基本行動のそれぞれが時系列的に理解されるべき過程（行動生起過程と効果生起過程の双方の過程）をもち、深田（2015a）で紹介したように、その生起過程を説明するための時系列的モデルの構築が可能である。標準的な親切過程を構成する個々の基本行動に関する行動生起過程および効果生起過程が「ミクロな親切過程」である。

例えば、標準的な親切過程の中核を成す親切行動について、第 5 章では、高木（1997, 1998）の援助行動の生起過程モデルに基づいて、図 5-1 に示した親切行動の生起過程モデルを作成した。その図 5-1 の親切行動の生起過程モデルは、親切行動の生起過程を、①対象者に関する評価・検討過程、②親切行動の意思決定過程、③親切行動の実行過程という 3 つの第一次下位過程とその第一次下位過程を構成する合計 11 段階の第二次下位過程から捉える詳細なモデルである。ただし、このモデルは、親切行動の負担度があまり小さい場合には適用しにくいという欠点をもつ。

ミクロな親切過程は、5 種類 4 段階の基本行動のそれぞれの行動生起過程と効果生起過程を指すので、ミクロな親切過程には、ミクロな行動的親切過程は限定された形でしか存在しない。すなわち、第 2 段階の親切行動と第 3 段階の親切受容行動の場合は、前段階の基本行動が規定因として機能し、後段階の基本行動が効果として測定できる。しかし、第 1 段階の困苦発見行動あるいは親切要請行動には規定因に当たる基本行動は存在しないし、第 4 段階の返礼行動には効果として測定できる基本行動が存在しない。

これに対し、ミクロな因果的親切過程とミクロな拡張的親切過程は存在する。ただし、上で述べたように、第 1 段階の行動の規定因の一部と第 4 段階の行動の効果の一部が存在しない。

第 4 節　親切現象に関する心理学的研究の未来

1. 心理学的研究で扱う親切と親切過程

(1) 心理学的研究で扱う親切

日本における親切の辞義的意味を検討した深田・岡竹（2015）と欧米における親切の辞義的意味

を検討した深田（2015b）で、日本の親切と欧米の親切（kindness）の意味する内容が異なることを指摘し、深田（2015a）で哲学的な日本的親切論を紹介した。そして、日本的親切の哲学的定義を踏まえ、深田（2015a）は、心理学分野における親切の関連概念の検討を経て、日本的親切の心理学的定義を提案した。

この心理学的定義では、日本的親切の対象は、家族を除く他者に限定され、日本的親切の内容は、負担度・犠牲度の比較的小さい手助け・贈与に限定される。こうした点が、親切の対象に家族も含め、動物や植物、環境や社会さえも含める欧米の親切とは異なる。また、親切の内容に生命の危険さえ伴うほどの大きな負担・犠牲を要する手助け・贈与や、幅広い日常的な向社会的行動が含まれる欧米の親切とは異なる。欧米の親切に向社会的行動が含まれる点は、わが国における小さな親切運動に共通する点である。

したがって、親切の心理学的研究は、家族以外の他者を対象とする、比較的負担の小さい手助け・贈与を扱うべきである。手助け・贈与の対象の範囲が拡大する場合、手助け・贈与の負担が大きい場合、行動内容の範囲が一般的な向社会的行動にまで及ぶ場合は、向社会的行動の研究として区別する方が適切であろう。

(2) 心理学的研究で扱う親切過程

本論では、親切現象を理解する基本的な枠組みとして、複雑性の次元から 3 水準の親切過程と広範性の次元から 3 層の親切過程を提案した。複雑性の次元から、第 1 に、親切に関わる 5 種類 4 段階の基本行動の時系列的な構造である行動的親切過程の概念を提案した。第 2 に、この行動的親切過程に、各基本行動の規定因と効果を組み込んだ因果的親切過程の概念を提案した。第 3 に、この因果的親切過程に、各基本行動の生起の媒介因と効果の媒介因を加味して、行動生起過程と効果生起過程を考慮した拡張的親切過程の概念を提案した。

次に、広範性の次元から、親切過程は、5 種類の基本行動から構成される標準的な親切過程のほかに、標準的な親切過程の連鎖であるマクロな親切過程と、5 種類の各基本行動に関する行動生起過程および効果生起過程を包含するミクロな親切過程という 3 層構造をもつことを指摘した。親切現象を俯瞰的に捉えるという意味では、本論で提案した親切過程という概念の使用が適切であろう。

しかし、個別の心理学的研究によってアプローチできる範囲は、極めて限定されるのが現実である。そうした意味で、親切に関する心理学的研究は、ミクロな親切過程の解明が主流にならざるを得ない。この現実を踏まえ、親切過程に関する心理学的課題の構造を構想してみる。

2. 親切現象に関する心理学的研究の課題構造

(1) 研究課題の基本構造

(a) 第 1 タイプの研究　親切過程に関する心理学的研究には、親切過程を構成する要素としての個々の基本行動や心理に関する研究が考えられる。これは、親切過程の特定時点（段階）に注目し、時間軸を切り取って、特定の時点（段階）での特定の行動や心理を中心に検討する第 1 タイプの研

究である。このタイプの研究には、①特定の一時点における個々の行動や心理の実態を解明する研究、②そうした個々の行動や心理の規定因を特定し、その効果を解明する研究、③特定された規定因が個々の行動や心理に及ぼす効果の生起機制を解明する研究、④生じた個々の行動や心理が後の行動や心理に及ぼす効果を解明する研究、⑤そうした効果とその生起機制を解明する研究、⑥個々の行動や心理に関する生起現象および効果現象を効率的に予測・説明する理論・モデルを構築する研究が含まれる。これらの研究は、ときには一つの目的を達成する研究（例えば、特定の行動の実態解明研究）として実施されることもあれば、いくつかの目的を達成する研究（例えば、特定の行動の規定因とその効果の生起機制の解明研究）として実施されることもある。

(b)第 2 タイプの研究　これに対して、親切過程を構成する複数の基本行動や心理を同時に取り上げる研究が考えられる。これは、親切過程を構成する個々の基本行動や心理の間の関連性、ないしは影響関係を検討する第 2 タイプの研究であり、本格的な時系列的視点を取り入れた研究である。このタイプの研究には、①複数時点における基本行動や心理の間の関連性を明らかにする研究、②そうした関連性の規定因を特定する研究、③親切過程を効率的に予測・説明する理論・モデルを構築する研究が含まれる。これらの研究は、複合的な目的のもとに実施されることが一般的である。

(2) 研究領域からみた親切現象の研究課題

研究課題の基本構造で指摘した第 1 タイプの親切過程に関する心理学的研究としては、①基本行動およびそれに関係する心理の測定的研究、②基本行動およびそれに関係する心理の規定因特定的研究、③基本行動およびそれに関係する心理の生起過程研究、④基本行動およびそれに関係する心理の効果研究といった社会心理学的研究課題が考えられる。また、⑤親切行動の介入研究のような臨床社会心理学的研究課題、⑥慈愛瞑想の効果研究のような臨床心理学的研究課題も考えられる。

また、格段に研究の計画・実施が困難であると予想されるが、親切過程を俯瞰するような、時系列的視点からの第 2 タイプの親切過程に関する研究の出現が待たれる。

(3) 親切現象に関する学際的共同研究課題

親切過程に関する心理学的研究の主流は、心理測定的研究であり、せいぜい生理学的な指標を利用する範囲にとどまる。心理測定的研究で明らかとなった基本行動や心理的反応が生体内のどのような変化によって引き起こされるのか、また、そうした基本行動や心理的反応が生体内にどのような変化を生じさせるのか、という証拠を得るためには、心理学的研究には限界がある。心理学的研究の弱点を補完するためには、生理学、脳科学、神経科学、内分泌学などの医学系分野の研究者との学際的共同研究が計画的・組織的に実行される必要がある。

第７章　親切現象における対人コミュニケーションの役割

本章では、対人コミュニケーションが親切現象と密接に関係していることを明らかにする。第 1 節「相互作用過程における親切現象」では、親切行動は対人行動の一形態であり、親切現象はコミュニケーション的行動と非コミュニケーション的行動から構成される一連の対人相互作用過程の中に位置づけられることを指摘する。第 2 節「親切過程における対人コミュニケーション」では、親切過程を構成する 4 段階 5 種類の基本行動を中心に、4 段階 5 種類の基本行動群の存在を指摘し、これらの行動群の大多数が対人コミュニケーションに相当することを論理的に証明する。

第１節　相互作用過程における親切現象

1. 親切現象の発生する文脈

親切現象は他の行動現象と独立的に発生するわけではなく、様々な対人相互作用の文脈の中で発生する。

(1) 対人相互作用過程の中の親切現象

対人相互作用過程は、二者間の行動の交換過程であり、行動の原因あるいは結果としての心理的反応を随伴する。親切要請行動にしても親切行動にしても、また親切受容行動や親切返礼行動にしても、行為者と対象者の間の対人相互作用過程の中で生じるものである。すなわち、親切現象は、対人相互作用過程の中で生じる現象である。

対人相互作用過程を構成する基本要素は、自己心理、対人心理、対人行動、対人関係の 4 つである。個人 B に対する個人 A の対人心理（対人認知、対人感情、対人動機、対人態度など）に個人 A の自己心理（自己認知、自己感情、自己態度など）が絡まり、個人 B に対する個人 A の対人行動（親切行動、親切要請行動など）が規定される。対人心理と自己心理が原因となり、対人行動が影響を受けるという因果関係が存在する。逆に、個人 B に対する個人 A の対人行動が、個人 B に対する個人 A の対人心理や個人 A の自己心理を規定する。対人行動が原因となり、対人心理と自己心理が影響を受けるという因果関係が存在する。このほかに、対人行動が対人関係を規定し、逆に、対人関係が対人行動を規定するという因果関係も存在する。

親切現象を 4 つの行動段階から単純化して捉えるために、ここでは対人行動に焦点化した分析と考察を加えたい。

(2) 対人相互作用過程における行動のタイプ

対人相互作用過程で交わされる対人行動は、その機能によって自己呈示行動、援助行動、攻撃行動などに分類可能である。困苦発見行動、親切要請行動、親切（提供）行動、親切受容行動、親切返礼行動といった親切過程における基本行動も、対人行動の機能から分類した行動名称である。

ところで、対人行動は、コミュニケーションという別の次元からの分類が可能である。コミュニケーションという分類基準を適用すると、あらゆる対人行動は、コミュニケーション的行動と非コミュニケーション的行動に大別できる。コミュニケーション的行動とは、言語や非言語（身振りや表情などの身体動作、対人距離、接触行動、準言語など）の記号を使用して、情報を伝達する行動のことである。

2. コミュニケーション行動から見た親切過程

親切現象は、コミュニケーション的行動と非コミュニケーション的行動から構成される一連の対人相互作用過程の中に位置づけられる。すなわち、時系列的に見た親切過程は、多様なコミュニケーション的行動と非コミュニケーション的行動の連続体であると想定される。親切現象の理解を深めるためには、こうした多様なコミュニケーション的行動と非コミュニケーション的行動の連続体の中のどの部分が親切過程の基本行動であるのか、どの部分が親切過程の基本行動に直接関係しない行動であるのか、を検討しなければならない。

別の表現をすれば、親切過程の基本行動はどのようなコミュニケーション的行動と非コミュニケーション的行動から構成されるのか、また、親切過程の基本行動はどのようなコミュニケーション的行動や非コミュニケーション的行動を随伴することによって成立しているのか、を解明しなければならない。この場合のコミュニケーション的行動は、行為者と対象者の二者間で交わされるコミュニケーションであるので、対人コミュニケーション（interpersonal communication）である。

第 2 節　親切過程における対人コミュニケーション

1. コミュニケーション的対人相互作用過程としての親切過程

(1) 対人行動としての親切行動

典型的な親切行動は、他者の困苦の解消を目的として、個人が無償の手助け・贈与を行う行動であり、二者間で交わされる対人行動の 1 形態である。これに対して、親切過程は、親切行動を含む

5 種類 4 段階の基本行動で構成される。

(2) 対人相互作用過程としての親切過程

親切過程は、困苦発見行動、親切要請行動、親切（提供）行動、親切受容行動、親切返礼行動という一連の行動から構成される。すなわち、親切は、行為者が他者の困苦を発見するか、他者が行為者に親切を要請するかを契機とし、行為者の親切行動が生起し、その親切行動を他者が受容し、他者が行為者に何らかの謝意を表して終結する、一連の対人相互作用過程である。

(3) コミュニケーション的行動としての親切過程における基本行動

(a)困苦発見行動　行為者が対象者の困苦を発見する困苦発見行動は、行為者の認知・判断のみで完了する場合は、行為者の行動と言うよりもむしろ認知といった方が適切であるが、ここでは非コミュニケーション的行動としておこう。しかし、行為者が対象者の困苦を確認する必要がある場合は、言語的コミュニケーションを用いた困苦の確認が行われる。

(b)親切要請行動　行為者に対して他者がとる親切要請行動は、手助け・贈与が欲しいという言語的コミュニケーションによって行われるので、コミュニケーション的行動である（例:道を尋ねる）。

(c)親切行動　他者に対して行為者がとる親切行動は、コミュニケーション的行動である場合（例：道を教える）と非コミュニケーション的行動である場合（例：座席を譲る）の両方がある。

(d)親切受容行動　行為者の親切行動に対する他者の受容行動は、コミュニケーション的親切行動に対しては、コミュニケーション的行動となるが（例：道を教えてもらったら、その情報を「分かりました」と受容する）、非コミュニケーション的親切行動に対しては、非コミュニケーション的行動となる（例：座席を譲られたら、その座席に座る）。

(e)親切返礼行動　行為者の親切行動に対する他者の返礼行動は、言語的コミュニケーションによって表明されることが一般的であるので（例：「ありがとうございます」と謝意を伝える）、コミュニケーション的行動である。

(f)まとめ　以上のように、親切関連行動の中核となる親切行動と周辺的な困苦発見行動および親切受容行動は、コミュニケーション的行動に該当する場合と非コミュニケーション的行動に該当する場合があるものの、ほかの 2 つの周辺的な親切関連行動である親切要請行動と親切返礼行動は、コミュニケーション的行動に該当する場合が一般的である。

2. 親切過程における対人コミュニケーションの具体像

現実の親切過程は、困苦発見行動、親切要請行動、親切行動、親切受容行動、親切返礼行動という 5 種類 4 段階の基本行動のみから構成されるのではない。これらの 4 つの行動は、確かに親切過程を構成する主要な行動であることには違いないが、実際には親切過程はそれ以外の多くの行動から成り立つ。

親切過程において行為者と他者の間で交わされる全てのコミュニケーション的行動は、二者間の

コミュニケーション、すなわち対人コミュニケーションである。

(1) 他者の困苦の発見段階での行動群

他者の困苦に行為者が気づいた場合、行為者は他者の困苦の確認をしたり、手助け・贈与の申し出をしたりするが、これは親切行動を実行する意思のあることを表明する行動であり、親切行動の一部であると考えることもできる。そして、行為者から困苦の確認の声かけや手助け・贈与の申し出を受けた他者は、そうした声掛けや申し出に対して、何らかの反応を返す。行為者と他者との間で交わされる、声かけや申し出とそれに対する応答は、コミュニケーション的行動である。

(a)困苦の確認行動と親切の申し出行動　他者に対する行為者による困苦の確認と手助け・贈与の申し出は、主に言語的コミュニケーションによって行われるコミュニケーション的行動である。

1)困苦の確認の声かけ：行為者は、他者が困苦の状態にあるのかどうかについて確信がもてない場合には、他者が困っているかどうかを確認するために声かけを行う(例:「何かお困りですか？」)。

2)手助け・贈与の申し出：行為者は、他者が困苦の状態にあると確信がもてる場合には、他者に手助け・贈与の申し出を行う（例：「お手伝いしましょうか？」)。

(b)困苦の確認の声かけと親切の申し出に対する応答行動　行為者による困苦の確認の声かけと手助け・贈与の申し出に対する他者の応答も、主に言語的コミュニケーションによって行われるコミュニケーション的行動である。

1)困苦の確認の声かけへの肯定的応答：行為者からの困苦の確認の声かけに対して、他者から肯定的応答が返ってきた場合（例：「ええ、道がよく分からなくて」)、行為者は、手助け・贈与の申し出をするか、あるいは親切行動の実行に移る。

2)困苦の確認の声かけへの否定的応答：行為者からの困苦の確認の声かけに対して、他者から否定的応答が返ってきた場合（例：「いいえ、大丈夫ですよ」)、行為者は親切行動をとらない。

3)手助け・贈与の申し出への肯定的応答：行為者からの手助け・贈与の申し出に対して、他者から肯定的応答が返ってきた場合（例：「ご好意に甘えて、お願いします」)、行為者は親切行動の実行に移る。

4)手助け・贈与の申し出への否定的応答：行為者からの手助け・贈与の申し出に対して、他者から否定的応答が返ってきた場合（例：「いいえ、結構です」)、行為者は親切行動をとらない。

(2) 親切要請行動の段階での行動群

他者は、自分の困苦を自分自身で解消できないと判断したとき、別の他者（行為者）に対して手助け・贈与の要請を行う。そして、他者からの手助け・贈与の要請を受けた行為者は、その要請に対する応答をする。行為者は、肯定的応答をした場合、親切行動を実行し、否定的応答をした場合、親切行動を実行しない。

(a)他者からの親切要請行動　他者からの親切の要請行動は、主に言語的コミュニケーションによって行われるコミュニケーション的行動である。

1)手助け・贈与の直接的要請：他者は、行為者に対して手助け・贈与を直接的に求めることがあ

る（例：「道を教えてもらえませんか？」）。

2)手助け・贈与の間接的要請：他者は、行為者に対して手助け・贈与を間接的に求めることがある（例：「道が分からなくて困っています」）。

(b)他者からの親切要請に対する応答行動　手助け・贈与の要請に対する行為者の応答行動も、主に言語的コミュニケーションによって行われるコミュニケーション的行動である。

1)手助け・贈与の要請への肯定的応答：他者からの要請に対して、行為者が肯定的応答を返す場合（例：「いいですよ、ご案内しましょう」）、行為者は親切行動の実行に移る。

2)手助け・贈与の要請への否定的応答：他者からの要請に対して、行為者が否定的応答を返す場合（例：「よく分からないので、ほかの人に聞いてください」）、行為者は親切行動をとらない。

(3) 親切行動の実行段階での行動群

親切行動は、コミュニケーション的行動であるか、非コミュニケーション的行動であるかによって、大きく 2 分類される。親切行動のうち、①関心、支持、共感の表明、②同情、慰めの表明、③指摘、助言、④情報提供は、コミュニケーション的行動である。このほかの親切行動である、⑤労力提供、⑥分与、寄付、⑦貸与、⑧協力、協同、⑨救助は、非コミュニケーション的行動である。しかし、後者の非コミュニケーション的行動に属する親切行動も、何の前触れもなく実行されるわけではなく、通常は何らかのコミュニケーション的行動を伴う。すなわち、非コミュニケーション的親切行動には、コミュニケーション的行動が随伴する。

(a)コミュニケーション的行動としての親切行動　行為者からの情報提供などのコミュニケショーション的親切行動は、行為者から他者へと発信される対人コミュニケーションである（例：時刻を尋ねられたとき、「12 時ちょうどですよ」）。

(b)コミュニケーション的行動を伴う親切行動　非コミュニケーション的親切行動には、コミュニケーション的行動が先行したり、挿入されたりする（例：電車で座席を譲るとき、「どうぞお座りください」）。

(4) 親切受容行動の段階での行動群

行為者の手助け・贈与を他者が受け入れる行動が親切受容行動である。コミュニケーション的親切行動を受容する行動は、やはりコミュニケーション的行動である。そして、非コミュニケーション的親切行動を受容する行動は、非コミュニケーション的行動であるが、これにはコミュニケーション的行動が随伴するのが普通である。

(a)コミュニケーション的行動としての親切受容行動　コミュニケーション的親切行動の場合、親切受容行動もコミュニケーション的行動である（例：道を教えてもらったとき、「分かりました。もう一つ向こうの通りだったのですね」）。もちろん、親切受容行動としてのコミュニケーション的行動だけでなく、親切受容行動に関連するコミュニケーション的行動が随伴することも多い（例：「何か目印になる建物はありますか？」）。

(b)コミュニケーション的行動を伴う親切受容行動　非コミュニケーション的親切行動の場合、

親切受容行動も非コミュニケーション的行動であるが（例：自転車で転んだとき、手を引っ張って助け起こしてもらう）、親切受容行動に関連するコミュニケーション的行動が随伴することも珍しくない（例：助け起こしてもらいながら、「足首を捻挫したみたいです」と言う）。

(5) 親切返礼行動の段階での行動群

行為者に対して、あるいは行為者の親切行動に対して、他者はなんらかの返礼行動をとろうとする。典型的な返礼行動は、感謝の気持ちの表明であり、これは主に言語的コミュニケーションを用いたコミュニケーション的行動である。こうした感謝の気持ちの表明は、表情や身振りなどの非言語的コミュニケーションを伴う場合が一般的である。

価値のあるものを受け取ったという評価は、同じような価値あるものをお返ししなければならないという互恵規範を他者の中に活性化させる。その結果、他者は行為者に対して、感謝の気持ちを示す物品の贈与を含む、非コミュニケーション的行動である親切のお返しをすることもある。こうした返礼行動にはコミュニケーション的行動が随伴することが多い。

(a) コミュニケーション的行動としての返礼行動　行為者の親切を肯定的に評価し、親切行動を受け入れた他者が自己の利益と満足感に注目する場合は、ありがたいという感謝の気持ちを表明する（例：「ありがとうございます。大変助かりました」）。しかし、他者が、行為者の負担や犠牲に注目する場合は、申し訳ないという心理的負債感を表明する（例：「申し訳ありません。ご迷惑をおかけしました」）。これらはまさにコミュニケーション的行動である。

(b) コミュニケーション的行動を伴う返礼行動　行為者の親切行動を受容した他者は、非コミュニケーション的な返礼行動を行うこともあるが（例：座席を譲ってもらった人が、譲ってくれた人の荷物を膝に置くことで、親切のお返しをする）、こうした返礼行動にはコミュニケーション的行動を随伴することが多い（例：「その荷物をお持ちしますから、どうぞこちらへ渡してください」）。

(c) 返礼行動に対する行為者の応答行動　他者からの返礼行動を受け取った行為者は、何らかの反応を返すが、それはコミュニケーション的行動である（例：「どういたしまして。気にしないでください」）。

3. 親切過程における対人コミュニケーションの構造的理解

対人コミュニケーションの視点から親切過程を考えることによって、親切過程における対人コミュニケーションを構造的に理解することを試みる。前項で取り上げた親切過程の進行段階に沿って対人コミュニケーションの出現を要約・整理し、表 7-1 に示した。

表 7-1 からも明らかなように、困苦発見行動、親切要請行動、親切行動、親切受容行動、親切返礼行動という 5 種類の基本行動を中核とする行動群である困苦発見行動群、親切要請行動群、親切行動群、親切受容行動群、親切返礼行動群は、それぞれ 5 種類、4 種類、4 種類、4 種類、5 種類の行動を包含している。これら合計 22 種類の行動のうち、実に 18 種類の行動が対人コミュニケーションに属する行動である。対人コミュニケーションに分類できない行動はわずか 4 種類に過ぎない。

特に、親切要請行動群の場合、構成する 4 種類の行動は全て対人コミュニケーションであり、非コミュニケーション的行動は皆無である。そのほかの困苦発見行動群、親切行動群、親切受容行動群、親切返礼行動群の場合は、それぞれの行動群を構成する行動のうち、1 種類のみが対人コミュニケーションといえない非コミュニケーション的行動である。

以上のように、親切過程と対人コミュニケーションの間には、密接な関係が存在し、親切過程は、対人コミュニケーション抜きには存在しえないことが明確になった。

表 7-1　親切過程における対人コミュニケーションの構造

基本行動	基本行動を構成する下位行動群	行動主体	行動分類
困苦発見行動	困苦の認知・判断	行為者	＊非コミュニケーション
	困苦の確認行動	行為者	対人コミュニケーション
	応答行動	他者	対人コミュニケーション
	親切申し出行動	行為者	対人コミュニケーション
	応答行動	他者	対人コミュニケーション
親切要請行動	直接的要請行動	他者	対人コミュニケーション
	応答行動	行為者	対人コミュニケーション
	間接的要請行動	他者	対人コミュニケーション
	応答行動	行為者	対人コミュニケーション
親切行動	コミュニケーション的親切行動	行為者	対人コミュニケーション
	随伴行動	行為者	対人コミュニケーション
	非コミュニケーション的親切行動	行為者	＊非コミュニケーション
	随伴行動	行為者	対人コミュニケーション
親切受容行動	コミュニケーション的親切受容行動	他者	対人コミュニケーション
	随伴行動	他者	対人コミュニケーション
	非コミュニケーション的親切受容行動	他者	＊非コミュニケーション
	随伴行動	他者	対人コミュニケーション
親切返礼行動	コミュニケーション的親切返礼行動	他者	対人コミュニケーション
	随伴行動	他者	対人コミュニケーション
	非コミュニケーション的親切返礼行動	他者	＊非コミュニケーション
	随伴行動	他者	対人コミュニケーション
	応答行動	行為者	対人コミュニケーション

第８章 わが国における親切の心理学的研究

わが国における親切に関する心理学的研究を展望する。最初に、第 1 節「わが国における親切の心理学的研究の特徴」として、先行研究を「定義の明確な日本的親切を主テーマとする研究」、「定義の不明確な親切を主テーマとする実証的研究」、「定義の明確な欧米的親切を付随的に扱う実証的研究」、「定義の不明確な親切を付随的に扱う実証的研究」に 4 分類する。この分類に従って、第 2 節「定義の明確な日本的親切を主テーマとする研究」では、「非実証的研究」と「実証的研究」に分けて、それぞれ 4 件と 5 件の先行研究を紹介する。第 3 節「定義の不明確な親切を主テーマとする実証的研究」では 5 件、第 4 節「定義の明確な欧米的親切を付随的に扱う実証的研究」では 3 件、第 5 節「定義の不明確な親切を付随的に扱う実証的研究」では 5 つのサブテーマから成る 11 件の先行研究を紹介する。最後に「まとめ」として、わが国における親切研究の特徴を 10 点指摘する。

第１節　わが国における親切の心理学的研究の特徴

わが国における「親切」の心理学的研究は、大きく 4 つに分類することができる。分類基準は、親切の概念の捉え方（日本的親切か、欧米的親切か、不明確か）と親切の位置づけ（主テーマか、付随的なテーマか）の 2 つである。先行研究は、理論的には 3×2 の 6 つの類型に分類される。しかし、日本的親切を付随的なテーマとする研究および欧米的親切を主テーマとする研究は見当たらなかった。そこで、最終的に、わが国における親切の心理学的研究は 4 つの類型に分類することができる。なお、定義の明確な日本的親切を主テーマとする先行研究は、非実証的研究と実証的研究に二分されるが、そのほかの 3 つの類型では、全てが実証的研究であり、非実証的研究は皆無である。

1. 定義の明確な日本的親切を主テーマとする研究

第 1 グループは、定義の明確な日本的親切に関する心理学的研究である。これには、近藤（2007a）の哲学的・倫理学的な親切論に基づいて展開された、筆者の一連の研究（深田, 2015a, 2015b, 2016; 深田・岡竹, 2015a, 2015b; 深田他, 2017c, 2017d; 深田・谷川, 2016）が存在する。これらの研究は、親切に伴う行為者の負担が比較的小さく、親切の対象が他者個人（家族を含まない他人）に限定されるという近藤（2007a）の日本的親切論を基本的に踏襲している。本研究の立場は、優しいという

意味を含むより広い概念である欧米の親切（kindness）、親切に伴う行為者の負担が非常に大きい場合も含む欧米の親切、親切の対象が家族、他者、集団・組織、社会、環境、動物にまで及ぶ欧米の親切、とは一線を画する。

2. 定義の不明確な親切を主テーマとする実証的研究

第 2 グループは、定義の不明確な親切を主テーマとする実証的研究（北村, 2012; 二宮, 1982; Otake, Shimai, Tanaka-Matsumi, Otsui, & Fredrickson, 2006）あるいはこれに準じる実証的研究（原田・松見, 2007; 油尾・吉田, 2013）である。これらの研究は、親切の概念的定義が提示されていないため、欧米的な親切を扱っているのか、あるいは日本的な親切を扱っているのか、判断不可能である。親切行動の介入実験が含まれるという点で、Otake et al.（2006）と北村（2012）の 2 研究には関連性が認められ、親切に焦点化された研究であると言える。また、親切判断を扱った二宮（1982）の研究も親切に焦点化された研究であるが、学会の大会発表にとどまっている。原田・松見（2007）と油尾・吉田（2013）の 2 研究は、親切の研究として実施されているわけではなく、油尾・吉田（2013）の研究は、社会的報酬操作のための具体的手段としてたまたま「親切行動」を使用しているにすぎないし、原田・松見（2007）の研究は、援助行動とほぼ同義に親切行動という用語を使用しているにすぎない。

3. 定義の明確な欧米的親切を付随的に扱う実証的研究

第 3 グループは、親切を主テーマとしていないが、定義の明確な欧米的親切を扱った実証的研究（有光, 2014; 大竹・島井・池見・宇津木・ピーターソン・セリグマン, 2005; Shimai, Otake, Park, Peterson, & Seligman, 2006）である。これらの研究は、親切を因子あるいは下位概念として含む欧米の心理尺度の日本語版を作成した研究（有光, 2014; 大竹他, 2005）、あるいは日本語版と欧米版の尺度を使用して比較を試みた研究（Shimai et al., 2006）である。

4. 定義の不明確な親切を付随的に扱う実証的研究

第 4 グループは、親切を主テーマとしないうえ、親切の定義が不明確な実証的研究である。これらの研究は、親切が研究の一部として付随的に扱われている実証的研究であり、しかも、親切の概念的定義が提示されていない実証的研究である。これらの研究には、例えば、性格としての親切（村上, 2003; 依田・深津, 1963）、向社会的行動や援助行動としての小さな親切行動（原田, 1990; 菊池, 1988; 高木, 1982, 1987）、取り入りとしての親切な行為（深田・田坂, 2017; 松本, 2003; 有倉, 1998, 2013）表情の印象としての親切（井上, 2014）に関する 11 件の研究が見られる。

第 2 節　定義の明確な日本的親切を主テーマとする研究

1. 非実証的研究

(1) 親切の哲学的・倫理学的研究から心理学的研究へ

深田（2015a）の研究　日本的親切論を展開した近藤（2007a）の哲学的・倫理学的研究を紹介した深田（2015a）は、①親切の対象者の特徴、②親切な人の特徴、③親切心、④親切の本質、の 4 つのパートから近藤（2007a）の親切論を捉え直した。そして、近藤（2007a）の親切論の修正を試み、暫定的に親切の哲学的再定義を提案した。

次に、深田（2015a）は、心理学分野における親切の関連・類似概念として、援助行動、愛他的行動、向社会的行動を取り上げ、これらの概念間の異同を検討するとともに、これらの概念と親切概念との異同を検討した。そして、近藤（2007a）の親切概念を拡張しつつ、関連・類似概念との差異を明示できる親切の心理学的定義を導いた。典型的な親切に焦点化した狭義の定義は、“親切とは、個人が、小さい負担を覚悟し、あたたかい思いやりの気持ちをもって、愛他的動機から自発的に、困っている他者の利益になる無償の手助け・贈与を偶然的に実行し、その行為を他者が肯定的に評価することである。”（深田, 2015a, p. 65）であり、広義の定義についても補足的な説明が加えられた。

さらに、①親切にかかわる行動の時系列的構造から、親切の心理学的研究の基本的枠組みを論じ、②親切行動の生起過程モデルに基づく親切の心理学的研究を提案し、③親切の心理学的研究に対する関連領域（援助行動、愛他的行動、向社会的行動領域）の先行研究から示唆される研究について述べ、④一連の親切過程のかなりの部分が対人コミュニケーションであることを指摘した。

(2) わが国と欧米における親切の辞義的研究

深田・岡竹（2015a）の研究　日本における親切の意味的構造を実証的に検討するに当たり、深田・岡竹（2015a）は、辞義としての親切について、6 種類の国語大辞典と 3 種類の漢和大辞典等の記述から検討した。その結果、「親切」、「深切」、「心切」の中核的用語は「親切」であること、「親切」の意味内容は人に対する愛他的な気持ちや振る舞いであること、「親切」は心理的側面と行動的側面から成立することを明らかにした。

深田（2015b）の研究　欧米における親切（kindness）の意味について、深田（2015b）は、1 種類の和英大辞典、2 種類の英和大辞典、4 種類の英英大辞典の記述から検討した。その結果、以下のことを指摘した。“kindness”は、心理的な側面と行動的な側面を含む点では、日本語の「親切」と同様である。しかし、優しさ、思いやり、愛情、寛大、善意、同情、友好的な気持ちといった多様な意味をもつ点では、日本語の「親切」よりもその意味する範囲が広い。また、人間以外のもの（例えば、動物）に対する優しさも含む点が日本語の「親切」とは異なる。さらに、日本語の「親切」と英語の“kindness”は、①親切の対象の範囲（狭－広）、②親切行動の負担度の範囲（狭－広）、③

親切の行為者（狭－広）の 3 点について異なる。

(3) 親切現象の心理学的理解

深田（2016）の研究　深田（2015a）の親切の心理学的定義には、親切現象を心理学的に理解するための多次元的視点と時系列的視点という 2 つの視点が内包される、と深田（2016）は指摘した。最初に、「親切現象の多次元的理解」をテーマに、「親切の成立要件とその構造」および「親切の成立要件の多次元的理解」について論じた。ここでは、親切事態を構成する当事者である行為者と対象者の二者関係から親切の成立要件とその構造を探り、さらに第三者が加わることで、親切の成立要件が複雑化することを論じ、親切の成立要件に関する二次元的理解と三次元的理解の例を挙げた。

次に、「親切現象の時系列的理解」をテーマに、「親切現象を構成する行動の時系列的構造」、「複雑性からみた 3 水準の親切過程」、「広範性からみた 3 層の親切過程」について論じた。ここでは、親切に関わる行動を、①困苦発見行動あるいは親切要請行動、②親切（提供）行動、③親切受容行動、④親切返礼行動の 5 種類 4 段階の行動として時系列的に捉え、これらの行動を基本行動と呼んだ。複雑性の観点から、基本行動によって構成される親切現象を「行動的親切過程」、個々の基本行動の規定因と効果を考慮した「因果的親切過程」、個々の基本行動の行動生起過程と効果生起過程（基本行動の規定因とその媒介因、および基本行動の効果とその媒介因）を考慮した「拡張的親切過程」の 3 水準で捉えた。そして、広範性の観点から、①4 段階の一連の親切過程を「標準的な親切過程」、②標準的な親切過程の連鎖を「マクロな親切過程」、③標準的な親切過程を構成する個々の基本行動に関する行動生起過程および効果生起過程を「ミクロな親切過程」とし、3 層で捉えた。

さらに、「親切過程に関する心理学的研究の未来」をテーマに、「心理学的研究で扱う親切と親切過程」および「親切過程に関する心理学的研究の課題構造」について論じた。また、最後に、「補遺：相互作用過程として親切現象を理解する」として、「親切現象の発生する文脈」と「コミュニケーション行動からみた親切過程」に触れた。

2. 実証的研究

(1) 親切の意味的構造：深田・岡竹（2015a）の研究

目的　親切の意味的構造を解明し、親切の意味を測定するための親切意味尺度を作成することを目的とした。そのため、まず、親切の類似語を収集し、次に、収集した類似語を理解可能な水準の類似語に絞り込み、続いて、理解可能な類似語と親切との類似度（意味的距離の逆数）を測定し、最終的に、類似語と親切との類似度を利用した因子分析によって、親切の類似語の構造、すなわち、親切の意味的構造を解明する。

予備調査 1　3 種類の類語辞典を中心に親切の類似語を 95 項目収集し、適切と思われる 35 項目に絞り込んだ。

予備調査 2　女子大学生 40 人を調査対象に、予備調査 1 で得られた 35 項目の類似語の理解度を 4 段階（1～4 点：高得点が理解度大）評定させ、理解度が 3 点以上の項目を 22 項目残した。

本調査　女性 110 人を対象に、親切と 22 項目の類似語との間の類似度を 5 段階（1～5 点：高得点が類似度大）で評定させた。類似度得点を利用した因子分析によって、親切の類似語の構造、すなわち、親切の意味的構造を検討した。その結果、第Ⅰ因子「温かい好意」（*M*=2.65）、第Ⅱ因子「思いやりのある配慮」（*M*=3.61）、第Ⅲ因子「善意の世話好き」（*M*=2.99）の 3 因子を抽出し、親切の意味的構造が 3 因子構造であることを解明した（表 8-1）。そして、親切の意味を測定するための 17 項目 3 因子から成る親切意味尺度を作成した。

表 8-1　親切意味尺度を構成する因子とその項目

第Ⅰ因子「温かい好意」
友好的、親心、好意、温厚、丁寧、心温まる、大切、心の籠った、温かい
第Ⅱ因子「思いやりのある配慮」
心配り、気配り、思いやり、心遣い
第Ⅲ因子「善意の世話好き」
世話好き、心がけのよい、善意、気に掛ける

総合考察　第Ⅰ因子として抽出されたのは「温かい好意」因子であり、親切との類似度が最も高いと判断されたのは、第Ⅱ因子として抽出された「思いやりのある配慮」因子であることから、「親切」の意味の中核を構成するのは、「温かい好意」と「思いやりのある配慮」であること、これに「善意の世話好き」が補強するように加わる形で、親切の意味が成立していると解釈できる。

(2) 親切の行動的構造：深田・岡竹（2015b）の研究

目的　典型的な親切行動を特定し、親切の行動的構造を解明し、親切行動を測定するための親切行動尺度を作成することを目的とした。そのため、まず、親切行動を収集し、次に、収集した親切行動を、実行可能性と実行に伴う負担度の次元から絞り込み、続いて、親切行動の実行可能性を利用した因子分析によって、親切の行動的構造を解明する。

予備調査　先行研究を中心に 130 項目の親切行動項目を収集し、最終的に未知の他人用親切行動 39 項目と友人・知人用親切行動 9 項目を残した。

本調査　予備調査で得られた親切行動項目に関して、145 人の女子大学生に実行可能性と負担度を 4 段階（1～4 点：高得点が可能性大、負担度大）で評定させた。未知の他人用親切行動項目では、天井効果と床効果を示す項目を削除した 17 項目の実行可能性得点に関する因子分析の結果、第Ⅰ因子「緊急対応的親切」（*M*=2.50）、第Ⅱ因子「世話好き的親切」（*M*=2.13）、第Ⅲ因子「分与・貸与的親切」（*M*=2.06）、第Ⅳ因子「応答的親切」（*M*=2.51）の 4 因子を抽出した（表 8-2）。未知の他人に対する親切の行動的構造が 4 因子構造であることを解明し、12 項目 4 因子から成る未知の他人用親切行動尺度を作成した。なお、「緊急対応的親切」と「応答的親切」の方が「世話好き的親切」と「分与・貸与的親切」よりも有意に実行可能性が高いことが示された（$F(3, 432) = 21.034, p < .001$; 多重比較により 5%水準で有意差あり）。

表 8-2　未知の他人用親切行動尺度を構成する因子とその項目

第Ⅰ因子「緊急対応的親切」
けが人や急病人が出たとき、救急車を呼ぶ
胸をおさえて歩道に横たわってる人がいたら、声をかけて救急車を呼ぶ
けが人や急病人が出たとき、介抱する
乱暴されている人をみたとき、警察に通報したりして助けを呼ぶ
第Ⅱ因子「世話好き的親切」
人が何か探し物をしているときに、こちらから声をかける
カメラのシャッター押しに「協力しましょうか」と声をかける
自転車が倒れていたら、起こしておいてあげる
コンタクト・レンズを落として探している人がいたら、一緒に探す
第Ⅲ因子「分与・貸与的親切」
困っている人に自分の持ちものをわけてあげる
財布を落とした人やお金の足りない人にお金を貸す
第Ⅳ因子「応答的親切」
荷物の番を頼まれたとき、引き受ける
「バス停まで連れて行って欲しい」と頼まれたとき、連れて行ってあげる

表 8-3　友人・知人用親切行動尺度を構成する因子とその項目

第Ⅰ因子「緊急対応的親切」
胸をおさえて歩道に横たわってる人がいたら、声をかけて救急車を呼ぶ
けが人や急病人が出たとき、救急車を呼ぶ
けが人や急病人が出たとき、介抱する
乱暴されている人をみたとき、警察に通報したりして助けを呼ぶ
第Ⅱ因子「日常対応的親切」
荷物の番を頼まれたとき、引き受ける
自転車が倒れていたら、起こしておいてあげる
困っている人に自分の持ちものをわけてあげる
「バス停まで連れて行って欲しい」と頼まれたとき、連れて行ってあげる
財布を落とした人やお金の足りない人にお金を貸す
コンタクト・レンズを落として探している人がいたら、一緒に探す

追加調査　友人・知人用親切行動 9 項目については、天井効果と床効果を示す項目を削除すると 1 項目しか残らなかったので、本調査で得られた未知の他人用親切行動尺度を利用し、53 人の女子大学生を対象に本調査と同様の手続きにより、友人・知人に対する親切行動を検討した。その結果、10 項目が残り、第Ⅰ因子「緊急対応的親切」（M=2.96）、第Ⅱ因子「日常対応的親切」（M=2.93）の

2 因子を抽出した（表 8-3）。友人・知人に対する親切の行動的構造が 2 因子構造であることを解明し、10 項目 2 因子から成る友人・知人用親切行動尺度を作成した。

総合考察　未知の他人に対する親切行動と友人・知人に対する親切行動とでは、親切行動の構造と実行可能性と負担度の全てが異なることが示唆された。未知の他人に対する親切に比べて、友人・知人に対する親切の方が、親切行動の構造が複雑で、実行可能性が高く、実行に伴う負担がやや小さいことが示唆された。

(3) 不親切の動機的構造：深田・谷川（2016）の研究

目的　未知の他人に対する不親切の動機的構造を解明し、未知の他人用不親切動機尺度を作成することを目的とした。親切場面として、親切の実行可能性の異なる緊急対応的親切場面（実行可能性高）と世話好き的親切場面（実行可能性低）を利用した。

方法　女子大学生 70 人を調査対象に、緊急対応的親切場面と世話好き的親切場面において、親切をしない動機を測定した。高木（1987b）の 26 項目 5 因子の非援助動機尺度を一部修正した不親切動機尺度を使用して、困っている人にかかわらない理由を 4 段階（1～4 点：高得点が不親切動機大）で評定させた。

表 8-4　未知の他人用不親切動機尺度を構成する因子とその項目

第Ⅰ因子「責任の分散と消極的態度」
自分以外にも何人かの人がそこにいたので
その人から自分が遠く離れていたので
その人が自分の知らない人だったので
他の人が助けていたので
今までに助けたことがなかったので
直接助けを求められなかったので
目立つのが恥ずかしかったので
第Ⅱ因子「合理的判断に基づく責任回避」
その人が困っているのは自業自得であり、自分には関係ないと思ったので
その人の困難はその人自身で切り抜けるべきだと思ったので
その人を助ける義務が自分にはないと思ったので
助けが必要だと思わなかったので
今までに自分が助けを求めても、誰も助けてくれなかったので
第Ⅲ因子「対象者の好ましくない特徴」
その人が嫌いなタイプの人だったので
その人が思いやりのない、利己的な人に思えたので
その人が好ましくない特徴を持っていたので

結果　得られた不親切動機得点を用いた因子分析によって不親切の動機的構造を検討した。その結果、第Ⅰ因子「責任の分散と消極的態度」（*M*=2.58）、第Ⅱ因子「合理的判断に基づく責任回避」（*M*=1.58）、第Ⅲ因子「対象者の好ましくない特徴」（*M*=1.82）の 3 因子を抽出し、不親切の動機的構造が 3 因子構造であることを解明した（表 8-4）。そして、未知の他人に対する不親切の動機を測定するための 15 項目 3 因子から成る未知の他人用不親切動機尺度を作成した。

考察　得られた不親切動機の構造は、非援助動機の構造と類似していたが、非援助動機の「援助能力の欠如」因子の相当する「親切能力」因子は抽出されなかった。これは、ささやかな親切の実行には、能力が関与する比重が小さいからであると解釈された。

(4) 親切行動とふれ合い恐怖心性の関連：深田他（2017c）の研究

目的　親切行動とふれ合い恐怖との関連を検討することを目的とした。

方法　女子大学生 109 人を調査対象に、深田・岡竹（2015b）の未知の他人用親切行動尺度（4 因子 12 項目）、深田他（2017a）の既知の他者に対する典型的ふれ合い恐怖心性尺度（2 因子 22 項目）と未知の他者に対する非典型的ふれ合い恐怖心性尺度（2 因子 20 項目）を使用して、親切行動とふれ合い恐怖心性を測定した。それぞれ 4 段階（1～4 点）評定させ、高得点ほど親切行動の実効可能性が高くなるように、また、ふれ合い恐怖心性が高くなるように得点化した。

結果　①典型的ふれ合い恐怖心性尺度得点と非典型的ふれ合い恐怖心性尺度得点、②典型的ふれ合い恐怖心性尺度の 2 種類の下位尺度得点、③非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の 2 種類の下位尺度得点という各 2 変数から成る 3 セットの各セットを説明変数とし、親切行動尺度得点とその 4 種類の下位尺度得点の合計 5 種類の得点を目的変数とする重回帰分析を行った。その結果、未知の他者に対する非典型的ふれ合い恐怖心性（尺度全体）が高くなると、未知の他者に対する親切行動全体、世話好き的親切行動、分与・貸与的親切行動が少なくなることを明らかにした。また、未知の他者に対する非典型的ふれ合い恐怖心性のうち、特に会食不安・雑談不安が高くなると、未知の他者に対する親切行動全体が少なくなり、特に世話好き的親切行動が少なくなることを解明した。

(5) 親切行動とコミュニケーション不安の関連：深田他（2017d）の研究

目的　親切行動とコミュニケーション不安との関連を検討することを目的とした。

方法　女子大学生 109 人を調査対象に、深田・岡竹（2015b）の未知の他人用親切行動尺度（4 因子 12 項目）、深田他（2017b）の既知の他者用コミュニケーション不安尺度（2 因子 11 項目）と未知の他者用コミュニケーション不安尺度（2 因子 10 項目）を使用して、親切行動とコミュニケーション不安を測定した。それぞれ 4 段階（1～4 点）で評定させ、高得点ほど親切行動の実効性が高くなるように、また、コミュニケーション不安が高くなるように得点化した。

結果　①既知の他者用コミュニケーション不安尺度得点と未知の他者用コミュニケーション不安尺度得点、②既知の他者用コミュニケーション不安尺度の 2 種類の下位尺度得点、③未知の他者用コミュニケーション不安尺度の 2 種類の下位尺度得点という各 2 変数から成る 3 セットの各セットを説明変数とし、親切行動尺度得点とその 4 種類の下位尺度得点の合計 5 種類の得点を目的変数と

する重回帰分析を行った。その結果、未知の他者に対するコミュニケーション不安（尺度全体）は、未知の他者への親切行動全体、緊急対応的親切、世話好き的親切を抑制していた。こうした抑制的影響は、大勢・少人数状況における不安では全く見られず、一対一状況における不安でのみ見られた。そして、一対一状況での未知の他者に対するコミュニケーション不安が、未知の他者に対する親切行動全体、世話好き的親切、分与・貸与的親切、応答的親切を抑制することを解明した。

第 3 節　定義の不明確な親切を主テーマとする実証的研究

1. 親切と幸福感の互恵的関係：Otake et al.（2006）の研究

感謝が主観的幸福感（subjective happiness）を高めることにヒントを得て、Otake et al.（2006）は、幸福な人は親切をすることでより幸福になることを 2 つの研究によって証明した。

(1) 研究 1：親切の程度と主観的幸福感の関係

目的　研究 1 の目的は、親切の程度と主観的幸福感の関係を検討することであった。

方法　175 人の日本人大学生男女を調査対象者に、①幸福感尺度、②親切尺度、③日常的幸・不幸経験報告という 3 種類の質問紙に回答させた。

幸福感尺度は、Lyubomirsky & Lepper（1999）の主観的幸福感尺度（Subjective Happiness Scale: SHS）に基づいて、島井・大竹・宇津木・池見・Lyubomirsky（2004）が開発した 4 項目の日本版主観的幸福感尺度であった。項目内容と回答形式（不幸な極 1 点～幸福な極 7 点の 7 段階評定）は、①自分自身を絶対評定で特徴づけること（非常に不幸～非常に幸福）、②同年輩の人と比較して自分自身を特徴づけること（より不幸な人間～より幸福な人間）、③幸福な人の特徴をもっている程度（まったくない～とてもある）、④不幸な人の特徴をもっている程度（まったくない～とてもある：逆転項目）、であった。

親切尺度は、①他者に親切にしたいという動機づけ、②他者に親切をしているという認識、③他者に親切な行為をしているという行動、の程度を測定する 3 項目の尺度であった。これらの親切の動機、認識、行動を表現した陳述文が、どの程度自分を特徴づけるか、5 段階（「まったく特徴づけない」1 点～「非常に特徴づける」5 点）で評定させた。

日常的幸・不幸経験報告は、過去 3 週間の間に経験した、強い情緒を喚起した幸福な出来事と不幸な出来事を記述させ、その幸・不幸の強度を 6 段階（「非常に弱い 1 点」～「非常に強い 6 点」）で評定させた。

結果　幸福感尺度の得点の中央値を分類基準に用いて、調査対象者を高幸福群（幸福な人々）と低幸福群（あまり幸福でない人々）に分類した。そして、高幸福群と低幸福群を比較したところ、高幸福群の方が、低幸福群よりも、幸福な経験の数と程度が有意に大きく（表 8-5）、親切の程度（親

切の動機づけ、認識、行動の程度）が有意に高かった（表 8-6）。しかし、不幸な経験の数と程度に関しては、両群間に差は見られなかった。

表 8-5　高幸福群と低幸福群における日常的な幸福経験と不幸経験の数と程度の平均（標準偏差）（Otake et al. (2006) の Table 1 を一部修正）

変数	高幸福群			低幸福群		t (173)	
幸福な経験の数	4.64	(1.14)	＞	3.68	(1.50)	2.28	p<.05
不幸な経験の数	3.58	(1.46)		3.77	(1.48)	*n.s.*	
幸福な経験の程度	5.29	(0.53)	＞	4.66	(0.68)	5.66	p<.001
不幸な経験の程度	4.68	(0.62)		4.77	(0.75)	*n.s.*	

表 8-6　高幸福群と低幸福群における親切の成分の平均（標準偏差）（Otake et al. (2006) の Table 2 を一部修正）

親切の成分	高幸福群			低幸福群		t (173)	
動機づけ	3.69	(0.99)	＞	3.15	(0.97)	2.33	p<.001
認識	3.08	(0.71)	＞	2.15	(0.70)	3.10	p<.001
行動	1.98	(0.50)	＞	1.26	(0.44)	3.14	p<.001

以上のように、幸福な人は、日常生活の中で、質的にも量的にもより幸福な経験をもっていた。そして、幸福な人は、親切な行動をより多くすることが、動機面、認識面、行動面から明らかとなった。

(2) 研究 2：親切を数えさせる介入が主観的幸福感に及ぼす効果

目的　研究 2 の目的は、実行した「親切を数えさせる」という介入（a “counting kindness” intervention）が主観的幸福感に及ぼす効果を検討することであった。

方法　119 人の日本人女子大学生を実験参加者にして、71 人を介入群に、48 人を統制群に、クラス単位で配置する準実験であった。

介入群の実験参加者は、1 週間の間、他者に自分自身が実行した親切行動を、毎日記録し、報告するように求められた。この手続きは、親切の数を数えさせる介入操作と、実際の親切行動の数の測定を意味する。統制群の実験参加者には、そのような働きかけがなかった。また、親切を数えるという介入の効果を調べるために、1 週間の介入期間の 1 か月前（ベースライン測定時）と 1 か月後（追跡測定時）に、日本版主観的幸福感尺度により主観的幸福感を測定した。さらに、1 週間の介入期間の翌日、介入群の実験参加者は、1 週間の介入期間の間に、親切を数えるという目標を達成した程度（「全く達成しなかった」1 点～「非常にたくさん達成した」5 点の 5 段階評定）と、他者などに自分が感謝した経験の程度（「全く経験しなかった」1 点～「非常にたくさん経験した」5 点の 5 段階評定）を測定された。

結果　介入の効果を検討するために、主観的幸福感に関して群要因（介入群と統制群）と時間要因（ベースライン測定時と追跡測定時）の 2 要因分散分析（2×2）を行った結果、群×時間の交互作用が有意（$F(1,117)=4.82, p<.05$）であった（図 8-1）。統制群では、ベースライン測定時と追跡測定時で主観的幸福感に違いはなかったが、介入群では、ベースライン測定時から追跡測定時にかけて主観的幸福感は有意（$p<.01$）に増加していた。また、追跡測定時点でのみ、介入群の方が統制群よりも、主観的幸福感は有意（$p<.05$）に高かった。このように、親切の数を単に数えるだけで幸福感が増加していた。

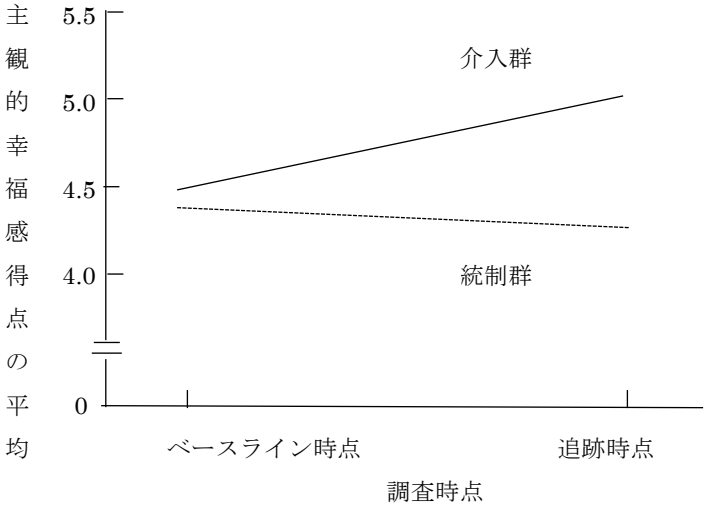

図 8-1　介入群と統制群におけるベースライン時点と追跡時点での主観的幸福感得点（Otake et al. (2006) の Figure 1 を一部修正）

表 8-7　介入群の増加大群と変化小群における親切行動、達成認知、感謝経験の平均（標準偏差）（Otake et al. (2006) の Table 3 を一部修正）

変数	増加大群			変化小群		t (69)	
実際の親切行動	3.38	(0.92)	＞	1.16	(0.57)	3.01	$p<.01$
達成認知の程度	3.61	(0.54)		3.32	(0.71)	*n.s.*	
感謝経験の程度	3.86	(0.67)	＞	2.01	(0.92)	2.84	$p<.01$

次に、介入群におけるベースライン測定時から追跡測定時にかけての主観的幸福感得点の変化量の平均＋1 標準偏差を分類基準に採り、介入群を増加大群（21 人）と変化小群（50 人）の 2 群に分類した。その結果、増加大群の方が、変化小群よりも、実際に実行した親切行動の数が有意に多く、感謝した経験も有意に多かった（表 8-7）。

以上のように、実行した親切を単に数えるだけで、幸福感は高まり、そして幸福感が高まると、

親切を実行したり、感謝したりすることが多くなることが分かった。

(3) まとめ

Otake et al.（2006）の研究の最も重要な知見は、親切と幸福感との間に密接な関係が存在することを実証した点である。すなわち、研究 1 から、幸福な人は、より幸福な記憶をもち、より多く親切行動をとることが、研究 2 から、1 週間の間、自分が実行した親切な行為を数えるだけで、人はより幸福になり、親切行動をより多く実行し、より感謝するようになることが解明された。Otake et al.（2006）の示唆によると、幸福な人は、第一により親切であり、また、簡単な介入があれば、さらに幸福になり、さらに親切になり、さらに感謝するようになる。したがって、親切と幸福感の間に互恵的な関係が存在する可能性が大きい。

2. 親切行動と感謝行動に関する介入の効果：北村（2012）の研究

他者に対する親切行動と、他者からの親切に対する感謝行動に焦点を当てた北村（2012）は、親切行動への介入が親切行動を実行する人を増加させ、感謝行動への介入が親切行動への動機づけを高めることを実証した。

目的　親切行動を心がけさせる、あるいは感謝の表明を心がけさせる 1 週間の介入が、1 か月後の主観的幸福感や親切行動への動機づけや親切行動の実行を高めるかどうかを検討することが目的であった。

方法　実験計画は、介入要因（親切群、感謝群、統制群）と測定時期要因（介入前、介入後）の 2 要因計画であった。82 人の女子短大生を実験参加者とし、18 人を感謝群、35 人を親切群、29 人を統制群に無作為配置した。親切群には、自分の周りの人が喜ぶことをすること（親切行動）を、感謝群には、誰かから親切にされたときに、「ありがとう」と相手に伝えること（感謝行動）を、1 週間継続して 1 日 1 回以上実施するように求めた。統制群には、何も働きかけをしなかった。

1 週間の介入期間前とその 1 か月後の 2 回にわたり、島井他（2004）の日本版主観的幸福感尺度を使用して主観的幸福感を、また、Otake et al.（2006）の親切尺度の中の動機づけ項目と行動項目を使用して親切の動機づけと行動を測定した。

1 週間の介入期間中に、親切群には親切行動の 1 日の実行回数を、感謝群には感謝行動の 1 日の実行回数を毎日報告させた。加えて、親切群には、1 日の中で自分の親切行動に相手が最も喜んだときの相手の反応について、感謝群には、1 日の中で相手の親切に自分が最も喜んだときの自分の反応について、嬉しかった程度を 5 段階（「全く嬉しくなかった」1 点～「とても嬉しかった」5 点）で評定させた。

介入期間終了直後に、周りからしてもらって嬉しかった・感謝した経験を 5 段階（「全くなかった」1 点～「とてもたくさんあった」5 点）で評定させた。

結果　介入の効果を検討するために、親切行動の動機づけ得点に関する 2 要因分散分析（3×2）を行ったところ、交互作用が有意（$F(2,79)=3.27, p<.05$）であり、次に、介入条件ごとに測定時期要

因の単純主効果の検定を行ったところ、介入前に比べて介入後に、親切行動の動機づけは、感謝群では有意（p<.01）に高まったが、親切群と統制群では有意な変化が見られなかった（表 8-8）。また、介入前に比べて介入後に、親切行動の実行（前日に実行した親切行動）は、親切群では有意（二項検定：p<.01）に高まったが、感謝群と統制群では有意な変化が見られなかった（表 8-9）。そして、主観的幸福感は、いずれの介入条件でも、介入前後の変化が見られなかった。

表 8-8　親切行動の動機づけの介入前と後の変化（北村 (2012) の Table 1 を一部修正）

	親切群		感謝群		統制群	
介入前	5.89	(0.95)	5.61	(1.21)	6.03	(1.10)
介入後	5.86	(1.12)	6.28	(0.99)	5.90	(1.24)

表 8-9　親切行動が介入前と後で変化した人数（北村 (2012) の Table 2 を一部修正）

	親切群	感謝群	統制群
親切行動をしなくなった	0	2	2
親切行動をするようになった	10	5	6

介入期間中の 1 日当たりの、親切群の親切行動の出現数（M=2.77）よりも感謝群の感謝行動の出現数（M=4.67）の方が有意（t 検定：詳細不明）に多かった。また、介入期間中の嬉しかった経験の程度は、感謝群（M=4.59）の方が親切群（M=4.09）よりも有意（$F(1,51)=6.49$, p<.05）に高かった。

介入直後の嬉しかった・感謝した経験の群間差は、1 要因分散分析の結果、有意（$F(2,79)=9.93$, p<.01）であり、多重比較を行ったところ、親切群（M=4.29）と感謝群（M=4.61）の方が統制群（M=3.66）よりも有意（ps<.01）に多かった。

まとめ　1 週間の間、親切な行動をするように介入すると、実際に親切行動の実行が促進され、親切にされたときに感謝行動（感謝の表明）をするように介入すると、親切な行動をしたいという動機づけが高まることが実験的に証明された。

親切行動を実行することによって、嬉しさや感謝の気持ちを経験するという Otake et al.（2006）の研究結果と、感謝を表明する行動によって、他者に親切にしたいという動機づけが高まるという自身の研究結果から、親切行動と感謝行動の間の双方向の影響が確認された、と北村（2012）は考察している。

3. 傍観者の存在が親切行動の生起に及ぼす効果：原田・松見（2007）の研究

知っている人が見ている場合の方が、見ていない場合よりも、親切行動が生じやすいと仮定した原田・松見（2007）は、予想と逆の結果を見出した。

目的　学校場面における親切行動に関して、原田・松見（2007）は、傍観者としての既知者の存在の有無が中学生の親切行動の生起に及ぼす影響を検討した。この研究における親切行動は、向社

会的行動に属する「日常生活における親切、奉仕活動、手助けといった行動」であり、具体的には、「落ちている黒板消しを拾って、黒板の桟上に戻す行動」であった。したがって、困窮している特定の他者に対する親切行動ではなく、教室を使用する多数の他者に対する親切行動である点が、典型的な親切行動と異なる。

方法　実験参加者は 44 人の男子中学生であった。実験計画は、1 要因 2 水準の独立変数（既知の指導者の存在の有無）を操作する実験参加者内要因計画であり、従属変数は親切行動を実行した生徒の人数であった。

結果と考察　黒板消しが落ちていることに気づいた参加者の人数（分母）に対する親切行動を実行した参加者の人数（分子）を親切行動の実行割合とした場合、親切行動の実行割合は、既知者の存在なし条件では 48%であったが、既知者の存在あり条件では 16%であった。また、既知者の存在なし条件でのみ親切行動を実行した参加者の人数（10 人）の方が、既知者の存在あり条件でのみ親切行動を実行した参加者の人数（0 人）よりも有意（二項検定：z=3.42, p<.01）に多かった。この結果は予想と反する結果である、と原田・松見（2007）は考察している。

4. 社会的迷惑行為の抑止に及ぼす親切行動の効果：油尾・吉田（2013）の研究

社会的迷惑行為とは、“行為者が自己の欲求充足を第一に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させる行為”（油尾・吉田, 2013, p.1）である。この研究では、迷惑を被る側が迷惑行為者に対して親切をすると、互恵規範が顕在化した迷惑行為者は迷惑行為を減少させることを見出した。

目的　社会的迷惑行為の抑止方法には禁止や制裁が取られることが多いが、油尾・吉田（2013）は、報酬による迷惑行為の抑止を検討した。彼らは、迷惑行為者に対して、迷惑を受ける迷惑認知者が好意の提供（親切な行動）を行うことが、迷惑行為者側に好意のお返しをしなければならないという互恵規範を喚起し、そのことにより社会的迷惑行為が抑制されると予測した。

方法　実験計画は、好意提供あり条件と好意提供なし条件の 1 要因 2 水準の実験参加者間計画であった。実験参加者は、大学生 153 人（男性 75 人、女性 78 人）であり、同性の 3 人が 1 組となり実験に参加し、好意提供あり条件と好意提供なし条件のどちらかに割り当てられた。3 人のうちの 2 人が迷惑行為を行う友人ペア（迷惑行為者ペア）、このペアと面識のない 1 人が迷惑認知者であった。1 回目の 5 分間のパズル課題で、集中して 1 人で課題に取り組んでいる迷惑認知者の近くで、2 名の友人ペアが大声で相談して課題に取り組む行動（迷惑行為の操作）をとった。1 回目の課題終了後に、ベースラインとなる迷惑行為者の迷惑抑制意図と迷惑認知者の迷惑認知を測定した。そして、休憩中に、迷惑認知者は、迷惑行為者に対して飲み物の提供（好意の提供＝親切な行動の操作）をし、迷惑行為について婉曲的に忠告した。休憩後、2 回目のパズル課題を行い、課題終了後に質問紙によって、再度迷惑行為者の迷惑抑制意図と迷惑認知者の迷惑認知を測定し、加えて、迷惑行為者の互恵性規範を測定した。なお、1 回目と 2 回目のパズル課題に回答中に、騒音計によって、迷惑行為者の声の大きさ（迷惑行動）を測定した。

迷惑行為者の迷惑抑制意図は、「声の大きさに注意した」、「気遣いながら取り組んだ」の 2 項目を「全くあてはまらない」（1 点）～「よくあてはまる」（6 点）の 6 件法で、また、迷惑認知者の迷惑認知は「声の大きさが気になった」、「話し声にいらいらすることがあった」、「話で集中力が切れることがあった」の 3 項目を同様の 6 件法で測定した。互恵性規範は、「親切にしたいと思った」、「恩を感じた」、「お返しをしたいと思った」の 3 項目を 6 件法で測定した。

結果　社会的迷惑行為の 3 種類の測度（迷惑行為、迷惑抑制意図、迷惑認知）の変化量に関して、好意提供あり条件と好意提供なし条件の間で比較したが、いずれの変化量に関しても有意差は見られず、好意の提供が社会的迷惑行為の抑止に及ぼす効果を見出すことに失敗した。

しかし、好意提供あり条件で互恵性規範の喚起度が高かった者は、迷惑抑制意図が高まるであろうと予想し、追加分析を行った。互恵性規範得点の平均値を基準として実験参加者を、好意提供あり・互恵性規範高群（N=28）、好意提供あり・互恵性規範低群（N=22）、好意提供なし群（N=52）の 3 群に分類した。そして、迷惑行為抑制意図の変化量を 3 群間で比較したところ、3 群間に有意差（$F(2,99)=5.62$, $p<.01$）が認められ、多重比較の結果、予想通り、好意提供あり・互恵性規範高群（M=1.43）の方が、好意提供あり・互恵性規範低群（M=0.18）や好意提供なし群（M=0.57）よりも、迷惑抑制意図の増加は有意（$p<.05$）に大きいことを見出した。

まとめとコメント　この研究は、研究の主旨から判断すると、親切に関する研究ではなく、吉田・斎藤・北折（2009）に代表される社会的迷惑行為の研究である。この研究では、好意の提供が親切な行動と同義に捉えられており、好意の提供は、具体的には飲み物の提供である。親切の典型は、困っている他者に対する手助け・贈与であるので、困っていない他者に対する飲み物の贈与は、非典型的な親切であるといえる。親切それ自体の研究でもなく、典型的な親切を扱っているわけでもないが、親切が社会的迷惑行為の抑止に役立つ可能性を証明した点と、そこには互恵性規範が重要な関わりをもつことを解明した点は興味深い。

5. 親切さの判断に及ぼす行為者の意図と他者の利益の影響：二宮（1982）の研究

保育園年中児、小学校 1 年生、3 年生を対象とした二宮（1982）は、親切さの判断に及ぼす行為者の意図（意図的、偶発的）の次元と他者の利益（利益大、利益小）の次元の影響を検討した。その結果、年齢が上がるにつれて、意図的行為の方をより親切であると判断するようになることを見出した。また、「親切さ」の判断には、①「親切さ」を判断する際に、行為の結果にのみ注目し、行為者の意図を考慮に入れていない「段階 1」、②「親切さ」の判断をする際に行為者の意図が関係しているが、まだ行為の結果の方が重要であると考えている「段階 2」、③「親切さ」の判断に行為者の意図が関係しており、行為の結果より重要であるが、まだ行為の結果も関係していると考えている「段階 3」、④「親切さ」の判断に際し、行為者の意図のみを考慮し判断している「段階 4」、の 4 段階があることを指摘した。

二宮（1982）の研究は、学会の大会発表論文集に掲載されたものであり、研究の詳細については知ることができないが、ピアジェ流の道徳判断の発達に関する研究の流れを汲む研究であることは

確かであろう。

第 4 節　定義の明確な欧米的親切を付随的に扱う実証的研究

ここでは、親切を主テーマにする研究ではないが、定義の明確な欧米的親切を扱っている研究として 3 件の研究を紹介する

1. 生き方の原則（長所・人徳）としての親切

大竹他（2005）の研究　Peterson & Seligman（2004）が開発した、人間の特性としての長所に関する尺度（Values in Action Inventory of Strengths: VIA-IS）は、生き方の原則調査票と呼ぶにふさわしい内容である。この尺度では、生き方の原則は、①知恵と知識、②勇気、③人間性と愛、④正義、⑤節度、⑥超越性の 6 領域に分類され、各領域は 3 つから 5 つの合計 24 の長所から構成され、さらに各長所は 10 項目から構成される。3 番目の領域「人間性と愛」の中に、「愛する力・愛される力」、「親切（kindness)」、「社会的知能」という 3 つの長所が含まれる。大学生男女 778 人を対象とした大竹他（2005）は、生き方の原則調査票の日本語版の作成を試み、240 項目の日本語版の妥当性と信頼性を検討した。親切という長所は、「私は、この 1 か月以内に、隣人を自発的に助けたことがある」、「私は、ほかの人の幸運を自分のことのようにうれしく感じる」などの 10 項目により、5 件法（全くあてはまらない～とてもよくあてはまる）で測定された。

Shimai et al.（2006）の研究　この生き方の原則調査票を用いた Shimai et al.（2006）は、若年成人（日本人 308 人、アメリカ人 1099 人）を対象とする調査を実施し、日米間の比較を試みた。平均値の差が日米間に見られたため、順位の平均値を求めたところ、日本では、①感謝、②親切、③平等・公平、④愛する力、・愛される力、⑤希望・楽観性が上位に挙がり、アメリカでは、①親切、②愛する力、愛される力、③ユーモア・遊戯心、④勤勉、⑤感謝が上位に挙がった。日米ともに、親切という長所は、第一位あるいは第二位に高く自己評価される長所であることが実証された。なお、親切などの対人的な特性は、男性よりも女性の方でより高く自己評価されることも示された。

2. 自己への親切（自分への優しさ）

有光（2014）の研究　セルフ・コンパッション尺度日本語版（the Japanese version of the Self-Compassion Scale）の作成を目指した有光（2014）は、“苦痛や心配を経験したときに、自分自身に対して思いやりの気持ちを持ち、否定的経験を人間として共通のものとして認識し、苦痛に満ちた考えや感情をバランスがとれた状態にしておくこと”（p.51）という Neff（2003b）のセルフ・コンパッションの定義を採用している。大学生男女 366 人を調査対象とした有光（2014）は、6 因子 26

項目から成る Neff（2003b）のセルフ・コンパッション尺度の邦訳を用いて、6 因子モデルの適合度が最も高いことを見出した。第 1 因子は、「自分へのやさしさ」因子であった。有光（2014）の「自分への優しさ」因子は、Neff（2003b）の「self-kindness」因子であり、「kindness」を「優しさ」と捉えている。「self-kindness」は、セルフ・コンパッションの中核を形成する因子であり、次の 5 項目から成る。①感情的な苦痛を感じているときに、自分自身に優しくする。②苦労を経験しているとき、必要とする程度に自分自身をいたわり、優しくする。③苦しみを経験しているとき、自分自身に優しくする。④自分自身の欠点と不十分なところについては、優しい目で見るようにしている。⑤自分のパーソナリティの好きでないところについては理解し、優しい目で見るようにしている。

第 5 節　定義の不明確な親切を付随的に扱う実証的研究

ここでは、親切を主テーマあるいはキーワードとする研究ではないが、部分的に親切に言及している研究の中から 11 件の研究を紹介する。多様な研究領域で、非組織的・非体系的に親切が取り上げられていることが窺える。

1. 性格としての親切

(1) 性格特性としての親切さ

村上（2003）の研究　性格の基本的次元が、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性の 5 次元から成るという仮説がビッグ・ファイブである（Goldberg, 1990）。語彙アプローチによって日本語におけるビッグ・ファイブを導くことをねらった村上（2003）は、村上（2002）の基本的な性格表現用語から 554 語を選択し、大学生男女 370 人に 2 件法で回答させた。

分析 1 では、最終的に性格表現用語を絞り込み、317 語を分析対象として因子分析を行い、ビッグ・ファイブに対応する 5 因子解を得た。分析 2 では、各因子 20 項目を抽出して因子分析を行い、100 語でビッグ・ファイブ構造を確認した。5 つの因子ごとに側面因子（下位因子）を求めた結果、勤勉性因子は、親切さ、ねばり強さ、従順さという 3 つの側面因子から構成されることを見出した。親切さ因子に属する性格表現用語には、「親切な、優しい、誠実な、温かい、善意がある、人情がある、良心的な、情け深い」が認められた。

(2) 出生順位と性別に起因する性格としての親切

依田・深津（1963）の研究　依田・深津（1963）は、2 人きょうだいの親子 145 組を調査対象に、子どもの出生順位と性格の関係を検討した。調査対象者は、小学校 4 年生～中学校 2 年生の児童生徒とその母親であり、①2 人きょうだいであること、②両親が健在で一緒に住んでいること、③きょうだいが幼稚園～高校に在園在学していること、の 3 条件を満たす児童生徒が 5 学年から 145 人

とその母親が 145 人抽出された。

妥当性の認められた 37 項目の性格特性のうち、親子の反応から、次子よりも長子の方によく当てはまる性格を長子的性格、逆に、長子よりも次子の方によく当てはまる性格特性を次子的性格としたところ、8 つの長子的性格特性のうちの 1 つが「親切」であった（$\chi^2(1)=5.69, p<.05$）。また、女子よりも男子の方によく当てはまる性格特性を男子的性格、逆に、男子よりも女子の方によく当てはまる性格特性を女子的性格としたところ、14 の女子的性格特性のうちの 1 つが「親切」であった（$\chi^2(1)=6.18, p<.05$）。さらに、同性のみで構成されているきょうだいを選び出して、同様の分析を行ったところ、やはり長子的性格の 1 つに「親切」が見られた。

2. 向社会的行動や援助行動としての小さな親切行動

(1) 向社会的行動の一類型としての小さな親切行動

高木（1982）の研究　大学生男女 69 人を調査対象として向社会的行動を収集した高木（1982）は、得られた向社会的行動を 22 種類に整理した。そして、大学生男女 64 人を調査対象者として 22 種類の向社会的行動の距離得点に関するクラスター分析を行い、7 つのクラスターを抽出した。これらのクラスターのうちの第 7 クラスターは、負担を伴わないちょっとした親切心からの援助行動を含んでいることから、「小さな親切行動」と命名された。「小さな親切行動」には、①道に迷っている人に道順を教える、②カサをさしかけたり、貸したりする、③小銭のない人に両替をしてあげる、④自動販売機や器具の使い方を教えてあげる、⑤カメラのシャッター押しを頼まれればする、の 5 項目が含まれていた。

高木（1987a）の研究　10 代～60 代の男女 196 人を調査対象として向社会的行動を収集した高木（1987a）は、得られた向社会的行動を 41 種類に整理した。そして、大学生男女 400 人を調査対象として 41 種類の向社会的行動の類似性得点に関するクラスター分析を行い、9 つのクラスターを抽出した。これらのクラスターのうちの第 6 クラスターは、ほとんど負担を伴わない援助要請に応諾する行動を含んでいることから、「小さな親切行動」と命名された。「小さな親切行動」には、①小銭のない人に両替をしてあげる、②隣の人の荷物・順番を見ていてあげる、③カメラのシャッター押しを頼まれて写真をとってあげる、④機械の使い方を知らない人に使い方を教えてあげる、の 4 項目が含まれていた。なお、高木（1982, 1987a）は、向社会的行動を順社会的行動と表現している。

菊池（1988）の研究　大学生 161 人を調査対象に 60 種類の思いやり行動の実行の程度を調べた菊池（1988）は、思いやり行動をたくさんしている学生（上位群）とあまりしていない学生（下位群）とで実行の程度に違いがある 20 項目の思いやり行動を選び出した。菊池（1988）は、これらの 20 項目から構成される尺度を向社会的行動尺度（大学生版）と名づけたが、「思いやり行動尺度」と呼んでもよいと述べている。そして、生命の危険にさらされるような深刻な行動が含まれていないことから、「小さな親切尺度」に相当すると考えている。これらの項目には、例えば、①列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる、②お店で、渡されたおつりが多かったとき、注意してあげる、③ころんだ子どもを起こしてやる、④あまり親しくない友人にもノートを貸す、⑤気持ちの悪

くなった友人を、保健室などに連れて行く、などが見られる。

(2) 援助行動の一類型としての小さな親切行動

原田（1990）の研究　援助行動型の特徴を解明しようとした原田（1990）は、援助行動型と援助動機の関係、および援助行動型と性格特性との関係を検討した。大学生男女 83 人を対象とした予備調査では、38 種類の援助行動を 7 つの援助行動型に分類した。また、38 種類の援助行動を行う動機を自由記述させ、18 種類の動機を得た。7 つの援助行動型のうちの 1 つが「小さな親切行動型」であり、この型を代表する援助行動としては、「落し物や忘れ物を届ける」、「棚の荷物を取ってあげる」、「荷物をもってあげる」が見られた。

大学生男女 175 人を調査対象とする本調査では、援助行動（7 行動型 20 項目）、援助動機（6 因子 18 項目）、性格特性（12 特性 60 項目）を測定した。その結果、「小さな親切型」の援助に対して、「合理的でない援助効用の予期」動機（「その人が喜んでくれるから」、「いつもお世話になっているから」）が促進的に関連し、「共感性」という性格特性が促進的に影響し、女性の場合に「抑うつ性」という性格特性が抑制的に影響することが見出された。

3. 取り入りの下位方略としての親切な行為

(1) 上司に対する部下の取り入りとしての親切な行為

有倉（1998）の研究　自己呈示方略を整理した Jones & Pittman（1983）によると、取り入り（ingratiation）は、相手からの好意的な印象を獲得する目的で使用される自己呈示方略（真意と異なる自己表現）の 1 つである。上司に対する部下の取り入りの規定因を検討した有倉（1998）は、取り入りの下位方略として、他者高揚、意見同調、自己卑下、親切な行為という 4 つを想定した。

企業就業者を対象とする調査から 222 人分の有効データが得られた。取り入りの規定因に相当する変数として、取り入る側の要因である取り入りの目標（個人・私的目標、組織・公的目標）、取り入りの対象の要因である上司のリーダーシップ・スタイルの認知（目標達成機能、集団維持機能）、両者を取り巻く状況の要因である組織の雰囲気の認知（組織の形式性と変革性、集団凝集性）を測定した。取り入り尺度のうち、親切な行為の下位尺度は、①上司が援助を求めようとしているとき、その上司に力を貸そうと申し出る、②たとえ関心がなくても、上司の個人的な話を聞いてあげる、③たとえ自分に関係のないことでも、上司の仕事に力を貸そうと申し出る、の 3 項目から成っていた。

相関分析の結果、親切な行為と、取り入る側の個人・私的目標（r=.40）、組織・公的目標（r=.33）、取り入る上司の集団維持機能（r=.17）、組織の形式性（r=.16）、変革性（r=.21）との間に、いずれも有意な正の相関関係が見出された。しかし、得られた相関係数の値は総じて小さく、親切な行為に対して顕著な影響を及ぼす要因は見いだせなかったと解釈できる。

有倉（2013）の研究　有倉（2013）は、取り入り方略を自発的方略と反応的方略に大別し、さらに自発的方略を他者高揚方略と親切な行為方略に、反応的方略を意見同調方略と自己卑下方略に細

分している。社会人 130 人を対象とするシナリオ実験のデータを利用して、部下の個人目標と上司のリーダーシップが部下の上司への取り入り行動の生起に及ぼす影響過程を共分散構造分析により検討した。その結果、親切な行為に関しては、①部下の個人的目標が取り入りの誘因価を増加させ（$\beta = .43$）、さらに誘因価の増加が親切な行為を増加させる（$\beta = .25$）という影響関係と、②上司のリーダーシップ M 機能の増加が自発的方略の主観的成功確率を増加させ（$\beta = .19$）、さらに主観的成功確率の増加が親切な行為を増加させる（$\beta = .33$）という影響関係が明らかとなった。

深田・田坂（2017）の研究　5 種類の取り入り方略と 4 種類の取り入り対象を用いて、アルバイト先の職場での高地位者に対する女子大学生の取り入り行動の実態を解明することを目的とした深田・田坂（2017）は、質問紙調査によって、定期的なアルバイト経験をもつ 106 人の女子大学生から有効回答を得た。高地位者全体に対する女子大学生の取り入り行動は、同調方略が最も多く、親切な行為方略と他者高揚方略が次に多く、自己高揚方略と自己卑下方略が最も少なかった。取り入り方略の使用度は、取り入り対象によって微妙に異なっていた。取り入り対象に直接働きかける直接的方略の方が、自己に言及することで取り入り対象に間接的に働きかける間接的方略よりも、使用度が高いと解釈された。

(2) 組織場面での取り入り戦略としての親切な行為に対する認知

松本（2003）の研究　大学生を対象とした松本（2003）は、組織場面での取り入り戦略として、同調戦略、自己高揚戦略、他者高揚戦略、親切な行為戦略、自己卑下戦略の 5 つの戦略を使用し、取り入り行動の知覚における個人差を検討している。大学生男女 208 人を調査対象とし、上司に良い印象を与えようと部下が行動する場面を 5 場面（5 種類の取り入り戦略場面）設定し、部下に対する認知を 20 項目の特性形容詞尺度（個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、活動的強さの 3 次元構造をもつ尺度）によって測定した。

その結果、親切な行為戦略は、社会的望ましさ次元において高い信頼性をもつ戦略であると認知されたが、個人的親しみやすさと活動的強さの次元においては特に顕著な特徴をもたない戦略であると認知された。なお、親切な行為戦略場面では、「上司が人間関係で問題を抱えているときに、飲みに誘われました。そこで私は、本当は聞きたくなかったのですが、上司の愚痴に何時間も付き合いました。」などの 5 項目を用いて設定された。

4. 表情の与える印象としての親切

井上（2014）の研究　井上（2014）は、表情が初対面の相手に与える印象を実験的に検討した。表情の操作は、実験参加者と面識のない同一人物（女子大生）の 4 種類の顔写真によって行われた。顔写真は、微笑み顔（口を開けない笑い）、笑い顔（口を開けての笑い）、真顔（まじめな顔）、しかめ顔（眉間にしわを寄せた顔）の 4 種類であった。大学生男女 100 人、社会人男女 90 人に対して、4 種類の顔写真を順番に提示し、印象を測定した。写真の提示順序は無作為であり、印象測定には、好ましい印象を表す形容詞 8 項目（「親切な」を含む）を使用し、5 段階で回答を求めた。

その結果、「微笑み顔」と「笑い顔」という笑顔が好印象を与え、「しかめ顔」が悪印象を与えることが分かった。項目別の分析から、「微笑み顔」と「笑い顔」条件では、「親切な」、「親しみやすい」、「明るい」の項目で得点が高く、逆に、「しかめ顔」条件では、同じ 3 項目で得点が低かった。すなわち、笑顔の人物からは、親切な、親しみやすい、明るい印象を受け、しかめ顔の人物からは、不親切な、親しみづらい、暗い印象を受けることが示された。

第 6 節　まとめ

わが国における親切に関する心理学的研究を総覧した結果、親切という概念定義がなされていないまま実行されていること、本格的な親切研究は少なく、組織的な研究の展開には程遠いことが改めて確認された。

わが国の親切の心理学的研究で得られた成果をまとめると、以下のようになる。1)～5)が親切を主テーマとする研究、6）～10）が親切を付随的に扱う研究である。

1）親切に関する非実証的研究には、①哲学的・倫理学的な日本的親切論を基に、親切の心理学的研究の展開を提案した研究（深田, 2015a）、②親切現象を心理学的に理解するための多次元的視点と時系列的視点を提案した研究（深田, 2016）、③日本における親切の辞義的研究（深田・岡竹, 2015）および欧米における親切の辞義的研究（深田, 2015b）、④欧米における親切の研究の動向を紹介した研究（深田, 2015b）がある。

2）親切の測定的研究としては、①親切の意味的構造が「温かい好意」、「思いやりのある配慮」、「善意の世話好き」の 3 因子構造であることを実証した研究（深田・岡竹, 2015a）、②未知の他人に対する親切の行動的構造が「緊急対応的親切」、「世話好き的親切」、「分与・貸与的親切」、「応答的親切」の 4 因子構造で、友人・知人に対する親切の行動的構造が「緊急対応的親切」と「日常対応的親切」の 2 因子構造であることを実証した研究（深田・岡竹, 2015b）、③未知の他人に対する不親切の動機的構造が「責任の分散と消極的態度」、「合理的判断に基づく責任回避」、「対象者の好ましくない特徴」の 3 因子構造をもつことを実証した研究（深田・谷川, 2016）がある。

3）親切行動に及ぼす行為者の特性の影響に関して、未知の他者に対するふれ合い恐怖心性（特に、会食不安・雑談不安）は親切行動（特に、世話好き的親切行動）を減少させること実証した研究（深田他, 2017c）と、未知の他者に対するコミュニケーション不安（特に、一対一状況でのコミュニケーション不安）は親切行動を減少させることを実証した研究（深田他, 2017d）がある。

4）親切への介入研究として、①幸福な人は親切な行動をとり、実行した親切を数えさせるだけで幸福になるという親切と幸福の互恵的関係を証明した研究（Otake et al., 2006）、②親切行動をするように介入すると親切行動が促進され、感謝行動をするように介入すると、親切行動をしたいという動機づけが高まることを証明した研究（北村, 2012）がある。

5）このほかに、親切の実証的研究には、①親切行動が社会的迷惑の抑止に効果があることを実証

した研究（由尾・吉田, 2013）、②既知の傍観者の存在が親切行動の生起に及ぼす効果を検討した研究（原田・松見, 2007）、③行為者の意図と他者の利益が親切さの判断に及ぼす影響を検討した研究（二宮, 1982）がある。

6）生き方の原則（長所・人徳）としての親切の価値を見出した研究として、①生き方の原則調査票の日本語版を作成し、6 つの領域の中の「人間性と愛」領域を構成する 3 つの下位領域の 1 つに「親切」があることを確認した研究（大竹他, 2005）、②生き方の原則の中で「親切」が日本では第 2 位に、アメリカでは第 1 位に評価されていることを解明した研究（Shimai et al., 2006）がある。

7）個人特性としての親切を取り上げた研究には、①セルフ・コンパッションを構成する 6 因子のうちの第 I 因子が自己への優しさ（自己への親切 : self-kindness）であると報告した研究（有光, 2014）、②性格の基本次元を 5 次元で捉えるビッグ・ファイブの 1 つである「勤勉性」を構成する 3 つの下位因子の 1 つが「親切」であると報告した研究（村上, 2003）、②出生順位と性別の観点から、8 つの長子的性格のうちの 1 つが「親切」であり、14 の女子的性格のうちの 1 つが「親切」であると報告した研究（依田・深津, 1963）がる。

8）向社会的行動や援助行動の一類型としての小さな親切行動としては、向社会的行動のクラスター分析から、7 つのクラスターのうちの 1 つが「小さな親切行動」であると報告した研究（高木, 1982）、同様に、9 つのクラスターのうちの 1 つが「小さな親切行動」であると報告した研究（高木, 1987a）、「小さな親切尺度」に相当する向社会的行動尺度を作成した研究（菊池, 1988）、7 つの援助行動型のうちの 1 つが「小さな援助行動型」であると報告した研究（原田, 1990）がある。

9）取り入り方略の一方略としての親切な行為に関しては、取り入りの 4 つの下位方略の 1 つが「親切な行為」であるとみなした研究（深田・田坂, 2017; 有倉, 1988, 2013）、5 つの下位方略のうちの 1 つが「親切な行為」であると見なした研究（松本, 2003）がある。

10）笑顔は「親切な印象」を与えるが、しかめ顔は「不親切な印象」を与える（井上, 2014）。

第９章　欧米における親切の研究

本章では欧米における親切の研究を展望する。第 1 節の「欧米における親切研究の概観」では、まず「欧米の親切研究を理解するための基本用語」を整理し、次に「欧米の親切研究の分野とその特徴」を指摘する。本章の中核となる第 2 節の「欧米における親切の心理学的研究」では、実験的研究と調査的研究の中から、親切に関する 7 つの典型的なテーマについての心理学的研究を取り上げる。第 3 節の「欧米における親切の医学的研究」では、心身の健康に及ぼす親切の効果に関する最新の医学的研究の成果をハミルトン（2011）の著作から紹介する。

第１節　欧米における親切研究の概観

1. 欧米の親切研究を理解するための基本用語

(1) 親切に関連する重要概念

欧米の親切研究を理解するためには、「kindness」、「loving-kindness」、「loving-kindness meditation」、「self-kindness」、「killing with kindness」、「compassion」、「compassion meditation」、「self-compassion」、「mindfulness」、「mindfulness meditation」、「well-being」、「happiness」、「life satisfaction」、「positive emotion」、「negative emotion」、「positive affect」、「negative affect」、などの専門用語を整理しておく必要がある。これら 17 の専門用語のうち、ファンデンボス（2013a）の『APA 心理学大辞典』で見出し語として取り上げられている用語は 11 であり、表 9-1 に示した訳語と解説が付けられている。

(2) 親切、自分への優しさ、慈愛、慈愛瞑想、ありがた迷惑

「kindness」に関係する「kindness」、「loving-kindness」、「loving-kindness meditation」、「self-kindness」、「killing with kindness」の 5 つの用語のうち、『APA 心理学大辞典』で見出し語として取り上げられている用語は「kindness」の 1 語のみであり、欧米での親切研究が学界で十分に認知されていないことが窺える。『APA 心理学大辞典』では、「kindness」は、「親切」の訳語のもとに、他者に対する慈悲的・援助的行為としての行動が強調されている。こうした「kindness」の行動面の重視が、内面にとどまる「compassion」との最大の違いであろう。

「loving-kindness」や「loving-kindness meditation」は見出し語として取り上げられていない。「loving-kindness」は、もともと仏教に由来する仏の慈悲・慈愛を意味するが、拡張的にキリスト教を含む宗教全般での神の慈愛（Lerner, 2013）も意味する用語であるので、「慈愛」と訳すことにする。したがって、「loving-kindness meditation」は、「慈愛瞑想」という訳語を使用することになる。慈愛瞑想は、自分自身と他者に対して世話をする感情を伴う、自己の世話と対人的な絆の両方を強調する（Leppma, 2012）。

表 9-1　『APA 心理学大辞典』に見る「kindness」理解のための専門用語の訳語と解説
（ファンデンボス（2013a）　より構成）

用語（訳語）	解説
kindness（親切）	“他者に対する意図的な慈悲的、援助的行為。親切は、はっきりりとした報酬を獲得するためや、明らかな罰を避けるためではなく、他者を助けたいという欲求に動機づけられるものである。”（p.451）
loving-kindness	［見出し語になし］
loving-kindness meditation	［見出し語になし］
self-kindness	［見出し語になし］
killing with kindness	［見出し語になし］
compassion（同情）	“他者の悲哀や苦悩に対する強い共感。通常、その人を助けたいあるいは慰めたいという欲望が含まれている。”（p.644）
compassion meditation	［見出し語になし］
self-compassion	［見出し語になし］
mindfulness（マインドフルネス）	“個人の内的状態や周囲の状態に最大限覚醒していること。・・・この概念は、様々な治療的介入に適用されている。・・・思考、情動、「いま、ここ」での体験を、判断や反発なく受け入れることである。”（ｐ.841）
mindfulness meditation（マインドフルネス瞑想）	“思考、感情、感覚を生じるまま自由に経験する瞑想での一種。”（ｐ.841）
well-being（ウェル・ビーイング）	“幸福感や満足感があり、それほど大きな悩みもなく、身体的、精神的に健康で、生活の質も高い状態のこと。”（p.60）
happiness（幸福）	“情動のうち、喜び、うれしさ、満足、心身の良好な状態を指す。”（p.279）
life satisfaction（生活満足）	“人が自分の生活を豊かである、有意義である、満たされている、質が高いなどと判断する程度のこと。”（p.484）
positive emotion（ポジティブな感情）	“ゴールに達したときに嬉しさを感じる、危険を回避したときに安堵する、現状の地位や関係性に満足し幸福を感じる、などのポジティブな感情の表出。”（pp.829-830）
negative emotion（ネガティブな感情）	“否定的感情の表出のための、不快で時に破壊的な情動反応。ネガティブな感情は、個人の目標の到達に向けたものではない。例としては、怒り、嫉妬、悲しみ、恐怖などがある。”（p.691）
positive affect（肯定的感情）	“目標を達成したり、脅威を回避できたり、現状に満足している時などに生じる内的感情。”（p.272）
negative affect（不定的感情）	“目標を達成しそこなったり、恐怖を避けることができなかったりしたときや、現在の問題状況に満足できないときに生じる内的な感情状態”（p.748）

なお、「self-kindness」については、自分自身への優しさや思いやりという意味を明瞭にするため、「自己への親切」という訳語ではなく、「自分への優しさ」を訳語とする。

また、「killing with kindness」という用語を使用する研究も散見されるが（例えば、Frentz, 2014）、この用語については「ありがた迷惑」の訳語が適当であろう。

(3) コンパッション、セルフ・コンパッション

『APA 心理学大辞典』では、「compassion」は「同情」の訳語を充てられているが、単なる同情にとどまらず、共感や深い思いやりを意味する用語である。本書では「深い思いやり」が最も近い意味であると考えるが、コンパッションという原語のカタカナ表記を使用する。そのため、「compassion meditation」は「コンパッション瞑想」、「self-compassion」は「セルフ・コンパッション」と表記する。

「親切」では行動面が重視されるが、「コンパッション」では心理面が重視される点が決定的に異なる。また、「慈愛瞑想」では全ての人々に対する無条件の親切感情状態を目指すが、コンパッション瞑想では不幸に見舞われた人々に対する思いやりと共感、その苦しみを和らげたいという願いを重視すると、これらの瞑想を区別する研究者（Hofmann, Grossman, & Hinton, 2011）もいる。他方で、慈愛瞑想は、自己と他者に対する親切とコンパッションの感情を高めるための実践であり、自己と他者に対してポジティブな意図からのフレーズの繰り返しを含むと、慈愛が親切とコンパッションの感情から成ると考える研究者（Kearney, Malte, McManus, Martinez, Felleman, & Simpson, 2013）もいる。

こうした親切とコンパッションの関係に関連して、仏教における「慈悲喜捨（四無量心）」という 4 つの心の保ち方の観点から、有光（2014）は、「慈（loving-kindness）」とは、相手の幸福や健康や安楽を願う心であり、「悲（compassion）」とは、相手の苦しみや痛みが和らぐように願う心であると、仏教の見解を紹介している。

(4) マインドフルネス、マインドフルネス瞑想

『APA 心理学大辞典』では、「mindfulness」の訳語は「マインドフルネス」とカタカナ表記が使用され、「mindfulness meditation」は「マインドフルネス瞑想」の表記が使用されている。若干の違いは認められるものの、「慈愛瞑想」も「コンパッション瞑想」も、マインドフルネス瞑想の一形態と位置づけられる（Hofmann et al., 2011）。わが国では、2013 年に日本マインドフルネス学会が創設され、この領域の研究成果が蓄積されつつある。「マインドフルネス」は、“今、この瞬間の体験に意図的な意識を向け、評価をせずに、とらわれのない状態で、ただ観ること”と定義される（日本マインドフルネス学会, 2013）。“なお、「観る」は、見る、聞く、味わう、触れる、さらにそれらによって生じる心のはたらきをも観る、という意味である。”との補足説明が加えられている。

(5) ウェル・ビーイング、幸福感、生活満足感、ポジティブ情緒、ネガティブ情緒、ポジティブ感情、ネガティブ感情

ところで、『APA 心理学大辞典』では、「well-being」、「happiness」、「life satisfaction」、「positive emotion」、「negative emotion」、「positive affect」、「negative affect」は、それぞれ「ウェル・ビーイング」、「幸福」、「生活満足」、「ポジティブな感情」、「ネガティブな感情」、「肯定的感情」、「否定的感情」という訳語が充てられている。

「happiness」と「life satisfaction」は、共に主観的感覚あるいは主観的感情としての「幸福感・幸福度」と「生活満足感・生活満足度」を意味する用語であるので、「幸福感」と「生活満足感」の訳語を充てる。

「positive emotion」は「positive affect」と、「negative emotion」は「negative affect」とよく類似しているが、その感情の強度と表出レベルにおいて区別できるものの、訳語にそうした違いが反映されていない。したがって、本書では、「positive emotion」、「negative emotion」、「positive affect」、「negative affect」に対して「ポジティブ情緒」、「ネガティブ情緒」、「ポジティブ感情」、「ネガティブ感情」の訳語を充てる。

「ウェル・ビーイング」は、身体的・精神的・社会的に良好な状態および満足できる生活状態を意味し、「幸福感」や「生活満足感」を包括する広い概念であり、「ポジティブ情緒」や「ポジティブ感情」に支えられている。

2. 欧米の親切研究の分野とその特徴

(1) 親切研究の分野

これまで見てきたように、欧米の親切概念（カインドネス）は、日本の親切概念よりも広いため、親切研究が行われている分野は多岐にわたる。データベース「Academic Search Complete」を使用して、親切（カインドネス）という用語を論文題目に含む研究論文を検索し、2 ページ以下の論文および論文掲載雑誌の性格が不明瞭な論文を削除した結果、100 件の研究が得られた。この 100 件の研究のうち 30 件が心理学分野の研究であった。

心理学分野以外の研究は、教育学、社会学、法学などの社会科学分野、倫理学、歴史学、宗教学などの人文科学分野、医学、看護学、健康科学などの自然科学分野と、あらゆる研究分野に及ぶ。親切研究は、心理学分野以外では、教育学（7 件）、宗教学（7 件）、医学（6 件）、健康科学（6 件）の分野で比較的多くみられる。心理学分野以外の分野における親切研究の論文内容の例と掲載雑誌名を表 9-2 に示す。ただし、専門分野の判断は決して正確なものではないことをお断りしておく。

(2) 心理学分野の親切研究の概要

欧米における親切の心理学的研究の中で、ある程度まとまった数の研究が見られるのは慈愛あるいは慈愛瞑想のテーマ（10 件）のみである。そのほかのテーマについては、親切への介入研究（5 件）が目につく以外は、特定のテーマごとに 1～2 件の研究が実施されているにすぎない。

(a)親切をする側に焦点化した研究　親切をする側に焦点化した研究としては、親切な行為への介入が大学生のウェル・ビーイングに及ぼす影響（Lyubomirsky, Tkach, & Sheldon, 2004）、親切と新奇な行為への介入が成人（青年を含む）の生活満足感に及ぼす影響（Buchanan & Bardi, 2010）、感謝と親切への介入が成人クライエントのウェル・ビーイングに及ぼす影響（Kerr, O'Donovan, & Pepping, 2015）、親切への介入が児童のウェル・ビーイングと仲間からの受容に及ぼす影響（Layous, Nelson, Oberle, Schonert-Reichl, & Lyubomirsky, 2012）、就学前児の向社会的行動と自己制御スキルに及ぼす親切カリキュラムの介入効果（Flook, Goldberg, Pinger, & Davidson, 2015）を検討した研究が存在する。

表 9-2　心理学分野以外の専門分野における親切研究の例

分野		論文内容例（著者名、出版年）	掲載雑誌例
社会科学	教育学	親切の賞賛（Strike, 2000）	道徳教育研究（Journal of Moral Education）
	社会学	車椅子の使用と公共の場での親切（Cahill & Eggleston, 1995）	季刊社会学（The Sociological Quarterly）
	法学	法律で親切は作れない（van Zyl Smit, Snacken, & Hayes, 2014）	刑罰と社会（Punishment & Society）
人文科学	倫理学	国際的援助としての親切の範囲（Cullity, 1994）	倫理学（Ethics）
	歴史学	19 世紀海軍が受けた親切へのお返し（Fletcher, 2010）	イギリス歴史展望（English Historical Review）
	宗教学	慈愛瞑想に関するフィールド研究（Alba, 2013）	現代仏教学（Contemporary Buddhism）
自然科学	医学	慈愛瞑想者の染色体テロメアは長い（Hoge, Chen, Orr et al., 2013）	脳と行動と免疫（Brain, Behavior & Immunity）
	看護学	薬物乱用のホームレス女性への親切（Cramer, 1995）	看護（Nursing）
	健康科学	見知らぬ他者の親切としての臓器提供（Steinberg, 2003）	健康問題（Health Affairs）

そして、青年・成人・壮年を対象に発達段階に応じた親切尺度の作成を試みた研究（Comunian, 1998）、サービス業における顧客に対する被雇用者の善意（親切）の抑圧が顧客の満足感を低下させることを見出した研究（Yagil, 2015）、動物を世話することを子どもに教えることが人間への共感を生むかを論じた人道教育研究（Ascione, 1997）、親切と虐待という視点から動物虐待と人間虐待の原因や解決の類似性と、人間と動物の福祉政策に言及した研究（Ascione & Shapiro, 2009）も見られる。

(b) 親切をされる側に焦点化した研究　他方、親切をされる側に焦点化した研究としては、自己への他者からの親切の熟考が自己の情緒や寛大さに及ぼす影響（Exline, Lisan, & Lisan, 2012）、相互作用の相手として親切な見知らぬ他者と魅力的な見知らぬ他者のどちらを選択するかという問題（Li, Halterman, Cason, Knight, & Maner, 2008）を検討した研究がある。また、援助動機（援助者あるいは被援助者のどちらに役立つか）の違いが小学生の親切の知覚に及ぼす影響（Shorr, 1993）、幼稚園児から大学生までを対象とした親切判断（Baldwin & Baldwin, 1970）、双生児ペア内での親切概念の不整合性とペア内の認識能力や気質の違いの関係（Brown, Matheny, & Wilson, 1973）を検討した研究も見られる。

(c) 親切をする側と親切をされる側が一体である研究　さらに、親切をする側と親切をされる側が一体である研究として、自分への優しさがウェル・ビーイングに及ぼす影響（Neely et al,, 2009）を明らかにしようとした研究がある。また、コンパッションを親切とみなし、短期の自己へのコンパッション・スキルを教える介入が女子大学生のレジリエンス（regilience：精神的な回復力）とウェル・ビーイングに及ぼす改善効果を報告した研究（Smeets, Neff, Alberts, & Peters, 2014）がある。

(d) 親切研究でない親切研究　「見知らぬ他者の親切への依存：最新の国家規模のデータと発達研究」という展望論文をまとめた Brooks-Gunn, Berlin, Leventhal, & Fuligni（2000）は、子どもに焦点化した大規模な縦断的研究を紹介している。この展望論文の中で、親子の相互作用、子どものケアの質、子どもの支援、家族の暴力、両親の精神衛生、両親の居住パターン、両親の雇用パターン、地域社会の特徴などの側面が取り上げられ、幼少期の介入サービスの効果性や住居移転プログラムの効果性などが検討された。そして、子ども支援の強化、貧困絶滅の戦略、子どもケアの利用可能性、子どもケアの補助金といった政策関連の問題に対する研究の有用性が考察された。しかしながら、論文題目から判断すると、見知らぬ他者からの親切に関する展望論文のはずであるが、引用された文献の内容は直接的に親切に関連するものではなく、ケアなど間接的に親切に関連する文献が取り上げられている。ちなみに、引用された 50 点の文献のうち、文献題目に「kindness」の用語が使用されている文献は皆無である。

(e) 慈愛に関する研究　慈愛に関しては、無神論者と比較した実践派の仏教徒の自己－他者統合の高さを検証し、慈愛が慈愛を呼ぶと題した研究（Colzato, Zech, Hommel, Verdonschot, van den Wildenberg, & Hsieh, 2012）、文化応用的認知行動療法の立場から、心的外傷をもつ難民や少数派集団に対する慈愛のようなマインドフルネス技法が治療的に有効であると論じた研究（Hinton, Ojserkis, Jalal, Peou, & Hofmann, 2013）がある。

(f) 慈愛瞑想に関する研究　慈愛瞑想に関しては、職業をもつ成人を対象とするフィールド実験によって、慈愛瞑想実践が日常的なポジティブな情緒経験を増加し、ポジティブな情緒経験が広範な個人的資源（マインドフルネス、生活の目的、サポートなど）を増加し、こうした個人的資源が生活満足感の増加と抑うつ感の減少をもたすことを報告した研究（Fredrickson, Cohn, Coffey, Pek, Finkel, 2008）、心的外傷後ストレス障害（posttraumatic stress disorder: PTSD）を抱える復員兵に対する 12 週間の慈愛瞑想を試行し、慈愛瞑想が安全で受容できる技法で、PTSD と抑うつの症状の軽減に有効であると報告した研究（Kearney et al., 2013）、統合失調症スペクトラム障害に苦しむ人に対する慈愛瞑想の臨床的適用可能性を検討し、事例研究から慈愛瞑想がポジティブな情緒を高め、ネガティブな症状を改善することを示唆する研究（Johnson, Penn, Fredrickson, Meyer, Kring, & Brantley, 2009）、同じく統合失調症スペクトラム障害と重大なネガティブな症状をもつ人々に対して慈愛瞑想の介入を行い、こうした人々に対する慈愛瞑想の介入が実行可能であり、慈愛瞑想介入がネガティブな症状の減少、ポジティブな情緒や心理学的回復の増加を導くことを示した研究（Johnson, Penn, Fredrickson, Kring, Meyer, Catalino, & Brantley, 2011）がある。

また、マインドフルネス瞑想の枠組みから慈愛瞑想とコンパッション瞑想の潜在的介入力を考察した研究（Hofmann et al., 2011）、訓練中の心理治療家を対象とした慈愛瞑想コースがセルフ・ケアやコンパッションを高めるために有効であると報告した研究（Boellinghaus, Jones, & Hutton, 2013）、瞑想の初心者を対象にしたストレス管理演習の結果から、マインドフルネスを基盤とする介入効果の有力な媒介変数である脱中心化（decentering）は、マインドフル呼吸法の方が慈愛瞑想や漸進的筋弛緩法（progressive muscle relaxation）よりも優れていると報告した研究（Feldman, Greeson, & Senville, 2010）などがある。

なお、ハミルトン（2011）は、7 週間の慈愛瞑想によって、喜び、感謝、満足感、自尊心などのポジティブな感情が増加し、こうした効果が慈愛瞑想を継続することでより大きくなるという研究例と、8 週間の慈愛瞑想によって、慢性腰痛患者の痛み、不安、怒り、ストレスが減少するという研究例を紹介している。

(g) 慈愛瞑想研究の一展望　心理的介入に対して慈愛瞑想とコンパッション瞑想がもつ潜在力を明らかにするために、マインドフルネス瞑想の枠組みから、Hofmann et al.（2011）は、慈愛瞑想とコンパッション瞑想の背景、技法、最新の研究結果を紹介している。慈愛瞑想は、全ての人々に対する無条件の親切という感情状態を発達させることを目的としているが、コンパッション瞑想は、不幸に見舞われた人々に対する思いやりと共感、その苦しみを和らげたいという願いを発達させることを目的とする。心理測定的研究、神経内分泌系研究、神経イメージング研究から、臨床的母集団における慈愛瞑想とコンパッション瞑想の適用の有用性を示唆する結果が得られた。すなわち、慈愛瞑想とコンパッション瞑想は、ポジティブ感情を増加し、ストレスやネガティブ感情（不安など）を減少する。そして、怒りの制御のような対人的問題を目的とする場合に、慈愛瞑想は特に有用である。さらに、抑うつや夫婦間葛藤のような人間関係の問題を扱う場合や、ケアの専門家および親族や友人を長期間ケアしなければならない非専門家における難題を扱う場合に、慈愛瞑想とコンパッション瞑想の両方が特に有用である。これらの示唆に基づき、Hofmann et al.（2011）は、慈愛瞑想やコンパッション瞑想が認知行動療法などと結びつくとき、慈愛瞑想とコンパッション瞑想が抑うつ、不安、怒り、夫婦間葛藤、長期的ケアによる過労といった心理学的問題に対処する有用な手段になりうると結論付けている。

(h) 慈愛瞑想の方法　慈愛瞑想の方法に関して、ハミルトン（2011）は表 9-3 のように簡潔に整理して示している。初めは、自分自身や大切な人のために祈るが、慣れてきたら、日頃付き合いのある人にも祈りを捧げ、さらには嫌いな人や自分を苦しめている人の幸せも祈るようにし、最終的には世界中の人が苦しみから解放されるように祈りを広げることを目標にする。

慈愛を向ける対象に関しては、①自己、②友人、③ニュートラルな人物（例：郵便配達の人）、④付き合うのが難しい人物、⑤人類全体、の 5 段階で広げるやり方が慈愛瞑想介入で採用されている（Boellinghaus et al., 2013）。

表 9-3　慈愛瞑想の方法（ハミルトン (2011) より表現を一部修正引用）

・椅子にゆったり腰かけ、呼吸に意識を集中する。ゆっくりと、規則正しい呼吸を心がける。
・大切な人を思い浮かべ、その人が健康になり、苦しみから解放されるよう、心から祈る。
・「あなたが健康になりますように。あなたが幸せになりますように。あなたに安らぎが訪れますように」と、声に出して唱えてもいい。
・自分のことも忘れてはいけない。同じように祈り、唱える。

第 2 節　欧米における親切の心理学的研究

1. 親切行動が自身のウェル・ビーイングと生活満足感に及ぼす効果：Lyubomirsky et al.（2004）と Buchanan & Bardi（2010）の研究

(1) 親切な行為は自身のウェル・ビーイングを高める

Lyubomirsky, Sheldon, & Schkade（2005）によると、大学生を実験参加者とした Lyubomirsky et al.（2004）は、アメリカで 6 週間の親切介入実験を行った。親切な行為は、自分自身に多少のコスト

はあるが、他の人々に恩恵をもたらし、他の人々を幸福にする行動（例えば、献血する、友人の論文を手伝う、高齢の親戚を訪問する、以前に指導を受けた教授に感謝の手紙を書く）とされた。Lyubomirsky et al.（2004）は、6 週間にわたって、1 週間に 5 つの親切な行為をするように、実験群の参加者に求めた。親切な行為の実行には、5 つの全ての行為を 1 日にまとめて行う条件（集中条件）と、5 つの行為を 1 週間に分散させて行う条件（分散条件）の 2 種類があった。実験群の参加者は、6 週間の介入の直前と直後にウェル・ビーイングを測定された。このほかに、介入操作を受けずに、ウェル・ビーイングを 6 週間間隔で 2 回測定される統制群を設けた。

6 週間の親切介入前後のウェル・ビーイングの変化（介入後得点－介入前得点）を図 9-1 に示した。統制群の参加者は 6 週間の間にウェル・ビーイングの低下を示しているが、親切な行為に関与した実験群の参加者はウェル・ビーイングの有意な増加を示した。しかし、こうした増加は、1 週間の親切行為を 1 日にまとめて行った条件でのみ認められ、分散させて行った条件では認められなかった。分散条件でウェル・ビーイングの増加が見られなかった理由としては、学生が遂行した親切行為の多くは小さな親切行為であったため、親切行為を分散させることが親切行為を目立たなくし、その力を弱めて、日常に習慣的に行う親切行動と区別できなくなったと考えられる。1 週間に 1 日だけ集中的に 5 つの親切行為を 6 週間にわたって実行するという、短期間の集中的な親切行為の遂行がウェル・ビーイングを増加させることができると実証された。

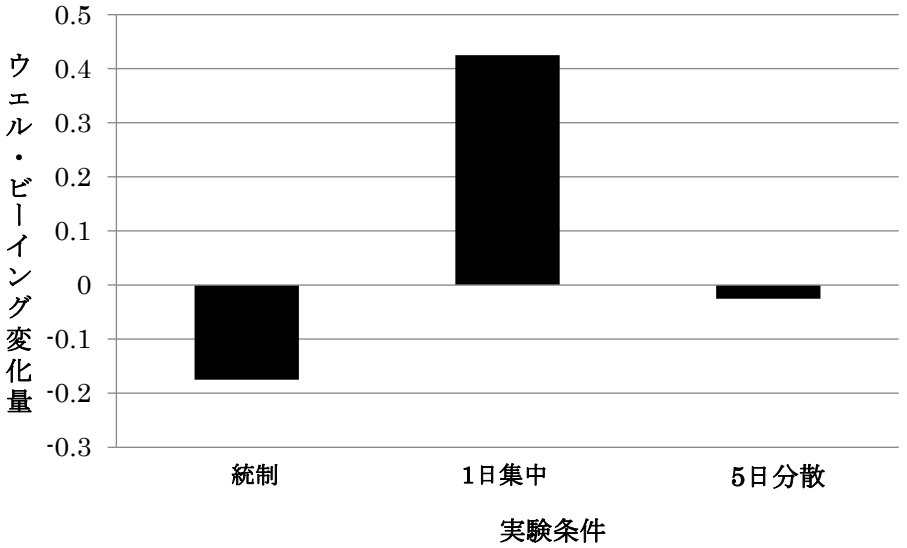

図9-1　6週間の親切介入によるウェル・ビーイングの変化
（Lyubomirsky et al. (2005) のFigure 3を一部修正）

(2) 親切な行為と新奇な行為は自身の生活満足感を高める

イギリスで Buchanan & Bardi（2010）は、親切な行為と新奇な行為（acts of novelty）が生活満足感に及ぼす効果を検証しようと試みた。実験参加者は、86 人の自発的参加者（男性 38 人、女性 48 人）であり、18～60 歳（平均年齢 26 歳）であった。参加者は、親切行為条件、新奇行為条件、統

制条件の 3 条件のいずれかに無作為に配置された。実験条件である親切行為条件あるいは新奇行為条件の参加者は、10 日間の間、毎日親切な行為あるいは新奇な行為を遂行し、その遂行した行為を記録するように求められた。統制条件の参加者は、特別な行為をするように指示されなかった。そして、これら 3 条件の参加者は、10 日間の介入の前後に、5 項目の生活満足感尺度を使用して、生活満足感を測定された。生活満足感変化得点は、介入後の得点から介入前の得点を差し引いた値であった。

生活満足感変化得点の平均（標準偏差）は、親切行為条件で 0.54（0.86）、新奇行為条件で 0.35（0.73）、統制条件で-0.04（0.74）であり、1 要因分散分析の結果は有意（$F(2,83)=4.13, p<.05$）であった。そして、生活満足感変化得点は、統制条件に比較して、親切行為条件（$t(83)=2.84,\ p\leqq.01$）と新奇行為条件（$t(83)=1.86,\ p\leqq.05$）が有意に大きかった。このように、10 日間の親切な行為と新奇な行為を実行し記録するように求める介入が生活満足感を高めることが証明された。

2. 親切と感謝の介入がクライエントの心理的機能の改善に及ぼす効果：Kerr et al.（2015）の研究

【問題】

(1) 問題の背景

臨床心理学では、心理治療を申し込んだクライエントが実際に治療を受けるまでに待たされることで発生する問題への対処が求められる。非常に短期間の自己管理されるポジティブな心理的介入でさえ、臨床標本（心理的問題を抱える人）に有益な効果をもつことにヒントを得た Kerr et al.（2015）は、オーストラリアでポジティブな情緒を経験させる 2 週間の介入が治療前介入として有効であるかどうかを検討した。こうした Kerr et al.（2015）の研究は、ポジティブな情緒を経験することが短期的な思考や活動（例：遊び）のレパートリーを拡張し、そのことが長期的な個人的資源（例：人間関係）を形成するのに役立つという「ポジティブな情緒の拡張・形成理論（the broaden and build theory of positive emotions）」（Fredrickson, 1998）を基盤としている。

(2) 目的と仮説

Kerr et al.（2015）の研究目的は、①臨床的母集団における感謝介入と親切介入の効果性を、気分測定プラシーボ統制介入条件（a mood–monitoring placebo control intervention condition：以下、統制条件と略記）と比較すること、②こうした介入が、治療に入るのを待機しているクライエントに対する価値ある治療前介入として役立つかどうかを検討すること、であった。そして、以下の 4 つの仮説を設けた。

仮説 1：感謝は、統制条件では増加しないが、感謝介入条件（以下、感謝条件と略記）では増加するであろう。

仮説 2：感謝介入は、心理的機能の改善をもたらすが、統制条件ではそうした効果は見られないであろう。

仮説 3：親切は、統制条件では増加しないが、親切介入条件（以下、親切条件と略記）では増加するであろう。

仮説 4：親切介入は、心理的機能の改善をもたらすが、統制条件ではそうした効果は見られないであろう。

【方法】

(1) 研究計画と手続き

(a)実験参加者　参加者は 48 人の成人クライエント（男性 36 人、女性 12 人、平均年齢 43 歳）であった。外来心理クリニックで心理治療の開始まで 1 か月以上待つよう要求されたクライエントのうち、治療の順番待ちの間に、本来の治療とは全く別の治療前プログラムへの参加に同意したクライエントであった。

(b)介入計画　参加者は、感謝条件、親切条件、統制条件という 3 つの条件の 1 つに無作為に配置された。介入は 14 日間であった。感謝条件では、今日感謝したことやありがたいと思ったことを 5 つ、親切条件では、今日だれか他者に対して行った親切な行為を 5 つ書き出させた。統制条件では、特別な介入は行わず、下記の(2)の測度のうち、(b)について毎日評定させた。

(c)測定　感謝条件と親切条件では、下記の(2)の測度のうち、(a)と(b)と(c)は 14 日間にわたって毎日測定し、(d)と(e)は介入の前後で 2 回測定した。

(2) 測度

(a)感謝と親切の頻度と程度　14 日間の介入期間中毎日、感謝条件では、感謝したことを列挙させ、感謝の平均的な程度（1 項目）を 7 段階評定させた。また、親切条件では、自分の実行した親切行為を列挙させ、親切の平均的な程度（1 項目）を 7 段階評定させた。このほかに、両条件で、毎日の感謝の感情と親切の感情をそれぞれ 3 項目の合成尺度で 5 段階評定させた（実際には下記の(b)の PANAS の下位尺度である）。

(b)自己の欲求に基づく快楽的ウェル・ビーイング　毎日の気分としてのポジティブな感情とネガティブな感情を、PANAS（Positive and Negative Affect Schedule）改訂版を使用して、毎日測定した。この結果から、毎日の感情バランス（ポジティブ感情得点－ネガティブ感情得点：得点が大きいほどウェル・ビーイングが高い）と、幸福な日の比率（「ポジティブ感情＞ネガティブ感情」である日の割合）を算出した。このほかに、一日の生活の全体的評価と、楽観的・悲観的期待を 7 段階で毎日評定させた。

(c)対人的機能　他者との絆の感覚（1 項目）を 7 段階で毎日測定した。

(d)より深い認知や人生の意味と関わるウェル・ビーイング　自分自身の人生の意味を PIL（Purpose in Life）検査によって測定した。

(e)一般的な心理的機能　症状と悩みを OQ-45（Outcome Questionnaire-45.2）によって測定し、抑うつと不安とストレスを DASS-21（Depression Anxiety and Stress Scale）によって測定した。

【結果と考察】

(1) 結果

(a)感謝と親切の頻度と程度　感謝条件では、感謝を引き起こした出来事の数は平均 2.70（*SD*=1.28）、感謝の程度は平均 5.46（*SD*=0.81）であった。合成尺度による感謝感情は、感謝条件（*M*=10.19）の方が統制条件（*M*=8.58）よりも有意に高かった。親切条件では、行った親切行為の数は平均 2.58（*SD*=1.11）、親切の程度は平均 4.50（*SD*=1.47）であった。しかし、合成尺度による親切感情に関する条件差は認められなかった。

(b)自己の欲求に基づく快楽的ウェル・ビーイング　毎日の感情バランスと幸福な日の比率に関しては、3 条件間で有意差は見られなかった。一日の生活の全体的評価は、感謝条件（*M*=4.95）と親切条件（*M*=4.91）の方が、統制条件（*M*=4.11）よりも、有意（$p<.05$ と $p=.06$：後者は有意傾向）

に高かった。そして、楽観的・悲観的期待得点の示す楽観的期待は、親切条件（M=5.25）と感謝条件（M=5.12）の方が、統制条件（M=4.38）よりも、有意（p<.05 と p=.07：後者は有意傾向）に高かった。

(c) 対人的機能　他者との絆の感覚は、親切条件（M=5.33）と感謝条件（M=5.20）の方が、統制条件（M=3.90）よりも、有意（ps<.01）に高かった。

(d) より深い認知や人生の意味と関わるウェル・ビーイング　自分自身の人生の意味に関しては、群（3）×時間（2）の分散分析の結果、主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった。

(e) 一般的な心理的機能　同様の群（3）×時間（2）の分散分析の結果、不安（DASS-21）のみで交互作用が有意であった。不安は、介入の前後で、感謝条件と親切条件では有意（p<.05 と p<.01）に低減（-4.62 と-5.81）していたが、統制条件ではそうした変化（1.75）は生じていなかった。

(2) 考察

仮説 1、仮説 2、仮説 4 は支持されたが、仮説 3 は支持されなかった。臨床的に問題を抱える人たちに対して、2 週間の感謝の自己管理的介入が感謝を育てたが、2 週間の親切の自己管理的介入では親切を育てることはできなかった。しかし、感謝と親切の介入は、他者との絆の感覚や生活満足感や楽観的期待を高め、不安を低めることが明らかとなったので、本格的な効果は期待できないまでも、心理治療を受けるまでの長い待ち時間のネガティブな影響を低減させる有用な治療前介入として役立ちうる。

3. 思春期直前の児童の親切行動促進がウェル・ビーイングと仲間からの受容に及ぼす効果：Layous et al.（2012）の研究

【問題】

カナダの 10 歳前後の思春期直前の児童を対象に、Layous et al.（2012）は、親切行為に関する縦断的な実験的介入が幸福感や人気に及ぼす効果を検討している。

子どもに関する両親の願いのトップは、子どもの幸福、優良な学業成績、他者とのポジティブな人間関係である。児童の向社会性と幸福感あるいは人気との間には双方向的ないしは互恵的な関係が存在することが先行研究から示唆される。

Layous et al.（2012）の研究の特徴は以下の通りである。①思春期直前の児童を対象とする親切行為の介入実験であること、②親切行為の実行が仲間からの受容に及ぼす影響という因果関係を実験的に証明しようとしていること、③仲間からの受容を社会測定的人気（sociometric popularity）から捉えていること。

この研究では、児童が実行した親切行為を記録させる親切群（実験群）と、児童が好んで訪れる場所を記録させる所在記録群（比較群）の 2 群を設定した。後者の比較群は、楽しい活動に従事することを意味する、弱いポジティブな比較群であった。

【方法】

(1) 実験参加の同意と倫理審査

研究を説明している同意用紙を家庭に送り、保護者が同意・署名した場合、その署名済みの同意用紙を児童が教室に持参し、児童自身も同意用紙に署名することで実験参加が確定した。その後、大学と学校の 2 つの研究倫理審査委員会で審査を受けた。

(2) 実験参加者と実験手続

実験計画は、1 要因 2 水準の参加者間計画であった。学級単位に、19 学級が親切行為条件と所在記録条件のどちらかに無作為に配置された。参加者は 415 人の児童で、平均年齢は 10.6 歳であった。実験時期は、学年の後期であった。全ての参加者に対して、子どもの経験と情緒についての研究であると説明した。

参加者は、4 週間にわたって毎週、彼らがしてあげたい人に対して親切行為を 3 つ実行するようにという教示、あるいは、彼らが行きたい 3 つの場所を訪問するようにという教示を与えられた。そして、毎週、教室内の調査で報告した。報告された親切行為の例としては、「お母さんが仕事でストレスがあったとき、お母さんを抱きしめてあげた」、「私の昼食の一部を誰かにあげた」、「床を電気掃除機で掃除した」、訪問場所の例としては、「ショッピング・センター」、「野球場」、「祖母の家」などがあった。

(3) 従属変数の測定

実験的介入の前後に、参加者は以下の自己報告測度に記入した。①生活満足感（児童用生活満足感尺度）、②幸福感（児童用主観的幸福感尺度）、③ポジティブ感情（ポジティブネ・ガティブ感情調査票児童版）。また、実験的介入の前後に、参加者は、同級生の名簿を渡され、校内活動で一緒に過ごしたい仲間の名前に〇を付けて選択するように求められた。その際、選択する人数は多くても少なくてもよかった。そして、参加者が何人の仲間から選択されたかが、仲間からの受容の測度となった。

3 種類の自己報告測度と仲間からの受容測度に関しては、4 週間にわたる実験的介入の前後の変化を分析した。すなわち、変化得点（事後測定得点－事前測定得点）を分析した。

【結果】

(1) 自己報告測度得点の変化

親切行為群と所在記録群の両方において、生活満足感、幸福感、ポジティブ感情のいずれも、実験的介入の前後で増加していることが t 検定の結果から明らかになった（$ts>1.67$, $ps<.10$）。しかし、3 種類の得点の変化の大きさに関しては、親切行為群と所在記録群の間に有意差は見られなかった。なお、学級の大きさは、親切行為の効果に影響していなかった。

(2) 仲間からの受容測度得点の変化

親切行為群と所在記録群の両方において、同級生から受け取った仲間指名の人数は有意に増加していたが、親切行為群（$M=+1.57$, $SD=1.90$）の方が、所在記録群（$M=+0.71$, $SD=2.17$）よりも、有意に多く増加していた（$t(17)=2.10$, $p=.05$）。このように、親切行為群は、4 週間の親切行為の実行によって、新たに 1.5 人の仲間から受容されるようになった。

また、ウェル・ビーイング（生活満足感、幸福感、ポジティブ感情）の変化は、仲間からの受容に影響していなかったし、ウェル・ビーイングの変化を統制しても、仲間からの受容に及ぼす親切行為の効果は有意であった。

【考察】

思春期直前の児童が親切行為のように他者のために良いことをすることは、生活満足感、幸福感、ポジティブ感情などウェル・ビーイングを改善するだけでなく、仲間からの受容・人気も改善するという恩恵を行為者である児童自身にもたらすことが実証された。しかも、向社会的行動を促すこ

とは、行為者の幸福感や人気の増加を超える波及効果（例：相手の感謝や幸福の感情を高めたり、親切の実行を高めたりする効果）をもつかもしれないと先行研究から示唆される。したがって、教師や介入者は、親切行為のような向社会的行動を教室に導入し、そうした向社会的行動を定期的・意図的に実行するように児童に勧告することによって、児童のウェル・ビーイングや人間関係の改善に役立てることが可能である。

4. 発達段階に対応した親切尺度の作成：Comunian（1998）の研究

【問題】

認知発達的アプローチは、価値や道徳が人間と環境の相互作用を通して段階的に発達すると仮定する。Kohlberg（1984）の道徳判断の発達段階に基づいて、Comunian（1998）は、親切という構成概念が次のような 4 つの段階を経て発達すると仮定した。段階 1 では、親切は自己中心的で主観的であり、親切行為は、自己の欲求を充足し、自己の関心を最大化するルールに従う。段階 2 では、親切は重要であるとみなされ、他者の視点を考慮した互恵的視点からの親切が可能になるが、まだ特定の文脈に限定された親切である。段階 3 では、相互的な人間関係の理解を基盤にして、親切は、自己の視点と他者の視点を統合した互恵的なものとなる。段階 4 では、社会的象徴的視点取得が特徴的であり、一般化された他者や社会システムに関する共有化された視点から親切は行われる。

そして、Comunian（1998）は、Kohlberg 流の考え方が親切に適用できて測定できるかどうか、親切尺度を作成して、その心理測定的特性を検討した。

【方法】

(1) 調査対象と調査手続き

対象者は 13～60 歳のイタリア人 407 人（男性 191 人、女性 216 人）であった。対象者個別に、「人々が親切な行為をどのように経験し実行しているか」を調査することが目的であると告げ、親切尺度を含む 5 種類の質問紙に無記名での記入を求めた。

(2) 親切尺度

著者が 1996 年に作成した 25 項目の尺度で、内的整合性を示すα係数は.85 であった。表 9-4 に示したように、4 段階に 5 項目ずつの計 20 項目の親切尺度で、残りの 5 項目は無関係な項目（distractor）であった。各項目に関して、「全く真実でない」（1 点）～「まさに真実である」（4 点）の 4 段階評定を求め、尺度全体の得点範囲は 20 点～80 点であった。

(3) 他の尺度

①テスト不安目録：テスト不安を測定する「状況特定的パーソナリティ特性」尺度で、2 つの下位尺度から成る。②状態・特性怒り表出目録：状態的怒りと特性的怒りの経験と表出を測定する尺度で 5 つの下位尺度から成る。③覚醒可能性・楽観主義尺度：ネガティブな生理的情緒特性と行動の自己制御パーソナリティ特性に関連する 2 種類の動機を測定する尺度から成る。④自己概念目録尺度：社会的、情緒的、道徳的、職業的自己概念を測定する多次元 SD 尺度である。

(4) 再検査信頼性

調査の 6 週間後に、127 人の対象者に対して、再度、親切尺度への記入を求めた。

【結果と考察】

(1) 親切尺度の因子構造

20 項目の親切尺度に関して因子分析（主成分法、バリマックス回転）を行ったところ、表 9-4 に示すように、4 つの発達段階に対応する 4 因子が得られた。予想通り、各因子は 5 項目から成り立っていた。4 因子の累積寄与率は 50.7%であり、各因子の内的斉合性を示すα係数は.65～.80 であった。因子分析の結果は、親切の段階的発達に対応した、親切の階層的順序に関する証拠を提供するものであった。

(2) 親切尺度の再検査信頼性

6 週間の間隔を置いた親切尺度の各因子得点の相関係数 *r* は.90～.93 と、非常に高い正の相関を示し、親切尺度には高い信頼性のあることが証明された。

表 9-4　親切尺度の項目と因子分析の結果（Comunian (1998) の Table 5 を一部修正）

項目	段階			
	1	2	3	4
私は親切なので、進歩や改善に貢献している。				.72
人々が親切を必要としているので、私は親切である。				.68
親切であるとき、私は誠実にコミュニケーションをすることができる。				.58
他者の尊厳を尊重することが大切だと思うので、私は親切である。				.49
親切はそれ自体に価値がある、と私は思う。				.49
私は、他者に対する適切な礼儀正しい接し方を知っている。			.61	
親切にすることが自分に個人的な満足感を与えてくれるので、私は親切である。			.59	
私は親切なので、私は他者と同じように立派に見える。			.56	
私は、他者が親切であると見られるのと同じように親切であると思われたい。			.54	
私は他者に対して親切にする仕方を知っている。			.49	
私が楽しく感じ、幸福であるときには、私は親切である。		.66		
自分に良くしてくれる人たちには、私は親切である。		.60		
自分が親切にしたいときには、私は親切である。		.59		
親切が何かの目的に役立つときには、私は親切である。		.46		
私は、障害のある人たちを気の毒に思う。		.37		
私に親切を要求される場合にだけ、私は親切である。	.69			
友だちに対してだけ、私は親切である。	.65			
私にとって良いことがあれば、私は親切である。	.60			
私が他者の言うことに耳を傾けている、と私は彼らに信じさせる。	.58			
欲しいものがより簡単に手に入るので、私は親切である。	.55			
固有値	4.30	1.36	2.06	5.05
寄与率	16.5	6.3	9.4	18.8

注 1) 因子分析の結果に関する本文中の記述と表示内容との間に大きな矛盾が見られるが、表示内容をそのまま紹介する。

(3) 親切尺度の弁別的妥当性

段階別の親切尺度得点とネガティブ情緒を意味する 3 種類の尺度得点（下位尺度別のテスト不安目録得点、状態・特性怒り表出目録得点、覚醒可能性・楽観主義の尺度得点）との相関関係は、有意ではあるが弱い負の相関関係が部分的に認められるにとどまり、正の相関関係は全く得られなかった。これに対して、段階別の親切尺度得点と下位尺度別の自己概念目録尺度得点との間には、段階 1 と段階 3 では有意な弱い負の相関関係が部分的に見られたものの、段階 4 では全面的に有意な正の相関関係が得られた。このように、十分ではないが、親切尺度の妥当性が支持された。

(4) 親切得点の性差

親切尺度得点の性差は、青年期前期においてのみ存在し、女性の方が男性よりも有意に親切得点は高かったが、青年期後期にはその差は消失した。

補注）Kohlberg の道徳性の発達段階について、二宮（1992）は、“コールバーグの発達段階を平易に述べれば、自己の行動の結果に方向づけられ、罰を避け、報酬を手に入れることが善でありその逆が悪であるとする慣習以前の水準から、他者の期待や他者からの承認、慣習的な仕方で行動することに方向づけられている慣習的水準を経て、自ら定義した道徳的価値・原理に従って判断しようとする慣習以降の水準へと発達していくというものである。”（p.847）と紹介している。そして、二宮（1992、p.846 の表 49-3）によると、Kohlberg の道徳性の発達段階は、以下のような 3 つの水準にまとめられる 6 つの段階から成る。

<u>①慣習的水準以前</u>　第 1 段階：罰と服従への志向（物理的な結果によって行為の善悪を判断し、結果のもつ人間的な意味や価値を無視する）。第 2 段階：道具主義的な相対主義志向（正しい行為とは、自分の欲求や場合によっては他人の欲求を満たすための手段である）。

<u>②慣習的水準</u>　第 3 段階：対人的同調、あるいは「良い子」志向（善い行為とは、他者を喜ばせたり、助けたりすることであり、他者から肯定されるようなことである）。第 4 段階：「法と秩序」志向（権威や固定された規則、そして社会秩序の維持を指針とする）。

<u>③慣習的水準以降の、自立的、原理化された水準</u>　第 5 段階：社会契約的な法律志向（一般的に功利主義的な色あいを帯び、正しい行為とは、一般的な個人の権利や、社会全体の規準によって定められ、法の可変性を認める）。第 6 段階：普遍的な倫理的原理の志向（正しさは、自分自身で選択した「倫理的原理」に従う良心によって定められる）。

5. 自己への他者からの親切行為の熟考が自己の情緒や寛大さに及ぼす効果：Exline et al.（2012）の研究

【問題】

(1) 問題の背景と目的

他者から受け取った親切行為を想起することが自己の情緒や寛大さにどう影響するのかという問題を、アメリカで Exline et al.（2012）は社会規範の役割に注目しつつ 2 つの研究によって検討している。寛大さとは、研究 1 では様々な他者に対する親切動機を指し、研究 2 では見知らぬ他者への親切行為（慈善事業への寄付行為）を指す。

研究の目標は、①過去に他者から受けた親切行為を想起するとき、人はどんな情緒を経験するのか、②自分への優しさ行為を想起することは、他者への寛大さを引き起こすのに有効な方法であるのか、を明らかにすることであった。そして、自分への優しさ行為の想起が引き起こす情緒と寛大

さには、社会規範に一致する規範的親切（normative kindness）と一致しない非規範的親切（non-normative kindness）とで異なると予想する。ここでの規範的親切とは、返報性、社会的交換、衡平の原理が働く場合の親切（親しい人間関係における親切、当然もらえると期待される親切、受け取るに値する親切）であり、非規範的親切とは、それらの原理に基づく保証がない場合の親切（見知らぬ他者からの親切、敵対する人からの親切）である。

(2) 仮説

①親切を受け取った記憶と結びつく情緒は、ネガティブ情緒よりもポジティブ情緒の方が優勢であると期待される。②非規範的親切の記憶よりも、規範的親切の記憶の方がポジティブ情緒との結びつきがより大きく、ネガティブ情緒との結びつきがより小さいと期待される。③寛大さに及ぼす親切タイプの効果に関する競合的予測：受け手に関係なく、社会規範に一致する規範的親切の想起の方が非規範的親切の想起よりも大きいポジティブ情緒をもたらし、ポジティブ情緒仮説（positive emotional hypothesis：ポジティブ情緒は向社会的行動を促進するという仮説）に従えば、そのポジティブ情緒はより大きい寛大さを予測する。対比的に、外集団顕在仮説（outgroup salience hypothesis）によると、社会規範に一致しない非規範的親切（見知らぬ他者や敵対する他者からの親切）の想起は、親切が見知らぬ他者の間で提供されることを顕在化するので、見知らぬ他者に対する寛大さの促進を予測する。

【研究 1：親切行為の想起が情緒反応と動機反応に及ぼす影響（調査的研究）】

(1) 目的

他者からの親切行為の想起が情緒反応と動機反応に及ぼす影響を検討する。

(2) 方法

(a) 参加者と手続き　参加者は 217 人の大学生（男性 114 人、女性 101 人、不明 2 人）であり、「与えることと貰うこと」と題するインターネット調査に参加した。参加者は、過去に他者から受けた親切行為に関するエッセイを書き、以下の 4 つの測度に回答した。

(b) 親切動機　「親しい他者」（3 項目）、「見知らぬ他者」（2 項目）、「敵対する他者」（2 項目）、「恩恵を施してくれる他者」（1 項目）という 4 種類の相手に対して、「親切をする機会が与えられたとしたら、どの程度親切をしたいと思うか」を、11 段階尺度（0～10 点、高得点ほど動機は大）で回答した。

(c) 情緒反応　「他者の親切行為によって次の情緒をどの程度感じたか」を、「愛され感」（7 項目）、「弱み／恥」（6 項目）、「不信感」（4 項目）、「驚嘆」（4 項目）、「感謝」（2 項目）について 11 段階尺度（0～10 点、高得点ほど情緒は大）で回答した。

(d) 人間関係のタイプ　親切にしてくれた人との人間関係のタイプを自由回答した（例：友人、見知らぬ他者、きょうだい）。

(e) 規範性　親切の規範性に関して、「他者からの親切な出来事の生じる前のその他者との親しさ」（1 項目）、「自己の期待と一致した他者からの親切」（5 項目）、「欲しかった親切・受け取って当然と思えた親切」（2 項目）を 11 段階尺度（0～10 点、高得点ほど規範性は大）で回答した。

(3) 結果と考察

(a) 親切の内容と親切にしてくれた人のタイプ　参加者の書いたエッセイについて、2 人の評定者が親切にしてもらった内容と誰が親切にしてくれたかをカテゴリー化した（表 9-5）。2 人の評定者の評定の一致率は高かった（κ =.86）。

表 9-5　親切の内容と親切にしてくれた人のタイプの出現率（Exline et al. (2012) より作成）

親切の内容	出現率	親切にしてくれた人のタイプ	出現率
①祝賀	25%	①友人	46%
②物理的援助・支援	19%	②見知らぬ他者	16%
③情緒的・精神的支援	18%	③家族成員	14%
④知的・職業的支援	17%	④知人	10%
⑤危害からの保護・救出	10%	⑤恋人	6%
⑥贈与	8%	⑥メンター・教師・その他の	
⑦許し	2%	リーダーシップ役割の人	6%

(b) 情緒反応　親切を受けたときに感じた情緒に関しては、分散分析によって 5 つの情緒間に有意差があること（$F(4,213)=491.24$, $p<.01$）、多重比較によって全ての情緒間に有意差（$ps<.01$）があることが示された（表 9-6 の左欄）。ポジティブ情緒の方がネガティブ情緒よりも強く感じられており、仮説 1 が支持された。

規範性の 2 つの下位尺度（他者との親しさ、期待と一致した親切）は、2 つのポジティブ情緒反応（感謝、愛され感）との間に正の相関関係（$r=.19$～$.52$, $ps<.01$）を示した。一方、規範性の 3 つの下位尺度は、1 つのネガティブ情緒反応（不信感）との間に負の相関関係（$r=-.14$～$-.26$, $ps<.05$）、1 つの下位尺度（欲しかった親切・当然の親切）は 1 つのネガティブ情緒反応（弱み／恥）との間に負の相関関係（$r=-.44$, $p<.01$）を示した。したがって、仮説 2 が支持された。

そして、ポジティブ情緒反応である感謝と愛され感は、恩恵を施してくれる他者や親しい他者に対する親切動機との間に正の相関関係（$r=.14$～$.34$, $ps<.05$）を示したが、見知らぬ他者や敵対する他者に対する親切動機との間には有意な相関関係を示さなかった。

以上のように、想起した親切行為の規範性はポジティブ情緒を促進したが、そのポジティブ情緒が全ての他者に対する親切動機を高めているわけではないため、競合的仮説 3 のポジティブ情緒仮説は部分的に支持されたと言える。

表 9-6　情緒反応と親切動機（Exline et al. (2012) の Table 1 より作成）

情緒反応		親切動機	
感謝	8.7 (1.7)	恩恵を施してくれる他者	9.4 (2.1)
愛され感	7.3 (2.0)	親しい他者	9.0 (1.2)
驚嘆	5.9 (2.6)	見知らぬ他者	5.7 (2.3)
弱み／恥	1.6 (1.9)	敵対する他者	3.7 (2.4)
不信感	0.9 (1.6)		

注 1）表内の数値は平均値（標準偏差）

(c) 親切動機　親切行為を想起したときの他者への親切動機は、人間関係のタイプによって大きく異なることが分散分析の結果から示され（$F(3,209)=343.11$, $p<.01$）、多重比較により、①恩恵を施してくれる他者・親しい他者、②見知らぬ他者、③敵対する他者の順に親切動機は大きかった($ps<.01$)

（表 9-6 の右欄）。

なお、見知らぬ他者に対する親切動機（*M*）は、見知らぬ他者（7.1）からの親切を想起したときの方が、親しい他者（友人 5.7、家族成員 4.7、恋人 4.6、知人 5.2）からの親切を想起したときよりも、有意に大きかった（*ps*<.05）。同様に、敵対する他者に対する親切動機（*M*）は、見知らぬ他者（5.3）からの親切を想起したときの方が、親しい他者（友人 3.4、家族成員 3.4、恋人 2.4）からの親切を想起したときよりも、有意に大きかった（*ps*<.05）。このように、競合的仮説 3 の外集団顕在仮説は部分的に支持されたことになる。

【研究 2：実験室実験における慈善的贈与（実験的研究）】

(1) 目的

規範的親切あるいは非規範的親切を想起することは慈善的贈与という寛大な行動を促進するかどうか、比較検討する。慈善的贈与は、見知らぬ他者に対する親切行為を意味する。

(2) 方法

(a)参加者と実験計画　参加者は 90 人の大学生（男性 52 人、女性 38 人）であり、「親切行為」と題する実験に参加した。実験計画は 1 要因 3 水準の参加者間計画であった。

(b)手続き　1)報酬の受け取り：参加者は、5 枚の 1 ドル札で 5 ドルを実験参加の報酬として受けとった。

2)実験操作：参加者は、次の 3 つの実験条件のどれかに無作為に配置され、特に重要な経験あるいは忘れられない経験を選び、生き生きと再生し、記述するように求められた。

規範的条件：参加者は、以下の 2 つの基準の両方を満たすような、特定の出来事を記述するよう求められた。「①他者があなたのために非常に親切なことをしてくれた。②他者の親切行為は、その人とあなたの人間関係に基づいて理解された。あるいは、あなたとの人間関係のタイプに一致しているように、あるいはそうした人間関係のタイプから生じているように思えた（表 9-7 の上部参照）。」

非規範的条件：参加者は、2 つの基準を満たす出来事を記述するように求められたが、基準①は規範的条件と同一であったが、基準②は規範条件の基準②とは反対方向のものであった。「①他者があなたのために非常に親切なことをしてくれた。②他者の親切行為は、その人とあなたの人間関係に基づいて理解されなかった。あるいは、その親切はあなたとの人間関係のタイプと一致するようには、あるいはその人間関係のタイプから生じているようには思えなかった（表 9-7 の下部参照）。」

統制条件：参加者は、授業、食事、仕事、勉強時間、課外活動、友人との時間などを含む、1 週間の典型的なスケジュールを記述するように求められた。

3)エッセイの記述：参加者は、エッセイを書くのに 10 分間の時間を与えられた。

4)寄付行動の測定：エッセイを回収した後、実験者は、①寄付申込用紙、②慈善事業のリスト、③参加者番号の書かれた封筒を参加者に手渡した。寄付申込用紙には表 9-8 に示した内容が印刷されていた。参加者は、5 つの慈善事業のどれにいくら寄付したかを、寄付申込用紙の末尾のところに記入した。なお、5 つの慈善事業の名称とその慈善事業を一段落分の記述で説明した別紙が参加者に手渡され、参加者は、この用紙にも寄付金額を記入したあと、この用紙と寄付金を封筒に入れて封をし、箱の中に入れた。寄付をしない参加者もその用紙を提出した。

5)事後測定とデブリーフィング：規範的条件と非規範的条件の参加者は、次項の測度に関する事後測定を実施され、デブリーフィングを受けた。

表 9-7　規範条件と非規範条件の具体例（Exline et al. (2012) より作成）

【規範的条件の例】
あなたはその人と親しい人間関係をもっていた。
あなたは過去にその人を良く待遇したことがあった。
あなたはこの親切を手に入れるために何かをしたことがあった。
その人はあなたが受けるに値するような扱いをしてくれた。
その人はあなたが好きな人であった、あるいはあなたの集団に対して友好的な集団の人であった。
その人は過去にあなたに対して親切であった。
【非規範条件の例】
あなたはその人を知らなかった。
あなたは過去にその人を虐待したことがあった。
あなたはこの親切を手に入れるために何もしなかった。
その人は、あなたを分不相応によく扱ってくれた。
その人はあなたが嫌いな人であった。
その人は過去にあなたに決して親切にしてくれたことがなかった。

表 9-8　寄付申込用紙に印刷された文章（Exline et al. (2012) より作成）

・あなたは、この研究に参加することに対して 5 ドルを支払われました。この時点で、あなたは、以下の慈善事業に寄付したいなら、このお金のうちからいくら（0 ドル、1 ドル、2 ドル、3 ドル、4 ドル、5 ドル）でも匿名で寄付をする選択の自由があります。
・あなたには、どんな額のお金も寄付する義務はありませんし、どのくらいの額のお金を贈与したかについては、学期の終わりまで私たちには分かりません。どうか私たちがこの研究で支払った 5 ドルを超える贈与はしないでください。
・もし寄付をする気があれば、どうかあなたの寄付金額を書いて、お金を封筒の中に入れてください。学期末に封筒の入った箱を開け、全ての寄付金を指定された慈善事業に送る予定です。

(c) 測度　1) 寛大さ：上述したように、参加者は、寄付申込用紙に寄付金額を記入した。

2) 情緒的基調：参加者が記述したエッセイがどの程度ポジティブ要素あるいはネガティブ要素を含むストーリーであるかを意味するポジティブ情緒的基調とネガティブ情緒的基調について、2 人の評定者が 6 段階尺度（0～5 点、最小～最大）で評定した。2 人の評定者間の評定の一致率は、ポジティブ情緒的基調とネガティブ情緒的基調とも r=.64 と r=.75 であまり高くなかった（ps<.01）。

3) 規範性：規範的条件と非規範的条件の参加者は、研究 1 の規範性尺度と同じ尺度に回答した。

(3) 結果と考察

(a) 操作チェック　他者からの親切行為の規範性に関して、規範的条件と非規範的条件とを比較したところ、規範性の 3 つの下位尺度得点に関して、規範的条件の方が非規範的条件よりも全ての規範性得点が高かった（表 9-9）。しかも、得点差だけでなく、規範的条件の参加者のエッセイで記述された他者からの親切は規範に一致する親切であったが、非規範的条件の参加者のエッセイで記述された他者からの親切は規範に一致しない親切であることが得点の大きさから確認でき、実験操

作は成功した。

(b)エッセイの情緒的基調　規範的条件の参加者が記述したエッセイの方が、非規範的条件の参加者が記述したエッセイよりも、ポジティブ情緒的基調が有意に高く、ネガティブ情緒的基調が有意に低かった（表 9-9）。

(c)寛大さ（寄付金額）　参加者の寄付の平均額は 3.52 ドル（*SD*=1.91 ドル）であった。表 9-9 から分かるように、規範的条件の参加者の方が、非規範的条件の参加者よりも、寄付金額は有意に多かった。統制条件の参加者の寄付金額は、平均 3.64 ドル（*SD*=1.81 ドル）であり、規範的条件と非規範的条件の中間値であった。しかし、1 要因 3 水準の分散分析と多重比較の結果から、統制条件と他の 2 条件との間には有意差は存在しないことが示された。

なお、寄付金額はポジティブ情緒的基調と有意な正の偏相関関係を示し、過去に他者から受けた親切行為の情緒的基調がポジティブであるほど、見知らぬ他者に対する親切行為が増加することが示された。この結果と、エッセイの情緒的基調および寛大さ（寄付金額）に関する結果は、競合的仮説 3 のポジティブ情緒仮説を全面的に支持する。

これに対し、寄付金額は規範性の中の他者との親しさと有意傾向の負の偏相関関係を示し、過去に他者から受けた親切行為が親しくない他者からのものであるほど、見知らぬ他者に対する親切行為が増加する傾向にあることが示された。この結果は、競合的仮説 3 の外集団顕在仮説を弱いながらも支持する。

表 9-9　規範的親切と非規範的親切の比較（Exline et al. (2012) の Table 3 を一部修正）

従属変数	規範的条件	非規範的条件	*t* 検定	偏相関係数
【操作チェック】				
他者との親しさ	6.6 (2.4)	1.9 (2.4)	7.70**	-.24†
期待と一致した親切	7.3 (1.9)	2.8 (2.3)	8.24**	-.18
欲しかった親切	6.1 (2.6)	4.1 (3.1)	2.72**	-.04
【情緒的基調】				
ポジティブ	3.4 (0.8)	2.7 (0.8)	3.60**	.31*
ネガティブ	1.3 (1.2)	2.5 (1.4)	3.65**	-.14
【寄付金額（ドル）】	4.10 (1.6)	2.87 (2.1)	2.53*	—

注 1）表内の数値は平均値（標準偏差）

注 2）偏相関係数は、寄付金額との偏相関係数

注 3）**p<01、*p<.05、†p<.10

【まとめ】

他者からの親切行為の想起は、ネガティブ情緒反応よりもポジティブ情緒反応をより多く生じさせ、その想起した親切行為が社会規範に一致しているほど、ポジティブ情緒反応は促進され、ネガティブ情緒反応は抑制された。

そして、他者からの親切行為の想起によって生じる親切動機は、恩恵を施してくれる他者や親しい他者に対する場合の方が見知らぬ他者や敵対する他者に対する場合よりも大きかった。

また、非規範的親切行為を想起した場合に比べて、規範的親切行為を想起した場合の方が、見知

らぬ他者に対する親切行為が促進された。

なお、上記の結果と矛盾する部分的な結果ではあるが、親しい他者からの親切行為を想起する場合に比べて、見知らぬ他者からの親切行為を想起する場合の方が、見知らぬ他者や敵対する他者に対する親切動機は促進されるという結果も得られた。

6. 実験参加者の性とストレスが異性あるいは同性の見知らぬ他者の親切さと魅力の選好に及ぼす効果：Li et al.（2008）の研究

【問題】

人は見知らぬ他者を相互作用の相手として選ぶとき、親切な人を選ぶのか、それとも魅力的な人を選ぶのか。こうした問題をアメリカで Li et al.（2008）は、通常の状況とストレス状況に置かれた場合の比較を通して検討する Schachter（1959）の「古典的なストレス下での親和アプローチ（a classic affiliation-under-stress approach）」の枠組みを援用して実験的に検討した。そして、置かれる状況によって作用する動機的状態の違いに着目し、配偶者希求動機（mating motives）と自己保護動機（self-protective motives）がせめぎ合いながら、魅力的な人あるいは親切な人に対する選好（preference）を説明すると考えた。

【研究 1：見知らぬ異性に対する選好】

(1) 目的

実験参加者の性やターゲット（対象人物）の親切さと魅力が、見知らぬ異性ターゲットに対する選好に及ぼす効果を解明する。

(2) 方法

(a) 実験計画と実験参加者　実験計画は、①ターゲットの親切さ（親切、不親切）、②ターゲットの魅力（魅力的、非魅力的）、③参加者の性（男性、女性）、④ストレス（低、高）の 4 要因計画であり、①と②が参加者内要因、③と④が参加者間要因であった。参加者は 174 人の大学生（男性 81 人、女性 93 人）であった。

(b) 実験手続　第 1 段階で、参加者は、簡単な課題遂行実験のために実験室に誘導され、ストレス要因が操作された。高ストレス条件では、苦痛ではあるが、生体組織への永続的な損傷を生じさせない、断続的な電気ショックを受けながら、課題遂行をしてもらう、という教示を参加者は与えられた。実験操作の信憑性を高めるために、電極付きの電気機械装置、アルコール、塗付用脱脂綿が実験室内のテーブル上に置いてあった。低ストレス条件では、普通の状況で課題を遂行してもらうという教示を与えられた。予備実験から両ストレス条件は異なるストレスを引き起こすことがあらかじめ確認済みであった。

第 2 段階で、参加者は、ホールの反対側で、対人的スタイルが他者との相互作用に及ぼす影響を検討する別の研究が同時進行的に実施されているので、実験課題の準備ができる 10～15 分の間、その別の研究の参加者と話をしてもらうと、実験者から説明された。

参加者は、別の研究の参加者が記入した 9 項目から成る親切質問紙（項目例：もし、同級生が落ち込んであなたに助けを求めたら、あなたは彼らのために時間を割きますか…10 段階の回答）を見せられ、また、別の研究の参加者である 4 人の異性の要約シート（4 枚）を与えられ、ターゲットの魅力の操作と親切さの操作が行われた。この要約シートの内容は、身分証明用写真のコピーと親

切得点の平均値であり、写真によって魅力の操作が、親切得点によって親切さの操作が行われた。予備実験の結果から、魅力の高低条件間および親切さの高低条件間には有意差が存在することがあらかじめ確認済みあった。要約シートで示されたターゲットは、①魅力的で親切な異性、②魅力的で不親切な異性、③非魅力的で親切な異性、④非魅力的で不親切な異性、の 4 タイプの異性であった。なお、2 つの魅力条件の写真は、実際にはそれぞれ 2 人の人物の写真が使用されていた。

第 3 段階で、参加者は、最も相互作用したいターゲットが 1 番上になるように、4 枚の要約シートを選好順に置くように求められた。実験者は課題遂行実験の準備のために実験室を離れ、5 分後に戻って、要約用紙を回収し、デブリーフィング（真の研究目的の説明）を行った。なお、後のデータ整理の段階で、1 番、2 番、3 番、4 番に順位づけられた場合、3 点、2 点、1 点、0 点と得点化され、親和選好得点として処理された。

(3) 結果

ストレス条件別に、親和選好得点を図 9-2 に示した。全条件で、最も選好されたターゲットは、魅力的で親切なターゲットであり、最も選好されなかったターゲットは、非魅力的で不親切なターゲットであった。

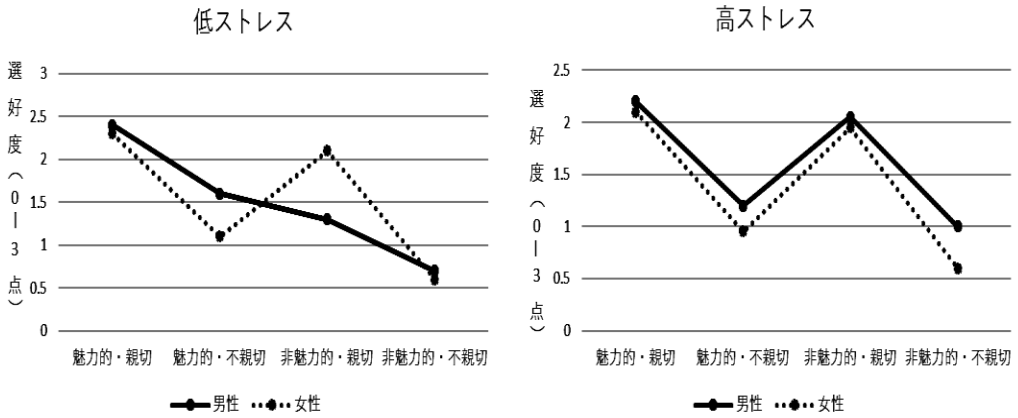

図 9-2　高・低ストレス条件における異性のターゲットに対する男性と女性の選好
（Li et al. (2008) の Figure.1）

魅力的で不親切なターゲット条件と非魅力的で親切なターゲット条件を比較したところ、次のようなことが分かった。男性は、低ストレス条件下では、多数派の 22 人が魅力的なターゲットを選好し、少数派の 15 人が親切なターゲットを選好しているが、高ストレス条件下では、多数派の 33 人が親切なターゲットを選考し、少数派の 11 人が魅力的なターゲットを選好しており、ストレス条件によって選好するターゲットの特性が逆転している（$\chi^2(1)=9.886, p=.002$）。ところが、女性は、低ストレス条件下でも高ストレス条件下でも、多数派の 35 人と 36 人が親切なターゲットを選好し、少数派の 11 人と 11 人が魅力的なターゲットを選好しており、ストレス条件による違いは見られず、選好するターゲットの特性は一貫している。

親和選好得点に関するターゲットの親切と魅力、参加者の性、ストレスの 4 要因分散分析の結果、

4 要因の交互作用が有意であった（$F(1,174)=4.440, p=.037$）。この交互作用を 3 要因の交互作用と 2 要因の交互作用に分解したところ、次の 3 点が明らかとなった。①女性の場合、高ストレス条件下と低ストレス条件下の両方で一貫して親切なターゲットを不親切なターゲットよりも選好するが、男性の場合、親切なターゲットを不親切なターゲットよりもより選好する程度は、低ストレス条件下よりも高ストレス条件下の方で顕著である。②魅力的なターゲットを非魅力的なターゲットよりも選好する程度は、男性の方が女性よりも顕著である。③男性の場合、魅力的なターゲットに対する選好は、高ストストレス条件下の方が低ストレス条件下よりも顕著であったが、女性の場合、そうしたストレス条件間の差は存在しなかった。

【研究 2：見知らぬ同性に対する選好】

(1) 目的

実験参加者の性やターゲット（対象人物）の親切さと魅力が、見知らぬ同性ターゲットに対する選好に及ぼす効果を解明する。

(2) 方法

参加者は 138 人の大学生（男性 64 人、女性 74 人）であった。ターゲットが同性である以外は、すべて研究 1 の方法と同じであった。

(3) 結果

ストレス条件別に、親和選好得点を算出したところ、高ストレス条件と低ストレス条件の両条件において、同性のターゲットに対する男性と女性の選好は、図 9-2 に示した高ストレス条件での異性のターゲットに対する男性と女性の選好に非常によく類似していた。全条件で、最も選好されたターゲットは、魅力的で親切なターゲットであり、次に選好されたターゲットは、非魅力的で親切なターゲットであった。

魅力的で不親切なターゲット条件と非魅力的で親切なターゲット条件を比較したところ、次のようなことが分かった。低ストレス条件および高ストレス条件の男性の場合も、また、低ストレス条件および高ストレス条件の女性の場合も、一貫して多数派（27 人、22 人、29 人、30 人）が親切なターゲットを選好し、少数派（5 人、10 人、7 人、4 人）が魅力的なターゲットを選好している。

親和選好得点に関する 4 要因の分散分析の結果、親切要因の主効果が有意であり（$F(1,174)=136.641, p<.001$）、親切なターゲットの方を不親切なターゲットよりも選好することが示された。

【総合考察】

研究 1 より、見知らぬ異性に対する選好は、参加者の性とストレス・レベルに依存することが示された。すなわち、男性は、低ストレス下では、親切な女性よりも魅力的な女性を好んだが、高ストレス下では、魅力的な女性よりも親切な女性を好んだ。こうした結果は、男性のパートナー選択に、低ストレス下では配偶者希求動機が作用するが、高ストレス下では自己保護動機が作用すると解釈できる。これに対して、女性は、ストレス・レベルに関係なく一貫して、魅力的な男性よりも親切な男性を好んだ。

研究 1 の結果と研究 2 の結果を総合すると、高ストレス下では、見知らぬ人が同性であっても異性であってもその親切さを、男女とも同じように高く評価する。しかし、低ストレス下では、同性に対しては、男女とも見知らぬ同性の親切さを高く評価するけれども、異性に対しては、女性は見

知らぬ異性の親切さを高く評価するが、男性は見知らぬ異性の魅力を高く評価する。

現代社会がストレスに満ち溢れていること、また、周囲のほとんどの人が見知らぬ他人であるとすれば、魅力的な見知らぬ他人よりも親切な見知らぬ他人の方がより選好されることは驚くことではなく、あまり目立たない親切という特性はもっと注目されてよい。

7. ストレス下での、自分への優しさがウェル・ビーイングに及ぼす効果：Neely et al.（2009）の研究

【問題】

Neely et al.（2009）は、親切とコンパッション（compassion）を同義と見なし、自分への優しさ（self-kindness）をセルフ・コンパッション（self-compassion）として捉えている。コンパッションは、「深い思いやり、慈悲心、同情」を意味する用語であり、セルフ・コンパッションは「自己への思いやり、自己への慈しみ」といった「あるがままの自己を受容すること」を意味する。

アメリカでの Neely et al.（2009）の研究の特徴は、大学生のウェル・ビーイングを規定する要因として目標調整（goal regulation）と情緒調整（emotion regulation）の要因を同時に導入した点にある。セルフ・コンパッションは、後者の情緒調整の能力に関係する要因と見なされる。そして、目標調整力、ストレス、サポートなどの諸要因に比較し、セルフ・コンパッションは、ウェル・ビーイングのより有力な予測因であることを、2 つの研究によって証明しようとしている。

なお、目標調整能力に関しては、達成できない目標を捨てる目標撤回能力と替わりの新たな目標に取り組む新目標追求能力の 2 面から捉える Wrosch, Scheier, Miller, Schulz, & Carver（2003）の考え方と尺度が採用されている。情緒調整能力としてのセルフ・コンパッションに関しては、自己に対する健全な態度で、自己受容の健全な形態であるとする Neff（2003a, 2003b）の定義と尺度が採用されている。

【研究 1：ストレス下でのウェル・ビーイングに及ぼすセルフ・コンパッションの影響】

(1) 目的

ストレスに直面する大学生のウェル・ビーイングに寄与する要因として、目標調整能力よりもセルフ・コンパッションの方がより重要であるかどうかを検討する。

(2) 方法

(a) 参加者と手続き　参加者は 203 人の大学生（男性 141 人、女性 62 人）で、年齢 22 歳以下が 87%であり、2～25 人の集団単位に質問紙を配布し回答させた。

(b) ウェル・ビーイング測度　5 種類の下位尺度（人生の目的、無力感、知覚されたストレス、うっとおしい考え、生活満足感）の合計 46 項目を使用して測定した。探索的因子分析の結果から、単一の潜在因子の存在が示されたので、46 項目の合計得点を用いる（逆転項目あり）。

(c) 予測因測度　①目標調整能力：最近、自分にとって重要な目標を追求するのを止めてしまったときのことを考えさせ、目標撤回尺度（4 項目）と新目標追求尺度（6 項目）に回答させた。②ストレス度：35 項目のストレスフルな出来事リストを示し、それらの出来事が過去 6 か月間に生じたか、また、これからの 6 か月間に生じると予期されるか、を回答させた。出来事の最大値は 100 点（家族成員の死）で、300 点を超えると、健康へのリスクが増大する。③セルフ・コンパッション：どのくらい情緒的にポジティブな自己態度を示すかを測定する尺度（26 項目）に回答させた。

(3) 結果

参加者のストレス度の平均は 309.0 点（*SD*=138.5）であった。ウェル・ビーイングを目的変数とし、4 つの予測因（目標撤回能力、新目標追求能力、ストレス度、セルフ・コンパッション）を説明変数として、説明変数を 3 段階で投入する階層的重回帰分析を行った結果が表 9-10 である。有意水準はすべて 5%に設定してある。

説明変数が目標撤回能力と新目標追求能力の 2 変数のモデル 1 の説明力（決定係数：R^2=.10）に比べ、ストレス度を追加投与した 3 変数のモデル 2 の方が説明力（R^2=.16）は有意に高まり、さらに、セルフ・コンパッションを追加投与した 4 変数のモデル 3 の方が説明力（R^2=.47）は顕著に高まった。

モデル 3 に注目すると、ウェル・ビーイングに対して、セルフ・コンパッションがかなり強い正の影響力（β=.57）をもつことが確認できる。新目標追求能力も、ウェル・ビーイングに対して正の影響力（β=.19）をもつが、セルフ・コンパッションに比べるとその影響力は小さい。なお、ストレス度は、ウェル・ビーイングに対して弱い負の影響力を持つことも示された。

表 9-10　ウェル・ビーイングを目的変数とし、4 つの予測因を説明変数とする階層的重回帰分析の結果（Neely et al. (2009) の Table 3 より作成）

予測因	モデル 1	モデル 2	モデル 3
目標撤回能力	-.11	-.12	-.06
新目標追求能力	.31*	.33*	.19*
ストレス度	—	-.25*	-.18*
セルフ・コンパッション	—	—	.57*
R^2	.10*	.16*	.47*
$\triangle R^2$	—	.06*	.28*

注 1）中欄の数値は標準化係数（β 係数）

注 2）* p<.05

注 3）表内の R^2 と $\triangle R^2$（比率増分）の値に解釈不能な値があるが、数値は元論文のままとした。

【研究 2：サポート下でのウェル・ビーイングに及ぼすセルフ・コンパッションの影響】

(1) 目的

研究 1 のストレス度の代わりにサポートを使用して、ウェル・ビーイングに対するセルフ・コンパッションの影響を再検証する。

(2) 方法

(a) 参加者と手続き　参加者は 271 人の大学生（男性 52 人、女性 219 人）で、年齢 22 歳以下が 84%であり、質問紙をオンラインで配布し、回答させた。参加者の半数は実験室で、残りの半数は自宅で質問紙にアクセスし、回答した。結果に関して、これら 2 群間に差は見られなかった。

(b) 測度　①ウェル・ビーイング、目標撤回能力、新目標追求能力、セルフ・コンパッション：研究 1 と同じであった。②サポート：知覚されたサポート欲求質問紙（10 項目：必要とするサポート）によって、必要とする教育的・情緒的サポートを評定させ、サポートの知覚された利用可能性質問紙（11 項目：知覚されたサポート）によって、3 種類のサポート源（仲間、家族、教師）からもらえそうな知覚されたサポートの程度を評定させた。

(3) 結果

ウェル・ビーイングを目的変数とし、5 つの予測因（目標撤回能力、新目標追求能力、必要とするサポート、知覚されたサポート、セルフ・コンパッション）を説明変数として、説明変数を 3 段階で投入する階層的重回帰分析を行った結果が表 9-11 である。

ウェル・ビーイングに対する説明力は、2 種類の目標調整能力に 2 種類のサポート変数を追加投与することによって大きく高まり、セルフ・コンパッションを追加投与することによって、さらに大きく高まった。研究 1 の結果と同様、5 つの変数のうちセルフ・コンパッションがウェル・ビーイングに対して最も大きい説明力をもつことが確認された。

表 9-11　ウェル・ビーイングを目的変数とし、5 つの予測因を説明変数とする階層的重回帰分析の結果（Neely et al. (2009) の Table 5 より作成）

予測因	モデル 1	モデル 2	モデル 3
目標撤回能力	.08	.04	.04
新目標追求能力	.28*	.19*	.11*
必要とするサポート	—	-.42*	-.29*
知覚されたサポート	—	.25*	.16*
セルフ・コンパッション	—	—	.54*
R^2	.09*	.32*	.56*
$\triangle R^2$	—	.27*	.24*

注 1）中欄の数値は標準化係数（β 係数）

注 2）* p<.05

注 3）Neely et al.（2009）の Table 5 では、必要とするサポートの β 係数の値の符号が正であるが、論文内で示された単相関係数の符号から誤りであると判断し、負の符号に変えた。なお、表内の R^2 と $\triangle R^2$ の値に解釈不能な値があるが、数値は元論文のままとした。

8. まとめ

1) 1 週間のうちの 1 日だけ集中的に 5 つの親切な行為を 6 週間続けさせる介入は、大学生のウェル・ビーイングを高め（Lyubomirsky et al., 2004）、10 日間毎日親切な行為を記録させる介入は、成人の生活満足感を高めた（Buchanan & Bardi, 2010）。

2) 14 日間毎日その日に実行した親切な行為を記録させる介入は、成人クライエントのウェル・ビーイング、楽観的期待、他者との絆の感覚を高め、不安を低下した（Kerr et al., 2015）。

3) 1 週間に 3 つの親切な行為を 4 週間実行させ、報告させる介入は、思春期直前の児童の生活満足感、幸福感、ポジティブ感情、仲間からの受容を高めた（Layous et al., 2012）。

4) 発達段階に対応する①自己中心的・主観的親切、②特定の文脈依存的親切、③互恵的親切、④社会的･倫理的原理に基づく親切､の 4 段階の親切から構成される親切尺度が作成された（Comunian, 1998）。

5) 他者から受けた親切を想起させると、ポジティブな情緒反応、親しい他者・恩恵を施してくれる他者への親切動機、見知らぬ他者への親切な行為が増加し、このことは社会的規範に一致した親切を想起する場合に顕著であった（Exline et al., 2012）。

6) 相互作用の相手として、ストレスのない状況で男性が親切な異性よりも魅力的な異性を選好することを除けば、男性は、ストレスのある状況あるいは相手が同性の場合は、魅力よりも親切さを重視し、女性は、ストレスのいかんにかかわらず、相手が同性でも異性でも、魅力よりも親切さを重視した（Li et al., 2008）。

7) ストレス状況下での自分への優しさは、自身のウェル・ビーイングを高める最も重要な要因であった（Neely et al., 2009）。

以上のように、親切な行為を実行させる場合は言うに及ばず、実行した親切な行為を単に記録させるだけでも、児童から成人まで幅広い年齢層で、健常者から心理治療を必要とするクライエントまで、情緒、動機、行為などの諸側面においてポジティブな効果が期待できることが介入研究から示唆される。そして、自分の実行する親切な行為ではなく、他者から受けた親切な行為を思い出すだけで、他者に対する親切動機や親切な行為が増加するのは非常に興味深い知見である。また、一般的には（7/8 条件で）、人は相互作用相手として、魅力的な人よりも親切な人を好むが、例外的に、ストレスがない状況で男性が異性を選ぶ場合にのみ（1/8 条件）、親切さよりも魅力が重視される点は面白い。加えて、発達的に見て 4 段階の親切があり、各段階の親切が測定可能であること、自分への優しさがストレス下でのウェル・ビーイングの改善に役立つことも価値ある発見である。

第 3 節　欧米における親切の医学的研究

Ferrucci（2006）によると、親切をすることは、親切をされることと同じくらい我々を大変心地良くするので、親切な人は、親切でない人よりも、より健康で、より長生きするし、より人気がありより生産的であり、仕事でより成功し、より幸福である。そして、親切は、温かさ、信頼、忍耐、誠実さ、感謝、そのほかの多くの資質の間の相互作用の結果であり、これらの要素から構成されると考えられる。そうした資質の 1 つが欠けても、親切はその確からしさを低下させてしまうと言う。

親切をすることが親切をする人自身に様々なポジティブな心理的効果および身体的効果をもたらすことに関して、それを裏付ける医学的な証拠をハミルトン（2011）が提出している。

1. オキシトシンの分泌を媒介として、親切が幸福と健康の増進に及ぼす効果：ハミルトン（2011）の研究

有機化学者ハミルトン（2011）によると、親切をすると、その人の脳内にオキシトシンという脳内物質が分泌されることによって、親切な人は幸福になり、人間関係が改善し、健康になる。

（1）親切の効果の概要

ハミルトン（2011）は、“親切なことをするとストレスが消え、健康になる”（p.19）と言う。人助けをすると、良い気分になる現象「ヘルパーズ・ハイ（helper’s high）」が知られているが、同じ仕組みによって、親切をすると、よい気分、温かい気持ちになる。人に親切をすると、脳内に脳内麻薬、セロトニン、オキシトシン（oxytocin）といった脳内物質が分泌され、これらの化学物質が気分の改善や楽観的な心理状態をもたらす。また、人に親切をすると、身体的な痛みが軽減し、老

化の速度が遅くなり、寿命が延びる。加えて、他者の親切行動を見聞きしただけでも、健康になれるマザー・テレサ効果（Mother Teresa effect）も存在する。こうした心と体に対する親切行動の効果に中心的な役割を果たすのがオキシトシンである。

（2）共感－思いやり－親切の連鎖

他者に対する親切を繰り返すことによって、脳に化学的・構造的変化が生じ、脳に親切への回路がつくられるため、さらに親切になっていく。他者の気持ちを理解しようとする共感（empathy）を高めれば、苦しんでいる他者に対する思いやり（compassion：有田は「情け」と訳している）が自然に湧き、その他者に親切にできるようになる。思いやりの心をもつことは健康の改善に直接役立つ。ハミルトン（2011）は、“思いやりを養う訓練を長期的にやっていると、迷走神経が活性化されて、さまざまな病気を予防できる可能性がある・・・”（p.68）と述べている。なぜならば、迷走神経は､癌や心臓病などの多くの病気や老化の原因となる炎症性サイトカイン（炎症を促進する物質）の過剰放出を抑制する働きをもつからである。

（3）オキシトシンの性質と役割

オキシトシンは、脳内物質「神経ペプチド」の一種である。ハミルトン（2011）は、「神経ペプチド」の性質と役割を、“神経ペプチドは、脳の視床下部というところでつくられ、私たちが思考や感情を抱くと、下垂体という場所に流れ込みます。そして、血管を通って体内を巡り、各所で細胞表面の受容体に取りついて、指令を伝達します。”（p.72）と説明している。そして、神経ペプチドを丸や四角のブロック、細胞を穴の開いた箱、受容体を穴で例え、細胞へ情報が伝わることをブロックが穴にはまることと例えている。すなわち、神経ペプチドは、脳から体中の細胞へ、情報を伝達する役割をもつが、その中でも 9 個のアミノ酸の結合したオキシトシンが重要である。

（4）オキシトシンの分泌の発生因

オキシトシンは、“①人とのつながりを感じたとき、②恋愛感情を抱いたとき、③セックスをしたとき”（p.74）に分泌されるので、「幸せ物質」、「愛情物質」とも呼ばれる。また、④抱擁したときにも、お互いにオキシトシンが分泌されるので、「抱擁物質」と呼ばれることもある。

親切をすることは、上記の①の人とのつながりが生まれる行為であるので、親切をする側と親切をされる側の双方にオキシトシンが分泌される。その意味で、オキシトシンは、人と人の絆の指標でもある。

（5）心と体へのオキシトシンの効果

オキシトシンが増えると、その人の心に次のような効果が表れる。①ひとを信じやすくなる。②裏切られても人を信頼し続ける。③恐怖や不安が抑制される。④知らない人が魅力的に見える。⑤相手の感情を正確に読み取れるようになる。⑥他者の顔を覚えやすくなる。

オキシトシンが増えると、その人の全身の機能や健康を高める、次のような効果が表れる。①胃での食べ物の消化（胃排出）を促す。②大腸の排泄機能を促す。③細菌感染や慢性的ストレスなどによる体内の炎症を抑制する。④血管を広げて血圧を下げる。⑤動脈硬化を防ぐ。⑥老化を防ぐ。⑦血管新生を促す（傷を治りやすくする）。⑧心臓疾患のリスクを低下させる。

（6）オキシトシンを体内でつくる方法

“幸せな気持ちになり、人間関係もうまくいき、体も元気にしてくれる”（p.88）オキシトシンを体内でつくる方法として、ハミルトン（2011）は次の 7 つを提案している。これらの提案の本質は、“他者とつながるあらゆる行為が、オキシトシンを分泌させる”（p.94）と読み取れる。

①親切をする。親切をするのが一番の基本である。ハミルトン（2011）が提出した親切を実践する際に役立つ 40 の親切行動については第 2 章で表 2-6 に示した。

②感動する。他者から感動や元気をもらうと、気持ちが高ぶり、オキシトシンが分泌される。

③感情を表に出す。怒りや悲しみなどのネガティブな感情をため込んだり我慢したりしないで、表出する。

④マッサージを受ける。マッサージで疲労回復し、かつオキシトシンを増やして元気になる。

⑤愛する人と精神的に支え合う、スキンシップをとる。配偶者や恋人との絆の強さやスキンシップがオキシトシンを増やす。また、精神的な絆で結ばれた友人をもつことは、オキシトシンを増やすのに有効である。

⑥抱擁をする。異性との抱擁がオキシトシンを増やす。

⑦ペットをなでる。人との触れ合いが難しい場合は、ペットと触れ合う。触れ合うことで、飼い主もペットも双方が健康になる。なお、触れ合う対象は動物でなくても、植物でもよい。植物に愛情を注いで世話をすることによってもオキシトシンは増える。

（7）親切の実践のためのエクササイズ

親切を実践するために効果的な 2 つのエクササイズを、ハミルトン（2011）が紹介している。1 つ目は、親切の「3 週間」運動である。この運動は、3 週間の間毎日親切を実行し、用意した日記帳に、①その日に実行した親切の内容、②親切をすることによってどんな気持ちになったか、③できれば、相手に与えた影響、を書きとめる。3 週間続ければ、親切は習慣化し、意識しなくても実行できるようになる。

2 つ目は、「1 日 3 回」親切運動である。毎日親切をするのが困難に思う人の場合、週に 1 日だけ親切をする曜日を決めて、その曜日に 3 回の親切を実行する。学校や職場などで、グループで実行するのもよい。

2. 親切のもたらす幸せのタイプ：監訳者・有田（2011）の見解

幸せ物質・愛情物質と呼ばれる神経物質のオキシトシンと親切との関係について、有田（2011）は、“親切な行動をとった瞬間、心と体に変化が起き、親切をした本人は無条件に幸せを手に入れることができる”（p.3）と述べ、医師としての立場から、以下のような見解を提示している。人に親切をすると、温かくていい気分になるが、このいい気分が、ストレスを解消し、健康を守る鍵になる。いい気分の元となるオキシトシンは、他者との身体的ふれあいや心のふれあいによって分泌され、親切な行為はオキシトシンの分泌に特に効果的である。すなわち、親切な行為をするとオキシトシンが分泌され、このオキシトシンが脳内で働くことによって心を変え、血液中のホルモンとなって体を変える。その具体的な効果として、次の 5 つの効果を挙げている。①人への親近感、信頼感が増す。②ストレスが消え、幸福感を得られる。③血圧の上昇を抑える。④心臓の機能をよくする。⑤長寿になる。

また、有田（2011）は、脳の仕組みから幸せになる方法には 2 つあると指摘する。1 つは、試験に合格する、試合に勝つといった目標達成や夢の実現によって得られる幸せで、神経物質のドーパミンが関係する。ドーパミンが関係する幸せは、舞い上がるような幸せ感や高揚感といった大きい快感をもたらすが、その幸せ感は長く続かず、次々に新たな目標や夢を追いかけ、エスカレートすることになる。これに対して、他者への親切や人とのふれあいによって得られる、オキシトシンが関係する幸せは、“心に灯がともるような、ほんのりと長続きする幸せ感”（p.7）であり、成果や競争とは無関係の幸せである。これこそ我々が目指すべき「本当の幸せ」ではないか、と有田（2011）は考えている。そして、親切の見返りを求めるとドーパミンが働くので、“親切をするときに見返りを求めない”（p.8）ように注意を喚起している。

第 10 章　親切の構造に関する測定的研究

本章では、筆者が実施した親切に関する 3 つの測定的研究を「親切の構造に関する測定的研究」として報告する。第 1 節「親切の意味構造」では、親切の類似語の意味的距離（類似度の逆数）から親切の意味的構造を明らかにし、親切意味尺度を作成する。第 2 節「親切の行動的構造」では、実行に伴う負担度が比較的小さい親切行動を利用して、親切の行動的構造を解明し、未知の他人用親切行動尺度と友人・知人用親切行動尺度を作成する。第 3 節「不親切の動機的構造」では、親切をしない動機の構造を究明し、未知の他人用不親切動機尺度を作成する。

第 1 節　親切の意味的構造

1. 問題

(1) 研究の背景

欧米人の親切と異なる、日本人独自の親切について論じた近藤（2007a）は、日本的な親切論を提出した。

近藤（2007a）は、「親切心」を「他人に対するあたたかな思いやり」と表現しており、親切心の中核的心性を「思いやり」と捉え、「思いやり」の「あたたかさ」を強調している。また、深田（2015a）は、近藤（2007a）の親切心を整理し、親切心には、「ささやかさ」と「あたたかさ」が常に随伴すると指摘した。親切心の基本的心性は、「優しさ」、「思いやり」、「愛」、「好意」であり、このほかに、「善意」、「同情」、「慈しみ」、「利他性」があり、これらは全て「あたたかさ」を共通要素としてもつと同時に、全て「ささやかな」ものである、と考えるところに近藤（2007a）の親切心の特徴が見られる。また、少し次元が異なるが、親切心を構成する心性として、近藤（2007a）は、自発性と任意性も挙げている。

近藤（2007a）が挙げた「親切な人」の特徴を、深田（2015a）は、「親切にする人」の特徴と「親切を乞われる人」の特徴とに区別して整理した。その結果、親切にする人は、「よく気のつく人」、「思いやりのある人」、「好意的な人」、「善意の人」、「同情的なひと」、「人見知りしない人」、「腰の軽い人」、「世話好きな人」、「利他的な人」であることが示された。この親切にする人の特徴から、親切の意味内容は、「気のつきやすさ」、「思いやり」、「好意」、「善意」、「同情」、「人好き」、「腰の軽さ」、「世話好き」、「利他性」であると推測される。

また、親切を乞われる人は、「優しそうなひと」、「暇そうなひと」、「求める能力をもっていそうな人」、「（親切な行為内容を）仕事にしていない人」、「たまたま近くに居合わせる人」であることが示された。この親切を乞われる人の特徴は、親切の意味内容とは直接関連しないものが多く、わずかに「優しさ」のみが親切の意味内容に関連すると解釈される。

しかし、 わが国における親切に関する本格的な心理学的研究は、北村（2012）と Otake et al.（2006）

のほかは見当たらず、しかも、全ての研究が親切という用語の概念を明確に示さないままに実施されてきた。

(2) 本研究の目的

親切の意味内容に関しては、国語辞典の記述内容の分析から、人に対する愛他的な気持ちや振る舞いであり、心理的側面と行動的側面から成立することが判明した。また、親切心および親切な人の特徴に関する哲学的考察から、親切の意味内容はあたたかい思いやりを中核とすることが示唆された。しかし、親切の意味内容を特定するような心理学的研究は、いまだ実施されていないのが現状である。

そこで、本研究では、親切の意味的構造を解明し、親切の意味を測定するための親切意味尺度を作成することを目的とする。

目的を達成するために、まず、親切の類似語を収集し、次に、収集した類似語を理解可能な水準の類似語に絞り込み、続いて、理解可能な類似語と親切との類似度（意味的距離の逆数）を測定し、最終的に、類似語と親切との類似度（意味的距離の逆数）を利用した因子分析によって、親切の類似語の構造、すなわち、親切の意味的構造を解明する。結果的に、そうした過程が親切意味尺度を作成することに繋がる。

2. 予備調査 1

(1) 目的

親切の類似語を、類語辞典を中心に収集する。

(2) 方法

(a) 類似語の収集　親切の類似語を収集するために、以下の 3 種類の類語辞典を使用した。①大野晋・浜西正人（著）（1981）『角川類語新辞典』角川書店。②志田義秀・佐伯常麿（編）（1974）『日本類語大辞典』講談社。③山口翼（編）（2003）『日本語大シソーラス――類語検索大辞典』大修館書店。

3 種類の類語辞典から 90 項目の類似語を収集した。心理学を専門とする大学教員 1 人と大学院生 4 人の合議により 5 項目を追加し、合計 95 項目の類似語を収集した。

(b) 類似語の取捨選択　収集した 95 項目の類似語を、次の 3 つの削除基準に基づいて、上記の 5 人の合議により取捨選択し、35 項目に絞り込んだ。①最近使用されない語。②親切の意味から比較的遠い語。③大学生に理解されにくい語。

(3) 結果

予備調査 1 で、最終的に収集した親切の類似語 35 項目を表 10-1 に示した。

表 10-1　予備調査 1 で収集した親切の類似語 35 項目

1. 思いやり	8. 気に掛ける*	15. 気配り*	22. 丁寧*	29. 友好的*
2. 心配り*	9. 心がけの良い	16. 好意	23. 献身的*	30. 厚意*
3. 人情のある*	10. 大切	17. 心の籠った*	24. 温厚*	31. 老婆心*
4. 温かい*	11. 情け深い*	18. 細やか*	25. 懇切*	32. 厚情*
5. 世話好き	12. 優しい	19. 心温まる*	26. 親心*	33. 懇意*
6. 善意*	13. 親身になる*	20. 気遣い*	27. 手厚い*	34. 懇親*
7. 心にかける	14. 心尽し*	21. 心遣い*	28. 丁重*	35. ねんごろ

注 1）次の予備調査 2 および後の本調査では、右肩に*印を付けた類似語の漢字の全部あるいは一部にルビを振って用いた。

3. 予備調査 2

(1) 目的

予備調査 1 で収集した 35 項目の親切の類似語に対する大学生の理解度を測定し、後の本調査で親切と類似語との類似度を測定する際に利用可能な類似語、すなわち、大学生に理解可能な親切の類似語を特定する。

(2) 方法

(a) 調査対象者と調査手続き　調査対象者は、女子大学生 40 人であり、39 人から有効回答が得られ、有効回答率は 97.5％であった。有効回答者の平均年齢は、18.6 歳（*SD*=0.50）であった。「親切に関する調査」という題目の質問紙調査を、集合調査法により、2013 年 10 月に実施した。

(b) 質問紙の構成　質問紙は、A4 用紙 3 枚の片面印刷であり、1 枚目が表紙、2 枚目と 3 枚目が親切の類似語の理解度を問う質問項目と回答欄であった。表紙には、調査題目、教示、対象者の年齢等の記入欄、調査者の氏名と連絡先等が印刷してあった。教示の冒頭で、「この調査は、親切の意味に関して、お尋ねするものです。」と、調査の趣旨を説明した。

(c) 質問紙の内容　予備調査 1 で得られた、35 項目の親切の類似語を示し、「親切に関連する 35 個の言葉の意味がどのくらいわかるか」と理解度を尋ね、「まったくわからない」（1 点）、「あまりわからない」（2 点）、「だいたいわかる」（3 点）、「よくわかる」（4 点）の 4 段階評定で回答を求め、得点化した。

(3) 結果

35 項目の親切の類似語に関する理解度得点の平均値と標準偏差を算出し、表 10-2 に示した。対象者にある程度以上理解可能な類似語を選択するための基準を、理解度得点の平均値が 3.0 以上とした。したがって、理解度の平均値が 3.0 未満の類似語は対象者の理解が不十分な類似語と判断し、削除することにした。その結果、本調査で親切と類似語との類似度を測定する際に利用可能な類似語、すなわち、大学生に理解可能な親切の類似語は 22 項目であることが判明した。

表 10-2　親切の類似語の理解度得点の平均値と標準偏差

1. 思いやり	3.56	(0.50)	19. 心温まる	3.51	(0.59)
2. 心配り	3.33	(0.57)	20. 気遣い	3.64	(0.53)
3. 人情のある	3.10	(0.78)	21. 心遣い	3.41	(0.59)
4. 温かい	3.62	(0.54)	22. 丁寧	3.62	(0.58)
5. 世話好き	3.72	(0.50)	23. 献身的*	2.82	(1.06)
6. 善意	3.36	(0.83)	24. 温厚	3.05	(1.01)
7. 心にかける*	2.64	(0.83)	25. 懇切*	2.00	(0.88)
8. 気に掛ける	3.49	(0.50)	26. 親心	3.26	(0.81)
9. 心がけの良い	3.05	(0.75)	27. 手厚い*	2.80	(0.97)
10. 大切	3.72	(0.50)	28. 丁重*	2.90	(0.93)
11. 情け深い*	2.85	(0.89)	29. 友好的	3.28	(0.82)
12. 優しい	3.77	(0.42)	30. 厚意*	2.54	(1.01)
13. 親身になる	3.64	(0.66)	31. 老婆心*	1.67	(0.76)
14. 心尽くし*	2.74	(0.93)	32. 厚情*	2.00	(1.04)
15. 気配り	3.44	(0.55)	33. 懇意*	1.87	(0.94)
16. 好意	3.59	(0.63)	34. 懇親*	1.85	(0.89)
17. 心の籠った	3.51	(0.75)	35. ねんごろ*	1.85	(0.89)
18. 細やか	3.05	(0.71)			

注 1）表内の数値は、平均値（標準偏差）である。

注 2）項目名の右肩に*印を付けた類似語は、理解度が低いため削除する項目である。

4. 本調査

(1) 目的

予備調査 2 の結果から得られた、理解度の高い親切の類似語 22 項目を使用して、親切とその類似語との類似度（意味的距離の逆数）を測定し、因子分析を利用して親切の類似語の構造を検討する。これによって、親切の意味的構造を解明し、親切意味尺度を作成する。

(2) 方法

(a) 調査対象者と調査手続き　調査対象者は、女性 110 人であり、110 人全員から有効回答を得た。対象者の内訳は、大学生 97 人、大学院生 7 人、25 歳以下の社会人 6 人であった。対象者の平均年齢は、20.1 歳（*SD*=1.80）であった。「親切の類似語に関する調査」という題目の質問紙調査を、大学生の場合は集合調査法により、大学院生と社会人の場合は個別調査法により、2013 年 12 月から 2014 年 1 月にかけて実施した。

(b) 質問紙の構成　質問紙は、A4 用紙 3 枚の片面印刷であり、1 枚目が表紙、2 枚目と 3 枚目が親切とその類似語との類似度を問う質問項目と回答欄であった。表紙には、調査題目、教示、対象者の年齢等の記入欄、調査者の氏名と連絡先等が印刷してあった。教示の冒頭で、「この調査は、親切の類似語に関して、お尋ねするものです。」と、調査の趣旨を説明した。

(c) 質問紙の内容　予備調査 2 で得られた、22 項目の親切の類似語を示し、「親切に関連する 22 個の言葉が、親切という言葉の意味とどのくらい似ているか」と類似度を尋ね、「まったく似ていない」（1 点）、「やや似ている」（2 点）、「わりと似ている」（3 点）、「かなり似ている」（4 点）、「極めて似ている」（5 点）の 5 段階評定で回答を求め、得点化した。

(3) 結果と考察

(a) 類似語と親切との類似度　22 項目の親切の類似語の類似度得点の平均値と標準偏差を算出し、表 10-3 に平均値が高い順に示した。22 項目の類似語のうち、平均値が 3.50 以上の比較的類似度が高いと回答された類似語は、「思いやり」、「心配り」、「親身になる」、「優しい」、「心遣い」の 5 項目であり、平均値が 3.00 以上 3.50 未満で次に類似度が高いと回答された類似語は、「気遣い」、「気配り」、「善意」、「温かい」、「心の籠った」、「気に掛ける」の 6 項目であった。

表 10-3　22 項目の類似語の、親切との類似度得点の平均値と標準偏差：平均値の高い順

1. 思いやり	3.83	(0.96)	12. 人情のある	2.97	(0.93)
2. 心配り	3.66	(1.00)	13. 心がけのよい	2.81	(1.13)
3. 親身になる	3.60	(1.10)	14. 世話好き	2.67	(1.16)
4. 優しい	3.55	(1.09)	15. 心温まる	2.66	(1.22)
4. 心遣い	3.55	(1.06)	15. 温厚	2.66	(1.17)
6. 気遣い	3.41	(1.17)	17. 友好的	2.52	(1.13)
7. 気配り	3.37	(1.00)	18. 好意	2.50	(1.19)
8. 善意	3.32	(1.09)	19. 丁寧	2.45	(1.11)
9. 温かい	3.22	(1.18)	20. 細やか	2.42	(1.14)
10. 心の籠った	3.17	(1.12)	21. 大切	2.41	(1.19)
11. 気に掛ける	3.14	(1.10)	22. 親心	2.30	(1.05)

注 1）表内の数値は、平均値（標準偏差）である。

注 2）項目番号は、平均値の順位を示す。

本来は、類似度が高いと回答された類似語のみを使用して、親切の意味的構造を検討しなければならない。しかし、本調査で使用した 22 項目の類似語の類似度平均値は予想よりも全体的に低く、半数の 11 項目は 1～5 点の 5 点尺度で中間値の 3 点を下回っていた。これは、類似している語のみを対象者に提示して類似度判断を求めたことが原因であるかもしれない。もし、類似度の低い、親切に関連しない非類似語も同時に提示したならば、対比効果によって、類似語の類似度が相対的に高く判断された可能性が大きいが、一定以上の類似度をもつ類似語のみを提示した本調査の場合、提示した類似語内で対比効果が働き、相対的に類似度の低い類似語の類似度がより低く判断された可能性が高いと解釈できる。そこで、類似度測定に使用した 22 項目の類似語を全て使用して、以後の分析を行うこととした。

(b) 類似度得点の因子構造　22 項目の類似語の類似度得点に関して、主因子法による因子分析を行い、固有値の推移から、3 因子解を採用した。この最初の因子分析段階での第Ⅰ因子、第Ⅱ因子、第Ⅲ因子の寄与率は、それぞれ 37.83％、9.09％、7.71％であり、3 因子の累積寄与率は 54.63％であ

った。

3 因子解を指定し、不適切な項目を削除しながら、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を繰り返し行った。各項目が適切であるかどうかの判断基準は、①いずれかの因子に対して絶対値で.45 以上の負荷量を示すこと、②その因子への負荷量と他の因子への負荷量の差が.20 以上であること、の 2 つの基準を同時に満たすことであった。その結果、上記の判断基準を満たさない 5 項目（親身になる、優しい、気遣い、人情のある、細やか）を削除した。

17 項目を使用した最終的な因子分析の結果を表 10-4 に示した。第Ⅰ因子には、「友好的」、「好意」、「心温まる」、「温かい」など 9 項目が含まれていたので、「温かい好意」因子と命名した。第Ⅱ因子には、「心配り」や「思いやり」など 4 項目が含まれていたので、「思いやりのある配慮」因子と命名した。第Ⅲ因子には、「世話好き」や「善意」など 4 項目が含まれていたので、「善意の世話好き」因子と命名した。

表 10-4　親切と類似語の類似度得点に関する因子分析結果
（α＝.90、主因子法、プロマックス回転）

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
第Ⅰ因子「温かい好意」			
友好的	**.81**	-.18	-.01
親心	**.78**	-.11	-.13
好意	**.76**	.11	-.04
温厚	**.72**	.07	-.05
丁寧	**.60**	-.21	.25
心温まる	**.59**	.21	-.01
大切	**.58**	.08	.05
心の籠った	**.56**	.26	-.04
温かい	**.46**	.19	.18
第Ⅱ因子「思いやりのある配慮」			
心配り	-.22	**.96**	-.04
気配り	.05	**.68**	.17
思いやり	.15	**.61**	-.17
心遣い	.08	**.57**	.11
第Ⅲ因子「善意の世話好き」			
世話好き	.06	-.28	**.80**
心がけのよい	-.01	.08	**.71**
善意	-.17	.14	**.62**
気に掛ける	.05	.19	**.60**
因子間相関　Ⅰ		.54	.56
Ⅱ			.51

表 10-4 には、因子間相関を併せて示した。3 因子間には.51～.56 という中程度の正の相関関係が存在することが明らかとなった。なお、17 項目の尺度全体の内的整合性は、クロンバックのα係数が.90 であり、尺度に高い内的整合性が存在することが証明された。

因子ごとのα係数、および平均値と標準偏差を表 10-5 に示した。各因子別のα係数は.78～.89 であり、それぞれの因子を構成する項目間に許容できる水準の内的整合性のあることが判明した。類似度得点の大きさを因子間で比較するために、1 要因 3 水準の対応のある分散分析を行ったところ、3 因子間に有意差（$F(2, 218) = 72.418$, $p<.001$）が存在することが分かった。そこで、各因子間の差を多重比較（有意水準を 5%に設定）によって検定したところ、各因子の間にはすべて有意差が存在することが示された。すなわち、第Ⅱ因子「思いやりのある配慮」の類似度得点が最も高く、第Ⅰ因子「温かい好意」の類似度得点が最も低く、第Ⅲ因子「善意の世話好き」の類似度得点がその中間の値であることが明らかとなった。

以上より、親切の類似語は 3 因子構造をもつこと、すなわち親切の意味的構造は 3 因子構造であることが実証された。そして、親切の意味を測定するための 17 項目 3 因子の親切意味尺度を作成することができた。

表 10-5　類似度得点に関する因子別のα係数、平均値および標準偏差

因子	α係数	平均値（標準偏差）
第Ⅰ因子「温かい好意」	.89	2.65　(0.84)
第Ⅱ因子「思いやりのある配慮」	.81	3.61　(0.80)
第Ⅲ因子「善意の世話好き」	.78	2.99　(0.86)

5. 総合考察

(1) 親切の意味的構造

(a) 予備調査と本調査からの知見　予備調査 1 で、3 種類の類語辞典を中心に、95 項目の親切の類似語を収集し、その 95 語を 3 つの削除基準に照らし、35 項目に絞り込むことができた。予備調査 2 では、35 項目の親切の類似語を使用して、理解度を測定し、理解度の高い 22 項目に親切の類似語を絞り込むことができた。本調査では、22 項目の親切の類似語を使用して、親切と類似語との類似度を測定した。そして、類似度得点に関する因子分析の結果から、3 因子が抽出された。第Ⅰ因子は「温かい好意」因子、第Ⅱ因子は「思いやりのある配慮」因子、第Ⅲ因子は「善意の世話好き」因子と命名された。このように、「親切」の意味的構造は 3 因子構造であることを解明し、最終的に、親切の意味を測定するための 17 項目 3 因子から成る親切意味尺度を作成することに成功した。

なお、尺度から削除した 5 項目の類似語のうち、親切との高い類似度を示す「親身になる」と「優しい」の 2 項目は、補足的に単項目の形で、親切意味尺度に追加して使用することも考えられる。

(b) 親切意味尺度の信頼性と妥当性　本研究で作成した親切意味尺度の信頼性と妥当性に関しては、特別な検討を行ってはいない。しかし、17 項目の尺度全体の内的整合性は非常に高く（α=.90）、尺度を構成する各因子の内的整合性も高い（α=.78～.89）ことが判明しており、親切意味尺度の信頼性は高いと判断できる。また、本研究で使用した親切の類似語は、類語辞典から収集した類似語であり、しかも、現代の若者に理解可能な類似語に限定していることから、親切意味尺度の内容的妥当性は保証されると解釈できるが、統計的妥当性を確認することが今後の課題として残る。

(c) 親切の意味的構造の特徴　親切意味尺度の第Ⅰ因子は、「温かい好意」であった。近藤（2007a）の親切心を整理した深田（2015a）は、親切心の基本的心性が「優しさ」、「思いやり」、「愛」、「好意」であるが、これらの基本特性には「ささやかさ」と「あたたかさ」が常に随伴すると指摘した。「温かい好意」因子は、近藤（2007a）および深田（2015a）の見解と一致する。すなわち、親切の基本特性の 1 つである「好意」と、基本特性の共通要素である「あたたかさ」の結合した「温かい好意」が第Ⅰ因子として抽出された点は興味深い。

親切意味尺度の第Ⅱ因子は、「思いやりのある配慮」であった。近藤（2007a）が「親切心」を「他人に対するあたたかな思いやり」と表現していることから、深田（2015a）は、親切心の中核的心性を「思いやり」と捉え、「あたたかい」が「思いやり」の「あたたかさ」を強調していると解釈した。「思いやりのある配慮」因子は、近藤（2007a）および深田（2015a）の見解と一致しする。

親切意味尺度の第Ⅲ因子は、「善意の世話好き」であった。近藤（2007a）は、親切心の基本的心性以外に、「善意」、「同情」、「慈しみ」、「利他性」を重要な心性とみなし、また、親切な人の特徴の 1 つに「世話好きな人」を挙げていた。「善意の世話好き」因子は、そうした近藤（2007a）の見解とも一致する。

以上のように、本研究で得られた親切の意味的構造を示す因子は、近藤（2007a）の親切論の見解および深田（2015a）によるその解釈と矛盾しないものであり、理論的に仮定される親切の心理的特徴との間に高い整合性を示すものであった。

そして、第Ⅰ因子として抽出されたのは「温かい好意」因子であり、親切との類似度が最も高いと判断されたのは、第Ⅱ因子として抽出された「思いやりのある配慮」因子であることから、「親切」の意味の中核を構成するのは、「温かい好意」と「思いやりのある配慮」であること、これに「善意の世話好き」が補強するように加わる形で、親切の意味が成立していると解釈できる。

(2) 今後の課題

本研究では、親切がどのような意味から成り立っているのか、という意味的構造から親切を解明することができた。一方では、親切はどのような具体的行動から成り立っているのか、という行動的構造を解明することが必要である。そして、親切の意味的構造と親切の行動的構造の対応関係を検討することによって、親切を多面的に理解する必要があるだろう。

6. 要約

本研究では、親切の意味的構造を解明し、親切を測定するための親切意味尺度を作成することを目的とした。予備調査 1 で、親切の類似語を収集し、予備調査 2 で、収集した類似語を理解可能な水準の類似語に絞り込み、本調査で、理解可能な類似語と親切との類似度（意味的距離の逆数）を測定し、その類似度得点を利用した因子分析によって、親切の類似語の構造、すなわち、親切の意味的構造を検討した。その結果、第Ⅰ因子「温かい好意」、第Ⅱ因子「思いやりのある配慮」、第Ⅲ因子「善意の世話好き」の 3 因子を抽出し、親切の意味的構造が 3 因子構造であることを解明した。そして、親切の意味を測定するための 17 項目 3 因子から成る親切意味尺度を作成した。

キーワード：親切、類似語、意味的構造、親切意味尺度

第 2 節　親切の行動的構造

1. 問題

(1) 研究の背景

親切の心理学的研究の基本的枠組みを論じた深田（2015a）は、“親切にかかわる行動は、対人相互作用における対人行動の一種であり、時系列的に示すと、①親切を求める行動（親切要請行動）、②親切を提供する行動（親切（提供）行動）、③親切を受容する行動（親切受容行動）、④行為者に対する対象者の行動（親切返礼行動）、の 4 種類となる。”と述べている。そして、深田（2015a）は、親切にかかわる 4 種類の行動のうち、親切提供行動（親切行動）が最も重要であり、親切行動に関する心理学的研究としては、親切行動の生起の促進・抑制要因の解明が最大の関心事になる、と考えた。

親切行動の規定因を解明する以前に、親切行動の実態としての親切行動の種類を把握しておく必要がある。しかし、親切行動の種類に関しては、データベース「CiNii Articles」による検索を試みても、先行研究が見当たらない。親切行動に関連の深い、援助行動、愛他的行動、向社会的行動の研究領域において、それらの行動の種類を検討している先行研究を調べた深田（2015a）は、それらの先行研究が親切行動の種類を検討する際に直接的な参考になると指摘した。

向社会的行動の研究領域では、Amato & Pearce（1983, 高木, 1987c による）の 62 項目の援助エピソード（4 群）、菊池（1988）の 20 項目の向社会的行動、高木（1982）の 22 項目の向会的行動（7 クラスター）、高木（1987a）の 41 項目の向社会的行動（9 クラスターあるいは 6 因子）、高木（1991）の 25 項目の向社会的行動、横塚（1989）の 20 項目の向社会的行動（5 因子）、が提出されている。また、愛他的行動の研究領域では、永井（2011）の 13 項目の愛他的行動、小田他（2013）の 21 項目の愛他的行動（3 対象群）が提出されている。さらに、援助行動の研究領域では、原田（1990）の 20 項目の援助行動（7 類型）、松井（1981）の 26 項目の援助行動（3 次元）、西川（1997）の 32 項目の援助行動（4 カテゴリー）が提出されている。

以上の関連領域における行動研究を参考にすると、①親切行動にはどのような典型的な行動が存在するのかという典型的な親切行動の特定と、②典型的な親切行動がどのように分類されるのかという親切行動の構造の解明、という 2 つの課題を指摘することができる。

(2) 本研究の目的

本研究では、典型的な親切行動を特定し、親切の行動的構造を解明し、親切行動を測定するための親切行動尺度を作成することを目的とする。

目的を達成するために、まず、親切行動を収集し、次に、収集した親切行動を、実行可能性と実行に伴う負担度の次元から絞り込み､続いて､親切行動の実行可能性を利用した因子分析によって、親切の行動的構造を解明する。結果的に、そうした過程が親切行動尺度を作成することに繋がる。

2. 予備調査

(1) 目的

典型的な親切行動を収集する。

(2) 方法

以下のような 4 段階の手続きにより、親切行動の項目収集を行った。なお、下記の(b)と(c)の手続きは、心理学を専門とする大学教員 1 人と大学院生 4 人の合議により行った。

(a) 4 つの先行研究からの項目収集　Amato & Pearce（1983）の援助エピソードのリスト 62 項目、西川（1997）の主婦の援助行動リスト 32 項目、小田他（2013）の対象別利他行動尺度 21 項目から家族を対象とする 7 項目を除く 14 項目、高木（1982）の順社会的行動のリスト 22 項目、の合計 130 項目を収集した。

(b) 不適当な項目の削除　次の 3 つの削除基準に基づき、不適当な項目を削除した。①日本社会では不適切となる行動。②大学生にとって不適切となる行動。③実行に伴う負担や犠牲が大きい行動。

(c) 項目や表現の調整　次の 4 つの基準に基づき、項目や表現について、統合、分割、修正、追加を行った。①内容が類似している項目を統合する。②内容が複合的である項目を分割する。③表現が不適切である項目を修正する。④内容が不足している場合、項目を追加する。

(d) 親切の対象別の分類　最終的に 48 項目の親切行動を収集することができたが、この 48 項目の親切行動は、親切の対象によって、未知の他人用 39 項目、友人・知人用 9 項目に分類された。

(3) 結果

表 10-6 の未知の他人用親切行動 39 項目と、表 10-7 の友人・知人用親切行動 9 項目の合計 48 項目を収集することができた。本調査では、この 48 項目を使用し、親切行動の実行可能性と負担度を測定する。

表 10-6　未知の他人用親切行動項目 39 項目

1. 街頭で募金に協力する
2. 献血に協力する
3. 財布を落とした人やお金の足りない人にお金を貸す**
4. 困っている人に自分の持ちものをわけてあげる**
5. 乱暴されている人をみたとき、警察に通報したりして助けを呼ぶ**
6. けが人や急病人がでたとき、救急車を呼ぶ**
7. けが人や急病人がでたとき、介抱する**
8. 自動車のパンクなどで故障して困っている人を助ける*
9. 迷子（まいご）を交番や案内所へ連れていく
10. 忘れもの、落としものを窓口や交番へ届ける
11. 道でつまずいたりして転んだお年寄りを助け起こす
12. 人が落として散らばった荷物を一緒に拾う
13. 乗りもの等の中で身体の不自由な人やお年よりに席を譲る

14. 身体の不自由な人のために車いすを押してあげる*
15. 階段や坂道でお年寄りの荷物を持ってあげる
16. 道に迷っている人に道順を教えてあげる
17. バス停で濡れている人にカサをさしかけてあげる
18. 小銭のない人に両替をしてあげる
19. 自動販売機や券売機の使い方を教えてあげる
20. カメラのシャッター押しを頼まれたら押してあげる
21. カメラのシャッター押しに「協力しましょうか」と声をかける**
22. 人が何か探し物をしているときに、こちらから声をかける**
23. 自転車が倒れていたら、起こしておいてあげる**
24. 子どもがケンカをしていたら仲裁する*
25. コンタクト・レンズを落として探している人がいたら、一緒に探す**
26. 両手いっぱいに荷物を持っている人がドアの前に来たとき、ドアを開けてあげる
27. 落し物をした人がいたら、落としたことをすぐに教えてあげる
28. 胸をおさえて歩道に横たわっている人がいたら、声をかけて救急車を呼ぶ**
29. 出入り口で人とかち合ったら、先に道を譲る
30. ドアを開けて出るとき、すぐ後ろに付いてきている人のために、ドアを開けてドアが閉まらないように抑えておく
31. 公衆トイレを出るときは、後の人のためにいつもきれいにして出る
32. 公衆トイレのトイレットペーパーを使い切ったら、次の人のために入れておく
33. バイト先で荷物の多いお客さんには、車まで荷物を運んであげる*
34. 飲食店などで、店員さんが食器を片付けやすいように気を配る
35. 乗り物の中で、家族連れや仲間同士で乗ってきたら、他の席へ移ってあげる*
36. 災害復旧や被災者のための、募金に協力をする
37. 時間を聞かれたとき、教えてあげる
38. 荷物の番を頼まれたとき、引き受ける**
39. 「バス停まで連れて行って欲しい」と頼まれたとき、連れて行ってあげる**

注 1）項目末尾に*と**をつけた項目は、本調査で実行可能性得点や負担度得点に天井効果や床効果を示さなかった 17 項目である。

注 2）項目末尾に**をつけた項目は、本調査での因子分析の結果、最終的に残った 12 項目である。

表 10-7　友人・知人用親切行動 9 項目

1. 友人や知人の悩みや愚痴（ぐち）を聞いてあげる
2. 友人の誕生日を祝ってあげる
3. 友人が行きたい場所につき合って一緒に行く
4. 気持ちの落ち込んだ友人に電話やメールをする
5. 友人や知人にお菓子や飲み物を分けてあげる
6. 友人が授業を休んだら、代わりに配付物を取っておいてあげる
7. 友人が授業を休んだら、連絡して様子を聞く
8. 一人暮らしのお年寄りには気をつけて声をかける*
9. 一人暮らしのお年寄りの人を訪問して話を聞いてあげる

注 1）項目末尾に*をつけた項目は、本調査で実行可能性得点や負担度得点に天井効果や床効果を示さなかった 1 項目である。

3. 本調査の方法

(1) 調査対象者と調査手続き

(a) 調査対象者　調査対象者は、女子大学生 189 人であったが、有効回答者は 145 人であり、有効回答率は 76.7%と低かった。有効回答者の平均年齢は、19.2 歳（*SD*=0.69）であった。

(b) 調査手続き　「他者に対する行動の調査」という題目の質問紙調査を、集合調査法により、2014 年 7 月に実施した。

(2) 質問紙の構成

質問紙は、A4 用紙 7 枚の片面印刷であり、1 枚目が表紙、2 枚目と 3 枚目が未知の他人に対する親切行動の実行可能性、4 枚目が友人・知人に対する親切行動の実行可能性、5 枚目と 6 枚目が未知の他人に対する親切行動の負担度、7 枚目が友人・知人に対する親切行動の負担度、を問う質問項目と回答欄であった。表紙には、調査題目、教示、対象者の年齢等の記入欄、調査者の氏名と連絡先等が印刷してあった。教示の冒頭で、「この調査は、他者に対する行動に関して、お尋ねするものです。」と、調査の趣旨を説明した。

(3) 質問紙の内容

(a) 実行可能性　未知の他人用 39 項目の親切行動を示し、「知らない他人に対して、39 種類の行動をどのくらい実行する可能性があるか」と実行可能性を尋ね、「まったくない」（1 点）、「少しある」（2 点）、「わりとある」（3 点）、「かなりある」（4 点）の 4 段階評定で回答を求め、得点化した。また、友人・知人用 9 項目の親切行動を示し、「友人・知人に対して、9 種類の行動をどのくらい実行する可能性があるか」と実行可能性を尋ね、未知の他人用の場合と同様に回答を求め、得点化した。

(b) 負担度　未知の他人用 39 項目の親切行動を示し、「知らない他人に対して、39 種類の行動をとることにどのくらい負担を感じるか」と負担度を尋ね、「まったく感じない」（1 点）、「少し感じ

る」（2 点）、「わりと感じる」（3 点）、「かなり感じる」（4 点）の 4 段階評定で回答を求め、得点化した。また、友人・知人用 9 項目の親切行動を示し、「友人・知人に対して、9 種類の行動をとることにどのくらい負担を感じるか」と負担度を尋ね、未知の他人用の場合と同様に回答を求め、得点化した。

4. 本調査の結果

(1) 未知の他人に対する親切行動項目の検討

(a) 天井効果と床効果　39 項目の未知の他人用親切行動に関する実行可能性得点と負担度得点の平均値と標準偏差を算出した。そして、将来的に介入研究にも使用できる親切行動尺度を作成するために、実行可能性得点と負担度得点に関する天井効果と床効果を検討した。天井効果あるいは床効果の存在は、得点の可動域に関する制限を意味し、増加方向あるいは減少方向への実行可能性得点や負担度得点の変容が期待できないことを意味する。なお、一般的には、天井効果は平均値プラス 1 標準偏差が得点範囲の最大値を上回る場合（$M+1SD>4$）、床効果は平均値マイナス 1 標準偏差が得点範囲の最小値を下回る場合（$M-1SD<1$）であるが、本研究では、尺度の項目数を絞るために、最大値以上あるいは最小値以下を天井効果あるいは床効果の基準とした。

39 項目の未知の他人用親切行動のうち、3 項目に実行可能性得点で天井効果と負担度得点で床効果の両方が見られ、3 項目に実行可能性得点で床効果が、16 項目に負担度得点で床効果が見られた。これらの天井効果や床効果の見られた 22 項目を削除対象の項目とした。未知の他人用親切行動 39 項目から 22 項目を削除した結果、17 項目が残った。

(b) 未知の他人に対する親切行動の実行可能性と負担度　未知の他人に対する親切行動の項目として適切と判断された 17 項目に関して、実行可能性得点の平均値と標準偏差、および負担度得点の平均値と標準偏差を表 10-8 に示した。また、実行可能性得点と負担度得点間の相関関係に関しては、ピアソンの相関係数を算出し、併せて表 10-8 に示した。17 項目の全てにおいて、実行可能性得点と負担度得点の間に、中程度から弱い有意な負の相関関係が存在することが明らかとなった。すなわち、全体的に各項目の負担度得点の平均値は低いものの、親切行動の負担度が高まるほど、実行可能性が低くなることが判明した。

(2) 友人・知人に対する親切行動項目の検討

9 項目の友人・知人用親切行動に関する実行可能性得点と負担度得点の平均値と標準偏差を算出した。9 項目の友人・知人用親切行動のうち、6 項目に実行可能性得点で天井効果と負担度得点で床効果の両方が見られ、1 項目に実行可能性得点で床効果、1 項目に負担度得点で床効果が見られた。これらの 8 項目が削除対象項目となったため、1 項目しか残らなかった。残った 1 項目は「8. 一人暮らしのお年寄りには気をつけて声をかける」であり、実行可能性得点の平均値（標準偏差）が 2.14（0.82）、負担度得点の平均値（標準偏差）が 2.19（0.94）、両得点間の相関係数が-.06 であった。したがって、友人・知人用親切行動尺度は作成できなかった。

(3) 未知の他人に対する親切行動の実行可能性得点の因子構造

未知の他人に対する親切行動として適切と判断された 17 項目の親切行動の実行可能性得点に関して、主因子法による因子分析を行い、固有値の推移から、4 因子解を採用した。この最初の因子

分析段階での第Ⅰ因子、第Ⅱ因子、第Ⅲ因子、第Ⅳ因子の寄与率は、それぞれ 35.93%、10.13%、8.39%、7.34%であり、4 因子の累積寄与率は 61.79%であった。

表 10-8　未知の他人用親切行動（17 項目）の実行可能性得点と負担度得点の平均値、標準偏差、および両得点間の相関関係

項目	実行可能性	負担度	相関
3. 財布を落とした人やお金の足りない人にお金を貸す	1.95 (0.94)	2.90 (1.05)	-.51***
4. 困っている人に自分の持ちものをわけてあげる	2,16 (0.85)	2.57 (0.98)	-.38***
5. 乱暴されている人をみたとき、警察に通報したりして助けを呼ぶ	2.26 (0.87)	2.37 (1.04)	-.26**
6. けが人や急病人が出たとき、救急車を呼ぶ	2.69 (0.92)	2.21 (1.04)	-.24**
7. けが人や急病人がでたとき、介抱する	2.37 (0.88)	2.43 (1.02)	-.35***
8. 自動車のパンクなどで故障して困っている人を助ける※	1.97 (0.79)	2.40 (0.94)	-.27**
14. 身体の不自由な人のために車いすを押してあげる※	2.21 (0.88)	2.03 (0.99)	-.28**
21. カメラのシャッター押しに「協力しましょうか」と声をかける	2.33 (1.09)	2.19 (1.07)	-.46***
22. 人が何か探し物をしているときに、こちらから声をかける	1.94 (0.75)	2.44 (0.94)	-.30***
23. 自転車が倒れていたら、起こしておいてあげる	2.35 (0.88)	2.18 (0.93)	-.21**
24. 子どもがケンカをしていたら仲裁する※	1.92 (0.85)	2.46 (0.94)	-.34***
25. コンタクト・レンズを落として探している人がいたら、一緒に探す	1.89 (0.76)	2.44 (0.96)	-.32***
28. 胸をおさえて歩道に横たわってる人がいたら、声をかけて救急車を呼ぶ	2.63 (0.86)	2.21 (1.03)	-.22**
33. バイト先で荷物の多いお客さんには、車まで荷物を運んであげる※	2.00 (0.97)	2.17 (0.97)	-.28***
35. 乗り物の中で、家族連れや仲間同士で乗ってきたら、他の席へ移ってあげる※	2.37 (0.84)	2.03 (0.86)	-.28***
38. 荷物の番を頼まれたとき、引き受ける	2.38 (0.99)	2.43 (1.09)	-.50***
39. 「バス停まで連れて行って欲しい」と頼まれたとき、連れて行ってあげる	2.64 (0.87)	2.18 (0.96)	-.20*

注 1）表内の第 2 列と第 3 列の数値は平均値（標準偏差）、相関の列の数値はピアソンの相関係数 *r* である。

注 2）***p<.001、**p<.01、*p<.05 である。

注 3）項目欄の項目内容の末尾の※は、因子分析の結果、削除される項目である。

4 因子解を指定し、不適切な項目を削除しながら、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を繰り返し行った。各項目が適切であるかどうかの判断基準は、①いずれかの因子に対して絶対値で.45 以上の負荷量を示すこと、②その因子への負荷量と他の因子への負荷量の差が.20 以上であること、の 2 つの基準を同時に満たすことであった。その結果、上記の判断基準を満たさない 5 項目

を削除した。

12 項目を使用した最終的な因子分析の結果を表 10-9 に示した。第Ⅰ因子には、けが人や急病人や乱暴されている人に遭遇した場合の親切に特化した 4 項目が含まれていたので、「緊急対応的親切」因子と命名した。第Ⅱ因子には、困っている人に遭遇した場合に労力を提供する親切に特化した 4 項目が含まれていたので、「世話好き的親切」因子と命名した。第Ⅲ因子には、困っている人に自分のお金や持ち物を与えたり、貸したりする親切である 2 項目が含まれていたので、「分与・貸与的親切」因子と命名した。第Ⅳ因子には、困っている人に何かを頼まれたときに応じる親切である 2 項目が含まれていたので、「応答的親切」因子と命名した。第Ⅲ因子と第Ⅳ因子は、項目数が 2 項目と少なく、因子として扱うには信頼性の問題が残るが、親切行動の多様性を確保するために、あえて因子として扱うこととした。

表 10-9　未知の他人に対する親切行動の実行可能性得点に関する因子分析結果
（α＝.84、主因子法、プロマックス回転）

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
第Ⅰ因子「緊急対応的親切」				
6. けが人や急病人が出たとき、救急車を呼ぶ	**1.04**	-.14	-.05	.02
28. 胸をおさえて歩道に横たわってる人がいたら、声をかけて救急車を呼ぶ	**.74**	.05	-.04	.10
7. けが人や急病人がでたとき、介抱する	**.70**	.14	.07	-.03
5. 乱暴されている人をみたとき、警察に通報したりして助けを呼ぶ	**.67**	.06	.02	-.13
第Ⅱ因子「世話好き的親切」				
22. 人が何か探し物をしているときに、こちらから声をかける	-.03	**.91**	-.01	-.11
21. カメラのシャッター押しに「協力しましょうか」と声をかける	.04	**.65**	.03	.02
23. 自転車が倒れていたら、起こしておいてあげる	-.01	**.50**	-.15	.18
25. コンタクト・レンズを落として探している人がいたら、一緒に探す	.12	**.48**	.12	.09
第Ⅲ因子「分与・貸与的親切」				
4. 困っている人に自分の持ちものをわけてあげる	.03	-.11	**.94**	.04
3. 財布を落とした人やお金の足りない人にお金を貸す	-.04	.08	**.69**	-.02
第Ⅳ因子「応答的親切」				
38. 荷物の番を頼まれたとき、引き受ける	-.01	-.04	-.03	**.95**
39. 「バス停まで連れて行って欲しい」と頼まれたとき、連れて行ってあげる	-.05	.13	.09	**.58**
因子間相関　Ⅰ		.51	.29	.39
Ⅱ			.39	.43
Ⅲ				.30

表 10-9 には、因子間相関を併せて示した。4 因子間には.29～.51 の中程度の正の相関関係が存在すること明らかとなった。なお、12 項目の尺度全体の内的整合性は、クロンバックのα係数が.84 であり、尺度に高い内的整合性が存在することが証明された。

因子ごとのα係数、および実行可能性得点の平均値と標準偏差を表 10-10 に示した。各因子別の

α係数は.74～.87 であり、それぞれの因子を構成する項目間に許容できる水準の内的整合性のあることが判明した。実行可能性得点の大きさを因子間で比較するために、1 要因 4 水準の対応のある分散分析を行ったところ、4 因子間に有意差（$F(3, 432) = 21.034$, $p<.001$）が存在することが分かった。そこで、各因子間の差を多重比較（有意水準を 5%に設定）によって検定したところ、第Ⅰ因子・第Ⅳ因子と第Ⅱ因子・第Ⅲ因子との間に有意差が存在すること、第Ⅰ因子と第Ⅳ因子の間および第Ⅱ因子と第Ⅲ因子の間には有意差がないことが示された。すなわち、第Ⅰ因子「緊急対応的親切」と第Ⅳ因子「応答的親切」の実行可能性得点の方が、第Ⅱ因子「世話好き的親切」と第Ⅲ因子「分与・貸与的親切」の実行可能性得点よりも高いことが明らかとなった。

表 10-10　未知の他人に対する親切行動の実行可能性得点に関する因子別のα係数、平均値および標準偏差

因子	α係数	平均値（標準偏差）
第Ⅰ因子「緊急対応的親切」	.87	2.50　(0.75)
第Ⅱ因子「世話好き的親切」	.75	2.13　(0.66)
第Ⅲ因子「分与・貸与的親切」	.78	2.06　(0.80)
第Ⅳ因子「応答的親切」	.74	2.51　(0.83)

以上より、実行可能性次元における未知の他人に対する親切行動は 4 因子構造をもつこと、すなわち未知の他人に対する親切の行動的構造は 4 因子構造であることが実証された。そして、未知の他人に対する親切行動を測定するための 12 項目 4 因子から成る未知の他人用親切行動尺度を作成することができた。

5. 追加調査

(1) 目的

本調査で使用した 48 項目の親切行動は、親切の対象によって、未知の他人用 39 項目と友人・知人用 9 項目に分類された。9 項目の友人・知人用親切行動は、実行可能性得点と負担度得点に関する天井効果と床効果の分析結果から、適切な項目は 1 項目しか残らず、友人・知人用親切行動尺度は作成不可能であった。

そこで、本調査で作成した 12 項目 4 因子から成る未知の他人用親切行動尺度の項目を利用して、再度、友人・知人に対する親切の行動的構造の解明と友人・知人用親切行動尺度の作成を目的とする追加調査を実施する。

(2) 方法

(a) 調査対象者と調査手続き　調査対象者は、女子大学生 57 人であったが、有効回答者は 53 人であり、有効回答率は 93.0%であった。有効回答者の平均年齢は、20.0 歳（SD=1.37）であった。調査は、「他者に対する行動の調査（2）」という題目の質問紙調査を、集合調査法により、2014 年 11 月に実施した。

(b) 質問紙　質問紙は、A4 用紙 3 枚の片面印刷であり、1 枚目が表紙、2 枚目が友人・知人に対する親切行動の実行可能性、3 枚目が友人・知人に対する親切行動の負担度、を問う質問項目と回答

欄であった。本調査の場合と同様に、表紙には、調査題目、教示、対象者の年齢等の記入欄、調査者の氏名と連絡先等が印刷してあった。教示の冒頭で、「この調査は、他者に対する行動に関して、お尋ねするものです。」と、調査の趣旨を説明した。

(c) 質問紙の内容　実行可能性 : 友人・知人用 12 項目の親切行動を示し、「友人・知人に対して、12 種類の行動をどのくらい実行する可能性があるか」と実行可能性を尋ね、「まったくない」(1 点)、「少しある」(2 点)、「わりとある」(3 点)、「かなりある」(4 点) の 4 段階評定で回答を求め、得点化した。

負担度 : 友人・知人用 12 項目の親切行動を示し、「友人・知人に対して、12 種類の行動をとることにどのくらい負担を感じるか」と負担度を尋ね、「まったく感じない」(1 点)、「少し感じる」(2 点)、「わりと感じる」(3 点)、「かなり感じる」(4 点) の 4 段階評定で回答を求め、得点化した。

(3) 結果

(a) 友人・知人に対する親切行動の実行可能性と負担度　12 項目の親切行動の実行可能性得点と負担度得点の平均値と標準偏差を算出した。そして、本調査の場合と同様に、実行可能性得点と負担度得点に関する天井効果と床効果を検討した結果、2 項目に負担度得点で床効果が見られたので、この 2 項目を削除し、10 項目を残した。削除した項目は、「6. カメラのシャッター押しに“協力しましょうか”と声をかける」と「7. 人が何か探し物をしているときに、こちらから声をかける」の 2 項目であった。

なお、友人・知人に対する親切行動の項目として適切と判断された 10 項目に関して、実行可能性得点の平均値と標準偏差、および負担度得点の平均値と標準偏差を表 10-11 に示した。また、実行可能性得点と負担度得点間の相関関係に関しては、ピアソンの相関係数を算出し、併せて表 10-11 に示した。10 項目中の 4 項目において、実行可能性得点と負担度得点の間に、中程度の有意な負の相関関係が存在し、親切行動の負担度が高まるほど、実行可能性が低くなることが示された。

(b) 未知の他人用親切行動の実行可能性得点の因子構造　10 項目の未知の他人用親切行動の実行可能性得点に関して、主因子法による因子分析を行い、固有値の推移から 2 因子解を採用した。この最初の因子分析段階での第Ⅰ因子と第Ⅱ因子の寄与率は、51.51%と 11.76%であり、2 因子の累積寄与率は 63.27%であった。

2 因子解を指定し、再度、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、10 項目のいずれも、①2 つの因子のどちらかに対して絶対値で.45 以上の負荷量を示し、②その因子への負荷量と他の因子への負荷量の差が.20 以上であった。そこで、10 項目を使用した因子分析の結果を表 10-12 に示した。

第Ⅰ因子には、けが人や急病人や乱暴されている人に遭遇した場合の親切に特化した 4 項目が含まれていたので、「緊急対応的親切」因子と命名した。第Ⅱ因子には、困っている人に遭遇した場合に労力を提供する親切（未知の他人用親切行動尺度の「世話好き的親切」因子）の 2 項目、困っている人に自分のお金や持ち物を与えたり、貸したりする親切（未知の他人用親切行動尺度の「分与・貸与的親切」因子）の 2 項目、困っている人に何かを頼まれたときに応じる親切（未知の他人用親切行動尺度の「応答的親切」因子）の 2 項目が含まれていたので、「日常対応的親切」因子と命名した。

表 10-11　友人・知人用親切行動（10 項目）の実行可能性得点と負担度得点の平均値、標準偏差、および両得点間の相関関係

項目	実行可能性	負担度	相関
1. 財布を落とした人やお金の足りない人にお金を貸す	2.83 (0.91)	2.38 (0.77)	-.37**
2. 困っている人に自分の持ちものをわけてあげる	3.08 (0.76)	1.91 (0.81)	-.49***
3. 乱暴されている人をみたとき、警察に通報したりして助けを呼ぶ	2.78 (0.93)	2.30 (0.80)	-.19
4. けが人や急病人が出たとき、救急車を呼ぶ	3.08 (0.85)	2.11 (0.97)	-.24
5. けが人や急病人がでたとき、介抱する	2.94 (0.86)	2.08 (0.98)	-.27
8. 自転車が倒れていたら、起しておいてあげる	2.75 (0.76)	1.94 (0.84)	-.20
9. コンタクト・レンズを落として探している人がいたら、一緒に探す	2.72 (0.84)	1.92 (0.85)	-.38**
10. 胸をおさえて歩道に横たわってる人がいたら、声をかけて救急車を呼ぶ	3.04 (0.81)	2.11 (0.97)	-.40**
11. 荷物の番を頼まれたとき、引き受ける	3.15 (0.84)	2.02 (0.93)	-.15
12. 「バス停まで連れて行って欲しい」と頼まれたとき、連れて行ってあげる	3.08 (0.70)	2.23 (0.80)	-.10

注 1）表内の第 2 列と第 3 列の数値は平均値（標準偏差）、相関の列の数値はピアソンの相関係数 *r* である。
注 2）***p<.001、**p<.01 である。

表 10-12　友人・知人に対する親切行動の実行可能性得点に関する因子分析結果（α＝.89、主因子法、プロマックス回転）

項目	Ⅰ	Ⅱ
第Ⅰ因子「緊急対応的親切」		
10. 胸をおさえて歩道に横たわってる人がいたら、声をかけて救急車を呼ぶ	**.92**	-.14
4. けが人や急病人が出たとき、救急車を呼ぶ	**.82**	-.03
5. けが人や急病人がでたとき、介抱する	**.81**	-.01
3. 乱暴されている人をみたとき、警察に通報したりして助けを呼ぶ	**.72**	.02
第Ⅱ因子「日常対応的親切」		
11. 荷物の番を頼まれたとき、引き受ける	-.02	**.68**
8. 自転車が倒れていたら、起しておいてあげる	-.24	**.67**
2. 困っている人に自分の持ちものをわけてあげる	.30	**.61**
12. 「バス停まで連れて行って欲しい」と頼まれたとき、連れて行ってあげる	.14	**.60**
1. 財布を落とした人やお金の足りない人にお金を貸す	.15	**.56**
9. コンタクト・レンズを落として探している人がいたら、一緒に探す	.25	**.51**
因子間相関		.72

表 10-13　友人・知人に対する親切行動の実行可能性得点に関する因子別のα係数、平均値および標準偏差

因子	α係数	平均値（標準偏差）
第Ⅰ因子「緊急対応的親切」	.87	2.96　(0.73)
第Ⅱ因子「日常対応的親切」	.83	2.93　(0.59)

表 10-12 には、因子間相関を併せて示した。2 因子間には.72 という高い正の相関関係が存在すること明らかとなった。なお、10 項目の尺度全体の内的整合性は、クロンバックのα係数が.89 であり、尺度に高い内的整合性が存在することが証明された。

因子ごとのα係数、および実行可能性得点の平均値と標準偏差を表 10-13 に示した。各因子別のα係数は.87 と.83 であり、それぞれの因子を構成する項目間に高い水準の内的整合性のあることが判明した。実行可能性得点の大きさを因子間で比較するために、1 要因 2 水準の対応のある分散分析を行ったところ、2 因子間に有意差は見られなかった（$F(1, 52) = 0.093$, *ns*）。すなわち、第Ⅰ因子「緊急対応的親切」と第Ⅱ因子「日常対応的親切」の実行可能性得点は同程度であることが明らかとなった。

以上より、実行可能性次元における友人・知人に対する親切行動は 2 因子構造をもつこと、すなわち友人・知人に対する親切の行動的構造は 2 因子構造であることが実証された。そして、友人知人に対する親切行動を測定するための 10 項目 2 因子から成る友人･知人用親切行動尺度を作成することができた。

6. 総合考察

(1) 本研究の概要

本研究では、親切の行動的構造を解明し、それに伴って、親切の行動を測定するための親切行動尺度を作成することを目的とした。

予備調査を通して、親切行動は、親切の対象者が未知の他人であるか、友人・知人であるかによって、2 種類に分類されることがわかり、未知の他人に対する親切行動 39 項目、友人・知人に対する親切行動 9 項目、の合計 48 項目を収集することができた。本調査では、この 48 項目を使用して、各親切行動の実行可能性と実行に伴う負担度を測定した。将来的に、親切行動への介入研究への利用を見据えて、実行可能性や負担度が変容の可動域にある親切行動を特定するために、実行可能性得点と負担度得点に関する天井効果と床効果の判定を行い、これらの効果を示す項目の削除を行った。その結果、未知の他人に対する親切行動では 39 項目中 17 項目が残ったので、この 17 項目を使用して、未知の他人に対する親切行動の構造を因子分析によって検討し、最終的に、未知の他人に対する親切行動の構造が 4 因子構造であることを解明し、12 項目 4 因子から成る未知の他人用親切行動尺度を作成することができた。しかし、友人・知人に対する親切行動では 9 項目中 1 項目しか残らなかったので、本調査の段階では、友人・知人に対する親切行動の構造を解明できず、友人・知人用親切行動尺度を作成することができなかった。そこで、追加調査として、本調査で得られた未知の他人用親切行動尺度の項目を利用して、友人・知人に対する親切行動を測定し、最終的に、友人･知人に対する親切行動の構造が 2 因子構造であることを解明し､10 項目 2 因子から成る友人･知人用親切行動尺度を作成することができた。

本研究で作成した未知の他人用親切行動尺度と友人・知人用親切行動尺度の信頼性と妥当性に関しては、以下のように考えられる。12 項目の未知の他人用親切行動尺度全体と 10 項目の友人・知人用親切行動尺度全体の内的整合性はいずれも高く（α=.84 と.89）、2 つの尺度を構成する各因子の内的整合性も許容できる程度に高い（α=.74～.87 と.83～.87）ことが判明しており、両尺度の信頼性は高いと判断できる。また、本研究で使用した親切行動は、関連領域の援助行動、愛他的行動、向社会的行動のリストから収集した親切行動であり、親切行動の概念に沿って、負担度の大きくない行動に限定していることから、両尺度の内容的妥当性はある程度保証されると解釈できるが、基準関連妥当性などの統計妥当性の検討が必要であろう。

(2) 親切の行動的構造

(a)未知の他人に対する親切行動の構造の特徴　未知の他人に対する親切行動は、第Ⅰ因子「緊急対応的親切」、第Ⅱ因子「世話好き的親切」、第Ⅲ因子「分与・貸与的親切」、第Ⅳ因子「応答的親切」の 4 因子構造であった。

第Ⅰ因子として、「緊急対応的親切」因子が抽出されたことは非常に興味深い。親切行動が出現する事態は、日常事態と緊急事態の 2 つに大きく分類される。「緊急対応的親切」行動は、緊急事態における親切行動である。本来、親切行動は、親切な心である愛他心に根差す行動であり、愛他心を基底とする愛他的動機によって引き起こされる、日常事態における親切行動と考えられる。しかし、緊急事態での小さな親切行動の出現には、ささやかな愛他心や愛他的動機が働くことは否定できないが、むしろ、社会の一員あるいは人間としての義務感や責任感、ないしは日常と異なる緊急を要する事態であるという認知（緊急性の認知判断）が大きくかかわっているように思われる。主に義務感や責任感、緊急性認知判断に導かれると推測される親切行動が第Ⅰ因子として挙がった点は、予想外の現象であり、興味深い結果である。

第Ⅱ因子の「世話好き的親切」行動と第Ⅲ因子の「分与・貸与的親切」行動と第Ⅳ因子の「応答的親切」行動は、いずれも日常事態における親切行動であり、この点が緊急事態における親切行動である第Ⅰ因子の「緊急対応的親切」行動と異なる。ところが、第Ⅰ因子の「緊急対応的親切」行動と第Ⅱ因子の「世話好き的親切」行動と第Ⅲ因子の「分与・貸与的親切」行動は、いずれも困っている他者に対する自発的、能動的、積極的な親切行動であり、この点が困っている他者から親切を乞われて応答的、受動的、消極的な親切行動をとる、第Ⅳ因子の「応答的親切」行動と異なる。

以上のように、未知の他人に対する親切行動は、4 因子構造であることが判明したものの、親切行動が単純に 4 分類されるのではなく、そこには、さらに「日常的－緊急的」次元と「自発的－応答的」次元が潜在しているように思われる。

そして、未知の他人に対する親切行動としては、「緊急対応的親切」行動（M=2.50）と「応答的親切」行動（M=2.51）のほうが、「世話好き的親切」行動（M=2.13）と「分与・貸与的親切」行動（M=2.06）よりも、実行されやすいことが示された。緊急事態や親切を求められる場合には、ほかの日常事態に比べて、親切行動が実行されやすいのであろう。

(b)友人・知人に対する親切行動の構造の特徴　友人・知人に対する親切行動は、第Ⅰ因子「緊急対応的親切」と第Ⅱ因子「日常対応的親切」の 2 因子構造であった。友人・知人に対する親切行動は、親切行動の 2 種類の出現事態である日常事態と緊急事態に対応する親切行動群であった。こうした友人・知人に対する親切行動は、第Ⅰ因子の「緊急対応的親切」行動に関しては、未知の他人に対する親切行動と全く同じ 4 項目から構成されており、2 種類の対象者に共通してみられる親

切行動の因子であることが証明された。そして、友人・知人に対する親切行動における第Ⅱ因子の「日常対応的親切」行動は、未知の他人に対する親切行動の第Ⅱ因子「世話好き的親切」行動から2項目が削除されたものの、第Ⅱ因子「世話好き的親切」行動、第Ⅲ因子「分与・貸与的親切」、第Ⅳ因子「応答的親切」の3因子が統合され、日常事態における親切行動を示す因子としてまとまった。

友人・知人に対する親切の実行可能性は、「緊急対応的親切」（*M*=2.96）と「日常対応的親切」（*M*=2.93）で違いが見られなかった。これは、親切行動の対象者が友人・知人の場合は、親切行動は、日常事態でも緊急事態と同程度に実行されやすいからであろう。

(3) 未知の他人に対する親切行動と友人・知人に対する親切行動の比較

親切行動の実行可能性は、親切の対象者が未知の他人の場合と友人・知人の場合とで違いが見られるであろうか。実行可能性得点に関する未知の他人用親切行動尺度12項目全体の平均値（尺度得点）は2.30、各項目の平均値の範囲は1.89～2.69、各因子の平均値の範囲は2.06～2.51であった。これに対して、実行可能性得点に関する友人・知人用親切行動尺度10項目全体の平均値（尺度得点）は2.95、各項目の平均値の範囲は2.72～3.15、各因子の平均値の範囲は2.93～2.96であった。これより、未知の他人用親切行動尺度の実行可能性得点に比べて、友人・知人用親切行動尺度の実行可能性得点の方が明らかに高いことが分かる。したがって、未知の他人に対する親切行動よりも、友人・知人に対する親切行動の方が実行されやすいことが示されたと言える。

次に、親切行動の実行に伴う負担度は、親切の対象者が未知の他人の場合と友人・知人の場合とで異なるかどうかを検討する。負担度得点に関する未知の他人用親切行動尺度12項目全体の平均値（尺度得点）は2.38、各項目の平均値の範囲は2.18～2.90であったが、友人・知人用親切行動尺度10項目全体の平均値（尺度得点）は2.10、各項目の平均値の範囲は1.91～2.38であった。このように、未知の他人用親切行動尺度の負担度得点に比べて、友人・知人用親切行動尺度の負担度得点の方がやや低いことが分かる。差異は顕著ではないものの、未知の他人に対する親切行動よりも、友人・知人に対する親切行動の方が負担は小さく感じられる傾向があると解釈できる。

(4) 親切の行動的構造と親切の意味構造の比較

親切意味構造を検討した深田・岡竹（2015a）は、親切の意味が「温かい好意」、「思いやりのある配慮」、「善意の世話好き」の3因子構造をもつことを解明した。こうした親切の意味構造（3因子）は、本研究で得られた未知の他人に対する親切の行動的構造（4 因子）および友人・知人に対する親切の行動的構造（2 因子）と明瞭な対応関係を示さない。このことから、親切の意味的構造と親切の行動的構造は、別次元の構造であると解釈される。

(5) 今後の課題

親切行動の心理学的研究は、親切の最も基礎となる意味的構造（深田・岡竹, 2015a）と行動的構造（本研究）に関しての研究がその緒に就いたばかりである。親切に関する非常に多様な心理学的研究の方向性が、深田（2015a）によって示唆された。この示唆を参考に、様々な研究課題に挑戦する研究が出現することを期待したい。また、「小さな親切運動」での親切の中に含まれる「あいさつ」や「感謝」などの基本的コミュニケーション行為と、「迷惑行為の抑止」などのマナーの遵守の問題をどのように親切に関連づけて検討するのか、といった課題もあるだろう。

7. 要約

本研究では、親切の行動的構造を解明し、親切行動を測定するための親切行動尺度を作成することを目的とした。予備調査では、先行研究を中心に、48 項目の親切行動を収集した。本調査では、48 項目の親切行動の実行可能性と負担度を測定し、天井効果や床効果を示さない 17 項目を、未知の他人に対する親切行動として選択した。この 17 項目の実行可能性得点を利用した因子分析によって、他人に対する親切行動の構造を検討した。その結果、12 項目が残り、第Ⅰ因子「緊急対応的親切」、第Ⅱ因子「世話好き的親切」、第Ⅲ因子「分与・貸与的親切」、第Ⅳ因子「応答的親切」の 4 因子を抽出した。未知の他人に対する親切の行動的構造が 4 因子構造であることを解明し、12 項目 4 因子から成る未知の他人用親切行動尺度を作成した。また、追加調査では、本調査で得られた未知の他人用親切行動尺度を利用し、本調査と同様の手続きにより、友人・知人に対する親切行動を検討した。その結果、10 項目が残り、第Ⅰ因子「緊急対応的親切」、第Ⅱ因子「日常対応的親切」の 2 因子を抽出した。友人・知人に対する親切の行動的構造が 2 因子構造であることを解明し、10 項目 2 因子から成る友人・知人用親切行動尺度を作成した。なお、未知の他人に対する親切に比べて、友人・知人に対する親切の方が、実行可能性が高く、実行に伴う負担がやや小さいことが示唆された。

キーワード：親切、親切行動、行動的構造、未知の他人用親切行動尺度、友人・知人用親切行動尺度

第 3 節　不親切の動機的構造

1. 問題

(1) 研究の背景

(a) 親切動機と不親切動機への示唆　親切行動を実行する動機に関しては、向社会的行動の動機を検討した高木（1983）の研究と援助行動の動機を検討した原田（1990）の研究から、親切行動を実行しない動機に関しては、向社会的行動の非生起理由を検討した高木（1987b）の研究から、親切行動を実行する動機と実行しない動機の両方に関しては、援助と非援助の理由を検討した本間（1988）の研究から示唆が得られる。

7 種類の向社会的行動群の動機として、25 種類の基本的動機が 6 種類の動機型に分類できることを見出した高木（1983）は、これら 6 種類の動機型が組み合わさって 7 種類の向社会的行動のそれぞれを生起させることを解明した。高木（1983）によって特定された 6 種類の動機型は、①援助への合理的認知判断、②責任の分散の不可能性、③援助および被援助経験、④援助者と被援助者の人格特徴と感情状態、⑤非援助出費と援助報酬の予想、⑥援助者と被援助者の関係、であった。

また、原田（1990）は、7 種類の援助行動型の動機として、18 種類の援助動機が 6 因子に分類できることを見出した。原田（1990）によって特定された 6 因子の援助動機は、①援助の規範意識と合理的援助効用の予期、②互恵と友好的関係、③被援助者への同情、④援助コストの低さと当然さ、

⑤合理的ではない援助効用の予期、⑥非援助の後ろめたさ、であった。

ところで、本間（1988）は、6 つの援助場面における反応を、①直接的援助（手を貸す、声をかける）、②様子を見る（人を呼ぶ：間接的援助）、③非援助（何もしない）の 3 件法で回答させ、その反応理由を 11 の選択肢（動機）から選択させる方法を採った。選択肢の 3 項目は援助動機に相当し、8 項目は非援助動機に相当する。援助動機は、①困っている人がかわいそうだから、②困っている人は助けるべきだと思うから、③困っている時はお互い様だから、の 3 項目であり、非援助動機は、①自分の取るべき行動がわからないから、②人のことは干渉したくないから、③お節介になるから、④周りの人に見られるのは嫌だから、⑤他の人は何もしていないから、⑥相手の素性が分からないから、⑦自分の身に危険が伴うかもしれないから、⑧面倒くさいから、の 8 項目であった。援助動機と非援助動機には地域差が見られ、援助動機①は非都市部に多く、非援助動機③は都市部に多かった。

向社会的行動の非生起理由（非援助動機）に着目した高木（1987b）は、7 種類の向社会的行動群を代表する 12 種類の向社会的行動の非生起理由（非援助動機）を検討し、非援助動機を 26 種類に絞り込んだ。そして、26 種類の非援助動機が、①合理的な状況判断に基づく責任の拒否、②援助もしくは被援助の好ましくない経験、③援助者もしくは被援助者の好ましくない人格特徴、④責任の分散可能性、⑤援助能力の欠如、の 5 因子構造をもつことを見出した。さらに、これらの 5 種類の非援助動機型を用いて、7 種類の向社会的行動群の非生起の特徴を解明した。

(b) 未知の他人に対する不親切動機　親切行動は、向社会的行動や援助行動に比べて、行為者の負担度・犠牲度が小さいところに顕著な相違点が存在する。したがって、向社会的行動や援助行動の場合は、その実行には大きな負担・犠牲を伴うこともあるため、実行動機が重要であり、関心を集めることになる。これに対して、親切行動の場合は、気軽に実行できるため、実行動機よりもむしろ非実行動機、すなわち不親切動機が関心を引く。

日本的親切論（近藤, 2007a）における典型的な親切は未知の他人に対する親切である。親切の対象を未知の他人から友人・知人に拡張した深田（2015a）の見解に基づき、親切の行動的構造を検討した深田・岡竹（2015b）は、親切の対象が未知の他人の場合と友人・知人の場合とでは親切行動の構造が異なることを、また、未知の他人に対する親切行動が、友人・知人に対する親切行動に比べて、実行されにくいことを解明した。こうした親切行動の実行可能性の違いから、未知の他人に対する不親切動機を検討することが相対的により重要性であると指摘できる。

深田・岡竹（2015b）の未知の他人用親切行動尺度は、12 項目 4 因子構造であり、緊急対応的親切、世話好き的親切、分与・貸与的親切、応答的親切の 4 因子から構成された。これらの 4 種類の親切行動に関しては、緊急対応的親切と応答的親切の方が、世話好き的親切と分与・貸与的親切よりも、実行可能性が高いことが見出された。本研究では、実行可能性が比較的高い親切行動として緊急対応的親切を、実行可能性が比較的低い親切行動として世話好き的親切を取り上げ、実行可能性の高さによる不親切動機の違いも、補足的に検討する。

(2) 本研究の目的

本研究では、高木（1987b）の 26 項目の非援助動機を修正して利用し、未知の他人に対する不親切動機を測定し、不親切動機の構造を検討し、未知の他人用不親切動機尺度を作成する。そして、作成した不親切動機尺度を使用して、実行可能性の異なる緊急対応的親切と世話好き的親切との間の不親切動機の違いを検討する。

2. 方法

(1) 調査対象者と調査手続き

(a) 調査対象者　調査対象者は、女子大学生 74 人であったが、有効回答者は 70 人であり、有効回答率は 94.6%であった。有効回答者の平均年齢は 21.4 歳（*SD*=0.77）であった。

(b) 調査手続き　「知らない人と距離を置きたい理由に関する調査」という題目の質問紙を、集合調査法（対象者 18 人、有効回答者 18 人）と個別調査法（対象者 56 人、有効回答者 52 人）により、2015 年 10 月に実施した。

(2) 質問紙の構成

質問紙は、A4 用紙 5 枚の片面印刷であり、1 枚目が表紙、2 枚目～5 枚目が 2 種類の親切場面における不親切動機を測定するための質問と回答欄であった。親切場面として、緊急対応的親切と世話好き的親切の 2 場面を取り上げたが、場面の順序効果を統制するために、先に緊急対応的親切場面について尋ね、次に世話好き的親切について尋ねる質問紙 A と、先に世話好き的親切場面について尋ね、次に緊急対応的親切について尋ねる質問紙 B の 2 種類を用意した。質問紙 A と質問紙 B の有効回答数は共に 35 であった。

表紙には、調査題目、教示、対象者の年齢記入欄、調査者の氏名と連絡先などが印刷されていた。教示の冒頭で、“この調査は、「知らない人と距離を置きたい理由」について調べるものです。”と調査の趣旨を説明した。また、回答は強制ではないなどの注意点も示した。

(3) 問いの文と親切場面の設定

緊急対応的親切場面に関しては、“次の場面に遭遇したと想像してください。『**あなたの知らない人が、具合が悪そうに道端でうずくまっています。**』　あなたがその人に関わらないとしたら、どのような理由がありますか。下にある 26 の理由のそれぞれについて、「かなりある」から「まったくない」までの 4 段階のうち、最も当てはまる段階に〇を付けて答えてください。”と尋ねた。

世話好き的親切場面に関しては、上記の『　　』部分が、『**あなたの知らない人が、困った様子で道で何か探し物をしています。**』に置き換わった。

(4) 質問項目と回答方法

高木（1987b）の 26 項目の非援助動機項目の表現を修正して、表 10-14 に示した 26 項目の未知の他人に対する不親切動機項目を作成した。回答は、「まったくない」（1 点）、「少しある」（2 点）、「わりとある」（3 点）、「かなりある」（4 点）の 4 段階で求めた。

表 10-14　未知の他人用不親切動機項目（高木 (1987b) の非援助動機項目を修正）

1. 助けてもその人からの報酬や返礼が期待できなかったので
2. 今までに自分が助けを求めても、誰も助けてくれなかったので
3. 今までに助けたことがなかったので
4. 目立つのが恥ずかしかったので
5. 助けが必要だと思わなかったので
6. 私のことをその人がどう思うか気にならなかったので
7. めんどうくさかったので
8. 今までに助けることに失敗して嫌な気持ちになったことがあったので
9. その人と関わりたくなかったので
10. その人が自分の知らない人だったので
11. 助ける能力や資格が自分にはないと思ったので
12. おせっかいと思われたくなかったので
13. その人を助ける義務が自分にはないと思ったので
14. その人の困難はその人自身で切り抜けるべきだと思ったので
15. 助けるための負担が大きかったので
16. 自分以外にも何人かの人がそこにいたので
17. その人から自分が遠く離れていたので
18. その人が好ましくない特徴を持っていたので
19. 他の人が助けていたので
20. その時の気分が悪かったので
21. 直接助けを求められなかったので
22. 助けなくても、その人や周囲の人たちから非難されることはなかったので
23. その人が嫌いなタイプの人だったので
24. その人が思いやりのない、利己的な人に思えたので
25. 周囲の人が誰一人として助けようとしなかったので
26. その人が困っているのは自業自得であり、自分には関係ないと思ったので

3. 結果

(1) 不親切動機得点の項目別の平均と標準偏差

緊急対応的親切場面と世話好き的親切場面における 26 項目の未知の他人用不親切動機得点の平均値と標準偏差を算出し、表 10-15 に示した。不親切動機得点に関する親切場面間の差を検討するために、両場面の不親切動機得点の平均値を t 検定によって比較した結果を表 10-15 に併せて示した。26 項目の不親切動機のうち 7 項目で有意差が認められ、4 項目で傾向差が認められた。不親切動機得点は、世話好き的親切場面の方が緊急対応的親切場面よりも 5 項目で有意に高く、4 項目で有意に高い傾向があることが分かった。逆に、緊急対応的親切場面の方が世話好き的親切場面よりも有意に高い項目は 2 項目であった。

また、緊急対応的親切場面における不親切動機得点と世話好き的親切場面における不親切動機得点の相関関係を検討するために、ピアソンの相関係数 r を算出し、表 10-15 に示した。26 項目すべ

てで両親切場面間に有意な正の相関係数（.44～.80, *ps*<.001）が得られた。

表 10-15　親切場面別の未知の他人用不親切動機得点の平均値と標準偏差、および親切場面間比較と場面間相関分析の結果

項目	緊急対応的親切		世話好き的親切		*t* (69)		*r*	
1.	1.16	(0.40)	1.36	(0.74)	-2.57	*	.49	***
2.	1.46	(0.76)	1.44	(0.75)	0.18		.61	***
3.	2.41	(1.14)	1.97	(0.99)	4.68	***	.73	***
4.	2.26	(1.09)	2.23	(1.04)	0.28		.68	***
5.	1.66	(0.80)	2.16	(1.02)	-4.43	***	.48	***
6.	1.80	(0.93)	1.97	(1.04)	-1.84	†	.69	***
7.	1.97	(1.12)	2.17	(1.13)	-1.78	†	.65	***
8.	1.91	(0.97)	2.00	(0.99)	-1.00		.73	***
9.	2.01	(1.01)	2.21	(1.14)	-1.75		.61	***
10.	2.33	(1.13)	2.43	(1.04)	-1.15		.78	***
11.	2.39	(1.12)	2.03	(0.99)	3.38	**	.66	***
12.	1.99	(1.00)	2.30	(1.05)	-3.41	**	.72	***
13.	1.64	(0.83)	1.86	(1.00)	-2.36	*	.67	***
14.	1.34	(0.68)	1.49	(0.81)	-1.93	†	.67	***
15.	2.10	(1.02)	1.94	(1.01)	1.29		.50	***
16.	2.91	(0.88)	2.96	(0.97)	-0.49		.69	***
17.	2.83	(0.96)	2.93	(1.01)	-1.19		.75	***
18.	1.83	(0.93)	2.00	(0.99)	-1.89	†	.69	***
19.	3.20	(0.84)	3.11	(0.91)	-0.77		.44	***
20.	2.07	(1.03)	2.13	(1.12)	-0.49		.59	***
21.	2.17	(1.08)	2.31	(1.06)	-1.60		.75	***
22.	1.91	(1.00)	2.03	(1.04)	-1.47		.80	***
23.	1.81	(0.95)	1.89	(0.97)	-0.82		.71	***
24.	1.67	(0.85)	1.74	(0.94)	-0.96		.76	***
25.	1.89	(0.99)	2.01	(0.99)	-1.22		.60	***
26.	1.30	(0.73)	1.47	(0.77)	-2.98	**	.80	***

注 1）項目番号は表 7-14 に対応しているので、項目内容は表 7-14 を参照すること。

注 2）表内左半分の数値は平均値と（標準偏差）である。

注 3）有意水準は、*** *p*<.001、***p*<.01、**p*<.05、†*p*<.10 である。

(2) 不親切動機の因子構造

緊急対応的親切場面と世話好き的親切場面に共通に適用できる、未知の他人に対する不親切の動機構造を解明するために、調査対象者一人分の緊急対応的親切場面の不親切動機得点と世話好き的親切場面の不親切動機得点を二人分の不親切動機得点と見なし、70 人×2 の延べ 140 人分の 26 項目の不親切動機得点に関する主因子法による因子分析を実施した。固有値の推移から、2～4 因子解の

いずれが適当であるか判断が困難であったため、3 種類（2 因子解、3 因子、4 因子解）の因子分析を試行的に行ったところ、3 因子解が最も解釈しやすかったので、3 因子解を採用した。この最初の因子分析段階での第Ⅰ因子、第Ⅱ因子、第Ⅲ因子の寄与率は、それぞれ 38.50％、8.34％、6.46％であり、3 因子の累積寄与率は 53.30％であった。

因子数を 3 と指定し、不適切な項目を削除しながら、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を繰り返し実施した。各項目が適切であるかどうかの判断基準は、①いずれかの因子に対して絶対値で.40 以上の負荷量を示すこと、②その因子への負荷量と他の因子への負荷量の差が.20 以上であること、の 2 つの基準を同時に満たすことであった。その結果、11 項目を削除し、15 項目を残すことになった。

15 項目を使用した最終的な因子分析の結果を表 10-16 に示した。第Ⅰ因子には、「自分以外にも何人かの人がそこにいたので」や「今までに助けたことがなかったので」など、親切をする責任を分散する態度や、親切をすることに消極的な態度を示す 7 項目が含まれていたので、「責任の分散と消極的態度」因子と命名した。第Ⅱ因子には、「その人が困っているのは自業自得であり、自分には関係ないと思ったので」や「その人の困難はその人自身で切り抜けるべきだと思ったので」など、合理的な判断理由に基づいて責任を回避することを示す 5 項目が含まれていたので、「合理的判断に基づく責任回避」因子と命名した。第Ⅲ因子には、「その人が嫌いなタイプの人だったので」や「その人が思いやりのない、利己的な人に思えたので」など、対象者のもつ好ましくない特徴を示す 3 項目が含まれていたので、「対象者の好ましくない特徴」因子と命名した。

表 10-16 には、因子間相関を併せて示した。3 因子間には.40～.57 という中程度の正の相関関係が存在することが明らかとなった。なお、15 項目の尺度全体の内的整合性は、クロンバックのα係数が.89 であり、尺度に高い内的整合性が存在することが証明された。

不親切動機得点に関する因子ごとのα係数、および平均値と標準偏差を表 10-17 に示した。各因子別のα係数は.84～.87 であり、それぞれの因子を構成する項目間に許容できる水準の内的整合性のあることが判明した。

不親切動機得点の大きさを因子間で比較するために、1 要因 3 水準の対応のある分散分析を行ったところ、3 因子間に有意差（$F(2, 278) = 116.13$, $p<.001$）が存在することが分かった。そこで、各因子間の差を多重比較（有意水準を 5％に設定。以下同様）によって検定したところ、各因子の間にはすべて有意差が存在することが示された。すなわち、第Ⅰ因子「責任の分散と消極的態度」の動機得点が最も高く、第Ⅱ因子「合理的判断に基づく責任回避」の動機得点が最も低く、第Ⅲ因子「対象者の好ましくない特徴」の動機得点がその中間の値であることが明らかとなった。なお、標本の大きさに関しては、因子分析と同様に、2 種類の親切場面の標本数を加算した延べ数を用いて処理した。

以上より、未知の他人に対する不親切の動機的構造は 3 因子構造であることが実証された。そして、未知の他人に対する不親切動機を測定するための 15 項目 3 因子の未知の他人用不親切動機尺度を作成することができた。

表 10-16　未知の他人用不親切動機得点に関する因子分析の結果
（α=.89、主因子法、プロマックス回転）

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
第Ⅰ因子「責任の分散と消極的態度」			
16. 自分以外にも何人かの人がそこにいたので	**.86**	-.17	.09
17. その人から自分が遠く離れていたので	**.73**	.10	-.10
10. その人が自分の知らない人だったので	**.72**	.17	-.01
19. 他の人が助けていたので	**.70**	-.05	-.11
3. 今までに助けたことがなかったので	**.70**	-.13	-.10
21. 直接助けを求められなかったので	**.62**	.17	.13
4. 目立つのが恥ずかしかったので	**.49**	.09	.08
第Ⅱ因子「合理的判断に基づく責任回避」			
26. その人が困っているのは自業自得であり、自分には関係ないと思ったので	-.19	**.92**	-.08
14. その人の困難はその人自身で切り抜けるべきだと思ったので	-.05	**.80**	.03
13. その人を助ける義務が自分にはないと思ったので	.16	**.72**	.02
5. 助けが必要だと思わなかったので	.03	**.59**	.01
2. 今までに自分が助けを求めても、誰も助けてくれなかったので	.20	**.49**	.07
第Ⅲ因子「対象者の好ましくない特徴」			
23. その人が嫌いなタイプの人だったので	.08	-.12	**.94**
24. その人が思いやりのない、利己的な人に思えたので	-.19	.13	**.83**
18. その人が好ましくない特徴を持っていたので	-.02	-.01	**.68**
因子間相関　Ⅰ		.57	.40
Ⅱ			.48

表 10-17　未知の他人用不親切動機得点の因子別のα係数、平均値と標準偏差

因子	α係数	平均値（標準偏差）
第Ⅰ因子「責任の分散と消極的態度」	.87	2.58　(0.76)
第Ⅱ因子「合理的判断に基づく責任回避」	.84	1.58　(0.64)
第Ⅲ因子「対象者の好ましくない特徴」	.84	1.82　(0.81)
全体	.89	2.09　(0.59)

(3) 不親切動機得点に関する詳細な因子間比較と場面間比較

(a) 分析の概要　調査対象者個人の親切場面別の不親切動機の各因子得点については、特定の親切場面における特定の因子に属する項目得点の和を項目数で割って得られた値を、その親切場面におけるその因子の不親切動機得点とした。親切場面別、因子別に不親切動機得点の平均値と標準偏差を算出し表 10-18 に示した。また、不親切動機得点に関して、親切場面別の因子間比較の結果、および、因子別の親切場面間比較の結果と因子別の親切場面間の相関関係の分析結果を、表 10-18 に併せて示した。

表 10-18　親切場面別、因子別の未知の他人用不親切動機得点の平均値と標準偏差、場面別因子間比較の結果、因子別場面間比較の結果、因子別場面間相関分析の結果

	緊急対応的親切	世話好き的親切	*t* 検定（*df*=69）	相関係数 *r*
第Ⅰ因子	2.59　(0.77)	2.56　(0.75)	-0.51	.86　***
第Ⅱ因子	1.48　(0.59)	1.68　(0.68)	-4.79　***	.85　***
第Ⅲ因子	1.77　(0.80)	1.88　(0.83)	-1.74　†	.81　***
全体	2.06　(0.57)	2.13　(0.61)	-2.33　*	.89　***
分散分析	$F(2,138)=69.42$***	$F(2,138)=47.83$***		
多重比較	Ⅰ＞Ⅲ＞Ⅱ	Ⅰ＞Ⅲ、Ⅱ		

注 1）表内の因子名は、表 7-16、表 7-17 を参照すること。

注 2）表内の左半分の数値は平均値と（標準偏差）である。

注 3）有意水準は、*** $p<.001$、* $p<.05$、† $p<.10$ である。

(b) 親切場面別の不親切動機得点に関する因子間比較　緊急対応的親切場面における不親切動機得点に関する因子間比較を行うため、対応のある 1 要因 3 水準の分散分析と多重比較を実施した。分散分析の結果は有意であり、多重比較（$p<.05$）の結果から、不親切動機得点は、全ての因子間に有意差が存在し、第Ⅰ因子「責任の分散と消極的態度」得点が最も高く、第Ⅲ因子「対象者の好ましくない特徴」得点が中間であり、第Ⅱ因子「合理的判断に基づく責任回避」得点が最も低いことが示された。

世話好き的親切場面における不親切動機得点に関する因子間比較を行うため、同様の分析を実施した。分散分析の結果は有意であり、多重比較の結果から、不親切動機得点は、第Ⅰ因子「責任の分散と消極的態度」得点の方が、第Ⅱ因子「合理的判断に基づく責任回避」得点と第Ⅲ因子「対象者の好ましくない特徴」得点よりも高いことが示された。

(c) 因子別の不親切動機得点に関する親切場面間比較と場面間の相関　因子別に、不親切動機得点に関する親切場面間比較を行うため、対応のある *t* 検定を行った。その結果、第Ⅱ因子「合理的判断に基づく責任回避」得点は親切場面間に有意差が見られ、世話好き的親切場面の方が緊急対応的親切場面よりも不親切動機得点は高かった。また、第Ⅲ因子「対象者の好ましくない特徴」得点は親切場面間に傾向差が見られ。世話好き的親切場面の方が緊急対応的親切場面よりも不親切動機得点は高い傾向があった。しかし、第Ⅰ因子「責任の分散と消極的態度」得点は親切場面間に有意差が見られなかった。

因子別に、不親切動機得点に関する親切場面間の相関関係をピアソンの相関係数 *r* を算出して検討したところ、3 因子全てにおいて緊急対応的親切場面と世話好き的親切場面の間に有意な正の相関係数が得られ、しかも相関係数の値は非常に高いことが判明した。

なお、尺度全体の不親切動機得点は、世話好き的親切場面の方が緊急対応的親切場面よりも有意に高いことが、また、両場面間には非常に高い正の相関関係が見られることが示された。

4. 考察

(1) 不親切の動機

(a) 不親切の動機的構造　本研究では、高木（1987b）の 26 項目の非援助動機尺度の表現を修正して、未知の他人に対する 26 項目の不親切動機項目を作成した。緊急対応的親切場面と世話好き的親切場面においてその 26 項目の不親切動機が働く程度を測定した。2 種類の親切場面に共通の因子構造を得るために、両場面におけるデータ数を延べ数的に処理し、不親切動機得点に関する因子分析を行ったところ、3 因子が抽出された。第Ⅰ因子は「責任の分散と消極的態度」因子、第Ⅱ因子は「合理的判断に基づく責任回避」因子、第Ⅲ因子は「対象者の好ましくない特徴」因子と命名された。このように、未知の他人に対する不親切の動機的構造は 3 因子構造であることを解明し、最終的に、未知の他人に対する不親切の動機を測定するための 15 項目 3 因子から成る未知の他人用不親切動機尺度を作成することに成功した。

(b) 不親切動機尺度の信頼性と妥当性　本研究で作成した不親切動機尺度の信頼性と妥当性に関しては、特別な検討を行ってはいない。しかし、15 項目の尺度全体の内的整合性は非常に高く（α =.89）、尺度を構成する各因子の内的整合性も高い（α =.84～.87）ことが判明しており、不親切動機尺度の信頼性は高いと判断できる。また、本研究で使用した不親切動機の項目は、既存の非援助動機の項目を利用していることから、不親切動機尺度の内容的妥当性はある程度保証されると解釈できるが、統計的妥当性を確認することが今後の課題として残る。

(2) 非援助動機と比較した不親切動機の特徴

本研究で得られた未知の他人用不親切動機因子と高木（1987b）の非援助動機因子との対応関係を表 10-19 に示した。

未知の他人用不親切動機尺度の第Ⅰ因子「責任の分散と消極的態度」因子 7 項目のうち、4 項目が高木（1987b）の第 4 因子「責任の分散可能性」に、2 項目が高木（1987b）の第 2 因子「援助もしくは被援助の好ましくない経験」に、1 項目が高木（1987b）の第 1 因子「合理的な判断状況に基づく責任の拒否」に対応する。高木（1987b）の第 4 因子に属する 2 項目と高木（1987b）の第 1 因子に属する 1 項目は、親切に対する消極的な態度という共通性が存在する。

不親切動機尺度の第Ⅱ因子「合理的判断に基づく責任回避」因子 5 項目のうち、4 項目が高木（1987b）の第 1 因子「合理的な判断状況に基づく責任の拒否」に、1 項目が高木（1987b）の第 2 因子「「援助もしくは被援助の好ましくない経験」」に対応する。

不親切動機尺度の第Ⅲ因子「対象者の好ましくない特徴」因子 3 項目のすべてが、高木（1987b）の第 3 因子「援助者もしくは被援助者の好ましくない特徴」に対応する。

以上のように、本研究で得られた親切の動機的構造を示す因子は、高木（1987b）の非援助動機の構造と類似しており、本研究の第Ⅰ因子、第Ⅱ因子、第Ⅲ因子は、それぞれ高木（1987b）の第 4 因子、第 1 因子、第 3 因子にほぼ対応していた。高木（1987b）の第 5 因子「援助能力の欠如」に対応する因子は抽出されなかったが、これはささやかな手助け・贈与である親切行動の非実行に対しては、「親切能力の欠如」が大きな意味をもたないためであると考えられる。また、高木（1987b）の第 2 因子「援助もしくは被援助の好ましくない経験」に対応する因子も抽出されなかったが、「親切の提供・被提供の好ましくない経験」の一部の項目が親切に対する消極的態度として「責任の分

散と消極的態度」因子に統合されたためであるかもしれない。

表 10-19　本研究で得られた未知の他人用不親切動機因子と高木（1987b）の非援助動機因子との対応関係

本研究で得られた因子とその構成項目	高木の因子
第Ⅰ因子「責任の分散と消極的態度」	
16. 自分以外にも何人かの人がそこにいたので	第 4 因子
17. その人から自分が遠く離れていたので	第 4 因子
10. その人が自分の知らない人だったので	第 1 因子
19. 他の人が助けていたので	第 4 因子
3. 今までに助けたことがなかったので	第 2 因子
21. 直接助けを求められなかったので	第 4 因子
4. 目立つのが恥ずかしかったので	第 2 因子
第Ⅱ因子「合理的判断に基づく責任回避」	
26. その人が困っているのは自業自得であり、自分には関係ないと思ったので	第 1 因子
14. その人の困難はその人自身で切り抜けるべきだと思ったので	第 1 因子
13. その人を助ける義務が自分にはないと思ったので	第 1 因子
5. 助けが必要だと思わなかったので	第 1 因子
2. 今までに自分が助けを求めても、誰も助けてくれなかったので	第 2 因子
第Ⅲ因子「対象者の好ましくない特徴」	
23. その人が嫌いなタイプの人だったので	第 3 因子
24. その人が思いやりのない、利己的な人に思えたので	第 3 因子
18. その人が好ましくない特徴を持っていたので	第 3 因子

注 1）高木（1987b）の非援助動機因は、第 1 因子「合理的な状況判断に基づく責任の拒否」、第 2 因子「援助もしくは被援助の好ましくない経験」、第 3 因子「援助者もしくは被援助者の好ましくない人格特徴」、第 4 因子「責任の分散可能性」、第 5 因子「援助能力の欠如」である。

(3) 不親切動機の因子差と場面差

(a) 因子差　未知の他人に対して不親切になる動機としては、「責任の分散と消極的態度」が最も大きく、「合理的判断に基づく責任回避」は最も小さく、「対象者の好ましくない特徴」が両者の中間であった。このように、未知の他人に親切をしない動機には、何も無理に自分が親切をしなくてもよいという消極的姿勢が強く働いていることが判明した。

こうした不親切動機には若干の場面差が存在し、緊急対応的親切場面では、動機の強さは、両場面込みの場合と同じであったが、世話好き的親切場面では、「責任の分散と消極的態度」が最も大きく、「対象者の好ましくない特徴」と「合理的判断に基づく責任回避」は同程度に小さかった。

(b) 場面差　未知の他人に対する不親切動機には、場面差が見られた。尺度全体と「合理的判断に基づく責任回避」因子では、世話好き的親切場面の方が緊急対応的親切場面よりも不親切動機得点は有意に高く、「対象者の好ましくない特徴」因子でも同様の傾向が見られた。尺度全体の不親切動機得点が緊急対応的親切場面よりも世話好き的親切場面の方で高かったことは、親切の実行可能性が比較的高い親切場面として緊急対応的親切場面を、また、親切の実行可能性が比較的低い親切

場面として世話好き的親切場面を採用した本研究の方法的妥当性を裏付けた。

(3) 今後の課題

本研究では、未知の他人に対して不親切をする動機を解明しようとした。見知っている友人・知人に対して不親切をする動機の解明、および未知の他人に対して親切をする動機の解明が直接的な発展課題として位置づけられる。さらに、見知っている友人・知人に対して親切をする動機の解明がさらなる発展課題として挙げられる。すなわち、友人・知人用不親切動機尺度、未知の他人用親切動機尺度、友人・知人用親切動機尺度の作成が今後の課題となる。

5. 要約

本研究では、未知の他人に対する不親切の動機的構造を解明し、未知の他人用不親切動機尺度を作成することを目的とした。高木（1987b）の 26 項目 5 因子の非援助動機尺度を修正し、この 26 項目を使用して、緊急対応的親切場面と世話好き的親切場面において、親切をしない動機を測定した。得られた不親切動機得点を用いた因子分析によって不親切の動機的構造を検討した。その結果、第Ⅰ因子「責任の分散と消極的態度」、第Ⅱ因子「合理的判断に基づく責任回避」、第Ⅲ因子「対象者の好ましくない特徴」の 3 因子を抽出し、不親切の動機的構造が 3 因子構造であることを解明した。そして、未知の他人に対する不親切の動機を測定するための 15 項目 3 因子から成る未知の他人用不親切動機尺度を作成した。

キーワード：親切、不親切、不親切の動機的構造、未知の他人用不親切動機尺度

第 11 章　親切行動とふれ合い恐怖心性の関連に関する研究

本章では、筆者が実施した親切行動とふれ合い恐怖心性の関連に関する 2 つの調査研究を報告する。第 1 節では、既知の他者に対するふれ合い恐怖心性を測定するための尺度作成、および未知の他者に対するふれ合い恐怖心性を測定するための尺度作成を試み、「典型的および非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の作成」について考察する。こうして作成した 2 種類の尺度を利用して、第 2 節では、親切行動の規定因としての行為者のふれ合い恐怖心性を検討し、「親切行動と典型的および非典型的ふれあい恐怖心性との関連」について解明する。

第 1 節　典型的および非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の作成

1. 問題

(1) 親切行動の規定因としてのふれ合い恐怖心性

(a) 親切行動の規定因としてのふれ合い恐怖心性要因の検討意義　親切行動の生起を促進したり抑制したりする要因として、すなわち親切行動の規定因として、ふれ合い恐怖はどのように評価されるのであろうか。親切をする人の特徴として、近藤（2007a）は、①よく気のつく人、②思いやりのある人、③好意的な人、④善意の人、⑤同情的な人、⑥人見知りしない人、⑦腰の軽い人、⑧世話好きな人、⑨利他的な人、⑩選択的に不親切な人（大局的に親切な人）を挙げている。これらの中の⑥人見知りしない人について、近藤（2007a）は次のように述べている。親切は実行されて初めて親切と言えるので、他人が困っているかどうか、気軽に声をかけ、手助けを気軽に実行できる人でなければならないが、人見知りする人は、恥ずかしさが先に立ち、手助けの実行が難しいため、親切を実行しにくい。

青年期以降の人見知りに密接に関係するパーソナリティ特性として、対人恐怖心性の現代的な型であるふれ合い恐怖心性を指摘できる。親切行動の行為者のもつふれ合い恐怖心性は、行為者が対象者とふれ合うこと、接触することを回避させ、行為者が親切行動を実行することをためらわせること、換言すれば、ふれ合い恐怖心性が親切行動を抑制することが十分予想できる。したがって、ふれ合い恐怖心性と親切行動の関連を検討することは意義のあることであると考えられる。

(b) 親切行動の規定因としてのふれ合い恐怖心性要因の位置づけ　親切行動を規定する要因は非

常に多様である。親切行動の規定因の種類と構造について指摘した深田（2016）は、親切行動の規定因を、①親切行動の行為者要因、②親切行動の対象者要因、③親切行動の特性要因、④親切行動の要請要因、⑤親切行動の行為者と対象者の置かれる状況要因、⑥親切行動と行為者と対象者の関係性要因、⑦親切行動の行為者の過去経験要因の 7 種類に大別している。この分類の中の①親切行動の行為者要因は、さらに①行為者の特性要因、②行為者の動機要因、③行為者の状況判断要因、④行為者の状態要因、⑤行為者の人口学的特性要因などに下位分類される。この下位分類の中の①行為者の特性要因に属する多数の要因の中の 1 つが行為者のふれ合い恐怖心性の要因である。したがって、ふれ合い恐怖心性は、親切行動の行為者要因の下位要因である行為者の特性要因に属する親切行動の規定因であると言える。

(2) 対人恐怖

(a) 対人恐怖症　対人恐怖症は、対人不安を中核とし、対人場面や対人関係に関わる神経症の一型であり、日本人に特徴的な神経症であるとされてきた。対人恐怖症のオーソドックスな概念定義を理解するために、心理学分野における代表的な辞典・事典を参照してみる。

『APA 心理学大辞典』における対人恐怖症の英文表記に “taijin kyofusho”が使用されていることからも判断できるように、対人恐怖症は日本に特有の恐怖症として位置付けられてきた。同辞典では、対人恐怖症に関して、“…社交恐怖に類似するもの。日本に特有のものであり、体の一部や身体機能、表情が他者に対して強張るまたは攻撃的になるという強い恐怖によって特徴づけられる。”（ファンデンボス, 2013b, p. 557）と解説されている。

『最新心理学事典』を見てみると、対人恐怖症は対人不安（social anxiety）の見出し項目の中で取り上げられている。同事典では、対人不安は、“他者からどのように評価されているだろうかという懸念を中核とする不安感…”（菅原, 2013, p. 482）と定義される。そして対人不安は、不安感そのものを意味する場合の状態不安と、不安になりやすい性格特性を意味する場合の特性不安とに分類されるという。菅原（2013）は、特性不安が社会適応に重大な支障をもたらす場合に、精神医学的な視点から社会不安障害（social anxiety disorder）と診断され、この社会不安障害の文化的亜型として、日本では対人恐怖症（anthropophobia / taijin kyofusho symptom）の用語が用いられると解釈している。

『心理学総合事典』では、社会恐怖は“他人の注視にさらされる状況に対し、持続的で不合理な恐怖をもち、それを避けることである。”（丹野, 2006, p. 523）と説明され、この社会恐怖が日本では対人恐怖症と呼ばれてきたと記述され、対人恐怖と社会恐怖が同一のものとして扱われている。そして、丹野（2006）は、対人恐怖の特徴として次の 4 点を挙げている。①家族や知らない人に対しては生じにくく、「半知り」の人に対して生じやすい。②同年輩や異性の人に対して生じやすい。③2 人ならよいが、3 人になると不安になる。④間があくことに耐えられないので、漠然とした雑談を避ける。

対人恐怖症（anthropophobia）について『心理臨床大事典』では、“対人恐怖症とは、対人場面で不当に強い不安や緊張を生じ、その結果、人からいやがられたり変に思われたりすることを恐れて、

対人関係を避けようとする神経症である。”（永田, 2004, p.861）と定義されている。対人恐怖症に関して、永田（2004）は、①青年期に多くみられる病態であること、②主に青年期前期に発症すること、③多くは 30 歳前後に軽快すること、④男性に多いこと、⑤わが国特有の神経症であること、を指摘している。そして、対人恐怖症の概念が拡大し、①正常範囲のもの（人みしり、気づかいなど）、②神経症水準のもの（恐怖症段階）、③境界例的な重症のもの（関係妄想性を帯びる段階）、④統合失調症の一部と見なされるもの、といった幅広い病態水準を含む症候群であると見なしている。また、永田（2004）は、対人恐怖症の根本的な病理が、人に優越したい強い気持ちと人から疎まれることを恐れる強い気持ちとの葛藤、すなわち自我の突出をめぐる葛藤であり、気づかいをしなくても済む家族のような親しい間柄の人や見知らぬ人に対しては症状が生じにくく、学校・職場・近所の人のような中間的な親しさの人に対して症状が生じやすい、と考えている。さらに、社会や文化と密接に関係する対人恐怖症は、時代的変遷が見られ、「恥」の意識に基づく赤面恐怖が減少し、「おびえ」の意識に基づく視線恐怖が増加したと述べている。なお、DSM-Ⅳで社会恐怖（social phobia）と分類される病態は、対人恐怖に類似した病態であるが、加害的な恐怖が含まれていない点で、対人恐怖と異なるという見解を提出している。

ところで、朝倉（2015）によると、日本精神神経学会では、2013 年改訂の DSM-5 の social anxiety disorder（social phobia）の日本語表記を「社交不安症／社交不安障害（社交恐怖）」とした。

『現代精神医学事典』では、対人恐怖（anthropophobia / social phobia / social anxiety disorder）は、“対人場面において耐え難い不安・緊張を抱くために、対人場面を恐れ・避けようとする神経症の一型。”（鍋田, 2011, p. 669）と定義されている。対人恐怖の内容について、鍋田（2011）は、次のように大きく 2 分類している。すなわち、①対人場面での行為の遂行や社交やコミュニケーションへの不安（対人関係における戸惑い、相手の期待をはずすことの恐れ、社交能力の自信のなさ、人前での何らかの行為の失敗の恐れなど）と、②強迫的思考や思い込みによる苦しみ（注視されている、赤面など恥ずかしい自分の何かが注目されている、駄目な自分を見透かされている、他者に見つめられている、迷惑がられている、嫌われている）、の 2 分類である。

以上の、対人恐怖症の症状としては、赤面恐怖、表情恐怖（正視恐怖）、視線恐怖（他者視線恐怖と自己視線恐怖）、醜形恐怖、嫌悪恐怖、嫌疑恐怖、会食恐怖、雑談恐怖、吃音恐怖、体臭恐怖、口臭恐怖、同性恐怖、異性恐怖など、多様な症状が見られる。

堀井・小川（1996）は、著しい対人不安を中核とする恐怖症の一群が対人恐怖症であり、対人恐怖症が日本でよくみられる病態であると捉えている。また、堀井・小川（1997a）は、対人恐怖症に関して、人前で恥ずかしがることを苦悩する病であり、強迫観念症の一種であるという森田療法の考え方を引用している。このように、対人恐怖症は、対人不安が慢性化、重篤化したものと考えることができる。

しかし、精神科領域での笠原（1997）の 3 つの見解を紹介した福井（2003）は、従来の対人恐怖症の定説を再検討せざるを得ないと主張している。その見解とは、①従来型の対人恐怖を訴える外来患者の減少、②東南アジアでの研究から対人恐怖が日本文化独自のものでないことの判明、③欧米でも対人状況で相手の評価に過度に敏感な人が大勢いることの判明、である。

(b) 対人恐怖心性とその構造　堀井・小川（1996）は、対人恐怖症の発症には至らないまでも、そうした心理的傾向である対人恐怖心性（anthropophobic tendency）を日本人が普遍的に有すること、また、時代的変化の影響を受けて、対人恐怖心性が量的に減少し、質的にもその内容が変化していることを指摘した。半世紀前の日本では、対人恐怖症の典型的病像は赤面恐怖（赤面しやすい）と他者視線恐怖（他人の視線が気になる）であった（稲浪・笠原, 1968）。しかし、その後、赤面恐怖の減少および自己視線恐怖の増加という対人恐怖心性の質における時代的変遷が指摘されている（堀井, 2006）。

対人恐怖心性に注目した小川（1974）は、“対人恐怖心性は対人関係および対人状況における不安意識と、対人意識のとらわれのなかで生じる自己に対する否定的な意識から成り立つ。”（p. 55）と述べている。そして、対人恐怖症者 120 人を調査対象とした小川（1974）は、対人恐怖心性を測定するための 117 項目 8 因子（①集団に溶け込めない悩み、②自分に満足できない悩み、③他人が気になる悩み、④くつろいで人とつき合えない悩み、⑤自分が気になる悩み、⑥気分のすぐれない悩み、⑦大勢の人に圧倒される悩み、⑧変な人に思われそうな悩み）から成る対人不安質問票を作成した。

中学生、高校生、大学生 1119 人を調査対象とした林・小川（1981）は、小川（1974）の対人不安質問票に改良を加え、66 項目 12 因子の対人関係質問票を作成し、中学生から高校生、大学生と年代が上昇すると対人恐怖心性が増加することを明らかにした。さらに、この 66 項目の対人関係質問票を再検討した堀井・小川（1997b）は、中学生、高校生、大学生 1128 人を調査対象とし、対人恐怖心性が 6 因子構造（①自分や他人が気になる悩み、②集団に溶け込めない悩み、③社会的場面で当惑する悩み、④目が気になる悩み、⑤自分を統制できない悩み、⑥生きることに疲れている悩み）をもつと主張した。⑤と⑥は対人恐怖の主症状ではなく、自己への不信感や感情的基調であると解釈された。

そして、中学生、高校生、大学生の男女 932 人を調査対象とした堀井・小川（1996）は、堀井・小川（1997b）の質問項目を絞り込み、30 項目 6 因子（各因子 5 項目）の対人恐怖心性尺度を作成した。得られた尺度は、堀井・小川（1997b）と同一の因子であったが、因子の抽出順序が異なっており、①集団に溶け込めない悩み、②目が気になる悩み、③自分や他人が気になる悩み、④社会的場面で当惑する悩み、⑤自分を統制できない悩み、⑥生きることに疲れている悩み、の 6 因子であった。なお、各項目に対する回答には、「全然あてはまらない」（0 点）から「非常に当てはまる」（6 点）までの 7 件法が使用された。

対人恐怖の時代的変遷に着目した堀井（2006）は、対人恐怖の典型例が「赤面恐怖」から「自己視線恐怖」へと変わり、対人恐怖の中核となる対人恐怖心性が「恥」から「おびえ」に変わったと指摘している。堀井（2006）は、“人前で恥ずかしがることに苦悩する学生よりは、被害感、迫害感、加害感などを訴え、対人関係におびえた学生が目立つ傾向にある。”（p.222）と述べ、おびえの心性を“対人場面で自己の攻撃性が他者に向けられる、または他者の攻撃性もしくは他者に投影された自己の攻撃性が自己に向けられることによって自己の安全感が損なわれることへの恐怖の心理的傾向”（p. 222）と定義している。そして、主に恥の心性に由来する対人恐怖心性を測定する堀井・小

川（1996）の対人恐怖心性尺度では不十分であると考えた堀井（2005）は、大学生 407 人を調査対象とし、おびえの心性に基づく対人恐怖心性尺度Ⅱの予備尺度（100 項目）の作成を試みた。そして、5 因子（①劣等恐怖、②被害恐怖、③自己視線・醜形恐怖、④孤立・親密恐怖、⑤加害恐怖）から成る予備尺度を作成した。続いて、尺度の有用性を高めるために、男女大学生 310 人を調査対象とした堀井（2006）は、堀井（2005）の予備尺度を各因子 5 項目に絞り、25 項目 5 因子から成る対人恐怖心性尺度Ⅱを作成した。抽出された因子とその順序は堀井（2005）の予備尺度と完全に一致していた。なお、各項目に対する回答には、堀井・小川（1996）と同様に、「全然あてはまらない」（0 点）から「非常に当てはまる」（6 点）までの 7 件法が使用された。

(3) 新タイプの対人恐怖としてのふれ合い恐怖

(a) ふれ合い恐怖症　日本では約半世紀前に比較して、特に大学生世代の青年の対人恐怖症の型が変化してきており、ふれ合い恐怖の症状群が顕著になっている、と指摘する研究者が続出した（福井, 2003; 伊藤・村瀬・金井, 2011; 伊藤・村瀬・吉住・村上, 2008; 岡田, 1993, 2002）。しかし、ふれ合い恐怖については、まだ英訳語にも合意形成が得られていない状況であり、福井（2003）は“fear of emotional touching”、伊藤他（2008, 2011）は“avoidance of intimacy”、岡田（1993, 2002）は“commu-phobia”という用語を使用している。

岡田（2002）によると、従来型の対人恐怖とふれ合い恐怖の間には次のような 3 つの相違点を認めることができる。①従来型の対人恐怖は出会い場面（人と人とが出会い顔見知りになる場面）で発症しやすいのに対し、ふれ合い恐怖はふれ合い場面（顔見知りからより親密な関係に発展する場面）で発症しやすい。②従来型の対人恐怖は中学生から高校生にかけて発症しやすいのに対し、ふれ合い恐怖は大学生で発症しやすい。③臨床的な問題が出現する場合、従来型の対人恐怖に比べて、ふれ合い恐怖の病理はあまり重篤ではない。このように、ふれ合い恐怖症の青年は、友人との雑談や会食のような対人関係が深まる場面に困難を感じるが、情緒的な関わりをもたなくて済む、形式的・機械的な関係であれば、困難を感じることはない。

福井（2003）は、“…対人接触の困難さの訴えは同じであるにもかかわらず、対人恐怖の特徴とされた従来の赤面、視線、自己臭、醜形恐怖のような身体的な不全さを対人回避の理由として主張しない”（p. 42）人々に注目し、これらの人々の示す対人恐怖をふれ合い恐怖として区別している。

(b) ふれ合い恐怖心性とその構造　対人恐怖と対人恐怖心性の関係と同様に、ふれ合い恐怖の持続的傾向をふれ合い恐怖心性という。本研究では、ふれ合い恐怖心性を「他者との関係が発展する状況におかれることに怯えを覚える内的傾向」と捉える。

このふれ合い恐怖心性の英文表記も研究者間で一致しておらず、伊藤他（2008, 2011）は“tendency to avoid intimacy”、岡田（1993, 2002）は“commu-phobic tendency”と表記しているが、福井（2003）は特に表記していない。

ふれ合い恐怖心性を測定するために、女子高校生と女子大学生を調査対象とした福井（2003）は、24 個のふれ合い恐怖項目と 16 個の外見恐怖項目を用意し、これら 40 項目の因子分析の結果、第Ⅰ因子として 20 項目のふれ合い恐怖因子を得た。次に、ふれ合い恐怖因子に属する 20 項目を因子分

析したところ、2 因子解が得られた。第Ⅰ因子は、友人との親密な二人だけの関係を形成することが困難な「友人関係形成困難」因子（12 項目、ただし 1 項目は第Ⅱ因子にも高負荷）、第Ⅱ因子は、対面している他者と親しい二人だけの関係へ移行することの拒否感・不安感である「対面不安」因子（8 項目）であった。なお、回答方法の記述は見られなかった。

また、男女大学生 524 人を調査対象とした岡田（2002）は、26 個のふれ合い恐怖項目を用意し、因子分析の結果、2 因子解を得た。第Ⅰ因子は、友だちや人と関わりたくない、食事をしたくないなどの「対人退却」因子（10 項目）、第Ⅱ因子は、人と一緒にいても話題がなくて困る、他人の本音で自分が傷つけられるなどの「関係調整不全」因子（7 項目）であった。回答方法は、「まったくあてはまらない」（1 点）～「とてもあてはまる」（6 点）の 6 件法であった。

(4) ふれ合い恐怖に関する研究課題

(a) ふれ合い恐怖心性尺度項目における関係発展場面への出会い場面の混入　岡田（2002）によると、対人恐怖とふれ合い恐怖を区別する 1 つの指標は、対人恐怖が人と人の出会い場面で発症しやすいのに対し、ふれ合い恐怖は顔見知りからより親密な関係に発展する関係発展場面で発症しやすい。このことから、対人恐怖は未知の他者に対する出会い場面で、また、ふれ合い恐怖は友人など既知の他者に対する関係発展場面で生じやすいと解釈できる。ただし、岡田（2002）の対人恐怖に関する見解は、対人恐怖が「半知り」の人に生じやすいという丹野（2006）や中間的な親しさの人に生じやすいという永田（2004）の見解と矛盾するが、本研究では、岡田（2002）の見解を踏まえてふれ合い恐怖の問題を考えていく。

既存のふれ合い恐怖心性尺度では、出会い場面であるか関係発展場面であるかを意識して、項目が作成されているのであろうか。また、別の角度から捉えるとき、既存のふれ合い恐怖心性尺度では、ふれ合い恐怖を感じる相手が、友人などの既知の他者であるか未知の他者であるかを意識して、項目が作成されているのであろうか。

福井（2003）が作成した 2 因子（友人関係形成困難因子、対面不安因子）20 項目のふれ合い恐怖心性尺度は、20 項目のうち、9 項目が既知の他者（友だち 7 項目、知っている人 1 項目、近所の人 1 項目）に対する恐怖を扱っており、残りの 11 項目が他者全般（既知・未知を問わず他者全般）に対する恐怖を扱っている。既知の他者に対する恐怖を扱っている 9 項目は、明らかに関係発展場面であるし、他者全般に対する恐怖を扱っている 11 項目は、関係発展場面と出会い場面の両方を包括する場面的特徴を示している。

岡田（2002）が作成した 2 因子（対人退却因子、関係調整不全因子）17 項目のふれ合い心性尺度は、17 項目のうち、6 項目が既知の他者（友だち）に対するふれ合い恐怖を扱っており、残りの 11 項目が他者全般（既知・未知を問わず他者全般）に対するふれ合い恐怖を扱っている。ここでも同様に、既知の他者に対する恐怖を扱っている 6 項目は、明らかに関係発展場面であるし、他者全般に対する恐怖を扱っている 11 項目は、関係発展場面と出会い場面の両方を包括する場面的特徴を示している。なお、岡田（2002）の尺度から削除された項目の中には、既知の他者として知り合いが用いられている場合もあった。

(b) ふれ合い恐怖心性尺度のタイプ　ふれ合い恐怖心性尺度によってふれ合い恐怖を測定する場合、恐怖を覚える対象人物の中から、親密で気を遣う必要のない家族・親族・親友・知人が除外されることは言うまでもない。このことを前提にすると、ふれ合い恐怖心性尺度は、測定するふれ合い恐怖が誰に対する恐怖であるのかによって、すなわち恐怖を覚える相手が誰であるかによって、5つのタイプに分類できると考えられる。

第 1 のタイプは、恐怖を覚える相手を他者全般とする場合であり、当然のことながら、既知の他者と未知の他者、既知であっても、ある程度親しい他者と親しくない他者が含まれる。この場合、対象人物を表現する用語として「他者」や「人」などを用いることができる。第 1 タイプの尺度は、関係発展場面における既知の他者に対する関係発展恐怖と、出会い場面における未知の他者に対する出会い恐怖とその後の関係発展恐怖を測定する尺度である。

第 2 のタイプは、項目や場面によって、恐怖を覚える他者を既知の他者としたり、他者全般としたりする場合であり、上記の福井（2003）と岡田（2002）の尺度がこれに相当する。この場合、既知の対象人物を表現する用語として「友だち」「知り合い」「近所の人」など、他者全般を表現する用語として「他者」や「人」などを用いることができる。第 2 タイプの尺度は、関係発展場面における既知の他者に対する関係発展恐怖と、出会い場面における未知の他者に対する出会い恐怖とその後の関係発展恐怖を測定する尺度である。

第 3 のタイプは、項目や場面によって、恐怖を覚える他者を未知の他者としたり、他者全般としたりする場合であり、この場合、未知の対象人物を表現する用語として「未知の他者」「知らない人」「初めて会う人」など、他者全般を表現する用語として「他者」や「人」などを用いることができる。第 3 タイプの尺度は、出会い場面における未知の他者に対する出会い恐怖とその後の関係発展恐怖と、関係発展場面における既知の他者に対する関係発展恐怖を測定する尺度である。

第 4 のタイプは、恐怖を覚える相手を既知の他者とする場合であり、この場合は対象人物を表現する用語として「友だち」「知り合い」「近所の人」などを用いることができる。第 4 タイプの尺度は、関係発展場面における既知の他者に対する関係発展恐怖を測定する尺度である。

第 5 のタイプは、恐怖を覚える相手を未知の他者とする場合であり、この場合は対象人物を表現する用語として「未知の他者」「知らない人」「初めて会う人」などを用いることができる。第 5 タイプの尺度は、出会い場面における未知の他者に対する出会い恐怖とその後の関係発展恐怖を測定する尺度である。

上述したように、福井（2003）と岡田（2002）が作成したふれ合い恐怖心性尺度を構成する項目には、関係発展場面と出会い場面が混在している。そこで、関係発展場面と出会い場面を明確に区別できる項目を用意することによって、2 種類のふれ合い恐怖を弁別的に測定することは有意義であろう。まず、既知の他者との関係発展場面を使用することによって、既知の他者とのより親密な関係への発展を恐れる典型的なふれ合い恐怖を測定可能とする典型的ふれ合い恐怖心性尺度を作成できる。次に、未知の他者との出会い場面を使用することによって、未知の他者に対する出会い恐怖とその後の関係発展恐怖を含む非典型的なふれ合い恐怖を測定可能とする非典型的ふれ合い恐怖心性尺度を作成できる。

本研究では、典型的ふれ合い恐怖心性尺度の項目としては、既知の他者を友だちとの関係発展場面を設定する。そして、非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の項目としては、未知の他者を知らない他人とする。両尺度による測定結果を比較可能にするために、両尺度で同一内容・同一表現の項目を用い、恐怖を感じる相手のみを友だちあるいは知らない他人に変える必要がある。

(5) 本研究の目的

本研究では、共通の項目内容から構成される 2 種類のふれ合い恐怖心性尺度、すなわち、既知の他者（友だち）との関係発展場面におけるふれ合い恐怖心性を測定するための典型的ふれ合い恐怖心性尺度と、未知の他者（知らない他人）との出会い場面（潜在的に関係発展の性質も含まれる場面）におけるふれ合い恐怖心性を測定するための非典型的ふれ合い恐怖心性尺度を作成し、両尺度の構造的異同および両尺度で測定したふれ合い恐怖心性の量的異同を検討する。

2. 方法

(1) 調査対象者と調査手続き

調査対象者は広島県内の A 大学の女子大学生 113 人であった。有効回答者は 109 人であり、有効回答率は 96.5%であった。有効回答者の平均年齢は 19.8 歳（標準偏差 1.07）であった。

調査は、「人間関係とコミュニケーションに関する調査」という題目の質問紙を用いて、心理学関係の授業時間を利用した集合調査法と、個別に調査依頼した個別調査法との 2 つの方法により、2014 年 9 月から 10 月にかけて実施した。集合調査法により 97 人の有効回答が、また、個別調査法により 12 人の有効回答が得られた。

(2) 質問紙の内容

(a) 質問紙の構成　質問紙は、A4 判用紙 6 枚に片面印刷したものであった。1 枚目は表紙、2 枚目は非典型的ふれ合い恐怖心性尺度、3 枚目は典型的ふれ合い恐怖心性尺度、4 枚目は未知の他者とのコミュニケーション不安尺度と既知の他者とのコミュニケーション不安尺度、5 枚目は未知の他人用親切行動尺度、6 枚目はメール・コミュニケーション・スキル尺度であった。本研究で分析に使用しない尺度の紹介は省略する。

(b) 全体教示　質問紙の表紙に“この調査は、「友だち」や「知らない他人」との人間関係及びコミュニケーションについてお尋ねするものです。ご協力いただける方は、以下の注意点をよく読んでからお答えください。”という教示を印刷し、口頭でも同様の教示を調査対象者に提示した。回答上の注意の要点は、①回答の正誤はないこと、②周囲の人と相談しないこと、③調査は無記名であり、回答内容を調査目的以外で使用しないこと、④データの廃棄など個人情報の保護に配慮すること、⑤回答は強制ではないこと、であった。なお、表紙には、調査対象者の学科・学年・年齢の記入欄、調査者の氏名・連絡先等が記載してあった。

(c) 非典型的ふれ合い恐怖心性尺度と典型的ふれ合い恐怖心性尺度　福井（2003）の「ふれあい恐怖尺度」と岡田（2002）の「ふれ合い恐怖尺度」に基づいて、ふれ合い恐怖心性を測定するための項目を 26 項目作成した。そして、恐怖を覚える他者を未知の他者「知らない他人」と設定する 26 項目の非典型的ふれ合い恐怖心性尺度（表 11-1 の左欄）と、恐怖を覚える他者を既知の「友だち」と設定する 26 項目の典型的ふれ合い恐怖心性尺度（表 11-1 の右欄）の 2 種類を用意した。

非典型的ふれ合い恐怖心性尺度では、“知らない他人の場合、下に示した項目の内容は、あなたにどの程度あてはまりますか？「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの 4 つの回答段階から 1 つ選んで、その数字に○を付けてください。”と教示した。他方、典型的ふれ合い恐怖心性尺度の教示では、上記の“知らない他人の場合”という表現を“友だちの場合”に変更した。

なお、回答は、「全くあてはまらない」（1 点）、「ややあてはまる」（2 点）、「わりとあてはまる」（3 点）、「とてもよくあてはまる」（4 点）の 4 段階で得点化した。

3. 結果

(1) 非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の分析

26 項目の非典型的ふれ合い恐怖心性得点に関して、最尤法による因子分析を行い、固有値の減衰状況と累積寄与率から 2 因子解が妥当であると判断した。回転前の累積寄与率は 50.15％であった。次に、抽出因子数を 2 因子に指定し、最尤法・プロマックス回転による因子分析を、不適切な項目を削除しつつ繰り返した。①因子負荷量の絶対値が.40 以上であること、②他の因子の負荷量との差が.20 以上であること、の 2 つの基準を満たさない項目を削除した結果、6 項目が削除され、20 項目が残った。表 11-2 に示したように、最終的に 20 項目の 2 因子構造が得られた。削除された項目を表 11-3 に示した。

表 11-2 から分かるように、第 1 因子は、“24. 自分が知らない他人を不快にさせるのではないかと気になる”、“12. 知らない他人の本音で自分が傷つけられそうな気がする”、“23. まわりの知らない他人から自分だけが浮いている”といった他者に対する加害不安や他者からの被害不安に関連する項目、および他者との関係に消極的な項目など 11 項目に高い負荷量が見られる。そこで、第 1 因子は「加害被害不安・対人回避」因子と命名した。

第 2 因子は、“2. 知らない他人と食事をしながら話すのはいやだ”、“1. 知らない他人と一緒に食事をするのは好きでない”、“6. 知らない他人から食事にさそわれると困る”といった他者との会食や雑談に対する不安に関連する項目など 9 項目に高い負荷量が見られる。そこで、第 2 因子は「会食不安・雑談不安」因子と命名した。

上記のように、第 1 因子と第 2 因子を命名したが、両因子の項目内容から判断できるように、両因子は共に明確な因子であるとは言えないという特徴を有していた。

表 11-1　用意した 2 種類のふれ合い恐怖心性尺度の項目

非典型的ふれ合い恐怖心性尺度	典型的ふれ合い恐怖心性尺度
1. 知らない他人と一緒に食事をするのは好きでない	1. 友だちと一緒に食事をするのは好きでない
2. 知らない他人と食事をしながら話すのはいやだ	2. 友だちと食事をしながら話すのはいやだ
3. 大勢の知らない他人とワイワイ騒ぐのが苦手だ	3. 大勢の友だちとワイワイ騒ぐのが苦手だ
4. できるだけ知らない他人に会いたくない	4. できるだけ友だちに会いたくない
5. できることなら知らない他人とあまり関わりになりたくない	5. できることなら友だちとあまり関わりになりたくない
6. 知らない他人から食事にさそわれると困る	6. 友だちから食事にさそわれると困る
7. 知らない他人と親しくなるのはめんどうくさい	7. 友だちと親しくなるのはめんどうくさい
8. 知らない他人と親しい関係がもてない	8. 友だちと親しい関係がもてない
9. 知らない他人と一緒にいるよりも、一人でいる方が気が楽だ	9. 友だちと一緒にいるよりも、一人でいる方が気が楽だ
10. 知らない他人から離れて、一人で趣味に没頭していたい	10 .友だちから離れて、一人で趣味に没頭していたい
11. 知らない他人といても話題がなくて困ることが多い	11. 友だちといても話題がなくて困ることが多い
12. 知らない他人の本音で自分が傷つけられそうな気がする	12. 友だちの本音で自分が傷つけられそうな気がする
13. 自分の本音を知らない他人に見せたくない	13. 自分の本音を友だちに見せたくない
14. 知らない他人とちょうどよい距離をとるのが難しい	14. 友だちとちょうどよい距離をとるのが難しい
15. 知らない他人と 2 人きりでいる場面は苦手だ	15. 友だちと 2 人きりでいる場面は苦手だ
16. 知らない他人と雑談するのは苦手だ	16. 友だちと雑談するのは苦手だ
17. 知らない他人は自分を受け入れてくれない	17. 友だちは自分を受け入れてくれない
18. 知らない他人とすぐ打ち解けることができない	18. 友だちとすぐ打ち解けることができない
19. 知らない他人に会った時、挨拶するのが苦痛だ	19. 友だちに会った時、挨拶するのが苦痛だ
20. 道を歩いていて、知らない他人に会うのがいやだ	20. 道を歩いていて、友だちに会うのがいやだ
21. 話をしていても、知らない他人の気持ちがわからない	21. 話をしていても、友だちの気持ちがわからない
22. 知らない他人に自分の考えをうまく伝えられない	22. 友だちに自分の考えをうまく伝えられない
23. まわりの知らない他人から自分だけが浮いている	23. まわりの友だちから自分だけが浮いている
24. 自分が知らない他人を不快にさせるのではないかと気になる	24. 自分が友だちを不快にさせるのではないかと気になる
25. 知らない他人と目が合わないように工夫している	25. 友だちと目が合わないように工夫している
26. 大勢の知らない他人がいるところは避けたい	26. 大勢の友だちがいるところは避けたい

表 11-2　非典型的ふれ合い恐怖心性得点に関する因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）

	項目	F1	F2	h^2
24.	自分が知らない他人を不快にさせるのではないかと気になる	**.82**	-.14	.55
12.	知らない他人の本音で自分が傷つけられそうな気がする	**.76**	-.13	.48
23.	まわりの知らない他人から自分だけが浮いている	**.74**	-.10	.47
26.	大勢の知らない他人がいるところは避けたい	**.71**	.08	.59
25.	知らない他人と目が合わないように工夫している	**.68**	.00	.46
20.	道を歩いていて、知らない他人に会うのがいやだ	**.67**	-.04	.42
14.	知らない他人とちょうどよい距離をとるのが難しい	**.64**	.06	.46
19	知らない他人に会った時、挨拶するのが苦痛だ	**.59**	.04	.38
17.	知らない他人は自分を受け入れてくれない	**.59**	.08	.41
22.	知らない他人に自分の考えをうまく伝えられない	**.53**	.21	.46
8.	知らない他人と親しい関係がもてない	**.47**	.13	.32
2.	知らない他人と食事をしながら話すのはいやだ	-.24	**.99**	.73
1.	知らない他人と一緒に食事をするのは好きでない	-.22	**.95**	.69
6.	知らない他人から食事にさそわれると困る	-.04	**.74**	.51
11.	知らない他人といても話題がなくて困ることが多い	.09	**.68**	.54
10.	知らない他人から離れて、一人で趣味に没頭していたい	.11	**.63**	.49
15.	知らない他人と 2 人きりでいる場面は苦手だ	.11	**.62**	.48
16.	知らない他人と雑談するのは苦手だ	.29	**.57**	.62
9.	知らない他人と一緒にいるよりも、一人でいる方が気が楽だ	.08	**.53**	.34
3.	大勢の知らない他人とワイワイ騒ぐのが苦手だ	.06	**.47**	.26

表 11-3　非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の削除項目

4. できるだけ知らない他人に会いたくない
5. できることなら知らない他人とあまり関わりになりたくない
7. 知らない他人と親しくなるのはめんどうくさい
13. 自分の本音を知らない他人に見せたくない
18. 知らない他人とすぐ打ち解けることができない
21. 話をしていても、知らない他人の気持ちがわからない

表 11-4　非典型的ふれ合い恐怖心性得点の平均と標準偏差、および因子間比較の結果

	尺度全体	第 1 因子	第 2 因子	因子間比較の結果
平均	2.521	2.234	2.872	t (108) = -10.575, p < .001
（標準偏差）	(0.615)	(0.682)	(0.700)	

クロンバックのα係数を算出して、20 項目の尺度全体の内的整合性を検討したところ、.93 という高いα係数が得られ、尺度が内的整合性をもつことが証明された。また、同様にα係数を求めて、各因子の内的整合性を検討したところ、第 1 因子と第 2 因子で共に.90 の高いα係数が得られたので、2 つの下位尺度の内的整合性も確認できた。また、因子間相関を求めた結果、第 1 因子と第 2 因子の間には.62 の相関が示され、2 因子間には中程度の相関関係が存在することが分かった。

調査対象者個人の各項目の得点を加算し、項目数で割って得られた項目平均を個人得点とすることによって、非典型的ふれ合い恐怖心性得点の平均と標準偏差を、尺度全体と因子別に算出し、表 11-4 に示した。表 11-4 に併せて示したように、第 1 因子と第 2 因子の得点の平均値を対応のある *t* 検定によって比較したところ、第 2 因子の得点の方が第 1 因子の得点よりも有意に高いことが分かった。

以上のように、未知の他者（知らない他人）との出会い場面（潜在的に関係発展の性質も含まれる場面）におけるふれ合い恐怖心性を測定するための、加害被害不安・対人回避因子と会食不安・雑談不安因子の 2 因子 20 項目から構成される非典型的ふれ合い恐怖心性尺度を作成することができた。

(2) 典型的ふれ合い恐怖心性尺度の分析

26 項目の典型的ふれ合い恐怖心性得点に関して、最尤法による因子分析を行い、固有値の減衰状況と累積寄与率から 2 因子解が妥当であると判断した。回転前の累積寄与率は 55.82％であった。次に、抽出因子数を 2 因子に指定し、最尤法・プロマックス回転による因子分析を、不適切な項目を削除しつつ繰り返した。①因子負荷量の絶対値が.40 以上であること、②他の因子の負荷量との差が.20 以上であること、の 2 つの基準を満たさない項目を削除した結果、4 項目が削除され、22 項目が残った。表 11-5 に示したように、最終的に 22 項目の 2 因子構造が得られた。削除された項目を表 11-6 に示した。

表 11-5 から分かるように、第 1 因子は、“18. 友だちとすぐ打ち解けることができない”、“14. 友だちとちょうどよい距離をとるのが難しい”、“24. 自分が友だちを不快にさせるのではないかと気になる”といった他者との関係形成が困難な項目など 12 項目に高い負荷量を示していた。そこで、第 1 因子は「関係形成困難」因子と命名した。

第 2 因子は、“5. できることなら友だちとあまり関わりになりたくない”、“2. 友だちと食事をしながら話すのはいやだ”、“4. できるだけ友だちに会いたくない”といった他者との会食への不安や他者とのふれ合いを避ける項目など 10 項目に高い負荷量を示していた。そこで、第 2 因子は「会食不安・対人回避」因子と命名した

上記のように、第 1 因子と第 2 因子を命名したが、この尺度の場合も、両因子の項目内容から判断できるように、両因子は共に明確な因子であるとは言えないという特徴を有していた。

表 11-5　典型的ふれ合い恐怖心性得点に関する因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）

	項目	F1	F2	h^2
18.	友だちとすぐ打ち解けることができない	**.87**	-.09	.67
14.	友だちとちょうどよい距離をとるのが難しい	**.86**	-.16	.60
24.	自分が友だちを不快にさせるのではないかと気になる	**.81**	-.13	.55
17.	友だちは自分を受け入れてくれない	**.78**	.03	.64
12.	友だちの本音で自分が傷つけられそうな気がする	**.77**	-.09	.51
22.	友だちに自分の考えをうまく伝えられない	**.76**	-.07	.52
11.	友だちといても話題がなくて困ることが多い	**.66**	.18	.61
23	まわりの友だちから自分だけが浮いている	**.65**	.19	.61
13.	自分の本音を友だちに見せたくない	**.61**	.14	.49
21.	話をしていても、友だちの気持ちがわからない	**.59**	-.07	.30
15.	友だちと 2 人きりでいる場面は苦手だ	**.57**	.11	.41
16.	友だちと雑談するのは苦手だ	**.56**	.34	.66
5.	できることなら友だちとあまり関わりになりたくない	-.11	**.92**	.73
2.	友だちと食事をしながら話すのはいやだ	-.27	**.90**	.59
4.	できるだけ友だちに会いたくない	-.05	**.85**	.67
1.	友だちと一緒に食事をするのは好きでない	-.08	**.78**	.54
6.	友だちから食事にさそわれると困る	-.09	**.68**	.39
7.	友だちと親しくなるのはめんどうくさい	.14	**.67**	.58
3.	大勢の友だちとワイワイ騒ぐのが苦手だ	.10	**.53**	.35
9.	友だちと一緒にいるよりも、一人でいる方が気が楽だ	.22	**.52**	.45
26.	大勢の友だちがいるところは避けたい	.33	**.51**	.56
10.	友だちから離れて、一人で趣味に没頭していたい	.17	**.48**	.37

表 11-6　典型的ふれ合い恐怖心性尺度の削除項目

8. 友だちと親しい関係がもてない
19. 友だちに会った時、挨拶するのが苦痛だ
20. 道を歩いていて、友だちに会うのがいやだ
25. 友だちと目が合わないように工夫している

表 11-7　典型的ふれ合い恐怖心性得点の平均と標準偏差、および因子間比較の結果

	尺度全体	第 1 因子	第 2 因子	因子間比較の結果
平均	1.548	1.661	1.397	t (108) = 5.495, p < .001
（標準偏差）	(0.492)	(0.615)	(0.454)	

クロンバックのα係数を算出して、22 項目の尺度全体の内的整合性を検討したところ、.94 という高いα係数が得られ、尺度が内的整合性をもつことが証明された。また、同様にα係数を求めて、各因子の内的整合性を検討したところ、第 1 因子で.93、第 2 因子で.90 の高いα係数が得られたので、2 つの下位尺度の内的整合性も確認できた。また、因子間相関を求めた結果、第 1 因子と第 2 因子の間には.61 の相関が示され、2 因子間には中程度の相関関係が存在することが分かった。

調査対象者個人の各項目の得点を加算し、項目数で割って得られた項目平均を個人得点とすることによって、典型的ふれ合い恐怖心性得点の平均と標準偏差を、尺度全体と因子別に算出し、表 11-7 に示した。表 11-7 に併せて示したように、第 1 因子と第 2 因子の得点の平均値を対応のある *t* 検定によって比較したところ、第1因子の得点の方が第2因子の得点よりも有意に高いことが分かった。

以上のように、既知の他者（友だち）との関係発展場面におけるふれ合い恐怖心性を測定するための、関係形成困難因子と会食不安・対人回避因子の 2 因子 22 項目から構成される典型的ふれ合い恐怖心性尺度を作成することができた。

(3) 非典型的ふれ合い恐怖心性尺度と典型的ふれ合い恐怖心性尺度の比較

項目レベルで、非典型的ふれ合い恐怖心性尺度と典型的ふれ合い恐怖心性尺度の因子構造を比較するために、それぞれの尺度の項目を、第 1 因子に属する項目、第 2 因子に属する項目、削除項目の 3 カテゴリーに分類した。そして、一方の尺度において 3 カテゴリーに分類された項目が他方の尺度ではどのカテゴリーに分類されるのか、対応関係を表 11-8 に整理した。表 11-8 によると、非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の第 1 因子（加害被害不安・対人回避因子）と典型的ふれ合い恐怖心性尺度の第 2 因子（会食不安・対人回避因子）との間、および非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の第 2 因子（会食不安・雑談不安因子）と典型的ふれ合い恐怖心性尺度の第 1 因子（関係形成困難因子）との間に比較的多くの共通項目が見られる。このように、両尺度間にある程度の一致は存在するが、項目の共通性は、両尺度を類似した尺度と見なすほど高くないと判断できる。したがって、両尺度の因子構造はかなり異なると言えるであろう。

次に、尺度レベルおよび因子（下位尺度）レベルで、非典型的ふれ合い恐怖心性得点と典型的ふれ合い恐怖心性得点の間の関係について、ピアソンの積率相関係数を算出することによって検討し、その結果を表 11-9 に示した。尺度レベルでも、因子レベルでも、非典型的ふれ合い恐怖心性得点と典型的ふれ合い恐怖心性得点の間には有意ではあるが、弱い正の相関関係が存在することが見出された。このように、相関分析の結果は、両尺度がふれ合い恐怖の異なる側面を測定している可能性の高いことを示唆していると解釈できる。

最後に、尺度レベルおよび因子（下位尺度）レベルで、非典型的ふれ合い恐怖心性得点と典型的ふれ合い恐怖心性得点の比較をするために、対応のある *t* 検定を用いて、平均値間の差の検定を実施し、その結果を表 11-10 に整理して示した。尺度レベルでも、因子レベルでも、非典型的ふれ合い恐怖心性得点の方が典型的ふれ合い恐怖心性得点よりも有意に大きいことが判明した。得点範囲が 1～4 点であることから、典型的ふれ合い恐怖心性得点が非常に低いことが分かる。このように得

点の差異の次元でも、非典型的ふれ合い恐怖心性尺度と典型的ふれ合い恐怖心性尺度は大きく異なることが証明された。

表 11-8　非典型的ふれ合い恐怖心性尺度と典型的ふれ合い恐怖心性尺度の因子構造の比較

		典型的ふれ合い恐怖心性尺度			
		第 1 因子	第 2 因子	削除項目	合計
非典型的ふれ合い恐怖心性尺度	第 1 因子	6	1	4	11
	第 2 因子	3	6	0	9
	削除項目	3	3	0	6
	合計	12	10	4	26

注 1）表内の数値は項目数

表 11-9　尺度レベルおよび因子レベルでの非典型的ふれ合い恐怖心性尺度と典型的ふれ合い恐怖心性尺度の相関関係（ピアソンの積率相関係数 *r*）

		典型的ふれ合い恐怖心性尺度		
		尺度全体	第 1 因子	第 2 因子
非典型的ふれ合い恐怖心性尺度	尺度全体	.36***	.34***	.29**
	第 1 因子	.38***	.37***	.30**
	第 2 因子	.24*	.22*	.21*

注 1）*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表 11-10　尺度レベルおよび因子レベルでの非典型的ふれ合い恐怖心性尺度得点と典型的ふれ合い恐怖心性尺度得点の比較結果（*t* 検定、*df* = 108、表内の数値は *t* 値）

			典型的ふれ合い恐怖心性尺度得点　*M* (*SD*)		
			尺度全体	第 1 因子	第 2 因子
			1.548 (0.492)	1.661 (0.615)	1.397 (0.454)
非典型的ふれ合い恐怖心性尺度得点 *M* (*SD*)	尺度全体	2.521 (0.615)	15.939***	—	—
	第 1 因子	2.234 (0.682)	—	8.156***	12.484***
	第 2 因子	2.872 (0.700)	—	15.275***	20.435***

注 1）*** $p < .001$

4. 考察

(1) 本研究で得られた知見

本研究では、ふれ合い恐怖を感じる相手のみを既知の他者（友だち）あるいは未知の他者（知ら

ない他人）に設定することによって、共通の項目内容から構成される 26 項目の予備尺度を用い、2 種類のふれ合い恐怖心性尺度を作成しようと試みた。因子分析の結果、既知の他者（友だち）との関係発展場面におけるふれ合い恐怖心性を測定する 2 因子 22 項目の典型的ふれ合い恐怖心性尺度（第 1 因子 12 項目：関係形成困難因子、第 2 因子 10 項目：会食不安・対人回避因子）と、未知の他者（知らない他人）との出会い場面（潜在的に関係発展の性質も含まれる場面）におけるふれ合い恐怖心性を測定する 2 因子 20 項目の非典型的ふれ合い恐怖心性尺度（第 1 因子 11 項目：加害被害不安・対人回避因子、第 2 因子 9 項目：会食不安・雑談不安因子）を作成することができた。

本研究で得られた典型的ふれ合い恐怖心性尺度と非典型的ふれ合い恐怖心性尺度に関する構造的異同および量的異同を 3 つの観点から検討した。第 1 に、項目レベルで、典型的ふれ合い恐怖心性尺度と非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の因子構造を比較するために、両尺度の各因子に属する項目の共通性を検討した。その結果、両尺度間の共通性はそれほど高くなく、両尺度の因子構造は異なることが示された。第 2 に、尺度レベルおよび因子（下位尺度）レベルで、典型的ふれ合い恐怖心性得点と非典型的ふれ合い恐怖心性得点の間の相関関係を検討したところ、弱い正の相関関係が存在し、両尺度が異なる側面を測定している可能性が高いことが示された。第 3 に、尺度レベルおよび因子（下位尺度）レベルで、典型的ふれ合い恐怖心性得点と非典型的ふれ合い恐怖心性得点を比較したところ、後者の得点の方が前者の得点よりも大きく、得点の差異の次元では、両尺度は大きく異なることが分かった。

以上より、本研究で検討した典型的ふれ合い恐怖心性尺度と非典型的ふれ合い恐怖心性尺度は異なる尺度として扱うことが適切であると判断できる。したがって、ふれ合い恐怖心性を測定する場合、ふれ合い恐怖を覚える相手を既知の他者と未知の他者に区別して扱うことが重要であるという本研究の当初の目的がある程度実証できたと考える。そして、未知の相手である知らない他人とふれ合う恐怖よりも、既知の相手である友だちとふれ合う恐怖の方が大きいかもしれないという予測とは逆に、調査対象者が友だちよりも知らない他人とふれ合うことを恐れていることが本研究の結果から明らかとなった。すなわち、ふれ合い恐怖心性は、既知の他者よりも未知の他者に対して強く関連していることが判明した。

なお、1 つの尺度でふれ合い恐怖心性を測定する場合は、項目によって、ふれ合い恐怖を覚える相手を既知の他者（例：友だち）としたり、未知の他者（例：知らない他人）としたりしないで、他者全般（例：他者）と一貫して抽象的に表記する方法もあろう。

(2) 今後の課題

本研究で別々の尺度項目として扱った典型的ふれ合い恐怖心性尺度項目と非典型的ふれ合い恐怖心性尺度項目を同時に因子分析することによって、ふれ合い恐怖を覚える相手の違いが因子構造にどのように反映されるのか、検討することは興味深い課題となる。本研究では、調査対象者数が少なかったため、当初用意した両尺度の項目（26 項目×2）を同時に因子分析することはできなかった。そうした意味で、調査対象者を増やす必要がある。

本研究では、ふれ合い恐怖を覚える既知の他者を友だちと設定した。しかし、友だちという概念

には多義的な要素があり、ほとんど付き合いのない親しくない友だちから、ごく普通の付き合いをしている平均的な友だち、さらには非常に親密に付き合っている親しい友だちまで想定できる。調査対象者がどのような親しさのレベルの友だちを想定するかによって、ふれ合い恐怖の程度は大きく異なると予想できる。今後は、既知の他者として友だちを設定する場合には、あまり親しくない友だちあるいはごく普通の付き合いをしている平均的な友だちといった具体的な設定をする方が望ましい。

最後に、ふれ合い恐怖を覚える他者の人数もふれ合い恐怖の程度を規定する重要な要因となりうることを指摘しておきたい。ふれ合い恐怖を覚えるのは、他者と一対一の対面状況であるのか、他者の人数が数人から 10 人程度の対面状況であるのか、もっと大勢の人々との対面状況であるのか、といった疑問も、解決すべき興味深い課題である。

5. 要約

共通の項目内容から構成される、既知の他者（友だち）に対する典型的ふれ合い恐怖心性尺度と、未知の他者（知らない他人）に対する非典型的ふれ合い恐怖心性尺度を作成し、両尺度の構造的異同および量的異同を検討した。女子大学生を調査対象とする調査結果から、2 因子 22 項目から成る典型的ふれ合い恐怖心性尺度（関係形成困難因子、会食不安・対人回避因子）と 2 因子 20 項目から成る非典型的ふれ合い恐怖心性尺度（加害被害不安・対人回避因子、会食不安・雑談不安因子）を作成したが、両尺度の因子構造はあまり明瞭ではなかった。因子を構成する項目の共通性が低いこと、両尺度間の相関関係が弱いこと、両尺度間の得点の差が大きいことから、既知の他者に対する典型的ふれ合い恐怖心性尺度と未知の他者に対する非典型的ふれ合い恐怖心性尺度は、ふれ合い恐怖の異なる側面を測定する異なる尺度であることを解明した。なお、未知の他者とのふれ合い恐怖心性の方が既知の他者とのふれ合い恐怖心性よりも有意に高いことが明らかとなったが、この差は既知の他者とのふれ合い恐怖心性の低さが原因であった。

キーワード：対人恐怖、ふれ合い恐怖、ふれ合い恐怖心性尺度、典型的ふれ合い恐怖、非典型的ふれ合い恐怖

第 2 節　親切行動と典型的および非典型的ふれ合い恐怖心性との関連

1. 問題

(1) ふれ合い恐怖心性

対人不安を中核とする対人恐怖症は、対人場面や対人関係に関わる神経症の一型であり、日本人に特徴的な神経症であるとされてきた。半世紀前頃は、対人恐怖症の典型的病像は赤面恐怖（赤面しやすい）と他者視線恐怖（他人の視線が気になる）であったが、近年になると赤面恐怖の減少および自己視線恐怖の増加という対人恐怖の時代的変遷が生じてきた。

堀井（2006）は、対人恐怖の中核となる対人恐怖心性が「恥」から「おびえ」に変わったと指摘している。大学生世代の青年の対人恐怖症の型の変化が特に大きく、ふれ合い恐怖の症状群が顕著にみられるようになった。このふれ合い恐怖の持続的傾向のことをふれ合い恐怖心性という。深田他（2017a）は、“他者との関係が発展する状況におかれることに怯えを覚える内的傾向”（p. 5）と捉え、ふれあい恐怖心性を測定するための尺度の開発を試みた。

ふれ合い恐怖心性を測定するための既存のふれ合い恐怖心性尺度を構成する項目を分析した深田他（2017a）は、出会い場面であるか関係発展場面であるか、あるいは、ふれ合い恐怖を感じる相手が未知の他者であるか既知の他者であるかが区別されていないと指摘した。例えば、福井（2003）と岡田（2002）が作成したふれ合い心性尺度を構成する項目には、関係発展場面と出会い場面が混在している。

そこで、深田他（2017a）は、関係発展場面と出会い場面を明確に区別できる項目を用意することによって、2 種類のふれ合い恐怖を弁別的に測定しようと試みた。深田他（2017a）は、共通の項目内容から構成される、既知の他者（友だち）に対する典型的ふれ合い恐怖心性尺度と、未知の他者（知らない他人）に対する非典型的ふれ合い恐怖心性尺度を作成し、両尺度の構造的異同および量的異同を検討した。女子大学生を対象とする調査結果から、2 因子 22 項目から成る典型的ふれ合い恐怖心性尺度（関係形成困難因子、会食不安・対人回避因子）と 2 因子 20 項目から成る非典型的ふれ合い恐怖心性尺度（加害被害不安・対人回避因子、会食不安・雑談不安因子）を作成した。そして、未知の他者とのふれ合い恐怖心性の方が既知の他者とのふれ合い恐怖心性よりも有意に高いことを明らかにし、この差は既知の他者とのふれ合い恐怖心性の低さが原因であると解釈した。

(2) ふれ合い恐怖心性との関連要因

ふれ合い恐怖心性を規定する要因はふれ合い恐怖心性への影響要因であり、また、ふれ合い恐怖心性が影響を与える要因はふれ合い恐怖心性の被影響要因である。影響要因と被影響要因をまとめて関連要因と呼ぶことができる。従来の研究では、ふれ合い恐怖心性への影響要因として、江原・

柴原（2011）はモーズレイ性格検査で測定される性格、福井（2003）と伊藤・村瀬・金井（2011）は自己愛傾向、伊藤（2013）は親子関係、溝口・相星・河野（2015）は親の養育態度と自己愛、西館（2011）は自己志向的完全主義と自己嫌悪感、山崎・吉野・木下・小野（2012）は親の養育態度を取り上げて検討している。

また、ふれ合い恐怖心性の被影響要因として、石原（2010）はストレス反応、伊藤・村瀬・吉住・村上（2008）は抑うつと自我同一性、加藤・岩崎・五十嵐（2013）は大学適応感と信頼感、西村（2001）は自己開示、岡田（2002）は友人関係を取り上げて検討している。これらの要因のうち、ストレス反応、抑うつ、自我同一性、大学適応感、信頼感は、個人の内的反応に関係する要因であり、自己開示は社会的行動に属する要因、友人関係は社会的関係に属する要因である。

本研究では、先行研究で検討されていない被影響要因に注目し、社会的行動としての親切行動を取り上げて、ふれ合い恐怖心性と親切行動の関連について検討する。

(3) 親切行動の規定因としてのふれ合い恐怖心性

親切の行為者の特徴として、近藤（2007a）は、①よく気のつく人、②思いやりのある人、③好意的な人、④善意の人、⑤同情的な人、⑥人見知りしない人、⑦腰の軽い人、⑧世話好きな人、⑨利他的な人、⑩選択的に不親切な人（大局的に親切な人）を挙げている。これらの中の⑥人見知りしない人について、近藤（2007a）は、他人が困っているかどうか、気軽に声をかけ、手助けを気軽に実行できる人でなければ親切行動は実行できないため、人見知りしない人であることが親切行動を実行するために必要であると考えている。逆に、人見知りする人は、恥ずかしさが先に立ち、手助けの実行が難しいため、親切を実行しにくいと考えている。

青年期以降の人見知りに密接に関係するパーソナリティ特性として、対人恐怖心性の現代的な型であるふれ合い恐怖心性がある。親切行動の行為者のもつふれ合い恐怖心性は、行為者が対象者との触れ合うことを回避ささせると、換言すれば、ふれ合い恐怖心性は親切行動を抑制すると予想できる。したがって、ふれ合い恐怖心性と親切行動の関連を検討することは意義のあることである。

ところで、親切行動に関しては、筆者は親切に関する一連の心理学的研究（深田, 2015a, 2015b, 2016, 2017; 深田・岡竹, 2015a, 2015b; 深田・谷川, 2016）を行ってきた。これらの研究の中で、深田・岡竹（2015b）は、親切の行動的構造を解明し、親切行動を測定するための親切行動尺度を作成しようと試みた。予備調査で 48 項目の親切行動を収集し、本調査で、48 項目の親切行動の実行可能性と負担度を測定し、天井効果や床効果を示さない 17 項目を、他人に対する親切行動として選択した。この 17 項目の実行可能性得点の因子分析の結果、第Ⅰ因子「緊急対応的親切」、第Ⅱ因子「世話好き的親切」、第Ⅲ因子「分与・貸与的親切」、第Ⅳ因子「応答的親切」の 4 因子を抽出し、4 因子 12 項目から成る他人用親切行動尺度を作成した。また、追加調査では、本調査で得られた他人用親切行動尺度を利用し、本調査と同様の手続きにより、友人・知人に対する親切行動を検討した。その結果、第Ⅰ因子「緊急対応的親切」、第Ⅱ因子「日常対応的親切」の 2 因子を抽出し、10 項目 2 因子から成る友人・知人用親切行動尺度を作成した。本研究では、深田・岡竹（2015b）の 4 因子から成る他人用親切行動尺度を使用して、未知の他者に対する親切行動を測定する。

なお、この未知の他者に対する親切行動と関連が大きいのは、既知の他者への典型的ふれ合い恐怖心性よりも未知の他者への非典型的ふれ合い恐怖心性であろうと予測できる。

(4) 本研究の目的

本研究の目的は、親切行動と既知の他者との典型的なふれ合い恐怖心性および未知の他者との非典型的なふれ合い恐怖心性との関連を検討することである。

2. 方法

(1) 調査対象者と調査手続き

広島県内の A 大学の女子大学生 109 人（平均年齢は 19.8 歳、標準偏差は 1.07）から有効回答を得た。調査は、「人間関係とコミュニケーションに関する調査」という題目の質問紙を用いて、集合調査法と個別調査法により、2014 年 9 月から 10 月にかけて実施した。

(2) 質問紙の内容

(a) 質問紙の構成　質問紙は、A4 判用紙 6 枚に片面印刷したものであった。1 枚目は表紙、2 枚目は非典型的ふれ合い恐怖心性尺度、3 枚目は典型的ふれ合い恐怖心性尺度、4 枚目は未知の他者用コミュニケーション不安尺度と既知の他者用コミュニケーション不安尺度、5 枚目は他人用親切行動尺度、6 枚目はメール・コミュニケーション・スキル尺度であった。本研究で分析に使用しない尺度の紹介は省略する。質問紙の表紙に、「友だち」や「知らない他人」との人間関係及びコミュニケーションに関する調査である旨の教示を印刷し、口頭でも同様の教示を行った。このほかに、表紙には、回答上の注意や調査対象者の年齢等の記入欄などが記載してあった。

(b) ふれ合い恐怖心性尺度　深田他（2017a）で作成した、未知の他者（知らない他人）に対する 2 因子（加害被害不安・対人回避因子と会食不安・雑談不安因子）20 項目の「非典型的ふれ合い恐怖心性尺度」（表 11-11）と、既知の他者（友だち）に対する 2 因子（関係形成困難因子、会食不安・対人回避因子）22 項目の「典型的ふれ合い恐怖心性尺度」（表 11-12）を使用した。回答は、「全くあてはまらない」（1 点）～「とてもよくあてはまる」（4 点）の 4 段階で、ふれ合い恐怖心性が強いほど高得点になるように得点化した。

(c) 親切行動尺度　深田・岡竹（2015b）の作成した未知の他者（知らない他人）に対する 4 因子（緊急対応的親切因子、世話好き的親切因子、分与・貸与的親切因子、応答的親切因子）12 項目の「他人用親切行動尺度」（表 11-13）を使用した。知らない他人に対して 12 項目（このほかに 5 項目のダミー項目を含む）の親切行動をどのくらい実行する可能性があるかを尋ね、「全くない」（1 点）、「少しある」（2 点）、「わりとある」（3 点）、「かなりある」（4 点）の 4 点尺度で回答を求め、親切行動の実行可能性が高まるほど高得点になるように 4 段階で得点化した。

表 11-11　本研究で使用した非典型的ふれ合い恐怖心性尺度
（深田他, 2017a）の項目

第 1 因子「加害被害不安・対人回避」
自分が知らない他人を不快にさせるのではないかと気になる
知らない他人の本音で自分が傷つけられそうな気がする
まわりの知らない他人から自分だけが浮いている
大勢の知らない他人がいるところは避けたい
知らない他人と目が合わないように工夫している
道を歩いていて、知らない他人に会うのがいやだ
知らない他人とちょうどよい距離をとるのが難しい
知らない他人に会った時、挨拶するのが苦痛だ
知らない他人は自分を受け入れてくれない
知らない他人に自分の考えをうまく伝えられない
知らない他人と親しい関係がもてない
第 2 因子「会食不安・雑談不安」
知らない他人と食事をしながら話すのはいやだ
知らない他人と一緒に食事をするのは好きでない
知らない他人から食事にさそわれると困る
知らない他人といても話題がなくて困ることが多い
知らない他人から離れて、一人で趣味に没頭していたい
知らない他人と 2 人きりでいる場面は苦手だ
知らない他人と雑談するのは苦手だ
知らない他人と一緒にいるよりも、一人でいる方が気が楽だ
大勢の知らない他人とワイワイ騒ぐのが苦手だ

表 11-12　本研究で使用した典型的ふれ合い恐怖心性尺度
（深田他, 2017a）の項目

第 1 因子「関係形成困難」
友だちとすぐ打ち解けることができない
友だちとちょうどよい距離をとるのが難しい
自分が友だちを不快にさせるのではないかと気になる
友だちは自分を受け入れてくれない
友だちの本音で自分が傷つけられそうな気がする
友だちに自分の考えをうまく伝えられない
友だちといても話題がなくて困ることが多い

まわりの友だちから自分だけが浮いている
自分の本音を友だちに見せたくない
話をしていても、友だちの気持ちがわからない
友だちと 2 人きりでいる場面は苦手だ
友だちと雑談するのは苦手だ
第 2 因子「会食不安・対人回避」
できることなら友だちとあまり関わりになりたくない
友だちと食事をしながら話すのはいやだ
できるだけ友だちに会いたくない
友だちと一緒に食事をするのは好きでない
友だちから食事にさそわれると困る
友だちと親しくなるのはめんどうくさい
大勢の友だちとワイワイ騒ぐのが苦手だ
友だちと一緒にいるよりも、一人でいる方が気が楽だ
大勢の友だちがいるところは避けたい
友だちから離れて、一人で趣味に没頭していたい

表 11-13　本研究で使用した他人用親切行動尺度（深田・岡竹, 2015b）の項目

第 1 因子「緊急対応的親切」
乱暴されている人をみたとき、警察に通報したりして助けを呼ぶ
けが人や急病人がでたとき、救急車を呼ぶ
けが人や急病人がでたとき、介抱する
胸をおさえて歩道に横たわっている人がいたら、声をかけて救急車を呼ぶ
第 2 因子「世話好き的親切」
カメラのシャッター押しに「協力しましょうか」と声をかける
人が何か探し物をしているときに、こちらから声をかける
自転車が倒れていたら、起こしておいてあげる
コンタクト・レンズを落として探している人がいたら、一緒に探す
第 3 因子「分与・貸与的親切」
財布を落とした人やお金の足りない人にお金を貸す
困っている人に自分の持ちものをわけてあげる
第 4 因子「応答的親切」
荷物の番を頼まれたとき、引き受ける
「バス停まで連れて行って欲しい」と頼まれたとき、連れて行ってあげる

3. 結果

(1) 親切行動の基礎統計量

知らない他人用親切行動尺度で測定した親切行動得点の平均、標準偏差、α係数を尺度全体および因子別に算出し表 11-14 に示した。そして、1 要因 4 水準の分散分析と多重比較による親切行動得点の因子間比較の結果を表 11-14 に併せて示した。尺度全体、緊急対応的親切、世話好き的親切のα係数は高かったが、分与・貸与的親切と応答的親切のα係数は低く、下位尺度としての信頼性に欠けることが示された。

また、行動得点に関しては、1 要因分散分析の結果が有意であり、多重比較の結果、緊急対応的親切と応答的親切が最も高く、世話好き的親切が次に高く、分与・貸与的親切が最も低いことが示された。

表 11-14　尺度全体と因子別の親切行動得点の平均、標準偏差、α係数、および親切行動得点の因子間比較の結果

	M	*(SD)*	α	分散分析	多重比較
親切行動尺度全体	2.19	(0.56)	.83	—	—
F1 緊急対応的親切	2.51	(0.75)	.87		
F2 世話好き的親切	2.09	(0.81)	.80	F (3, 324) = 40.946	F1 = F4 > F2 > F3
F3 分与・貸与的親切	1.71	(0.61)	.67	p < .001	ps < .05
F4 応答的親切	2.43	(0.89)	.67		

(2) ふれ合い恐怖心性を説明変数、親切行動を目的変数とする重回帰分析

尺度全体と因子別の親切行動得点の 5 変数それぞれを目的変数とし、次に述べる 4 セットのふれ合い恐怖心性を説明変数とする重回帰分析を行った。説明変数は、①非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の全体得点と典型的ふれ合い恐怖心性尺度の全体得点の 2 変数、②非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の加害被害不安・対人回避因子得点と会食不安・雑談不安因子得点の 2 変数、③典型的ふれ合い恐怖心性尺度の関係形成困難因子得点と会食不安・対人回避因子得点の 2 変数、④非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の加害被害不安・対人回避因子得点と会食不安・雑談不安因子得点、典型的ふれ合い恐怖心性尺度の関係形成困難因子得点と会食不安・対人回避因子得点の 4 変数、の 4 セットであった。この説明変数のセットを縦に、5 種類の目的変数を横にとり、算出したβ係数を表 11-15 に示した。

表 11-15 から、非典型的ふれ合い恐怖心性は親切行動に影響を及ぼすが、典型的ふれ合い恐怖心性は親切行動に影響を及ぼさないことが分かった。詳細に結果を見ると、非典型的ふれ合い恐怖心性全体は、親切行動全体を有意に抑制し、親切行動の中でも世話好き的親切と分与・貸与的親切を有意に抑制することが実証された。しかし、このような非典型的ふれ合い恐怖心性の影響は、非典型的ふれ合い恐怖心性を構成する 2 因子に共通にみられるのではなく、会食不安・雑談不安因子の

みに認められた。すなわち、非典型的ふれ合い恐怖心性を構成する会食不安・雑談不安だけが親切行動全体と世話好き的親切を有意に抑制していた。

表 11-15　ふれ合い恐怖心性を説明変数、親切行動を目的変数とする重回帰分析の結果（β係数）

説明変数（ふれ合い恐怖心性）	目的変数				
	親切行動尺度全体	緊急対応的親切	世話好き的親切	分与貸与的親切	応答的親切
（非）尺度全体	**-.258****	-.120	**-.465*****	**-.272****	-.270
（典）尺度全体	-.117	-.152	-.108	-.024	-.193
（非）加害被害不安・対人回避	-.084	-.142	-.045	-.109	-.166
（非）会食不安・雑談不安	**-.208***	-.020	**-.455*****	-.171	-.160
（典）関係形成困難	-.129	-.190	-.154	-.077	-.097
（典）会食不安・対人回避	-.104	.025	-.176	-.071	-.263
（非）加害被害不安・対人回避	-.048	-.098	-.004	-.100	-.118
（非）会食不安・雑談不安	**-.206***	-.022	**-.452*****	-.170	-.151
（典）関係形成困難	-.081	-.153	-.081	-.017	-.034
（典）会食不安・対人回避	-.053	.047	-.083	-.019	-.211

注 1）（非）：非典型的ふれ合い恐怖心性、（典）：典型的ふれ合い恐怖心性

注 2）*** $p < .001$、** $p < .01$、* $p < .05$

(3) 典型的・非典型的ふれ合い恐怖心性の類型と親切行動との関連

非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の全体得点の平均値を基準に、調査対象者を非典型的ふれ合い恐怖心性高群（$N = 52$）と低群（$N = 57$）に分類した。また、典型的ふれ合い恐怖心性尺度の全体得点の平均値を基準に、調査対象者を典型的ふれ合い恐怖心性高群（$N = 41$）と低群（$N = 68$）に分類した。次に、非典型的ふれ合い恐怖心性の高低と典型的ふれ合い恐怖心性の高低の組み合わせから、非典型的ふれ合い恐怖心性高・典型的ふれ合い恐怖心性高群（$N = 31$：以下、非高典高群）、非典型的ふれ合い恐怖心性高・典型的ふれ合い恐怖心性低群（$N = 21$：以下、非高典低群）、非典型的ふれ合い恐怖心性低群・典型的ふれ合い恐怖心性高群（$N = 10$：以下、非低典高群）、非典型的ふれ合い恐怖心性低・典型的ふれ合い恐怖心性低群（$N = 47$：以下、非低典低群）の 4 群に調査対象者を類型化した。この類型化した 4 群における親切行動得点の平均と標準偏差を、尺度全体と因子別に表 11-16 に示した。

尺度全体と因子別の親切行動得点に関して、非典型的ふれ合い恐怖心性要因（高・低）と典型的ふれ合い恐怖心性要因（高・低）の 2 要因分散分析（2×2）を行った結果を表 11-17 に示した。また、2 種類のふれ合い恐怖心性得点の高低の組み合わせによって類型化した 4 群を 1 要因に見立てて、1 要因 4 水準の分散分析と多重比較の結果を表 11-17 に併せて示した。

表 11-16　ふれ合い恐怖心性の類型別の親切行動得点の平均と標準偏差

	非高典高群	非高典低群	非低典高群	非低典低群
親切行動尺度全体	1.992 (0.583)	1.975 (0.357)	2.124 (0.436)	2.422 (0.557)
緊急対応的親切	2.739 (0.793)	2.298 (0.732)	2.275 (0.618)	2.734 (0.725)
世話好き的親切	1.823 (0.772)	1.714 (0.470)	2.125 (0.784)	2.426 (0.836)
分与・貸与的親切	1.565 (0.559)	1.524 (0.559)	1.700 (0.350)	1.894 (0.667)
応答的親切	2.129 (0.806)	2.238 (0.846)	2.200 (0.856)	2.766 (0.878)

注 1）非高典高群：非典型的ふれ合い恐怖心性高・典型的ふれ合い恐怖心性高群

非高典低群：非典型的ふれ合い恐怖心性高・典型的ふれ合い恐怖心性低群

非低典高群：非典型的ふれ合い恐怖心性低・典型的ふれ合い恐怖心性高群

非低典低群：非典型的ふれ合い恐怖心性低・典型的ふれ合い恐怖心性低群

表 11-17　尺度全体と因子別の親切行動得点に関する分析結果（表内の数値は *F* 値）

	2 要因分散分析			1 要因	多重比較
	(非)主効果	(典)主効果	交互作用	分散分析	（$p < .05$）
親切行動尺度全体	**6.073***	1.431	1.813	**5.788****	高高、高低＜低低
緊急対応的親切	1.009	1.302	2.667	**2.687** †	—
世話好き的親切	**8.946****	0.322	1.455	**6.121*****	高高、高低＜低低
分与・貸与的親切	**3.585** †	0.328	0.771	**2.796***	—
応答的親切	2.469	**3.137** †	1.437	**4.346****	高高＜低低

注 1）2 要因分散分析の場合、主効果と交互作用の自由度はいずれも $df = 1, 105$

1 要因分散分析の場合の自由度は $df = 3, 105$

注 2）*** $p < .001$、** $p < .01$、* $p < .05$、† $p < .10$

注 3）(非)　：非典型的ふれ合い恐怖心性要因

(典)　：典型的ふれ合い恐怖心性要因

注 4）高高：非典型的ふれ合い恐怖心性高・典型的ふれ合い恐怖心性高群

高低：非典型的ふれ合い恐怖心性高・典型的ふれ合い恐怖心性低群

低低：非典型的ふれ合い恐怖心性低・典型的ふれ合い恐怖心性低群

表 11-17 の 2 要因分散分析の結果から、親切行動全体と世話好き的親切に関して、非典型的ふれ合い恐怖心性要因の主効果が有意であり、高群が低群よりも親切行動得点が低いことが分かった。また、表 11-7 の 1 要因分散分析と多重比較の検定結果から、親切行動の全体および 4 因子の全てに関して、4 群間に有意差および傾向差が認められ、特に、親切行動全体と世話好き的親切に関しては、非高典高群と非高典低群の方が非低典低群よりも有意に親切行動得点が低いこと、また、応答

的親切に関しては､非高典高群の方が非低典低群よりも有意に親切行動得点が低いことが分かった。しかし、4 群間に有意差のみられた分与・貸与的親切と傾向差のみられた緊急対応的親切に関しては、いずれの群間差も認められなかった。

4. 考察

(1) 本研究で得られた知見

親切行動の全体得点および因子別得点の 5 変数それぞれを目的変数とし、非典型的および典型的ふれ合い恐怖心性の全体得点および因子別得点の組み合わせから 4 セットのふれ合い恐怖変数を説明変数とする重回帰分析を行ったところ、次のような結果が得られた。すなわち、①未知の他者に対する非典型的ふれ合い恐怖心性は親切行動に影響を及ぼすが、既知の他者に対する典型的ふれ合い恐怖心性は親切行動に影響を及ぼさない、②非典型的ふれ合い恐怖心性全体は、親切行動全体を有意に抑制し、親切行動の中でも世話好き的親切と分与・貸与的親切を有意に抑制する、③非典型的ふれ合い恐怖心性の影響は、非典型的ふれ合い恐怖心性を構成する 2 因子に共通にみられるのではなく、会食不安・雑談不安因子だけが親切行動全体と世話好き的親切を有意に抑制する。

本研究では、親切行動として未知の他者に対する親切行動を測定したので、同じく未知の他者に対するふれ合い恐怖の中でも特に「会食不安・雑談不安」からの抑制的影響が顕著に出現したと考えられる。この未知の他者に対する「会食不安・雑談不安」は、未知の他者に対する親切行動全体を抑制するが、特に世話好き的親切を抑制することが解明された。

非典型的および典型的ふれ合い恐怖心性の高低の組み合わせによって調査対象者を 4 類型に分類し、2 要因分散分析、1 要因分散分析、多重比較を行ったところ、次のような結果が得られた。すなわち、非典型的ふれ合い恐怖心性の高い 2 群は、両方のふれあい恐怖心性の低い群に比べて、未知の他者に対する親切行動全体と世話好き的親切行動が少なく、また、両方のふれ合い恐怖心性が高い群は、両方が低い群に比べて応答的親切が少ない。

以上のように、未知の他者に対する非典型的なふれ合い恐怖心性のうち、特に会食不安・雑談不安の高い人は、未知の他者に対する親切行動全体が少なくなり、特に世話好き的親切行動が少なくなることが解明された。

(2) 今後の課題

本研究では、ふれあい恐怖心性は、未知の他者に対する非典型的ふれ合い恐怖心性と既知の他者に対する典型的ふれ合い恐怖心性を測定した。ところが、親切行動は未知の他者に対する親切行動のみを測定した。そのため、本研究には、他者をどのような具体的な他者として設定するか、――未知の他者とするのか、既知の他者とするのか、他者全般とするのか――という問題が重要な検討課題として残る。したがって、ふれ合い恐怖心性、親切行動の測定に際して、これら 3 種類の変数を同一次元の他者として測定することによって、ふれ合い恐怖心性と親切行動の関係をより厳密に検討する必要があるであろう。

5. 要約

ふれ合い恐怖心性と親切行動の関連を検討した。女子大学生を対象にした調査で、既知の他者（友だち）に対する典型的ふれ合い恐怖心性尺度、未知の他者（知らない他人）に対する非典型的ふれ合い恐怖心性尺度、未知の他者用親切行動尺度を使用し、以下の結果を得た。未知の他者に対する非典型的ふれ合い恐怖心性が高くなると、未知の他者に対する親切行動全体、世話好き的親切行動、分与・貸与的親切行動が少なくなることを明らかにした。また、未知の他者に対する非典型的なふれ合い恐怖心性のうち、特に会食不安・雑談不安が高くなると、未知の他者に対する親切行動全体が少なくなり、特に世話好き的親切行動が少なくなることを解明した。

キーワード：親切行動、ふれ合い恐怖、ふれ合い恐怖心性尺度

第 12 章　親切行動とコミュニケーション不安の関連に関する研究

本章では、筆者が実施した親切行動とコミュニケーション不安の関連に関する 2 つの調査研究を報告する。第 1 節では、既知の他者に対するコミュニケーション不安を測定するための尺度作成、および未知の他者に対するコミュニケーション不安を測定するための尺度作成を試み、「既知の他者用および未知の他者用コミュニケーション不安尺度の作成」について考察する。こうして作成した 2 種類の尺度を利用して、第 2 節では、親切行動の規定因としての行為者のコミュニケーション不安を検討し、「親切行動と既知の他者および未知の他者へのコミュニケーション不安との関連」について解明する。

第 1 節　既知の他者用および未知の他者用コミュニケーション不安尺度の作成

1. 問題

(1) 親切行動の規定因としてのコミュニケーション不安

(a) 親切行動の規定因としてのコミュニケーション不安要因の検討意義　親切行動の生起を促進したり抑制したりする要因として、すなわち親切行動の規定因として、コミュニケーション不安はどのように評価されるのであろうか。親切現象が発生する文脈について論じた深田（2016）は、親切現象が対人相互作用過程の中で発生し、親切過程を構成する 5 種類の基本行動（困苦発見行動、親切要請行動、親切行動、親切受容行動、親切返礼行動）を対人行動として位置付けた。そして、対人行動を言語や非言語の記号を使用するコミュニケーション的行動と使用しない非コミュニケーション的行動に大別し、時系列的に見た親切過程は、多様なコミュニケーション的行動と非コミュニケーション的行動の連続体であると述べている。この点について、深田（2015a）は、親切過程を構成する 5 種類の基本行動がそれぞれ 4 つ～5 つの下位行動群から構成されることを指摘し、合計 22 の下位行動のうち 18 の下位行動がコミュニケーション的行動であることを解明した。このコミュニケーション的行動は対人コミュニケーションである。

親切行動を構成する 4 つの下位行動のうちの 3 つが対人コミュニケーションであり、親切行動は

対人コミュニケーション抜きには成立しえないことが明らかとなった。この対人コミュニケーションを得意とするか苦手とするかに直接関係する特性要因の一つがコミュニケーション不安の要因である。親切行動の行為者のもつコミュニケーション不安が対象者に対する行為者の接触をためらわせ回避させること、換言すれば、コミュニケーション不安が親切行動を抑制することが十分予想できる。したがって、コミュニケーション不安と親切行動の関連を検討することは意義のあることであると考えられる。

(b) 親切行動の規定因としてのコミュニケーション不安要因の位置づけ　親切行動の規定因の種類と構造について指摘した深田（2016）は、親切行動の規定因を、①親切行動の行為者要因、②親切行動の対象者要因、③親切行動の特性要因、④親切行動の要請要因、⑤親切行動の行為者と対象者の置かれる状況要因、⑥親切行動と行為者と対象者の関係性要因、⑦親切行動の行為者の過去経験要因の 7 種類に大別している。この分類の中の①親切行動の行為者要因は、さらに①行為者の特性要因、②行為者の動機要因、③行為者の状況判断要因、④行為者の状態要因、⑤行為者の人口学的特性要因などに下位分類される。この下位分類の中の①行為者の特性要因に属する多数の要因の中の 1 つが行為者のコミュニケーション不安の要因である。したがって、コミュニケーション不安は、親切行動の行為者要因の下位要因である行為者の特性要因に属する親切行動の規定因であると言える。

(2) コミュニケーション不安

コミュニケーション不安は、『APA 心理学大辞典』によると、“他者と会話を開始したり維持したりすることに関する不安”（ファンデンボス, 2013c, p. 299）と定義される。ここではコミュニケーション不安の原語として“communication apprehension”が使用されている。このコミュニケーション不安に関連する概念として、スピーチ不安があり、これは“多勢の人の前でスピーチをしたりプレゼンテーションをしたりする際の、否定的に評価されることや他者に恥をかかされるのではないかという予測による恐怖”（ファンデンボス, 2013c, p. 480）と定義される。スピーチ不安の原語としては“speech anxiety”が使用されている。『APA 心理学大辞典』では、コミュニケーション不安は社交恐怖（social phobia; social anxiety disorder）の一般的な特徴であると見なされ、スピーチ不安は社交恐怖と関連すると解説されている。社交恐怖は、“極端で持続的な社交不安あるいはパフォーマンス不安を特徴とする不安障害のこと”（ファンデンボス, 2013c, p. 389）であり、症状が深刻でない場合を社交不安（social anxiety）と呼んで区別しているし、社交恐怖に類似する日本特有のものを対人恐怖症（taijin kyofusho）と位置付けている。

(3) コミュニケーション不安尺度

コミュニケーション不安を原語で“communication anxiety”と表記した Booth-Butterfield & Gould（1986）は、特性コミュニケーション不安を測定する 21 項目の特性コミュニケーション不安尺度（Communication Anxiety Inventory: Form Trait）と状態コミュニケーション不安を測定する 20 項目の状態コミュニケーション不安尺度（Communication Anxiety Inventory: Form State）を作成した。この

うちの特性コミュニケーション不安尺度は、一対一状況、少人数状況、大勢状況に関してそれぞれ7項目の合計21項目から構成される、コミュニケーション不安特性を測定するための尺度であった。

向後・向後（1995）は、その特性コミュニケーション不安尺度を翻訳し、コミュニケーション不安尺度日本語版を作成した。Booth-Butterfield & Gould（1986）の特性コミュニケーション不安尺度および向後・向後（1995）のコミュニケーション不安尺度日本語版における項目表現は3種類の状況によって異なる。そのため、一対一状況、少人数状況、大勢状況の間で、測定したコミュニケーション不安の程度が異なっていたとしても、その差の原因が状況差であるのか、項目内容差であるのか、判断できない。

そこで、深田・梶本（2014）は、3 種類の状況で共通の項目内容になるように表現を統一し、項目数を各状況4項目の合計12項目に減らした簡易尺度を作成した。深田・梶本（2014）のコミュニケーション不安尺度では、一対一状況、少人数状況、大勢状況の各状況において、①うまく話せない、②話をしたくない、③話すことに緊張する、④話すことは苦痛だ、の4種類の共通表現を使用した（表12-1）。

143 人の女子大学生を調査対象とした結果から、深田・梶本（2014）は、少人数状況よりも一対一状況と大勢状況の方でコミュニケーション不安が強いことを見出した。また、因子分析の結果、2因子解が得られ、大勢状況の4項目と一対一状況の3項目が第Ⅰ因子を構成し、少人数状況の4項目が第Ⅱ因子を構成していることを報告した。なお、深田・梶本（2014）は、コミュニケーション不安と女性の化粧の関係を併せて検討し、コミュニケーション不安の高い女性は、化粧を肯定的に認知し、化粧を積極的に利用していることを解明した。

表12-1　深田・梶本（2014）のコミュニケーション不安尺度の項目

1. 一対一の場面でうまく話せない	7. 少人数の集まりで話をするときには緊張する
2. あまりよく知らない人とは話をしたくない	8. 少人数の集まりで話すことは苦痛だ
3. あまりよく知らない人と話すときには緊張する	9. 大勢の前ではうまく話せない
4. 初対面の人と話をすることは苦痛だ	10. 大勢の前では話をしたくない
5. 少人数の集まりでうまく話せない	11. 大勢の前で話をするときには緊張する
6. 少人数の集まりでは話をしたくない	12. 大勢の前で話すことは苦痛だ

(4) コミュニケーション不安尺度に関する研究課題

コミュニケーション不安を測定するにあたって、重要な視点が2つあると考えられる。第1は、Booth-Butterfield & Gould（1986）、向後・向後（1995）、深田・梶本（2014）の尺度の状況構成に見られるように、コミュニケーションの相手となる他者の人数規模の要因である。先行研究から、一対一状況、少人数状況、大勢状況の3状況を用意するのが適当であろう。

第2は、コミュニケーションの相手となる他者の既知性の要因である。コミュニケーション不安は、相手が未知の他者であるのか、既知の他者であるのかによって大きく異なる可能性がある。しかし、向後・向後（1995）の尺度では、「あまりよく知らない人」と「いま知り合ったばかりの人」

という表現が使用されている項目が 4 項目見られ、これらは未知の他者に相当するであろうが、残りの 17 項目には、既知・未知を区別しない他者全般に相当する表現が使用されている。また、深田・梶本（2014）の尺度では、「あまりよく知らない人」と「初対面の人」という表現が使用されている項目が 3 項目見られ、これらは未知の他者に相当するであろうが、残りの 9 項目には、既知・未知を区別しない他者全般に相当する表現が使用されている。

ふれ合い恐怖心性尺度の作成にあたって、深田他（2017a）は、ふれ合い恐怖を測定する場合、恐怖を覚える対象人物の中から、親密で気を遣う必要のない家族・親族・親友・知人が除外されると考えたが、これはコミュニケーション不安を測定する場合にも当てはまる。このことを前提に、コミュニケーション不安尺度は、不安を覚える相手が誰であるかによって、以下の 5 つのタイプに分類できる。

第 1 タイプは、不安を覚える相手を他者全般とする場合であり、既知の他者と未知の他者が含まれる。第 2 タイプは、項目や場面によって、恐怖を覚える他者を既知の他者としたり、他者全般としたりする場合である。第 3 タイプは、項目や場面によって、恐怖を覚える他者を未知の他者としたり、他者全般としたりする場合である。上述の向後・向後（1995）の尺度と深田・梶本（2014）の尺度はこの第 3 タイプに属する。第 4 タイプは、恐怖を覚える相手を既知の他者とする場合であり、第 5 タイプは、恐怖を覚える相手を未知の他者とする場合である。

既存のコミュニケーション不安尺度は、向後・向後（1995）の尺度と深田・梶本（2014）の尺度の両方が不安を覚える他者の一部を未知の他者とし、大部分を他者全般としており、他者の規定が不統一である。したがって、本研究では、不安を覚える相手である他者を、既知の他者と未知の他者に明確に区分し、上記の第 4 タイプと第 5 タイプのコミュニケーション不安尺度を作成する。

既知性の設定に関しては深田他（2017a）を踏襲し、既知の他者に対するコミュニケーション不安尺度の場合、既知の他者を「友だち」とし、未知の他者に対するコミュニケーション不安尺度の場合、未知の他者を「知らない他人」とする。両尺度による測定結果を比較可能にするために、両尺度で同一内容・同一表現の項目を用い、不安を感じる相手のみを「友だち」あるいは「知らない他人」に変える。

(5) 本研究の目的

本研究では、共通の項目内容から構成される 2 種類のコミュニケーション不安尺度、すなわち、既知の他者（友だち）とのコミュニケーション場面における不安を測定するための既知の他者用コミュニケーション不安尺度と、未知の他者（知らない他人）とのコミュニケーション場面における不安を測定するための未知の他者用コミュニケーション不安尺度を作成し、両尺度の構造的異同および両尺度で測定した不安の量的異同を検討する。

なお、両尺度間で厳密な比較が可能になるよう、両尺度間で項目内容と項目表現を統一する。さらに、一対一状況、少人数状況、大勢状況の 3 状況を用い、状況間での厳密な比較が可能になるよう、深田・梶本（2014）と同様に、状況間で項目内容と項目表現を統一する。

2. 方法

(1) 調査対象者と調査手続き

調査対象者は広島県内の A 大学の女子大学生 113 人であった。有効回答者は 109 人であり、有効回答率は 96.5%であった。有効回答者の平均年齢は 19.8 歳（標準偏差 1.07）であった。

調査は、「人間関係とコミュニケーションに関する調査」という題目の質問紙を用いて、心理学関係の授業時間を利用した集合調査法と、個別に調査依頼した個別調査法との 2 つの方法により、2014 年 9 月から 10 月にかけて実施した。集合調査法により 97 人の有効回答が、また、個別調査法により 12 人の有効回答が得られた。

(2) 質問紙の内容

(a) 質問紙の構成　質問紙は、A4 判用紙 6 枚に片面印刷したものであった。1 枚目は表紙、2 枚目は非典型的ふれ合い恐怖心性尺度、3 枚目は典型的ふれ合い恐怖心性尺度、4 枚目は未知の他者用コミュニケーション不安尺度と既知の他者用コミュニケーション不安尺度、5 枚目は未知の他人用親切行動尺度、6 枚目はメール・コミュニケーション・スキル尺度であった。本研究で分析に使用しない尺度の紹介は省略する。

(b) 全体教示　質問紙の表紙に“この調査は、「友だち」や「知らない他人」との人間関係及びコミュニケーションについてお尋ねするものです。ご協力いただける方は、以下の注意点をよく読んでからお答えください。”という教示を印刷し、口頭でも同様の教示を調査対象者に提示した。回答上の注意の要点は、①回答の正誤はないこと、②周囲の人と相談しないこと、③調査は無記名であり、回答内容を調査目的以外で使用しないこと、④データの廃棄など個人情報の保護に配慮すること、⑤回答は強制ではないこと、であった。なお、表紙には、調査対象者の学科・学年・年齢の記入欄、調査者の氏名・連絡先等が記載してあった。

(c) 未知の他者用コミュニケーション不安尺度と既知の他者用コミュニケーション不安尺度　表 1 に示した深田・梶本（2014）のコミュニケーション不安尺度を修正して、新たに 12 項目の不安尺度を 2 種類作成した。不安を覚える未知の他者を「知らない他人」と設定した未知の他者用コミュニケーション不安尺度（表 12-2 の上欄）と、不安を覚える既知の他者を「友だち」と設定した既知の他者用コミュニケーション不安尺度（表 12-2 の下欄）の 2 種類を用意した。

冒頭の質問文は、“知らない他人の場合と友だちの場合で、下に示した項目の内容は、あなたにどの程度あてはまりますか？「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの 4 つの回答段階から 1 つ選んで、その番号に〇をつけてください。”であり、4 段階評定であった。回答は、「全くあてはまらない」（1 点）、「ややあてはまる」（2 点）、「わりとあてはまる」（3 点）、「とてもよくあてはまる」（4 点）の 4 段階で得点化した。

表 12-2　未知の他者用と既知の他者用コミュニケーション不安尺度の項目

1.	知らない他人と一対一の場面でうまく話せない
2.	知らない他人とは話をしたくない
3.	知らない他人と話すときには緊張する
4.	知らない他人と話をすることは苦痛だ
5.	少人数の知らない他人の集まりでうまく話せない
6.	少人数の知らない他人の集まりでは話をしたくない
7.	少人数の知らない他人の集まりで話をするときには緊張する
8.	少人数の知らない他人の集まりで話すことは苦痛だ
9.	大勢の知らない他人の前ではうまく話せない
10.	大勢の知らない他人の前では話をしたくない
11.	大勢の知らない他人の前で話をするときには緊張する
12.	大勢の知らない他人の前で話すことは苦痛だ
1.	友だちと一対一の場面でうまく話せない
2.	友だちとは話をしたくない
3.	友だちと話すときには緊張する
4.	友だちと話をすることは苦痛だ
5.	少人数の友だちの集まりでうまく話せない
6.	少人数の友だちの集まりでは話をしたくない
7.	少人数の友だちの集まりで話をするときには緊張する
8.	少人数の友だちの集まりで話すことは苦痛だ
9.	大勢の友だちの前ではうまく話せない
10.	大勢の友だちの前では話をしたくない
11.	大勢の友だちの前で話をするときには緊張する
12.	大勢の友だちの前で話すことは苦痛だ

3. 結果

(1) 未知の他者用コミュニケーション不安尺度の分析

12 項目の未知の他者用コミュニケーション不安尺度の得点に関して、最尤法による因子分析を行い、固有値の減衰状況と累積寄与率から 2 因子解が妥当であると判断した。回転前の累積寄与率は 73.52%であった。次に、抽出因子数を 2 因子に指定し、最尤法・プロマックス回転による因子分析を、不適切な項目を削除しつつ繰り返した。①因子負荷量の絶対値が.40 以上であること、②他の因子の負荷量との差が.20 以上であること、の 2 つの基準を満たさない項目を削除した結果、2 項目が削除され、10 項目が残った。表 12-3 に示したように、最終的に 10 項目の 2 因子構造が得られた。

削除された項目は、一対一状況の項目 3 と少人数状況の項目 5 であった。

表 12-3 から分かるように、第 1 因子は、大勢状況の 4 項目と少人数状況の 3 項目から構成されており、「大勢・少人数状況」因子と命名した。第 2 因子は、一対一状況の 3 項目から構成されており、「一対一状況」因子と命名した。

表 12-3　未知の他者へのコミュニケーション不安得点に関する因子分析結果
（最尤法、プロマックス回転）

	項目	F1	F2	h^2
11.	大勢の知らない他人の前で話をするときには緊張する	**1.02**	-.27	.73
9.	大勢の知らない他人の前ではうまく話せない	**.87**	.02	.78
12.	大勢の知らない他人の前で話すことは苦痛だ	**.85**	.02	.75
7.	少人数の知らない他人の集まりで話をするときには緊張する	**.72**	.10	.62
10.	大勢の知らない他人の前では話をしたくない	**.71**	.19	.73
8.	少人数の知らない他人の集まりで話すことは苦痛だ	**.62**	.27	.68
6.	少人数の知らない他人の集まりでは話をしたくない	**.55**	.31	.64
2.	知らない他人とは話をしたくない	-.10	**.96**	.80
4.	知らない他人と話をすることは苦痛だ	.09	**.81**	.78
1.	知らない他人と一対一の場面でうまく話せない	-.05	**.81**	.61

クロンバックのα係数を算出して、10 項目の尺度全体の内的整合性を検討したところ、.94 という高いα係数が得られ、尺度が内的整合性をもつことが証明された。同様にα係数を求めて、各因子の内的整合性を検討したところ、第 1 因子で.94、第 2 因子で.89 の高いα係数が得られたので、2 つの下位尺度の内的整合性も確認できた。また、因子間相関を求めた結果、第 1 因子と第 2 因子の間には.70 の相関が示され、2 因子間にはわりと高い相関関係が存在することが分かった。

調査対象者個人の各項目の得点を加算し、項目数で割って得られた項目平均を個人得点とすることによって、未知の他者用コミュニケーション不安尺度得点の平均と標準偏差を、尺度全体と因子（下位尺度）別に算出し、表 12-4 に示した。表 12-4 に併せて示したように、第 1 因子と第 2 因子の得点の平均値を対応のある *t* 検定によって比較したところ、第 1 因子（大勢・少人数状況）の得点の方が第 2 因子（一対一状況）の得点よりも有意に高いことが分かった。

表 12-4　未知の他者用コミュニケーション不安尺度得点の平均（標準偏差）と因子間比較の結果

	尺度全体	第 1 因子	第 2 因子	因子間比較の結果
平均	2.938	3.089	2.584	$t(108) = 7.709, p < .001$
（標準偏差）	(0.728)	(0.737)	(0.907)	

以上のように、未知の他者（知らない他人）とのコミュニケーション不安を測定するための、2 因子 10 項目から構成される未知の他者用コミュニケーション不安尺度を作成することができた。

(2) 既知の他者用コミュニケーション不安尺度の分析

12 項目の既知の他者用コミュニケーション不安尺度の得点に関して、最尤法による因子分析を行い、固有値の減衰状況と累積寄与率から 2 因子解が妥当であると判断した。回転前の累積寄与率は 75.03%であった。次に、抽出因子数を 2 因子に指定し、最尤法・プロマックス回転による因子分析を、不適切な項目を削除しつつ繰り返した。①因子負荷量の絶対値が.40 以上であること、②他の因子の負荷量との差が.20 以上であること、の 2 つの基準を満たさない項目を削除した結果、1 項目が削除され、11 項目が残った。表 12-5 に示したように、最終的に 11 項目の 2 因子構造が得られた。削除された項目は、一対一状況の項目 3 であった。

表 12-5 から分かるように、第 1 因子は、少人数状況の 4 項目と一対一状況の 2 項目から構成されており、「少人数・一対一状況」因子と命名した。第 2 因子は、大勢状況の 4 項目と一対一状況の 1 項目から構成されており、「大勢状況」因子と命名した。

表 12-5　既知の他者へのコミュニケーション不安得点に関する因子分析結果
（最尤法、プロマックス回転）

	項目	F1	F2	h^2
8.	少人数の友だちの集まりで話すことは苦痛だ	**.91**	-.01	.82
4.	友だちと話をすることは苦痛だ	**.89**	-.22	.58
6.	少人数の友だちの集まりでは話をしたくない	**.76**	.13	.74
2.	友だちとは話をしたくない	**.74**	.01	.55
5.	少人数の友だちの集まりでうまく話せない	**.70**	.20	.72
7.	少人数の友だちの集まりで話をするときには緊張する	**.70**	.26	.81
11.	大勢の友だちの前で話をするときには緊張する	-.19	**1.03**	.82
9.	大勢の友だちの前ではうまく話せない	-.09	**.93**	.76
10.	大勢の友だちの前では話をしたくない	.13	**.83**	.84
12.	大勢の友だちの前で話すことは苦痛だ	.13	**.82**	.84
1.	友だちと一対一の場面でうまく話せない	.23	**.44**	.38

クロンバックのα係数を算出して、11 項目の尺度全体の内的整合性を検討したところ、.94 という高いα係数が得られ、尺度が内的整合性をもつことが証明された。同様にα係数を求めて、各因子の内的整合性を検討したところ、第 1 因子で.93、第 2 因子で.92 と高いα係数が得られたので、2 つの下位尺度の内的整合性も確認できた。また、因子間相関を求めた結果、第 1 因子と第 2 因子の間には.69 の相関が示され、2 因子間にはわりと高い相関関係が存在することが分かった。

調査対象者個人の各項目の得点を加算し、項目数で割って得られた項目平均を個人得点とすることによって、既知の他者用コミュニケーション不安尺度得点の平均と標準偏差を、尺度全体と因子（下位尺度）別に算出し、表 12-6 に示した。表 12-6 に併せて示したように、第 1 因子と第 2 因子の得点の平均値を対応のある *t* 検定によって比較したところ、第 2 因子（大勢状況）の得点の方が第 1 因子（少人数・一対一状況）の得点よりも有意に高いことが分かった。

以上のように、既知の他者（友だち）とのコミュニケーション不安を測定するための、2 因子 11 項目から構成される既知の他者用コミュニケーション不安尺度を作成することができた。

表 12-6　既知の他者用コミュニケーション不安尺度得点の平均（標準偏差）と因子間比較の結果

	尺度全体	第 1 因子	第 2 因子	因子間比較の結果
平均	1.478	1.294	1.699	t (108) = -7.876, p < .001
（標準偏差）	(0.590)	(0.537)	(0.760)	

(3) 未知の他者用コミュニケーション不安尺度と既知の他者用コミュニケーション不安尺度の比較

項目レベルで、未知の他者用コミュニケーション不安尺度と既知の他者用コミュニケーション不安尺度の因子構造を比較するために、それぞれの尺度の項目を、第 1 因子に属する項目、第 2 因子に属する項目、削除項目の 3 カテゴリーに分類した。そして、一方の尺度において 3 カテゴリーに分類された項目が他方の尺度ではどのカテゴリーに分類されるのか、対応関係を表 12-7 に整理した。表 12-7 によると、因子別に見て、両尺度間に項目の共通性は認められないことから、両尺度の因子構造は異なると言える。

表 12-7　未知の他者用コミュニケーション不安尺度と既知の他者用コミュニケーション不安尺度の因子構造の比較

		既知の他者用コミュニケーション不安尺度			
		第 1 因子	第 2 因子	削除項目	合計
未知の他者用コミュニケーション不安尺度	第 1 因子	3	4	0	7
	第 2 因子	2	1	0	3
	削除項目	1	0	1	2
	合計	6	5	1	12

注 1）表内の数値は項目数

次に、尺度レベルおよび因子（下位尺度）レベルで、未知の他者用コミュニケーション不安尺度得点と既知の他者用コミュニケーション不安尺度得点の間の関係について、ピアソンの積率相関係

数を算出することによって検討し、その結果を表 12-8 に示した。尺度レベルでも、因子レベルでも、未知の他者へのコミュニケーション不安得点と既知の他者へのコミュニケーション不安得点の間には有意ではあるが、中程度から弱い正の相関関係が存在することが見出された。このように、相関分析の結果は、両尺度がコミュニケーション不安の異なる側面を測定している可能性の高いことを示唆している。

表 12-8　尺度レベルおよび因子レベルでの未知の他者へのコミュニケーション不安得点と既知の他者へのコミュニケーション不安得点の相関関係（ピアソンの積率相関係数 *r*）

		既知の他者用コミュニケーション不安		
		尺度全体	第 1 因子	第 2 因子
未知の他者用コミュニケーション不安	尺度全体	.42***	.30**	.46***
	第 1 因子	.42***	.31**	.46***
	第 2 因子	.32**	.23**	.36***

注 1）*** $p < .001$, ** $p < .01$

表 12-9　尺度レベルおよび因子レベルでの未知の他者へのコミュニケーション不安得点と既知の他者へのコミュニケーション不安得点の比較結果（*t* 検定、*df* = 108）

			既知の他者へのコミュニケーション不安得点　*M* (*SD*)		
			尺度全体	第 1 因子	第 2 因子
			1.478 (0.590)	1.294 (0.537)	1.699 (0.760)
未知の他者へのコミュニケーション不安得点 *M* (*SD*)	尺度全体	2.938 (0.728)	21.098***	—	—
	第 1 因子	3.089 (0.737)	—	24.365***	18.565***
	第 2 因子	2.584 (0.907)	—	14.235***	9.673***

注 1）*** $p < .001$

最後に、尺度レベルおよび因子（下位尺度）レベルで、未知の他者用コミュニケーション不安尺度得点と既知の他者用コミュニケーション不安尺度得点を比較するために、対応のある *t* 検定を用いて、平均値間の差の検定を実施し、その結果を表 12-9 に整理して示した。尺度レベルでも、因子レベルでも、未知の他者へのコミュニケーション不安得点の方が既知の他者へのコミュニケーション不安得点よりも有意に大きいことが判明した。得点範囲が 1〜4 点であることから、既知の他者へのコミュニケーション不安得点が非常に低いことが分かる。このように得点の差異の次元では、未知の他者用コミュニケーション不安尺度と既知の他者用コミュニケーション不安尺度は大きく異なることが証明された。

(4) 他者全般用コミュニケーション不安尺度作成の試み

未知の他者用コミュニケーション不安尺度と既知の他者用コミュニケーション不安尺度を作成するために、本研究で元々用意していた 12 項目ずつの合計 24 項目を使用して、未知・既知を問わない他者全般用の合成尺度の作成を試みる。

これまでの因子分析と同様に、24 項目のコミュニケーション不安得点に関して、最尤法による因子分析を行い、固有値の減衰状況と累積寄与率から 4 因子解が妥当であると判断した。回転前の累積寄与率は 75.13%であった。次に、抽出因子数を 4 因子に指定し、最尤法・プロマックス回転による因子分析を、不適切な項目を削除しつつ繰り返した。①因子負荷量の絶対値が.40 以上であること、②他の因子の負荷量との差が.20 以上であること、の 2 つの基準を満たさない項目を削除した結果、2 項目が削除され、22 項目が残った。表 12-10 に示したように、最終的に 22 項目の 4 因子構造が得られた。削除された項目は、未知の他者用の一対一状況の項目 3 と既知の他者用の一対一状況の項目 1 であった。

表 12-10 から分かるように、第 1 因子は、未知の他者の大勢状況の 4 項目と未知の他者の少人数状況の 4 項目の合計 8 項目から構成されており、「未知の他者の大勢・少人数状況」因子と命名した。第 2 因子は、既知の他者の少人数状況の 4 項目と既知の他者の一対一状況の 3 項目の合計 7 項目から構成されており、「既知の他者の少人数・一対一状況」因子と命名した。第 3 因子は、既知の他者の大勢状況の 4 項目から構成されており、「既知の他者の大勢状況」因子と命名した。第 4 因子は、未知の他者の一対一状況の 3 項目から構成されており、「未知の他者との一対一状況」因子と命名した。

クロンバックのα係数を算出して、22 項目の尺度全体の内的整合性を検討したところ、.94 という高いα係数が得られ、尺度が内的整合性をもつことが証明された。また、同様にα係数を求めて、各因子の内的整合性を検討したところ、第 1 因子で.94、第 2 因子で.93、第 3 因子で.94、第 4 因子で.89 の高いα係数が得られたので、4 つの下位尺度の内的整合性も確認できた。また、因子間相関を求めた結果、表 12-10 の最下欄に示したように、中程度から弱い正の相関が見られた。比較的高い中程度の相関は、未知の他者に関係する 2 つの因子間および既知の他者に関係する 2 つの因子間で見られた。

調査対象者個人の各項目の得点を加算し、項目数で割って得られた項目平均を個人得点とすることによって、他者全般用コミュニケーション不安得点の平均と標準偏差を、尺度全体と因子（下位尺度）別に算出し、表 12-11 に示した。表 12-11 に併せて示したように、コミュニケーション不安得点に関する 4 つの因子間の差は、1 要因分散分析によって有意であることが見出されたので、多重比較を行ったところ、全ての因子間に有意差が認められた。コミュニケーション不安は、第 1 因子の「未知の他者の大勢・少人数状況」因子で最も高く、第 4 因子の「未知の他者との一対一状況」因子で次に高く、第 3 因子の「既知の他者の大勢状況」因子では低くなり、第 2 因子の「既知の他者の少人数・一対一状況」因子で最も低くなっていた。

以上のように、未知の他者（知らない他人）と既知の他者（友だち）を含む他者全般に対するコミュニケーション不安を測定するための、4 因子 22 項目から構成される他者全般用コミュニケーシ

ョン不安尺度を作成することができた。

表 12-10　24 項目の他者全般へのコミュニケーション不安得点に関する因子分析結果
（最尤法、プロマックス回転）

	項目	F1	F2	F3	F4	h^2
U11.	大勢の知らない他人の前で話をするときには緊張する	**1.00**	-.11	.08	-.29	.72
U 9.	大勢の知らない他人の前ではうまく話せない	**.91**	-.05	.03	-.04	.78
U12.	大勢の知らない他人の前で話すことは苦痛だ	**.89**	-.06	.00	-.02	.74
U 7.	少人数の知らない他人の集まりで話をするときには緊張する	**.79**	.03	-.09	.06	.63
U10.	大勢の知らない他人の前では話をしたくない	**.77**	.10	-.01	.09	.73
U 8.	少人数の知らない他人の集まりで話すことは苦痛だ	**.66**	.12	.02	.18	.71
U 6.	少人数の知らない他人の集まりでは話をしたくない	**.64**	.10	-.03	.20	.66
U 5.	少人数の知らない他人の集まりでうまく話せない	**.57**	-.03	-.02	.31	.63
F 8.	少人数の友だちの集まりで話すことは苦痛だ	.05	**.93**	-.04	-.10	.80
F 4.	友だちと話をすることは苦痛だ	-.05	**.93**	-.26	.03	.60
F 6.	少人数の友だちの集まりでは話をしたくない	.11	**.83**	.04	-.11	.76
F 5.	少人数の友だちの集まりでうまく話せない	.08	**.77**	.11	-.08	.72
F 7.	少人数の友だちの集まりで話をするときには緊張する	.05	**.77**	.18	-.05	.81
F 2.	友だちとは話をしたくない	-.11	**.76**	-.01	.07	.56
F 3.	友だちと話すときには緊張する	-.13	**.52**	.28	.14	.55
F11.	大勢の友だちの前で話をするときには緊張する	-.07	-.08	**.97**	.02	.81
F 9.	大勢の友だちの前ではうまく話せない	.10	.03	**.80**	-.02	.74
F10.	大勢の友だちの前では話をしたくない	-.05	.21	**.79**	.04	.86
F12.	大勢の友だちの前で話すことは苦痛だ	.05	.21	**.76**	-.05	.85
U 2.	知らない他人とは話をしたくない	.09	.04	-.10	**.84**	.78
U 1.	知らない他人と一対一の場面でうまく話せない	.07	-.09	.02	**.76**	.63
U 4.	知らない他人と話をすることは苦痛だ	.14	-.05	.14	**.76**	.80
	因子間相関 F1		.29	.46	.65	
	因子間相関 F2			.67	.28	
	因子間相関 F3				.34	

注 1）項目番号の前の記号 U は未知の他者用、F は既知の他者用を示す。

表 12-11　他者全般へのコミュニケーション不安得点の平均（標準偏差）と因子間比較の結果

	尺度全体	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
平均	2.194	3.050	1.291	1.768	2.584
（標準偏差）	(0.554)	(0.733)	(0.523)	(0.847)	(0.907)
分散分析	F (3, 324) = 207.249, p < .001				
多重比較	第 1 因子＞第 4 因子＞第 3 因子＞第 2 因子（ps < . 001）				

4. 考察

(1) 既知の他者と未知の他者に対するコミュニケーション不安の構造

本研究では、コミュニケーション不安を感じる相手を既知の他者（友だち）あるいは未知の他者（知らない他人）に設定することによって、共通の項目内容から構成される友だちとのコミュニケーション場面における不安を測定するための既知の他者用コミュニケーション不安尺度と、知らない他人とのコミュニケーション場面における不安を測定するための未知の他者用コミュニケーション不安尺度を作成し、両尺度間の構造的異同および量的異同を検討しようと試みた。また、両尺度に共通の 3 状況（一対一状況、少人数状況、大勢状況）を組み込んだ。

因子分析の結果、2 因子 11 項目の既知の他者用コミュニケーション不安尺度（6 項目の少人数・一対一状況因子、5 項目の大勢状況因子）と、2 因子 10 項目の未知の他者用コミュニケーション不安尺度（7 項目の大勢・少人数状況因子、3 項目の一対一状況因子）を作成することができた。

本研究で得られた既知の他者用コミュニケーション不安尺度と未知の他者用コミュニケーション不安尺度に関する構造的異同および量的異同を 3 つの観点から検討した。第 1 に、項目レベルで、既知の他者用コミュニケーション不安尺度と未知の他者用コミュニケーション不安尺度の因子構造を比較するために、両尺度の各因子に属する項目の共通性を検討した。その結果、両尺度間の共通性は低く、両尺度の因子構造は異なることが示された。第 2 に、尺度レベルおよび因子（下位尺度）レベルで、既知の他者用コミュニケーション不安尺度得点と未知の他者用コミュニケーション不安尺度得点の間の相関関係を検討したところ、中程度あるいは弱い正の相関関係が存在し、両尺度が異なる側面を測定している可能性が高いことが示された。第 3 に、尺度レベルおよび因子（下位尺度）レベルで、既知の他者用コミュニケーション不安尺度得点と未知の他者用コミュニケーション不安尺度得点を比較したところ、後者の得点の方が前者の得点よりも大きく、得点の差異の次元でも、両尺度は大きく異なることが分かった。

さらに、両尺度を一つの尺度と見なして因子分析した結果、4 因子 22 項目から成る他者全般用コミュニケーション不安尺度（8 項目の未知の他者の大勢・少人数状況因子、7 項目の既知の他者の少人数・一対一状況因子、4 項目の既知の他者の大勢状況因子、3 項目の未知の他者との一対一状況因子）を作成することができた。このように、既知の他者に対するコミュニケーション不安は第 2 因

子と第 3 因子としてまとまり、未知の他者に対するコミュニケーション不安は第 1 因子と第 4 因子としてまとまった。これらの 4 因子は、既知の他者用コミュニケーション不安尺度の 2 因子と未知の他者用コミュニケーション不安尺度の 2 因子に非常によく対応している。

以上より、本研究で検討した既知の他者用コミュニケーション不安尺度と未知の他者用コミュニケーション不安尺度は異なる尺度として扱うことが適切であると判断できる。したがって、コミュニケーション不安を測定する場合、コミュニケーション不安を覚える相手を既知の他者と未知の他者に区別して扱うことが重要であるという本研究の当初の目的が実証できたと考える。

(2) 既知の他者と未知の他者に対するコミュニケーション不安の量

既知の他者用コミュニケーション不安尺度で得られた得点（M = 1.478）、すなわち既知の他者に対するコミュニケーション不安は、未知の他者用コミュニケーション不安尺度で得られた得点（M = 2.938）、すなわち未知の他者に対するコミュニケーション不安よりも明らかに低いことが実証された。さらに詳しく因子別に検討したところ、既知の他者用コミュニケーション不安尺度における少人数・一対一状況因子得点（M =1.294）と大勢状況因子得点（M =1.699）は、共に、未知の他者用コミュニケーション不安尺度における大勢・少人数状況因子得点（M =3.089）と一対一状況因子得点（M =2.584）よりも有意に小さいことが重ねて実証された。このように、調査対象者の覚えるコミュニケーション不安は、既知の他者に対しては小さく、未知の他者に対して大きいことが証明された。

なお、状況が不安に及ぼす影響も解明された。既知の他者用コミュニケーション不安尺度で得られた得点は、少人数・一対一状況因子（M =1.294）の方が大勢因子（M =1.699）よりも小さく、未知の他者用コミュニケーション不安尺度で得られた得点は、一対一状況因子（M =2.584）の方が大勢・少人数状況因子（M =3.089）よりも小さかった。このように、調査対象者の覚えるコミュニケーション不安は、相手が既知の他者であるか未知の他者であるかに関係なく、一対一状況の方が小さく、大勢状況の方が大きいことが実証された。

ただし、細部に注目すると、既知の他者に対するコミュニケーション不安の場合には、少人数状況は一対一状況と同じように見なされ、少人数の他者であれば一人の他者と同じように見なされることが分かった。しかし、未知の他者に対するコミュニケーション不安の場合には、少人数状況は大勢状況と同じように見なされ、他者が一人でなく少人数になると、大勢の他者と同じように見なされることが分かった。このように、他者の人数が増加するとコミュニケーション不安は増加するが、既知の他者の場合には少人数は一人と同様の意味をもち、未知の他者の場合には少人数は大勢と同様の意味をもつことが判明した。

以上の解釈は、他者全般用コミュニケーション不安尺度に関して得られた因子別得点間の差の検定（1 要因 4 水準の分散分析と多重比較）の結果からも確認することができる。すなわち、因子得点は、小さい方から、①既知の他者の少人数・一対一状況因子（M =1.291）、②既知の他者の大勢状況因子（M =1.768）、③未知の他者との一対一状況因子（M =2.584）、④未知の他者の大勢・少人数状況因子（M =3.050）の順であった。

(3) 今後の課題

本研究では、2 つの尺度の項目を用意する際に、一対一状況において「一対一で」という具体的な表記をした項目は 4 項目中 1 項目であった。調査対象者に対して一対一状況であることを明確に示すためには、他の 3 項目も「一対一で」という語句を挿入すべきであったと考える。

また、1 種類の簡易尺度でコミュニケーション不安を測定する場合は、項目によって、コミュニケーション不安を覚える相手を既知の他者（例：友だち）あるいは未知の他者（例：知らない他人）としないで、他者全般（例：他者）と一貫して抽象的に表記する方法もあると思われる。

今後は、どのような要因がコミュニケーション不安に影響するのか、あるいはコミュニケーション不安がどのような要因に影響するのかといった疑問の解明、すなわちコミュニケーション不安の影響要因（規定因）や被影響要因（効果要因）の解明が課題として指摘できるであろう。

5. 要約

共通の項目内容から構成される、既知の他者（友だち）に対するコミュニケーション不安尺度と、未知の他者（知らない他人）に対するコミュニケーション不安尺度を作成し、両尺度の構造的異同および量的異同を検討した。女子大学生を調査対象とする調査結果から、2 因子 11 項目から成る既知の他者用コミュニケーション不安尺度（少人数・一対一状況因子、大勢状況因子）と、2 因子 10 項目から成る未知の他者用コミュニケーション不安尺度（大勢・少人数状況因子、一対一状況因子）を作成した。因子を構成する項目の共通性が低いこと、両尺度間の相関関係が弱いこと、両尺度間の得点の差が大きいことから、両尺度は、コミュニケーション不安の異なる側面を測定する異なる尺度であることを解明した。そして、既知の他者に対するコミュニケーション不安の方が未知の他者に対するコミュニケーション不安よりも有意に低いこと、また、一対一状況におけるコミュニケーション不安の方が大勢状況におけるコミュニケーション不安よりも有意に低いことを解明した。

キーワード：コミュニケーション不安、コミュニケーション不安尺度、既知の他者、未知の他者

第 2 節　親切行動と既知の他者および未知の他者へのコミュニケーション不安との関連

1. 問題

(1) コミュニケーション不安

コミュニケーション不安は、“他者と会話を開始したり維持したりすることに関する不安。”（ファンデンボス, 2013c, p. 299）と定義される。Booth-Butterfield & Gould（1986）の特性コミュニケーション不安尺度（Communication Anxiety Inventory: Form Trait）および向後・向後（1995）の日本語版尺度に基づき、深田・梶本（2014）は、一対一状況、少人数状況、大勢状況での項目表現を統一した簡易尺度を作成した。この深田・梶本（2014）のコミュニケーション不安尺度に基づき、深田他（2017b）は、コミュニケーション不安を覚える相手を既知の他者と未知の他者とに区別することによって、2 因子 11 項目から成る既知の他者用コミュニケーション不安尺度（少人数・一対一状況因子、大勢状況因子）と、2 因子 10 項目から成る未知の他者用コミュニケーション不安尺度（大勢・少人数状況因子、一対一状況因子）を作成した。そして、両尺度は、コミュニケーション不安の異なる側面を測定する異なる尺度であることや、既知の他者に対するコミュニケーション不安の方が未知の他者に対するコミュニケーション不安よりも有意に低いこと、また、一対一状況におけるコミュニケーション不安の方が大勢状況におけるコミュニケーション不安よりも有意に低いことを解明した。

(2) 親切行動の規定因としてのコミュニケーション不安

深田他（2017a）の作成した既知の他者に対する典型的ふれ合い恐怖心性尺度と未知の他者に対する非典型的ふれ合い恐怖心性尺度を利用した深田他（2017c）は、ふれ合い恐怖心性と社会的行動としての親切行動および社会的スキルとしてのメール・コミュニケーション・スキルとの関連を検討した。そして、未知の他者に対する非典型的なふれ合い恐怖心性のうち、特に会食不安・雑談不安が高くなると、未知の他者に対する親切行動全体が少なくなり、特に世話好き的親切行動が少なくなることを解明した。また、メール・コミュニケーション・スキルの中の特定の因子に対しての限定的な影響ではあるが、非典型的および典型的ふれ合い恐怖心性を構成するそれぞれ 2 つの因子が、促進方向と抑制方向の相反する影響をもつことを解明した。

深田（2015a）は、親切行動を構成する 4 つの下位行動のうちの 3 つが対人コミュニケーションであり、親切行動は対人コミュニケーション抜きには成立しえないことを指摘している。この対人コミュニケーションに直接関係する特性要因の一つがコミュニケーション不安であり、親切行動の行為者のもつコミュニケーション不安が対象者に対する行為者の接触をためらわせ回避させること、換言すれば、コミュニケーション不安が親切行動を抑制すると予想される。

そこで、深田他（2017a）の作成した既知の他者と未知の他者に対するふれ合い恐怖心性尺度と同様に、深田他（2017b）の作成した既知の他者と未知の他者に対するコミュニケーション不安尺度が、社会的行動としての親切行動とどのような関連を示すのかについて検討してみたい。深田他（2017c）の結果のように、未知の他者への親切行動に対しては、既知の他者に対するコミュニケーション不安よりも未知の他者に対するコミュニケーション不安の方がより顕著な関連を示すと予想される。この関連性に対して、他者の状況（一対一状況、少人数状況、大勢状況）がどのようなかかわりを示すのかも興味深い。

(3) 本研究の目的

本研究の目的は、親切行動と既知の他者へのコミュニケーション不安および未知の他者へのコミュニケーション不安との関連を検討することである。

2. 方法

(1) 調査対象者と調査手続き

広島県内の A 大学の女子大学生 109 人（平均年齢は 19.8 歳、標準偏差は 1.07）から有効回答を得た。調査は、「人間関係とコミュニケーションに関する調査」という題目の質問紙を用いて、集合調査法と個別調査法により、2014 年 9 月から 10 月にかけて実施した。

(2) 質問紙の内容

(a) 質問紙の構成　質問紙は、A4 判用紙 6 枚に片面印刷したものであった。1 枚目は表紙、2 枚目は非典型的ふれ合い恐怖心性尺度、3 枚目は典型的ふれ合い恐怖心性尺度、4 枚目は未知の他者とのコミュニケーション不安尺度と既知の他者とのコミュニケーション不安尺度、5 枚目は他人用親切行動尺度、6 枚目はメール・コミュニケーション・スキル尺度であった。本研究で分析に使用しない尺度の紹介は省略する。質問紙の表紙に、「友だち」や「知らない他人」との人間関係及びコミュニケーションに関する調査である旨の教示を印刷し、口頭でも同様の教示を行った。このほかに、表紙には、回答上の注意や調査対象者の年齢等の記入欄などが記載してあった。

(b) コミュニケーション不安尺度　深田他（2017b）の作成した、未知の他者（知らない他人）に対する 2 因子（大勢・少人数状況因子と一対一状況因子）10 項目の「未知の他者用コミュニケーション不安尺度」（表 12-12）、既知の他者（友だち）に対する 2 因子（少人数・一対一状況因子、大勢状況因子）11 項目の「既知の他者用コミュニケーション不安尺度」（表 12-13）を使用した。回答は、「全くあてはまらない」（1 点）、「ややあてはまる」（2 点）、「わりとあてはまる」（3 点）、「とてもよくあてはまる」（4 点）の 4 段階で、不安が高いほど高得点になるように得点化した。

(c) 親切行動尺度　深田・岡竹（2015b）の作成した未知の他者（知らない他人）に対する 4 因子（緊急対応的親切因子、世話好き的親切因子、分与・貸与的親切因子、応答的親切因子）12 項目の「他人用親切行動尺度」を使用した。知らない他人に対して 17 項目（5 項目はダミー項目）の親切

行動をどのくらい実行する可能性があるかを尋ね、「全くない」（1 点）、「少しある」（2 点）、「わりとある」（3 点）、「かなりある」（4 点）の 4 点尺度で回答を求め、親切行動の実行可能性が高くなるほど高得点になるように 4 段階で得点化した。

表 12-12　本研究で使用した未知の他者用コミュニケーション不安尺度（深田他, 2017b）の項目

第 1 因子「大勢・少人数状況」
大勢の知らない他人の前で話をするときには緊張する
大勢の知らない他人の前ではうまく話せない
大勢の知らない他人の前で話すことは苦痛だ
少人数の知らない他人の集まりで話をするときには緊張する
大勢の知らない他人の前では話をしたくない
少人数の知らない他人の集まりで話すことは苦痛だ
少人数の知らない他人の集まりでは話をしたくない
第 2 因子「一対一状況」
知らない他人とは話をしたくない
知らない他人と話をすることは苦痛だ
知らない他人と一対一の場面でうまく話せない

表 12-13　本研究で使用した既知の他者用コミュニケーション不安尺度（深田他, 2017b）の項目

第 1 因子「少人数・一対一状況因子」
少人数の友だちの集まりで話すことは苦痛だ
友だちと話をすることは苦痛だ
少人数の友だちの集まりでは話をしたくない
友だちとは話をしたくない
少人数の友だちの集まりでうまく話せない
少人数の友だちの集まりで話をするときには緊張する
第 2 因子「大勢状況」
大勢の友だちの前で話をするときには緊張する
大勢の友だちの前ではうまく話せない
大勢の友だちの前では話をしたくない
大勢の友だちの前で話すことは苦痛だ
友だちと一対一の場面でうまく話せない

3. 結果

(1) コミュニケーション不安を説明変数、親切行動を目的変数とする重回帰分析

尺度全体と因子別の親切行動得点の 5 変数それぞれを目的変数とし、次に述べる 4 セットのコミュニケーション不安を説明変数とする重回帰分析を行った。説明変数は、①未知の他者用コミュニケーション不安尺度の全体得点と既知の他者用コミュニケーション不安尺度の全体得点の 2 変数、②未知の他者用コミュニケーション不安尺度の大勢・少人数状況因子得点と一対一状況因子得点の 2 変数、③既知の他者用コミュニケーション不安尺度の少人数・一対一状況因子得点と大勢状況因子得点の 2 変数、④未知の他者用コミュニケーション不安尺度の大勢・少人数状況因子得点と一対一状況因子得点、既知の他者用コミュニケーション不安尺度の少人数・一対一状況因子得点と大勢状況因子得点の 4 変数、の 4 セットであった。この説明変数のセットを縦に、5 種類の目的変数を横にとり、得られた β 係数を表 12-14 に示した。

表 12-14 から、未知の他者に対するコミュニケーション不安は、未知の他者への親切行動に対して有意な負の影響をもつこと、すなわち、親切行動を抑制することが示された。しかし、既知の他者に対するコミュニケーション不安は、未知の他者に対する親切行動に対して有意な影響を及ぼさないことが示された。

表 12-14　コミュニケーション不安を説明変数、親切行動を目的変数とする重回帰分析の結果（β 係数）

説明変数（コミュニケーション不安）	目的変数 親切行動尺度全体	緊急対応的親切	世話好き的親切	分与貸与的親切	応答的親切
(未) 尺度全体	**-.294*** **	**-.259***	**-.454*** **	-.178	-.217
(既) 尺度全体	.031	.074	0.100	-.052	-.090
(未) 大勢・少人数状況	-.042	-.120	-.079	.037	.086
(未) 一対一状況	**-.228** **	-.110	**-.323** **	**-.218** **	**-.313** **
(既) 少人数・一対一状況	-.130	-.215	-.054	-.252	-.136
(既) 大勢状況	-.011	.098	-.075	.054	-.074
(未) 大勢・少人数状況	-.063	-.166	-.116	.035	.110
(未) 一対一状況	**-.236** **	-.125	**-.333** **	**-.225** **	**-.312** **
(既) 少人数・一対一状況	-.157	-.235	-.094	-.274	-.164
(既) 大勢状況	.132	.236	.140	.147	.026

注 1）(未)：未知の他者用コミュニケーション不安尺度、(既)：既知の他者用コミュニケーション不安尺度

注 2）*** $p < .001$、** $p < .01$、* $p < .05$

未知の他者への親切行動に対する未知の他者に対するコミュニケーション不安の抑制的影響を詳細に検討してみると、未知の他者に対するコミュニケーション不安全体は、親切行動全体、緊急対応的親切、世話好き的親切を有意に抑制していることが分かった。しかし、未知の他者に対するコミュニケーション不安の抑制的影響は、大勢・少人数状況での不安では全く見られず、一対一状況でのみ見られた。このように、一対一状況での未知の他者に対するコミュニケーション不安が、親切行動全体、世話好き的親切、分与・貸与的親切、応答的親切を有意に抑制することが判明した。コミュニケーション不安全体の有意な抑制的影響が見られた緊急対応的親切に関しては、一対一状況でのコミュニケーション不安の有意な抑制的影響が見られず、得られた結果の整合性に一部矛盾が存在していた。

(2) 未知の他者・既知の他者へのコミュニケーション不安の類型と親切行動との関連

未知の他者用コミュニケーション不安尺度の全体得点の平均値を基準に、調査対象者を未知の他者へのコミュニケーション不安高群（N = 57）と低群（N =52）に分類した。また、既知の他者用コミュニケーション不安尺度の全体得点の平均値を基準に、調査対象者を既知の他者へのコミュニケーション不安高群（N = 34）と低群（N =75）に分類した。次に、未知の他者へのコミュニケーション不安の高低と既知の他者へのコミュニケーション不安の高低の組み合わせから、未知の他者へのコミュニケーション不安高・既知の他者へのコミュニケーション不安高群（N = 26：以下、未高既高群）、未知の他者へのコミュニケーション不安高・既知の他者へのコミュニケーション不安低群（N = 31：以下、未高既低群）、未知の他者へのコミュニケーション不安低群・既知の他者へのコミュニケーション不安高群（N = 8：以下、未低既高群）、未知の他者へのコミュニケーション不安低・既知の他者へのコミュニケーション不安低群（N = 44：以下、未低既低群）の 4 群に調査対象者を類型化した。この類型化した 4 群における親切行動得点の平均と標準偏差を、尺度全体と因子別に表 12-15 に示した。

表 12-15　コミュニケーション不安の類型別の親切行動得点の平均と標準偏差

	未高既高群	未高既低群	未低既高群	未低既低群
親切行動尺度全体	1.996 (0.502)	2.070 (0.502)	2.257 (0.522)	2.368 (0.588)
緊急対応的親切	2.356 (0.701)	2.315 (0.725)	2.688 (0.704)	2.699 (0.784)
世話好き的親切	1.865 (0.708)	1.919 (0.699)	2.031 (0.850)	2.352 (0.875)
分与・貸与的親切	1.519 (0.479)	1.661 (0.611)	1.813 (0.651)	1.841 (0.654)
応答的親切	2.115 (0.875)	2.484 (0.944)	2.563 (0.776)	2.557 (0.857)

注 1）未高既高群：未知の他者へのコミュニケーション不安高・既知の他者へのコミュニケーション不安高群
未高既低群：未知の他者へのコミュニケーション不安高・既知の他者へのコミュニケーション不安低群
未低既高群：未知の他者へのコミュニケーション不安低・既知の他者へのコミュニケーション不安高群
未低既低群：未知の他者へのコミュニケーション不安低・既知の他者へのコミュニケーション不安低群

表 12-16　尺度全体と因子別の親切行動得点に関する分析結果（表内の数値は *F* 値）

従属変数	2 要因分散分析 (未)主効果	(既)主効果	交互作用	1 要因 分散分析	多重比較 （*p* < .05）
親切行動尺度全体	**4.910***	0.537	0.020	**3.259***	高高＜低低
緊急対応的親切	**4.254***	0.007	0.023	2.189 †	—
世話好き的親切	2.644	1.037	0.526	**2.830***	—
分与・貸与的親切	2.807 †	0.365	0.162	1.698	—
応答的親切	1.591	0.774	0.823	1.504	—

注 1）2 要因分散分析の場合、主効果と交互作用の自由度はいずれも $df = 1, 105$、1 要因分散分析の場合の自由度は $df = 3, 105$　　* $p < .05$、† $p < .10$

注 2）(未)：未知の他者へのコミュニケーション不安要因、(既)：既知の他者へのコミュニケーション不安要因

注 3）高高：未知の他者へのコミュニケーション不安高・既知の他者へのコミュニケーション不安高群

低低：未知の他者へのコミュニケーション不安低・既知の他者へのコミュニケーション不安低群

尺度全体と因子別の親切行動得点に関して、未知の他者へのコミュニケーション不安要因（高・低）と既知の他者へのコミュニケーション不安要因（高・低）の 2 要因分散分析（2×2）を行った結果を表 12-16 に示した。また、2 種類のコミュニケーション不安得点の高低の組み合わせによって類型化した 4 群を 1 要因に見立てて、1 要因 4 水準の分散分析と多重比較を行った結果を表 12-16 に併せて示した。

表 12-16 の 2 要因分散分析の結果から、未知の他者へのコミュニケーション不安要因の主効果のみが、親切行動全体と緊急対応的親切で有意であり、未知の他者とのコミュニケーション不安の高い人は、不安の低い人に比べて、親切行動全体と緊急対応的親切が有意に少ないことが示された。また、1 要因分散分析の結果から、親切行動全体と世話好き的親切で 4 群間に有意差が示されたが、多重比較の結果からは、既知の他者および未知の他者とのコミュニケーション不安の両方が高い群の方が、両方が低い群よりも、親切行動全体が少なくなるという 2 群間の差が示されるにとどまった。

4. 考察

(1) 本研究で得られた知見

親切行動の全体得点および因子別得点の 5 変数それぞれを目的変数とし、未知の他者および既知の他者に対するコミュニケーション不安の全体得点および因子別得点の組み合わせから 4 セットのコミュニケーション不安変数を説明変数とする重回帰分析を行ったところ、次のような結果が得られた。すなわち、①未知の他者に対するコミュニケーション不安は、未知の他者への親切行動に対して有意な負の影響をもつが、既知の他者に対するコミュニケーション不安は、未知の他者に対する親切行動に対して有意な影響を及ぼさない。②未知の他者に対するコミュニケーション不安全体

は、未知の他者への親切行動全体、緊急対応的親切、世話好き的親切を抑制する。③こうした抑制的影響は、大勢・少人数状況では全く見られず、一対一状況でのみ見られる。④一対一状況での未知の他者に対するコミュニケーション不安は、親切行動全体、世話好き的親切、分与・貸与的親切、応答的親切を抑制するが、未知の他者に対するコミュニケーション不安全体で見られた緊急対応的親切への抑制的影響は消失している。

以上のように、一対一状況での未知の他者に対するコミュニケーション不安が、親切行動全体、世話好き的親切、分与・貸与的親切、応答的親切を抑制し、さらに、未知の他者に対するコミュニケーション不安全体が緊急対応的親切を抑制することが解明された。

本研究では、親切行動として未知の他者に対する親切行動を測定したので、既知の他者に対するコミュニケーション不安よりも未知の他者に対するコミュニケーション不安の方が親切行動とより高い関連を示したと解釈できる。そして、こうした未知の他者に対する親切行動への未知の他者に対するコミュニケーション不安の影響は、未知の他者が大勢あるいは少人数いる状況では出現せず、未知の他者との一対一の状況でのみ出現した。深田（2015）によると、親切行動は困苦を抱えている個人に対して向けられる行動であり、親切行動は一連の対人コミュニケーション過程の中で出現する行動である。したがって、未知の他者との一対一の状況におけるコミュニケーション不安が高ければ、未知の他者に対する親切行動の生起が抑制されると解釈できる。

未知の他者および既知の他者に対するコミュニケーション不安の高低の組み合わせによって調査対象者を 4 類型に分類し、2 要因分散分析、1 要因分散分析、多重比較の検定を行ったところ、次のような結果が得られた。すなわち、①親切行動全体と緊急対応的親切に関して、未知の他者へのコミュニケーション不安の高い人は、低い人に比べて、親切行動全体と緊急対応的親切が有意に少ない。②既知の他者および未知の他者とのコミュニケーション不安の両方が高い群の方が、両方が低い群よりも、親切行動全体が少なくなる。こうした分散分析の結果は、上述した重回帰分析の結果と一貫している。

(2) 今後の課題

深田他（2017c）で述べた課題と同じ課題が指摘できる。すなわち、本研究では、コミュニケーション不安は、未知の他者に対するコミュニケーション不安と既知の他者に対するコミュニケーション不安を測定したが、親切行動は未知の他者に対する親切行動のみを測定した。そのため、他者をどのような具体的な他者として設定するか、――未知の他者とするのか、既知の他者とするのか、他者全般とするのか――という問題が重要な検討課題として残る。したがって、コミュニケーション不安、親切行動、メール・コミュニケーション・スキルの測定に際して、これら 3 種類の変数を同一次元の他者として測定することによって、コミュニケーション不安と親切行動の関係をより厳密に検討する必要がある。

５．要約

コミュニケーション不安と親切行動の関連を検討した。女子大学生を対象にした調査で、既知の他者（友だち）に対するコミュニケーション不安尺度、未知の他者（知らない他人）に対するコミュニケーション不安尺度、未知の他者用親切行動尺度を使用し、以下の結果を得た。未知の他者に対するコミュニケーション不安全体は、未知の他者への親切行動全体、緊急対応的親切、世話好き的親切を抑制する。こうした抑制的影響は、大勢・少人数状況における不安では全く見られず、一対一状況における不安でのみ見られる。そして、一対一状況での未知の他者に対するコミュニケーション不安が、親切行動全体、世話好き的親切、分与・貸与的親切、応答的親切を抑制することを解明した。

キーワード：親切行動、コミュニケーション不安、コミュニケーション不安尺度

引用文献

相川 充 (1984). 援助者に対する被援助者の評価に及ぼす返報の効果 心理学研究, **55**, 8-14.

相川 充 (1988). 心理的負債に対する被援助利益の重みと援助コストの重みの比較 心理学研究, **58**, 366-372.

相川 充 (1999a). 愛他的行動 中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁桝 算男・立花 政夫・箱田 裕司 (編) 心理学辞典 有斐閣 p.3.

相川 充 (1999b). 援助行動 中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁桝 算男・立花 政夫・箱田 裕司 (編) 心理学辞典 有斐閣 pp.74-75.

相川 充・吉森 護 (1995). 心理的負債感尺度の作成の試み 社会心理学研究, **11**, 63-72.

赤井 米吉 (1964). ふれあう心 茅 誠司 (編) 小さな親切 光風社 pp.43-49.

明田 芳久 (2002a). 愛他心 古畑 和孝・岡 隆 (編) 社会心理学小辞典〔増補版〕 有斐閣 p.2.

明田 芳久 (2002b). 道徳性 古畑 和孝・岡 隆 (編) 社会心理学小辞典〔増補版〕 有斐閣 p.177.

Alba, B. (2013). Loving-kindness meditation: A field study. *Contemporary Buddhism*, **14(2)**, 187-203.

Amato, P. R., & Pearce, P. (1983). A cognitively-based taxonomy of helping. In M. Smithson, P. R. Amato, & P. Pearce (Eds.), *Dimensions of helping behavior* (*International Series in Experimental Social Psychology*. Vol.6). Oxford: Pergamon Press. （高木 修 (1987c). 援助行動の類型と特性 中村 陽吉・高木 修 (編著) 「他者（ひと）*を助ける行動」の心理学 光生館 pp.14-33. ＊書名の（ひと）は、ルビとして振られているものである。）

有光 興記 (2014). セルフ・コンパッション尺度日本語版の作成と信頼性、妥当性の検討 心理学研究, **85**, 50-59.

有田 秀穂 (2011). 監訳者のことば ハミルトン, ディビッド (著) 有田 秀穂 (監訳) 「親切」は驚くほど体にいい！ “幸せ物質”オキシトシンで人生が変わる 飛鳥新社 pp.3-9.

朝倉 聡 (2015). 社交不安障害の診断と治療 精神神経学会雑誌, **117(6)**, 413-430.

Ascione, F. R. (1997). Humane education research: Evaluating efforts to encourage children’s kindness and caring toward animals. *Genetic, Social & General Psychology*, **123(1)**, 59-77.

Ascione, F. R, & Shapiro, K. (2009). People and animals, kindness and cruelty: Research directions and policy implications. *Journal of Social Issues*, **65(3)**, 569-587.

Baldwin, C. P., & Baldwin, A. L. (1970). Children’s judgement of kindness. *Child Development*, **41**, 29-47.

Boellinghaus, I., Jones, F. W., & Hutton, J. (2013). Cultivating self-care and compassion in psychological therapists in training: The experience of practicing loving-kindness meditation. *Training and Education in Professional Psychology*, **7(4)**, 267-277.

Booth-Butterfield, S., & Gould, M. (1986). The Communication Anxiety Inventory: Validation of state- and context-communication apprehension. *Communication Quarterly*, **34(2)**, 194-205.

Brooks-Gunn, J., Berlin, L. J., Leventhal, T., & Fuligni, A. S. (2000). Depending on the kindness of strangers: Current national data initiatives and developmental research. *Child Development*, **71(1)**, 257-268.

Brown, A. M., Matheny, Jr., A. P., & Wilson, R. S. (1973). Baldwin's kindness concept measure as related to children's cognition and temperament: A twin study. *Child Development*, **44**, 193-195

Buchanan, K. E., & Bardi, A. (2010). Acts of kindness and acts of novelty affect life satisfaction. *The Journal of Social Psychology*, **150(3)**, 235-237.

Cahill, S. E., & Eggleston, R. (1995). Reconsidering the stigma of physical disability: Wheelchair use and public kindness. *The Sociological Quarterly*, **36(4)**, 681-698.

Colzato, L. S., Zech, H., Hommel, B., Verdonschot, R., van den Wildenberg, W. P. M., & Hsieh, S. (2012). Loving-kindness brings loving-kindness: The impact of Buddhism on cognitive self-other integration. *Psychonomic Bulletin & Review*, **19**, 541-545.

Comunian, A. L. (1998). The Kindness Scale. *Psychological Reports*, **83**, 1351-1361.

Cramer, C. (1995). Emma benefited from the kindness of strangers. *Nursing*, **25(12)**, 42-44.

Cullity, G. (1994). International aid and the scope of kindness. *Ethics*, **105**, 99-127.

堂野 恵子 (1995). 愛他的行動 小川 一夫 (監修) 改訂新版 社会心理学用語辞典 北大路書房 pp.2-3.

江原 辰典・柴原 直樹 (2011). 大学生におけるふれ合い恐怖および外見恐怖と MPI との関連について 近畿医療福祉大学紀要, **12(1)**, 109-117.

Exline, J. J., Lisan, A. M., & Lisan, E. R. (2012). Reflecting on acts of kindness toward the self: Emotions, generosity, and the role of social norms. *The Journal of Positive Psychology*, **7(1)**, 45-56.

ファンデンボス, G. R. (監修) 繁桝 算男・四本 裕子 (監訳) (2013a). APA 心理学大辞典 培風館 (VandenBos, G. R. (Ed. in Chief) (2007). *APA dictionary of psychology*. Washington, DC: American Psychological Association.)

ファンデンボス, G. R. (2013b). 対人恐怖症 ファンデンボス, G. R. (監修) 繁桝 算男・四本 裕子 (監訳) APA 心理学大辞典 培風館 p. 557.

ファンデンボス, G. R. (2013c). コミュニケーション不安 社交不安 スピーチ不安 ファンデンボス, G. R. (監修) 繁桝 算男・四本 裕子 (監訳) APA 心理学大辞典 培風館 p. 29, p. 389, p. 480.

Feldman, G., Greeson, J., & Senville, J. (2010). Differential effects of mindful breathing, progressive muscle relaxation, and loving-kindness meditation on decentering and negative reactions to repetitive thoughts. *Behaviour Research and Therapy*, **48**, 1002-1011.

Ferrucci, P. (2006). The power of kindness: The unexpected benefits of leading a compassionate life. New York: Jeremy P. Tarcher / Penguin.

Fletcher, R. S. G. (2010). 'Returning kindness received'? Missionaries, Empire, and the Royal Navy in Okinawa, 1846-57. *English Historical Review*, **125(514)**, 599-641.

Flexner, S. B. (Ed. in Chief), & Hauck, L. C. (Managing Ed.) (Eds.) (1987). *The Random House Dictionary of the English Language. Second Edition.* New York: Random House.

Flook, L., Goldberg, S. B., Pinger, L., & Davidson, R. J. (2015). Promoting prosocial behaivior and self-regulatory skills in preschool children through a mindfulness-based kindness curriculum. *Developmental Psychology*, **51(1)**, 44-51.

Fredrickson, B. L. (1998). What good are positive emotions? *Review of General Psychology*, **2(3)**, 300-319.

Fredrickson, B. L., Cohn, M. A., Coffey, K. A., Pek, J., & Finkel, S M. (2008). Open hearts build lives:

Positive emotions, induced through loving-kindness meditation, build consequential personal resources. *Journal of Personality and Social Psychology*, **95(5)**, 1045-1063.
Frentz, T. (2014). Killing with kindness: Confessions of an obsessive. *Qualitative Inquiry*, **20(1)**, 15-22.
藤永 保 (監修) (2013). 最新心理学事典 平凡社
深田 博己 (2015a). 親切の哲学と心理学 対人コミュニケーション研究, **3**, 33-83.
深田 博己 (2015b). 欧米における親切の研究 広島文教女子大学心理学研究, **2(1)**, 1-38.
深田 博己 (2016). 親切現象の心理学的理解 広島文教女子大学心理学研究, **3(1)**, 1-18.
深田 博己 (2017). わが国における親切の心理学的研究 広島文教女子大学心理学研究, **3(2)**, 1-22.
深田 博己・梶本 あゆみ (2014). 女性の化粧に及ぼすコミュニケーション不安の影響 対人コミュニケーション研究, **2**, 49-63.
深田 博己・岡竹 郁子 (2015a). 親切の意味的構造 広島文教女子大学心理学研究, **1(2)**, 1-20.
深田 博己・岡竹 郁子 (2015b). 親切の行動的構造 広島文教女子大学心理学研究, **1(2)**, 21-36.
深田 博己・谷川 瑞貴 (2016). 不親切の動機的構造 広島文教女子大学心理学研究, **2(2)**, 25-36.
深田 博己・田坂 瞳 (2017). アルバイト場面における女子大学生の取り入り行動 広島文教女子大学心理学研究, **3(2)**, 35-52.
深田 博己・山根 嵩史・植田 智・福田 雄一 (2017a). 典型的および非典型的ふれ合い恐怖心性尺度の作成 広島文教女子大学心理学研究, **4(1)**, 1-18.
深田 博己・山根 嵩史・植田 智・福田 雄一 (2017b). 既知の他者用および未知の他者用コミュニケーション不安尺度の作成 広島文教女子大学心理学研究, **4(1)**, 19-32.
深田 博己・山根 嵩史・植田 智・福田 雄一 (2017c). ふれ合い恐怖心性と社会的行動およびスキルとの関連 広島文教女子大学心理学研究, **4(1)**, 33-48.
深田 博己・山根 嵩史・植田 智・福田 雄一 (2017d). コミュニケーション不安と社会的行動およびスキルとの関連 広島文教女子大学心理学研究, **4(1)**, 49-59.
福井 康之 (2003). 女子青年のふれあい恐怖と外見恐怖 人間性心理学研究, **21(2)**, 187-197.
古畑 和孝・岡 隆 (編) (2002). 社会心理学小辞典〔増補版〕 有斐閣
Goldberg, L. R. (1990). An alternative “description of personality”: The Big-Five factor structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 1216-1229.
呉 泰三 (1964). サラリーマン下沢君の場合 茅 誠司 (編) 小さな親切 光風社 pp.195-202.
Gove, P. B. (Ed. in Chief), & The Merriam-Webster Editorial Staff (Eds.) (1986). *Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged*. Springfield, MA: Merriam-Webster Inc.
箱井 英寿・高木 修 (1987). 援助規範意識の性別、年代、および、世代間の比較 社会心理学研究, **3**, 39-47.
ハミルトン, ディビッド (著) 有田 秀穂 (監訳) (2011).「親切」は驚くほど体にいい！ “幸せ物質”オキシトシンで人生が変わる 飛鳥新社（Hamilton, D. R. (2010). Why kindness is good for you. UK: Hay House.）
原 安三郎 (1964). 小さな親切に思う 茅 誠司 (編) 小さな親切 光風社 pp.113-121.
原田 純治 (1983). 援助行動に及ぼすパーソナリティ要因の効果 (Ⅱ)——都市化傾向、利他性と援助行動について—— 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), **28**, 11-15.
Harada, J. (1985). Bystander intervention: The effect of ambiguity of the helping situation and the interpersonal relationship between bystanders. *Japanese Psychological Research*, **27**, 177-184.

原田 純治 (1990). 援助行動と動機・性格との関連 実験社会心理学研究, **30**, 109-121.
原田 純治・狩野 素朗 (1980). 援助行動に及ぼすパーソナリティ要因の効果 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), **25(1)**, 83-88.
原田 匠・松見 淳子 (2007). 既知者の存在が親切行動を促進あるいは抑制する効果の検証―中学生を対象とした行動観察を用いて― 日本行動療法学会大会発表論文集, **33**, 312-313.
林 洋一・小川 捷之 (1981). 対人不安意識尺度構成の試み 横浜国立大学保健管理センター年報, **1**, 29-46.
Hinton, D. E., Ojserkis, R. A., Jalal, B., Peou, S., & Hofmann, S. G. (2013). Loving-kindness in the treatment of traumatized refugees and minority groups: A typology of mindfulness and the Nodal Network Model of Affect and Affect Regulation. *Journal of Clinical Psychology: In Session*, **69(8)**, 817-828.
廣兼 潤子 (1995a). 援助行動 小川 一夫 (監修) 改訂新版 社会心理学用語辞典 北大路書房 pp.23-24.
廣兼 潤子 (1995b). 向社会的行動 小川 一夫 (監修) 改訂新版 社会心理学用語辞典 北大路書房 p.84.
Hofmann, S. G., Grossman, P., & Hinton, D. E. (2011). Loving-kindness and compassion meditation: Potential for psychological interventions. *Clinical Psychology Review*, **31**, 1126-1132.
Hoge, E. A., Chen, M. M., Orr, E., Metcalf, C. A., Fischer, L. E., Pollack, M. H., DeVivo, I., & Simon, N. M. (2013). Loving-kindness meditation practice associated with longer telomeres in women. *Brain, Behavior, and Immunity*, **32**, 159-163.
本間 道子 (1988). 非関与の規範が援助行動に及ぼす効果――都市空間における―― 日本女子大学紀要 文学部, **37**, 51-62.
堀井 俊章 (2005). 現代大学生の対人恐怖心性―対人関係における「おびえ」の測定 CAMPUS HEALTH, **42(2)**, 69-74.
堀井 俊章 (2006). 対人恐怖心性尺度Ⅱの開発――対人関係におけるおびえの心性を測定する試み―― 学生相談研究, **26**, 221-232.
堀井 俊章・小川 捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, **20**, 55-65.
堀井 俊章・小川 捷之 (1997a). 対人恐怖心性尺度の作成（続報） 上智大学心理学年報, **21**, 43-51.
堀井 俊章・小川 捷之 (1997b). 青年期における対人不安意識の発達的変化 心理臨床学研究, **14(4)**, 448-455.
市河 淳章 (1995). 道徳性 小川 一夫 (監修) 改訂新版 社会心理学用語辞典 北大路書房 p.257.
稲浪 正充・笠原 嘉 (1968). 大学生と対人恐怖症 全国大学保健管理協会誌, **4**, 24-28.
井上 清子 (2014). 表情が初対面の相手に与える印象 文教大学生活科学研究, **36**, 183-194.
石原 俊一 (2010). 大学生におけるふれ合い恐怖的心性と心理的ストレス反応の関連性 立教大学人間科学部人間科学研究, **31**, 85-93.
伊藤 亮 (2013). ふれ合い恐怖心性と親子関係との関連について―Parental Bonding Instrument（PBI）を用いた検討― 愛知学泉大学・短期大学紀要, **48**, 83-88.
伊藤 亮・村瀬 聡美・金井 篤子 (2011). 過敏性自己愛傾向が現代青年のふれ合い恐怖心性に及ぼす影響について――自己愛的脆弱性尺度を用いた検討 パーソナリティ研究, **19(3)**, 181-190.
伊藤 亮・村瀬 聡美・吉住 隆弘・村上 隆 (2008). 現代青年における“ふれ合い恐怖的心性”と抑う

つおよび自我同一性との関連　パーソナリティ研究, **16(3)**, 396-405.
岩淵 千明 (2009). 愛他主義と向社会的行動　日本社会心理学会 (編) 社会心理学事典　丸善 pp.124-125.
Johnson, D. P., Penn, D. L., Fredrickson, B. L., Kring, A. M., Meyer, P. S., Catalino, L. I., & Brantley, M. (2011). A pilot study of loving-kindness meditation for the negative symptoms of schizophrenia. *Schizophrenia Research*, **129**, 137-140.
Johnson, D. P., Penn, D. L., Fredrickson, B. L., Meyer, P. S., , Kring, A. M., & Brantley, M. (2009). Loving-kindness meditation to enhance recovery from negative symptoms of schizophrenia. *Journal of Clinical Psychology: In Session*, **65(5)**, 499-509.
Jones, E. E., & Pittman, T. S. (1983). Toward a general theory of strategic self-presentation. In J. Suls (Ed.), *Psychological perspectives on the self*. Vol.1. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp.231-262.
鎌田 正・米山 寅太郎 (1992). 大漢語林　大修館書店
加藤 由貴・岩﨑 眞和・五十嵐 透子 (2013). 大学生のふれあい恐怖傾向と大学適応感および信頼感の関連　上越教育大学心理教育相談研究, **12**, 35-42.
茅 誠司 (編) (1964a). 小さな親切　光風社
茅 誠司 (1964b). 序　小さな親切運動を提唱して半歳　茅 誠司 (編) 小さな親切　光風社 pp.3-5.
茅 誠司 (1964c). 社会の規律と親切　茅 誠司 (編) 小さな親切　光風社　pp.105-112.
Kearney, D. J., Malte, C. A., McManus, C., Martinez, M. E., Felleman, B., & Simpson, T. L. (2013). Loving-kindness meditation for posttraumatic stress disorder: A pilot study. *Journal of Traumatic Stress*, **26**, 426-434.
Kerr, S. L., O'Donovan, A. , & Pepping, C. A. (2015). Can gratitude and kindness interventions enhance well-being in a clinical sample? *Journal of Happiness Studies*, **16**, 17-36.
菊池 章夫 (1988). 思いやりを科学する――向社会的行動の心理とスキル　川島書店
金田一 春彦・池田 弥三郎 (編) (1980). 学研国語大辞典[机上版]　学習研究社
北嶋 廣敏 (2011). 二字漢字の謎を解く　親を切ると書いてなぜ「親切」(リイド文庫)　リイド社
北村 瑞穂 (2012). 親切と感謝の行動が幸福感に及ぼす影響　四条畷学園短期大学紀要, **45**, 30-38.
向後 智子・向後 千春 (1995). 電子メール利用とコミュニケーション能力との関係　電子情報通信学会技術研究報告, **ET95**, 15-20.
Kohlberg, L. (1984). *The psychology of moral development: The nature and validity of moral stages (Essays on moral development, Vol.2)*. New York: Harper & Row.
近藤 良樹 (2004a). 我々の親切は、誰にするのか―日本的な親切の人間関係論―　メタフュシカ (大阪大学大学院文学研究科哲学講座), **35**, 別冊, 33-40.（近藤 良樹 (2007a). 親切 (論文集)　広島大学学術情報リポジトリ　広島大学図書館　pp.1-10.）
近藤 良樹 (2004b). 親切な人（ひと）*とは、どんな他人（ひと）*か―人間関係としての親切論―　HABITUS(西日本応用倫理学研究会), **11**, 1-17.（近藤 良樹 (2007a). 親切 (論文集)　広島大学学術情報リポジトリ　広島大学図書館　pp.27-39.）　*論文題目中の（ひと）は、ルビとして振られているものである。
Kondo, Y. (2004c). The theory of kindness from the viewpoint of Japanese human relations―Whom are we kind to?―　ぷらくしす(広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター・西日本応用倫理学研

究会), Winter, 1-15.（近藤 良樹 (2007a). 親切 (論文集) 広島大学学術情報リポジトリ 広島大学図書館 pp.11-26.）
近藤 良樹 (2007a). 親切 (論文集) 広島大学学術情報リポジトリ 広島大学図書館 pp.1-65.
近藤 良樹 (2007b). 親切心—他人に対するあたたかな思いやり— 近藤 良樹 (2007a). 親切 (論文集) 広島大学学術情報リポジトリ 広島大学図書館 pp.40-51.
近藤 良樹 (2007c). 親切の本質—たまたまする、ささやかな手助け— 近藤 良樹 (2007a). 親切 (論文集) 広島大学学術情報リポジトリ 広島大学図書館 pp.52-65.
公益社団法人「小さな親切」運動本部 (2015). 「小さな親切」運動 公益社団法人「小さな親切」運動本部公式ホームページ (http://www.kindness.jp/) 2015 年 2 月 20 日
栗田 確也 (1964). 「小さな親切」運動について 茅 誠司 (編) 小さな親切 光風社 pp.189-194.
Layous, K., Nelson, S. K., Oberle, E., Schonert-Reichl, K. A., & Lyubomirsky, S. (2012). Kindness counts: Prompting prosocial behavior in preadolescents boosts peer acceptance and well-being. *PLOS ONE*, **7(12)**, e51380.
Leppma, M. (2012). Loving-kindness meditation and counseling. *Journal of Mental Health Counseling*, **34(3)**, 197-205.
Lerner, B. D. (2013). God's kindness has overwhelmed us: A contemporary doctrine of the Jews as the chosen people – By Jerome (Yehudah) Gellman. *Reviews in Religion & Theology*, **20(3)**, 413-416.
Lexicon Publications (1987). *The New Lexicon Webster's Dictionary of the English Language. 1988 Edition*. New York: Lexicon Publications, Inc.
Li, N. P., Halterman, R. A., Cason, M. J., Knight, G. P., & Maner, J. K. (2008). The stress-affiliation paradigm revised: Do people prefer the kindness of strangers or their attractiveness? *Personality and Individual Differences*, **44**, 382-391.
Lyubomirsky, S., & Lepper, H. S. (1999). A measure of subjective happiness: Preliminary reliability and construct validation. *Social Indicators Research*, **46**, 137-155.
Lyubomirsky, S., Sheldon, K. M., & Schkade, D. (2005). Pursuing happiness: The architecture of sustainable change. *Review of General Psychology*, **9(2)**, 111-131.
Lyubomirsky, S., Tkach, C., & Sheldon, K. M. (2004). [Pursuing sustained happiness through random acts of kindness and counting one's blessings: Tests of two six-week interventions.] Unpublished raw data. In Lyubomirsky, S., Sheldon, K. M., & Schkade, D. (2005). Pursuing happiness: The architecture of sustainable change. *Review of General Psychology*, **9(2)**, 111-131.
松井 豊 (1981). 援助行動の構造分析 心理学研究, **52**, 226-232.
松井 豊 (1985). 援助行動の生起に関する理論モデルの動向 東横学園女子短期大学紀要, **20**, 104-115.
松井 豊・堀 洋道 (1978). 大学生の援助に関する規範意識の検討 (その１) 日本心理学会第 42 回大会発表論文集, 1298-1299.
松井 豊・堀 洋道 (1979). 大学生の援助に関する規範意識の検討 (その２) 日本心理学会第 43 回大会発表論文集, 755.
松本 芳之 (2003). 組織場面における自己呈示の知覚：取り入り行動の知覚における個人差の検討 早稲田大学教育学部学術研究 (教育心理学編), **51**, 15-27.
松下 幸之助 (1964). 躾けが人をつくる 茅 誠司 (編) 小さな親切 光風社 pp.22-29.

McCarty, M., & McCarty, H. (1994). *Acts of kindness: How to make a gentle difference*. Deerfield Beach, FL: Health Communication, Inc.

溝口 剛・相星 有紀子・河野 伸子 (2015). 大学生の「ふれ合い恐怖的心性」に影響を与える要因についての研究―親の養育態度と自己愛に注目して― 大分大学教育福祉科学部研究紀要, **37(2)**, 193-208.

森下 春一 (1964). 小さな親切と論語と墨子 茅 誠司 (編) 小さな親切 光風社 pp.137-147.

森戸 辰男 (1964). 平和の源泉としての小さな親切 茅 誠司 (編) 小さな親切 光風社 pp.155-162.

諸井 貫一 (1964). 二十年の反省 茅 誠司 (編) 小さな親切 光風社 pp.148-154.

村上 宣寛 (2002). 基本的な性格表現用語の収集 性格心理学研究, **11**, 35-49.

村上 宣寛 (2003). 日本語におけるビッグ・ファイブとその心理測定的条件 性格心理学研究, **11**, 70-85.

鍋田 恭孝 (2011). 対人恐怖 加藤 敏・神庭 重信・中谷 陽二・武田 雅俊・鹿島 晴雄・狩野 力八郎・市川 宏伸 (編) 現代精神医学事典 弘文堂 p. 669.

永井 暁行 (2011). 青年期における友人関係愛他行動尺度作成の試み 日本青年心理学会第 19 回大会発表論文集, 62-63.

永田 法子 (2004). 対人恐怖症 氏原 寛・亀口 憲治・成田 善弘・東山 紘久・山中 康裕 (編) 心理臨床大事典［改訂版］ 培風館 pp. 861-862.

中村 陽吉 (1976). 援助行動の研究――Sawyer の愛他心尺度の検討―― 人文学報 (東京都立大学人文学会), **111**, 11-22.

中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁桝 算男・立花 政夫・箱田 裕司 (編) (1999). 心理学辞典 有斐閣

Neely, M. E., Schallert, D. L., Mohammed, S. S., Roberts, R. M., & Chen, Y.-J. (2009). Self-kindness when facing stress: The role of self-compassion, goal regulation, and support in college students' well-being. *Motivation & Emotion*, **33(1)**, 88-97.

Neff, K. D. (2003a). Self-compassion: An alternative conceptualization of a healthy attitude toward oneself. *Self and Identity*, **2**, 85-101.

Neff, K. D. (2003b). The development and validation of a scale to measure self-compassion. *Self and Identity*, **2**, 223-250.

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2001). 日本国語大辞典 第二版 第 7 巻 小学館

日本マインドフルネス学会 (2013). 設立趣旨 日本マインドフルネス学会公式ホームページ (http://mindfulness.jp.net/) 2015 年 8 月 1 日

日本社会心理学会 (編) (2009). 社会心理学事典 丸善

二宮 克美 (1982). 児童の「親切さ」の判断に関する一研究 日本教育心理学会第 24 回総会発表論文集, 230-231.

二宮 克美 (1992). 道徳性 東 洋・繁多 進・田島 信元 (編) 発達心理学ハンドブック 福村出版 pp.840-855.

二宮 克美 (1999). 道徳性 中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁桝 算男・立花 政夫・箱田 裕司 (編) 心理学辞典 有斐閣 pp.632-633.

西館 千瑛 (2011). 大学生における自己志向的完全主義と自己嫌悪感がふれ合い恐怖的心性に与える影響 東北福祉大学大学院総合福祉学研究科紀要, **9**, 153-167.

西川 正之 (1985). 補償的返礼行動に及ぼす加害の程度と援助意図性の効果 実験社会心理学研究, **24**, 161-165.

西川 正之 (1986). 返礼義務感に及ぼす援助意図性、援助成果、および援助出費の効果 心理学研究, **57**, 214-219.

西川 正之 (1997). 主婦の日常生活における援助行動の研究 社会心理学研究, **13**, 13-22.

西川 正之・高木 修 (1986). 援助に対する返礼行動の研究 (1)被援助経験の有無と援助意図性の効果 社会心理学研究, **2**, 11-16.

西村 麻友子 (2001). 現代青年におけるふれあい恐怖的心性と自己開示 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, **3**, 227-237.

小田 亮・大 めぐみ・丹羽 雄輝・五百部 裕・清成 透子・武田 美亜・平石 界 (2013). 対象別利他行動尺度の作成と妥当性・信頼性の検討 心理学研究, **84**, 28-36.

小川 捷之 (1974). いわゆる対人恐怖症者における「悩み」の構造に関する研究 横浜国立大学教育紀要, **14**, 1-33.

小川 一夫 (監修) (1995). 改訂新版 社会心理学用語辞典 北大路書房

大野 晋・浜西 正人 (1981). 角川類語新辞典 角川書店

岡田 努 (1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, **4(2)**, 162-170.

岡田 努 (2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, **10(2)**, 69-84.

大竹 恵子・島井 哲志・池見 陽・宇津木 成介・ピーターソン, クリストファー・セリグマン, マーティン E. P. (2005). 日本版生き方の原則調査票（VIA-IS: Values in Action Inventory of Strength）作成の試み 心理学研究, **76**, 461-467.

Otake, K., Shimai, S., Tanaka-Matsumi, J., Otsui, K., & Fredrickson, B. L. (2006). Happy people become happier through kindness: A counting kindness intervention. *Journal of Happiness Studies*, **7**, 361-375.

尾崎 雄二郎・都留 春雄・西岡 弘・山田 勝美・山田 俊雄 (編) (1992) 角川大字源 角川書店

Peterson, C., & Seligman, M. E. P. (2004). *Human strength: A classification manual*. Washington, DC: American Psychological Association.

坂西 志保 (1964). 心の灯 茅 誠司 (編) 小さな親切 光風社 pp.13-21.

三省堂編修所 (編) (1984). 広辞林 第六版[机上版] 三省堂

佐藤 喜一郎 (1964). オアシスをつくる 茅 誠司 (編) 小さな親切 光風社 pp.88-93.

首藤 敏元 (2013). どうとくせい 道徳性 藤永 保 (監修) 最新心理学事典 平凡社 pp.558-559.

Schachter, S. (1959). *The Psychology of affiliation: Experimental studies of the sources of gregariousness*. (Stanford Studies in Psychology. Vol.1.) Stanford, CA: Stanford University Press.

志田 義秀・佐伯 常麿 (編) (1974). 日本類語大辞典 講談社

島田 泉・高木 修 (1994). 援助要請を抑制する要因の研究Ⅰ ——状況認知要因と個人特性の効果について—— 社会心理学研究, **10**, 35-43.

島田 泉・高木 修 (1995). 援助要請行動の意思決定過程の分析 心理学研究, **66**, 269-276.

Shimai, S., Otake, K., Park, N., Perterson, C., & Seligman, M. E. P. (2006). Convergence of character

strength in American and Japanese young adults. *Journal of Happiness Studies*, **7**, 311-322.
島井 哲志・大竹 恵子・宇津木 成介・池見 陽・Lyubomirsky, S. (2004). 日本版主観的幸福感尺度（Subjective Happiness Scale: SHS）の信頼性と妥当性の検討 日本公衆衛生雑誌, **51**, 845-853.
新村 出 (編) (2008). 広辞苑 第六版[机上版：あーそ] 岩波書店
小学館大辞泉編集部 (編) (2012). 大辞泉 第二版[上巻] 小学館
小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会 (編) (1974). 小学館ランダムハウス英和大辞典 第2巻 小学館
Shorr, D. N. (1993). Children's perceptions of others' kindness in helping: The endocentric motivations of pride and guilt. *The Journal of Genetic Psychology*, **15(3)**, 363-374.
Simpson, J. A., & Weiner, E. S. C. (Eds.) (1989). *The Oxford English Dictionary. Second Edition*. Vol.VIII. Oxford: Clarendon Press.
Smeets, E., Neff, K., Alberts, H., & Peters, M. (2014). Meeting suffering with kindness: Effects of a brief self-compassion intervention for female college students. *Journal of Clinical Psychology*, **70(9)**, 794-807.
Steinberg, D. (2003). Kidneys and the kindness of strangers: A medical ethicist changes his mind about altruistic donors. *Health Affairs*, **22(4)**, 184-189.
Strike, K. A. (2000). Liberalism, communitarianism and the space between: In praise of kindness. *Journal of Moral Education*, **29(2)**, 133-147.
菅原 健介 (2013). たいじんふあん 対人不安 藤永 保 (監修) 最新心理学事典 平凡社 pp. 482-483.
高木 修 (1982). 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学, **23**, 135-156.
高木 修 (1983). 順社会的行動の動機の構造 年報社会心理学, **24**, 187-207.
高木 修 (1986). 援助行動の意思決定過程の研究――Schwartz, S. H. の規範的モデルについて―― 関西大学社会学部紀要, **17(2)**, 23-48.
高木 修 (1987a). 順社会的行動の分類 関西大学社会学部紀要, **18**(2), 67-114.
高木 修 (1987b). 非援助動機の構造とそれに基づく非援助行動の特徴づけ 関西大学社会学部紀要, **19(1)**, 27-49.
高木 修 (1987c). 援助行動の類型と特性 中村 陽吉・高木 修 (編著) 「他者（ひと）*を助ける行動」の心理学 光生館 pp.14-33. *書名の（ひと）は、ルビとして振られているものである。
高木 修 (1991). 米国における向社会的行動の分類学的研究 (1)向社会的行動の類型 関西大学社会学部紀要, **23(1)**, 141-165.
高木 修 (1992). 米国における向社会的行動の分類学的研究 (2)向社会的行動についての規範的態度 関西大学社会学部紀要, **23(2)**, 75-106.
高木 修 (1997). 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, **29(1)**, 1-21.
高木 修 (1998). 人を助ける心――援助行動の社会心理学―― (セレクション社会心理学－7) サイエンス社
高木 修 (2002a). 援助行動 古畑 和孝・岡 隆 (編) 社会心理学小辞典〔増補版〕 有斐閣 p.22.
高木 修 (2002b). 向社会的行動 古畑 和孝・岡 隆 (編) 社会心理学小辞典〔増補版〕 有斐閣 p.68.
高木 修 (2013). えんじょ 援助 藤永 保 (監修) 新心理学事典 平凡社 pp.40-43.

竹林 滋 (編集代表) (編) (2002). 研究社 新英和大辞典 第6版 研究社
竹村 和久・高木 修 (1985). 順社会的行動の意思決定過程の分析 社会心理学研究, **1**, 35-44.
竹村 和久・高木 修 (1987a). 順社会的行動の意思決定過程における認知の変化 心理学研究, **58**, 144-150.
竹村 和久・高木 修 (1987b). 意思決定過程における情報探索ストラテジーと内的状態：提供行動の場合 実験社会心理学研究, **26**, 105-114.
竹村 和久・高木 修 (1988). 順社会的行動の意思決定モデルの検討 実験社会心理学研究, **27**, 171-180.
丹野 義彦 (2006). 病態心理の諸相 海保 博之・楠見 孝 (監修) 心理学総合事典 朝倉書店 pp. 516-525.
手塚 大輔 (1994). 援助規範意識の違いが援助行動場面における感情に及ぼす影響 追手門学院大学心理学論集, **2**, 41-50.
The Dalai Lama (2006). Preface. In P. Ferrucci, *The power of kindness: The unexpected benefits of leading a compassionate life*. New York: Jeremy P. Tarcher / Penguin. pp.ix-x.
Tibetan Review (2009). Karmapa urges climate action as kindness for future generations. *Tibetan Review: The Monthly Magazine on All Aspects of Tibet*, **44(12)**, 16.
藤堂 明保 (編) (1980) 学研漢和大字典(机上版) 学習研究社
塚原 富衛 (1964). 双葉に太陽を！ 茅 誠司 (編) 小さな親切 光風社 pp.218-241.
梅棹 忠夫・金田一 春彦・阪倉 篤義・日野原 重明 (監修) (1995). 講談社カラー版 日本語大辞典 第二版 講談社
浦 光博 (2009). 援助行動 日本社会心理学会 (編) 社会心理学事典 丸善 pp.220-221.
van Zyl Smit, D., Snacken, S., & Hayes, D. (2014). 'One cannot legislate kindness': Ambiguities in European legal instruments on non-custodial sanctions. *Punishment & Society*, **17(1)**, 3-26.
Venable, S., & Shaw, C. J. (2011). The kindness—and money—of strangers: Foreign adoptions from post-communist Europe. *Europe-Asia Studies*, **63(8)**, 1469-1488.
渡邉 敏郎・Skrzypczak, E. R.・Snowden, P. (編) (2003). 研究社 新和英大辞典 第5版 研究社
Wrosch, C., Scheier, M. F., Miller, G. E., Schulz, R., & Carver, C. S. (2003). Adaptive self-regulation of unattainable goals: Goal disengagement, goal reengagement, and subjective well-being. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 1494-1508.
山口 翼 (編) (2003). 日本語大シソーラス——類語検索大辞典 大修館書店
山口 智子・西川 正之 (1991). 援助要請行動に及ぼす援助者の性、要請者の性、対人魅力、および自尊心の影響について 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門, **40**, 21-28.
矢野 一郎 (1964). 親切とは 茅 誠司 (編) 小さな親切 光風社 pp.30-39.
Yagil, D. (2015). Display rules for kindness: Outcomes of suppressing benevolent emotions. *Motivation and Emotion*, **39**, 156-166.
山崎 久美子・吉野 真紀・木下 利彦・小野 純平 (2012). 大学生における対人恐怖的心性、ふれあい恐怖的心性と両親の養育態度について 心理臨床学研究, **29(6)**, 673-682.
横塚 怜子 (1989). 向社会的行動尺度（中高生版）作成の試み 教育心理学研究, **37**, 158-162.
吉田 金彦 (編) (2000). 語源辞典 形容詞編 東京堂出版
吉田 俊和・斎藤 和志・北折 充隆 (編) (2009). 社会的迷惑の心理学 ナカニシヤ出版

依田 明・深津 千賀子 (1963). 出生順位と性格 教育心理学研究, **11**, 239-246, 256.
有倉 巳幸 (1998). 上司への取り入り行動に関する研究 実験社会心理学研究, **38**, 80-92.
有倉 巳幸 (2007). 上司への取り入り行動を規定する傾性要因の検討 産業・組織心理学研究, **21(1)**, 41-47.
有倉 巳幸 (2013). 上司に対する部下の取り入り行動の生起過程に関する研究 対人コミュニケーション研究, **1**, 17-38.
油尾 聡子・吉田 俊和 (2013). 社会的迷惑行為の抑止策としての好意の提供 実験社会心理学研究, **53**, 1-11.

【著者紹介】

深田 博己（ふかだ ひろみ）

1948 年　島根県に生まれる
1971 年　広島大学 教育学部 心理学科 卒業
1976 年　広島大学 大学院教育学研究科 実験心理学専攻 博士課程 単位修得退学
現　在　広島文教大学 人間科学部 心理学科 教授
文学博士／広島大学 名誉教授
専　門　社会心理学
（実験社会心理学、対人社会心理学、コミュニケーション社会心理学）
主　著　『説得と態度変容――恐怖喚起コミュニケーション研究――』　北大路書房（1988 年）
『中国人留学生と日本』（岡益巳・深田博己の共著）白帝社（1995 年）
『インターパーソナル・コミュニケーション――対人コミュニケーションの心理学――』　北大路書房（1998 年）
『コミュニケーション心理学――心理学的コミュニケーション論への招待――』（編著）　北大路書房（1999 年）
『説得心理学ハンドブック――説得コミュニケーション研究の最前線――』（編著）北大路書房（2002 年）
『特集 説得の心理学（心理学評論第 48 巻第 1 号）』（編著）　心理学評論刊行会（2005 年）
『説得に対する防御技法としての警告技法の開発に関する研究』　北大路書房（2006 年）
『心理学研究の新世紀 全 4 巻』（監修）　『第 2 巻 社会心理学』（編著）ミネルヴァ書房（2012 年）

広島文教大学 心理学研究叢書 第 1 巻
『親切の心理学』
2019 年（令和元年）5 月 30 日　発行

著　者　深田 博己
発　行　広島文教大学 心理学会（会長　植田 智）
〒731-0295　広島市安佐北区可部東 1－2－1　広島文教大学人間科学部心理学科内
印　刷　レタープレス株式会社
〒739-1752　広島市安佐北区上深川町 809－5

Hiroshima Bunkyo University Studies in Psychology
Volume 1

The Psychology of Kindness

Hiromi Fukada

Psychology Society of Hiroshima Bunkyo University
May, 2019